
チルドレンのためのエヴァンゲリオン ~いつか、心、開いて~

朝陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チルドレンのためのエヴァンゲリオン ～いつか、心、開いて～

【Nコード】

N1718I

【作者名】

朝陽

【あらすじ】

周りの大人達がしつかり支えてあげれば、アスカとシンジは悲劇的な最後を迎えなかったかもしれない。大人達が成熟し優しくなったエヴァンゲリオンの物語。本編に沿った話で進みます。こちらの作品の第1話～第6話は2009年に他の投稿サイトに投稿していたのですが、諸事情によりこちらで掲載させて頂く事になりました。（作品の投稿や削除に管理人様の確認が要らないサイトです）
2010/10/10クロスオーバー要素減らしました。第二十五話までクロスオーバーありません。原作のスーパーロボット大

戦MXもLASエントなので機会があったらプレイしてみてください。
スーパーロボット大戦MXとのクロスオーバー作品です。

修正履歴・オリジナル設定

< 重要な修正履歴 >

2011/10/10

クロスオーバー作品から「大怪獣デブラス」を外しました。

戦車・航空機の名称などを外す修正をしました。

理由は大怪獣デブラスの二次創作作品としては楽しみにくい意見を頂いていたからです。

懐かしいと言う感想も頂いていたのですが、この度（感想ではなく本文のクロスオーバー部分を）削除しました。

この作品のクロスオーバーはスーパーロボット大戦MXだけになります。

2011/08/14

小説家になろう！の利用規約変更に伴いまして、物語の本文中に使われていた歌詞について後書きで注釈を加えました。

2011/05/08

物語の雰囲気損なうパロディなどのマイナーなギャグや固い文章の表現を修正しました。

（当時の自分は面白いと思って書いたギャグなのですが、冷静に読み返すと恥ずかしいので削除や修正を行いました）

新世紀エヴァンゲリオンの原作アニメ・漫画のセリフを使用していたので修正しました。

誤字脱字の修正をしました。

2010/05/10

スーパーロボット大戦MXと大怪獣デブラスのクロスオーバー表示をど忘れしていましたので修正いたしました。

他のゲームやアニメ作品のセリフを使用していたので修正しました。誠に申し訳ありませんでした。

<オリジナル設定キャラ紹介>

葛城ミサト（現：加持ミサト）（29）

2000年。彼女は14歳のとき父親とともに南極に行き、セカンドインパクトに遭遇。

その後ネルフの監視下に置かれた彼女に職業選択の自由はなく、ネルフの軍属となる。

敵味方の損害が最小限に抑える戦術が功を奏し、その手腕が認められ若くしてネルフの作戦部長になる。

加持リョウジと15歳の時に第一子（娘）を産んでからは、母親としての強さと優しさを持つようになった。

加持リョウジ（30）

ミサト暗殺の命を受けて彼女に接近したが、彼は任務を遂行することとはできなかった。

その後は雇い主から追われる身となり、ネルフに亡命。

妻と子、そして自分の命と何重にも人質を取られた彼はゲンドウの忠実な駒となるしかなかった。

表向きはネルフの雑用係でミサトには釣り合わないと言われているが、彼の裏の仕事は妻のミサトですら知らない。

<オリジナルキャラ>

加持エツコ（13）

ミサトの一人娘。ミサトの陽気な性格を存分に引き継いだみたいで、あだ名は「太陽の娘」。

女子バスケット部所属。

スタイル抜群で無防備なので、側にいるヨシアキはハラハラさせられてる。

加持ヨシアキ（14）

3年前、加持リョウジが「拾ってきた」少年。素性は不明。日本語を話せることと風貌から日本人と思われる。

加持家に来た当初は冷たい少年だったが、家族の暖かさによってその心は溶けだしたように見える。

このオリジナルキャラ2人は、「英雄伝説 空の軌跡」のエステルとヨシユアをイメージして創らせていただきました。ただし、作品内のセリフや行動は私のオリジナルです。

第一話 使徒、襲来

西暦2015年。

日本の領海に突然謎の巨大生物が出現した。

国連軍は在日アメリカ軍と日本の戦略自衛隊を主力に戦いを挑んだが、巨大生物の前に敗退。

防衛線を第三新東京市近くの海岸沿いまで後退させ、戦車隊の列により長蛇の壁を作ったが、それもあっさりと巨大生物に突破され上陸を許してしまった。

上陸した巨大生物は旧伊豆市街地を通過し、第三新東京市に迫っていた。

戦車隊は少しでも侵攻を遅らせるために砲撃を続ける事しかできなかった。

<特務機関ネルフ 第一発令所>

正面のモニターには戦闘機や戦車隊をなぎ倒しながら迫りくる巨大生物が映し出されていた。

「……使徒か」

「……ああ。十五年振りだな」

発令所の後方の高い場所にある司令と副司令の席に座っている、ネルフ総司令碇ゲンドウと副司令冬月コウゾウは当然といったように落ち着いていた。

それに反して、発令所前方の指揮官席に陣取る国連と戦略自衛隊の幹部たちは慌てていた。

「あれだけの攻撃を受けてなおも無傷だと！」

「こうなったら仕方あるまい、切り札を使うぞ！」

顔を見合せながら言う戦略自衛隊幹部達。

そこへ痺れを切らしたように今まで黙って立っていた、ネルフの指揮官制服に身を包んだ長い紫かった黒髪の女性士官が割って入る。

「いい加減に諦めて指揮権をネルフに移譲してください！ これ以上の攻撃は無意味です！ N2地雷を使うなんて言うまでもありません！ 近くのシエルターに居る住民の命を軽ろんじているんですか！」

「うるさい！ 我々に口出しするとは無礼だぞ、加持ミサト一尉！」
「この作戦には戦略自衛隊のプライドがかかっているのだ！」

戦略自衛隊の幹部に向かって、ミサトは拳を振り上げて怒鳴る。

「あんたたち、自衛隊なんでしょ！ 弱い人達の味方じゃない！ そんなくだらないプライド捨てちゃいなさいよ！」

加持ミサトは十四歳の頃、とある事件で南極海でゲヒルン（ネルフの前身的組織）に保護された時からゲヒルンの軍部隊所属となり、一年前に日本に落ち着くまで、多くの戦場を巡って来た。

人間同士の様々な紛争において、こう着状態を解決するためになりふり構わずN2兵器を使う戦略自衛隊の行動で多くの命が失われた過去の事実があった。

ネルフは国連軍の一員であるが、対使徒戦でなければ基本的にその国の軍隊の指揮下に入ることであり、ミサトと戦略自衛隊の指揮官は犬猿の仲である。

ミサトと戦略自衛隊の幹部が言い争っていると、司令席の碇ゲンド

ウが声を発する。

「政府から通達がありました。指揮権を国連軍からネルフに委譲するそうです」

「何だと!？」

それを聞いた戦略自衛隊の幹部たちは口を閉ざす事しかできなかった。

ミサトはN2地雷が使われなくなったことにほっと胸をなで下ろした。

今まではエヴァンゲリオンに関わる作戦が無かったので、軍の運用は自由にやらせてもらっていた。

しかし今回は相手が使徒ということで、ミサトは上司たちに対して不安を抱いていた。

特にエヴァンゲリオンに関する情報は機密だということで、ほとんどひた隠しにされていたからである。

ただ使徒を倒せるのはエヴァンゲリオンだけという事実を知って、ミサトはネルフの対使徒戦の作戦部長の職を引き受けたのだ。

「我々の兵器が使徒に歯が立たなかった事は認めよう。だが、君達が勝てるとは限らんぞ」

司令席に座る碇ゲンドウはサングラスを指先で持ち上げながら答えた。

「……使徒を倒すためのネルフです」

「碇、零号機は損傷を受けて使用不能だぞ、何か手があるのか？」

コウゾウがゲンドウだけに聞こえるようにそっとささやく。

「……初号機を起動させる」

「パイロットが居ないぞ？ ファースト・チルドレンを再び乗せるつもりか？」

「問題ありません、もうすぐ代わりが来ます」

<ネルフ R-18 廊下>

「……僕は父に捨てられたはずなのに。どうして父さんは僕を呼んだんだろう」

「ブツブツ言わずにさっさと歩け。予定より10分も遅れているんだぞ」

周りを無愛想なネルフの保安部員に囲まれながら、碇シンジは発令所への道を歩いていた。

シンジは幼い頃に母を失い、父親は息子である彼を弟夫婦の元に預けていた。

彼は叔父と叔母に心を開かず、孤独な日々を送り、無気力無関心な人間に育ってしまった。

十四歳まで平凡だが寂しい生活を送っていた彼の元に前触れもなくネルフの保安部員たちが訪れた。

「碇シンジ、我々ネルフ保安部が連行する」

そう言われて彼は有無を言わずネルフ本部へ連行された。

シンジはろくな抵抗もせずに諦めてついて行った。

<ネルフ発令所>

「サードチルドレン、碇シンジを連行しました」

碇ゲンドウの自信たっぷりの発言に冬月が疑問に思い問いたただそうとした時、発令所のリフトに乗ったシンジと保安部員が姿を現した。冬月コウゾウや赤木リツコ、ネルフの整備班やオペレーターなどのスタッフのほとんどがシンジがサードチルドレンに選ばれたことを知らなかった。

「なるほど、ファースト・チルドレンの他に初号機を動かせる可能性があるのは彼だけだからな。しかし、碇のやつは良く決心したなあんなに会ったのを嫌がっていたのに」

「レイの初号機起動実験に失敗した時に進言したけど、まさか本当に呼び寄せるなんて……使徒は倒さないといけないし、仕方のないことよね」

「司令の息子さんがエヴァに乗るのか。かわいそうに、司令の子供なんかに産まれて、運が悪かったな……」

コウゾウ、リツコ、オペレーター達の心にそれぞれ思い浮かぶことはあったが、誰もゲンドウの判断に反対を唱えなかった。

しかし、発令所で一人だけゲンドウに対して異議を叩きつけるものが居た。

それはミサトだった。

「幼い頃からパイロットとして訓練されたレイでも、シンクロするのに何ヶ月もかかったんですよ！それに民間人の普通の子を戦わせるつもりですか！」

ミサトには若い頃に産んだ大事な一人娘と、二年前戦場で傷だらけで死の恐怖に震えている所を拾った戦災孤児という家族がいる。

同じ年齢の子供たちを見ると我が子を見ているような感覚にとらわれ、ミサトにはそのような子供たちが傷つくことは耐えがたいものだった。

『戦う』という言葉に反応してシンジがびくつと体を震わせる。

「加持一尉。それでは君はさきほどの初号機の起動実験で失敗して大怪我を負ったファースト・チルドレンを再び乗せると言うのかね」
「それは……………しかし……………」

ゲンドウの言葉に反論することができず、ミサトは下を向いて唇をかみしめるしかなかった。

そんなミサトの様子に発令所のざわめきも収まり、ゲンドウはリツコに命令を下す。

「赤木博士、サード・チルドレンをケージに連れて行け」

シンジは固い表情のまま無抵抗でリツコに手を引かれてケージへと向かって行った。

「冬月先生、後を頼みます」

ゲンドウはそう言うと言席を立て、コンソールルーム（初号機を見下ろせる部屋）へと向かって行った。

<エヴァ初号機ケージ>

「私はどうしたらいいの……………？ このまま黙って彼がエヴァに乗るのを見ているだけしかできないの……………？」

一足先に誰もいない初号機のケージにたどり着いた沈んだ表情のミサト。

「いえ、ここで私が諦めたら彼が負傷してから後悔することになる……考えなきゃ、例えばエヴァを使わずに使徒を倒す方法、いえ時間を稼ぐだけでもかなり違う……」

ミサトが思慮を始めたころ、ついにリツコがシンジを連れてやって来てしまった。

初号機の側に居たミサトはシンジが姿を現した時に、初号機の目の部分に眼球が現れ、視線の先のシンジのことを見つめたのが分かった。

「まさか、初号機がシンジ君に反応を示している？」

リツコとシンジが初号機の近くに来た時にはすでに眼球は姿を消していた。

「……巨大なロボット……？」

シンジは拘束されている紫色の巨大なロボットののような物体を見てつぶやいた。

「ロボットではないわ、人の作りだした決戦兵器、人造人間エヴァンゲリオンよ！」

リツコは誇らしげにシンジに向かってそう宣言をした。

「シンジ、お前はこれに乗ってあの使徒と戦うのだ！」

シンジが声のした方を見上げると、ゲンドウが見下ろしているのが見えた。

「僕が……戦うだって？ いやだ！ できるわけ無いよ！ 痛くて死んじゃうよ！」

「今エヴァを動かせるのはあなただけなのよ」

「シンジ君、私たちはあなたの力を必要としているわ。勝手なお願いだと思うけど……もちろん、乗る事を強制したりはしないわ」

「じゃあ乗りません、帰ります」

そう言つて後ろを振り向いて帰ろうとするシンジをリツコがあわてて引き止める。

「余計ないことを言わないでちょうだい、ミサト！ シンジ君を無駄に怖がらせているのはあなたの言葉なのよ！」

ミサトはシンジの手をとり、シンジの目をしっかりと見つめてシンジを説得する。

「シンジ君……エヴァはきつとあなたの味方になって守ってくれるわ。さつき、エヴァはあなたを見て反応を示したわ。だからエヴァを信じて……」

「……そんなこと突然言われても、わかりませんよ！」

シンジは首を激しく横に振ってミサトの言葉を拒否した。

その時、ネルフの建物全体が大きく振動した。

「使徒め、ここに気がついたか。もう時間が無い……冬月、レイを寄越せ」

危険を察知したゲンドウが通信モニターに向かって指示を出した。

「しかし、戦えるのかね」

「とりあえず座らせる事はできる」

ガラガラガラ……

ストレッチャーに乗せられた傷だらけの少女、綾波レイが運ばれてくる。

「こんなことをしたらレイの怪我が悪化するわ！　すぐに病室に戻して！」

「しかし命令ですから……」

まさかのゲンドウの命令に驚いたミサトは、運んできた医師と看護師に食ってかかった。

「レイ、代わりが使い物にならなくなった、お前が乗れ」

「はい……」

起き上ろうとするレイをミサトが必死に覆いかぶさって引き留める。

「司令！　あなたはレイを殺す気ですか！」

その様子を眺めていたシンジはリツコに声を掛けられる。

「あなたが乗らなければあの子を乗せなければならないのよ、私達は」

「僕と歳が変わらない、あんな子がパイロットをやっていただなんて……」

シンジは初めて見るレイの痛々しい姿にショックを受ける。

「加持一尉！ それ以上邪魔をするなら命令執行妨害で逮捕するぞ！」

ゲンドウの怒鳴り声と共に保安部員がミサトを取り囲んだ。

「止めてください、僕が乗ります！」

それまで下を向いてうつむいていたシンジは手を力いっぱい握り締めて叫んだ。

「よく言ってくれたわね、シンジ君。さあこちらへいらっしゃい、操作方法を説明するから」

「待って、シンジ君！」

邪魔されたりツコは困った表情でミサトの方を振り返った。

「本当に、自分の意思でエヴァに乗りたと思ったのね」

「はい、加持さん。僕も逃げてばかりはいけなかったと思いました」

シンジはミサトから目をそらさずにそう答えた。

「わかったわ、じゃあ私は、あなたが危ない目に合わないようになれるだけサポートするわ」

「ありがとうございます、加持さん」

「これからはミサト、と呼んでくれて構わないわよ」

ミサトの笑顔を背に受けて、シンジは初号機へと乗り込んだ。

<ネルフ本部 第一発令所>

シンジがエヴァに乗るということで、ミサトは発令所の作戦指揮席に戻っていた。

「あんたたち、なに他人事みたいな顔してるのよ！ シンジくんは私達のために戦ってくれてるのよ！ シャキツとしないさい！」

その言葉にネルフスタッフたちは気を引き締める。

副司令席に座っている冬月は苦い表情でその姿を見ていた。

「加持一尉は有能かも知れんが、思想に問題がある。命令に従わなくていいなどと発言するとは組織においてはもつてのほかだ」

「しかし、我々の計画に彼女は必要な人材だ」

「ゼーレからも彼女を作戦部長にするようにとの意向だしな、仕方あるまいか」

前方の作戦司令席近くではミサトを中心としてネルフ作戦部のメンバーや技術部のメンバーたちと意見交換をしていた。

「誰か、今回の使徒戦に関して意見は無い？」

ミサトは作戦を決定する前に必ず人の意見を聞くことにしている。

「はい、やはり使徒の近くに射出するのは危険だと思われます」

ミサトはネルフの作戦部長になってから、チルドレンが危険な目に

あわないように戦術などの研究も日夜努力していた。

「そうね日向君、私も同意見。でも少し離れた所に射出するだけでは不十分だわ、使徒の注意をひきつけるおとりが必要ね」

そう言つてミサトは戦略自衛隊の幹部たちの方に視線を向ける。

「……まさか我々戦略自衛隊の同胞をおとりに使おうというのかね」
「子供が危険にさらされてるのよ！ あんたたちも軍人なら命を掛けなさいよ！」

ミサトに詰め寄られた戦略自衛隊の幹部はしぶしぶ攻撃の命令を出した。

「……戦略自衛隊の兵士のみなさん、危険な役割を押しつけてごめんなさい。でも、これはエヴァに乗っているパイロットを守るための作戦です」

「パイロットを守るのは名誉な仕事だ」
「チルドレンのために命をかけようぞ」

好意的な戦略自衛隊の兵士たちの答えは初号機に乗るシンジにも聞こえて来た。

「シンジ君。話は聞いたわよね。あなたは使徒を後ろから思いつきりガツンと殴ってやればいいのよ」

ミサトはシンジを元気づけようと明るい声で語りかける。

「……はい、僕を必要としてくれる人がいるなんて嬉しいです、ミサトさん！」

普通の十四歳の少年にしてはネガティブな思考だとミサトは思った。別に必要とされていなくても自由にしてもいいではないか。

大人たちに迷惑をかけても、と。

しかし、今はそんな事を言っている場合ではないとミサトは思い直し、作戦指揮席に座り正面のモニターに映し出された使徒をにらみつけた。

「加持一尉、出撃命令を下せ。人類の未来のために」

ゲンドウに言われて、ミサトはうなずいて号令を発する。

「エヴァンゲリオン初号機、発進！」

……怪我をしないで……無事に戻って来て……シンジ君……。

ミサトは両親の名前が刻まれた形見の十字架のペンダントを握りしめた。

第二話 暖かい、天井

<第三新東京市 ネルフ本部直上 天井都市>

「エヴァンゲリオン初号機、発進！」

加持ミサト一尉の号令の下、エヴァンゲリオン初号機が使徒サキエルの後方に射出される。

使徒は前面に展開された戦略自衛隊の大型ロボット兵器、『トライデント』に引きつけられている。

トライデントとは、ネルフのエヴァンゲリオンに対抗するため戦略自衛隊が秘密裏に製造していた兵器である。

「ミサイルランチャー、準備できました！」

「攻撃準備よし、行け！」

トライデントから多くのミサイルが発射されたが、使徒のATフィールドに阻まれてしまった。

しかし使徒の注意を引きつけるだけの衝撃はあったのか、使徒はビーム攻撃を仕掛ける。

「左腕損傷、損傷度は35%です！ まだ耐えられます！」

戦略自衛隊のオペレーターと戦闘指揮官がそう報告した。

さすが戦自の誇る兵器。

装甲は厚く耐久力が高い。

「N2兵器以外にもあんな兵器を持っていたとは意外ね。ミサト、知っていてあんなことを言ったの？」

「……まあ、ちょっとある筋から情報を仕入れていてね。これでシンジくんはずいぶん戦いやすくなったわ」

ミサトは戦略自衛隊の旧友たちに感謝していた。彼らの協力でN2兵器より大分マシな兵器を引き出せた。

「シンジ君、操作方法は説明した通りよ、まずは走って使徒の背中に接近することを考えて。そうして使徒を後ろから叩きのめすイメージで動かせばいいの」

「はい、わかりました！」

トライデントの活躍もあってか、シンジは少し安心して、操縦に集中できているようだった。

「エヴァンゲリオン初号機、リフト・オフ！」

ミサト一尉の号令により、エヴァンゲリオン初号機の固定が解かれる。

シンジは操縦かんを握り歩くようにイメージすると、エヴァンゲリオン初号機はゆっくりと歩き出した。

その姿がスクリーンに映し出され、ネルフの第一発令所は歓声に包まれた。

そしてエヴァ初号機は走り出したが、破壊されたビルのがれきにつまづいて転んでしまった。

運が悪いことに、転んだエヴァ初号機の蹴飛ばしたがれきのひとつが使徒の後頭部にクリーンヒット！

使徒が初号機存在に気づいてしまった。

使徒はエヴァ初号機の腕をつかみ上げると手首を思いっきり握りしめる。

折れるエヴァ初号機の左手首。

左手はダランと垂れ下っている。

「うわあああ！」

シンジは叫び声をあげた。発令所にその声が響き渡る。

「シンジ君、落ち着いて。折られたのはシンジ君の腕じゃないわ！」

リツコがそう言ってもシンジの泣き叫ぶ声は止まらない。完全に自分を見失っているようだ。

「リツコ、シンジ君を落ち着かせるために一時撤退よ！」

使徒は初号機をつかみ上げたまま、今度は初号機の頭部に向かって左目からビーム光線を連射する。

リツコは初めての实战にとまどっているのか、ミサトの言葉が届いていない様子だった。

「んもうリツコ、しっかりしてよ！……戦略自衛隊のみなさん、総攻撃をお願いします。使徒の注意をなんとかエヴァから引き離してください」

エヴァ初号機に当たらないように気を付けながらもミサイル、砲弾、レーザーの嵐が使徒に直撃する。しかし、使徒のエヴァに対する攻撃はやまなかった。

「頭部損傷、ダメージ不明」

「パイロットの反応がありません！」

オペレーターたちの報告にミサトは最悪の事態を想像した。

「シンジ君……！」

ミサトが動かなくなつた初号機を見て真つ青になった。

しかし次の瞬間、動かなくなつた初号機が突然動き出し使徒を攻撃し始めた！

四足歩行で移動する初号機の姿は、今までのシンジの操縦とはまるで違うものだった。

「まさか、暴走！？」

「何よりツコ、暴走って！」

ミサトはリツコにつかみかかって尋ねると、リツコはポツリとつぶやく。

「覚醒したのよ、エヴァが」

<ネルフ本部病棟>

「ここは……どこだ……」

シンジが目を覚めたのは病院の一室のベッドの上だった。

「気がついたのね、シンジ君……」

ミサトは包み込むようにシンジの手を取ると、目に浮かべた涙をぬぐうようにそっとほっぺたに寄せた。

「ミサトさん……まさか、ずっと側についてくれたんですか？」

「あなたを危険な場所に送り出してしまったんだもの……作戦部長の役目じゃない言われたんだけどね」

ミサトはそう言って穏やかな笑顔をシンジに向けた。

「診察の結果、目だった外傷は無いってことだけど……大丈夫？」

「やられた時のことはよく覚えてませんが、大丈夫です」

「記憶が多少混乱しているのね、あんな怖い思いをしたから……」

ミサトはそう言ってシンジを抱き寄せた。

タンクトップにショートパンツというミサトの姿は刺激が強すぎたのかもしれない。

シンジは使徒戦とは違う意味で混乱を起こしそうになっていた。しかしシンジはミサトの胸に抱きしめられているうちに、気持ちが落ち着いて行くのだった。

シンジとミサトが病室を出て外に向かう途中、エレベーターから降りて来るゲンドウに遭遇した。

ゲンドウはサングラス越しにシンジを見下ろしたまま何も言わない。

シンジも視線をそらして悲しそうな顔でうつむいたまま黙っていた。そんな様子を見たミサトはゲンドウに進言する。

「あのー、碇司令。息子さんは頑張ったと思うんですが、お誉めの言葉をひとつくらいかけてあげたらいかがですか？」

「……問題無い」

ゲンドウはそう答えて立ち去って行った。

「……まったく司令つたら、「問題無い」と「冬月先生、後はお任せしました」しか言えないのかしら」

ゲンドウを見送った後、ミサトはゲンドウのモノマネをした。シンジが受けたシヨックを陽気に振る舞うことでやわらげてあげようとした。

「プッ」

「あら、今シンちゃん、笑わなかった？ 可愛い顔して笑うのね」
「……余計なお世話ですよ」

そう答えても赤くなる顔をシンジは隠すことができなかった。

<ネルフ司令室>

「一人で住む……？ 本当にそれでいいの、シンジ君」
「いいんです、どこに居ても一人ですから」

退院したシンジはミサトに付き添われて司令室でネルフ職員から住居の説明を受けていた。

ミサトはせっかく近くに居るのだから父親とシンジを住ませてあげたかった。

しかし説得してもシンジの方も父親を嫌っている様子で拒否していた。

彼に家族のぬくもりを教えてあげたい。

一人で寂しさを抱えたまま落ち込んで欲しくない。

そう考えたミサトは行動に出た。

「なんですって？」

「だから、シンジ君は私の息子にしたから」

司令室からでたミサトはすぐに方々に向かって電話をかけていた。そのうちの一人であるリツコが話の内容を聞いて驚きの声をあげる。

「司令の許可もとったし。大丈夫よ、別に本当に戸籍を入れて養子にするってわけじゃないから、ヨシアキもエツコもいい子だし問題ないわ」

「まったくあなたは後先考えずに決めちゃって。いい？ そう言うことはまず手順を踏んで……」

リツコの騒がしい声に耐えきれなくなったのか、ミサトは受話器を耳から遠ざける。

「相変わらずリツコは融通が効かないわね」

<第三新東京市 幹線道路>

シンジはミサトの運転する青いルノーに同乗していた。

「さあ、今日はパーッとやらないとね！」

「何をですか？」

「もちろん、新しい家族の誕生の歓迎会よ」

ミサトとシンジは夕食の食材を買いにスーパーへ到着した。

「ミサトさん、料理できるんですか？」

「はは、できなそうに見える？ まあ、以前は料理とか家事とか苦手だったんだけどね。……そうとう修行したわよ」

ミサトが14歳の時に初めて加持リョウジに振る舞った料理は一口食べただけでぶっ倒れるほど強烈だった。

……もちろんその事実のリョウジとリツコしか知らない。

「しゅ、修行ですか、大げさですね」

壮絶な修行の結果、人並みまで腕は上がったが、まだ料理に関しては暴走気味なところもある。

生きたタコ一匹を丸ごと買った時はシンジは目を丸くして驚いた。再びルノーに乗り込んだシンジに、ミサトはこう声をかけた。

「すまないけど、ちょっと寄り道するわよ」

「どこですか？」

「い・い・と・こ・ろ」

ミサトはニヤけた顔をしながら、それ以上シンジの問いには答えなかった。

<第三新東京市 第壱中学校>

「よかったー、まだ結構生徒が残っているわね」

ミサトは駐車場にルノーを止めて、部活でにぎわう校内を眺めながら言った。

「ここは？」

「第壱中学校、明日からあなたが通う学校よ。ちょっと教室まで行ってみようかしら」

ミサトが2 - Aの扉を開くと、中に居た数人の生徒が気づいて近づいて来た。

「ミサト先生！」

「どうしたんですか？」

「突然辞めるなんて心配したんですよ！」

教室に来たのはネルフの実験でエヴァンゲリオンが本格的に起動し、ミサトが指揮官の仕事が多忙になるため、教師としての辞表を提出した日以来だった。

第壱中学校の2 - Aは特殊な事情を持つ生徒ばかりが集まられており、裏ではネルフが管理していた。

管理者兼見張り役としてミサトが抜擢されていた。

ミサトには裏の事情のすべては知らされては居ない。

ただ保護する必要があるということで、多少の疑問は持ちながらも指揮官と教師の兼務をこなしていた。

「あーみんな落ち着いてね、この子は碇シンジ君、あの怪獣と戦ったロボットのパイロットよ。明日から転校してくるからよろしくね」

ミサトが後ろに隠れているシンジを強引に前へ引っ張り出した。

「お前が俺たちを守ってくれたのか」

「すげー、必殺技とかある!？」

「すっごーい！」

シンジは目を丸くして、そして浴びせられる質問にうろたえるしかなかった。

「はいはい、詳しい質問は明日ね。んじゃ今日はシンジ君の引っ越しがあるからまたねー」

「さようなら、ミサト先生。碓君もバイバイ」
「バ、バイバイ……」

シンジは流されるまま女子生徒達に手を振り返してしまった。

「ここが私達の街よ、そしてあなたが守った街。いま会った子たちも、あなたが守ったのよ」

「僕がみんなを……街を……住んでいる人たちを……守った」

ミサトはシンジ自身に自信を持つてほしかった。

守るべきものを持った人間は強いことは身をもって知っている。

ミサト自身守りたいもの、支えてくれるものがあるからここまでやって来れた。

言葉でシンジを誉めるのは簡単だ。

しかしそれでは伝えきれないかもしれない。

そこでシンジには自分が守った命、人々の生活をじかに見せてあげたかった。

単なる「街」というビル群の建物ではなく。

<第三新東京市郊外 加持邸>

第三新東京市の郊外に木造の大きな庭付き一戸建ての家がある。壁は木肌がそのままむき出しになっていて、ログハウスに見えるそ

の家は、温かみを感じさせていた。
この家は結婚したミサトとリョウジが森を切り開いて作った家である。

「広いお庭ですね。……あ、魚が泳いでいる池や、スイカ畑まである」

「旦那の趣味だね。人間は地に足を付けて生活するのが当然って言うて、この家を建てたのよ。子供の情操教育にも良いしね」

「……えんとつから煙が上がってる」

「うちの子たちが料理の準備をしてくれているようね」

「え、ミサトさんって子供がいるんですか？ ……とてもそうは見えませんでした」

「お世辞でも、そう言うてくれると嬉しいわ さ、中に入って」

ミサトはそういつて玄関の扉を開けてシンジを招き入れた。

「おじゃまします」

「違っでしょ、ここはあなたの家なんだから。はいやり直し」

シンジは外に出て、ドアを開けて入りなおす。

「……た、ただいま」

「……おかえりなさい」

家の奥の方から人の足音が聞こえる。玄関に近づいてきているようだ。

「お帰りー、お母さん」

「お帰りなさい、母さん」

出て来た自分と同じ年ぐらいの少年と少女にシンジは面喰ってしまった。

ミサトはシンジに向かって微笑みながら二人を紹介する。

「こっちの女の子は、加持エツコ、十三歳。私と旦那……リョウジが十五の時に産んだ子なの」

「よろしくね」

黒髪のポニーテール、Ｔシャツにショートパンツといったラフなスタイルの元気な少女が挨拶する。

「こっちの男の子は、加持ヨシアキ、十四歳。旦那が二年前、ドイツの戦場から拾ってきた孤児」

「よろしくお願いします」

黒髪の長髪、琥珀色の瞳が印象的な、落ち着いた静かな感じの少年が頭を軽く頭を下げる。

シンジは今日最大の衝撃を受けた……ミサトさん、凄い人生を歩んでいるんだな……。

「さ、今度はあんたの番よ！」

エツコが笑顔でシンジの腕を手に取る。

「何が？」

「名前よ、名前。あたしただけ知らないって言うのは不公平でしょう？」

「碇シンジ……」

「シンジか……。じゃあこれからあたしたちは家族なんだから、お互い呼び捨てにすること。いいでしょう？」

「でも、僕たち会ったばかりだよ？」

シンジがそう言っていると、エツコは強い力でシンジの手をねじ伏せた。

「い・い・で・しょ・う？」

「痛たたた……何て馬鹿力……」

「この家では女性が強いんだ。逆らわない方がいいよ」

穏やかに微笑んでそう言うヨシアキにシンジはため息交じりに頷いた。

やっとエツコに手を離してもらったシンジは、ミサト共に買った食材を持って奥のリビングに向かう。

そこは8人は軽く入れる、小さなパーティーが開けそうなゆったりとした広間だった。

「二階の空き部屋はきちんと片づけておいてあるわよね」

「やーね、お母さん。当然よ」

「君は散らかすのが専門だろ。片づけたのは僕じゃないか」

「なんですってー！」

シンジは仲の良い二人をぼーっと眺めていた。リビングはとりあえずきれいに片付いている。

「あ、野菜やお肉とかを冷蔵庫に入れておいてくれる？」

「はい」

冷蔵庫は3台あった。

シンジが一番手前の冷蔵庫を開けるとそこには食材と調味料が入っ

ていた。

そこにスーパーで買ってきたものを入れた。

シンジは気になったので他の冷蔵庫も少しのぞいてみた。

真ん中の冷蔵庫には大量のコーヒー。

奥の大きな冷蔵庫はからっぽだった。

「もしかして、ミサトさんはお酒を飲まないのかな？」

ミサトが大酒飲みとイメージしていたシンジは意表を突かれた感じだった。

「さーて、今日は私の腕をはりきってふるいますか！」

エプロンを着たミサトが台所に立つ。

エプロン姿のミサトにシンジが赤くなりながら見てみると、向かい側に座った加持家の子供二人は浮かない顔をしている。

「……今日はミサトスペシャルの日だね」

「そうみたいだね」

「何？ ミサトスペシャルって？」

シンジの質問にエツコとヨシアキはさらに声を小さくして答えた。

「お母さんの実験的料理よ。お父さんに食べてもらうために定期的に作るのよ」

「おいしい時とマズイ時があるんだよ……」

シンジから見て、台所に立つミサトは料理が上手く見えた。ただ手に持ってるのが包丁ではなく、アーミーナイフだったのには驚いたが。

「はい、できたわよ」ミサトスペシャル12!

見た目は普通のカレーだった。

たこ焼きやタコの足が入っている以外は。

「……いただきまーす」

「んぐんぐ、プハーツ! やっぱり人生、この時のために生きているようなものよね」

ミサトはコーヒを飲みほした後、食事に手を付けないシンジに頭をちよつとかしげながら話しかける。

「食べないの? あの二人が食べてるんだし、失敗作じゃないと思うんだけど?」

「あ、あのこういう食事慣れてないから……」

「ダメよ、好き嫌いしちゃ!」

ミサトはコーヒをテーブルに叩きつけて、シンジに向かって身を乗り出す。それでも二児の母なのだろうか。行儀が悪い。

「あの……いえ……その……違うんです」

「……楽しいでしょう、こうしてみんなと顔を合わせて食事をするのは」

ミサトの笑顔にシンジは少し照れながら答えた。

「……はい」

この後、シンジが加わり四人家族となった加持家では、忙しいミサ

トとシンジの事情を配慮して家事当番が決められた。

『シンちゃんのお部屋』（と部屋のドアにミサト直筆の紙が貼られている）

シンジは二階の四部屋のうち、北東の部屋を自分の部屋としてもらった。

残りの二部屋はヨシアキとエツコの部屋で、シンジの向かいの部屋は空室になっている。

「木の天井って、何か暖かい感じがする……住んでいる人たちも暖かいから、かな……」

ベッドに横たわるシンジはSDATから流れる音楽を聴きながらそう呟いた。

「シンジ君……よく聞いて。今日あなたは人にほめられるようなことをしたのよ。何よりも自分で自分をほめてあげて。自信をもつてね」

寝る前にミサトは部屋にいるシンジに聞こえるようにそつ声をかける。

その言葉を聞いたシンジは心地よく眠れた気がした……。

第三話 鳴らせない、電話

<ネルフ エヴァ戦闘実験室>

「おはよう、シンジ君。調子はどう？」

エヴァ初号機の戦闘プログラム筐体に座っているシンジに向かって、リツコが声をかける。

「問題無いと思います。もう慣れました」

シンジは暗い表情でボソボソとそれに答える。

しばらくリツコのエヴァに関する説明と、それにはいと答えるシンジのやり取りが続く。

「では、昨日の続きを始めるわよ」

「目標をセンターに入れてスイッチ、目標をセンターに入れてスイッチ。目標を……」

シンジは暗い表情でつぶやきながら機械的に同じ動作をおこなう。

「でも、シンジ君はよくエヴァに乗る気になってくれましたね」

オペレーターの伊吹マヤがリツコに問いかける。

「命令された事には従うのが彼の処世術よ」

リツコがそう答えると、ミサトは思いつきり苦い顔をする。

「彼は誰にも心を開けない環境で育ってしまったのね。連絡の一つもこないし」

「え？ 何の話？」

「こっちに来て一週間ぐらいになるけど、シンジ君の面倒を見てた伯父さんたちから連絡が無いのよね」

「もしかして、彼にはもう居場所がないのかもしれないわね」

「リツコ、私はやるわ。きっとシンジ君の居場所を作ってみせるわ」

ミサトはリツコに向かって力強く宣言をした。

<第三新東京市 加持邸>

「ミサトさん、ヨシアキさん、エツコさん。おはようございます」

リビングでは加持家の四人が朝食をとっていた。

「ヨシアキとエツコにまで敬語を使う必要は無いわよ。同い年なんだし」

ミサトはあくびをかみ殺しながらシンジにつっこむ。

「そういえば、今日は木曜日だっけ。燃えるゴミ出さなきゃ」

「ミサトさんは昨日当直で眠いでしょ。もう寝てください。僕が当番を代わりますよ」

「ありがとう、シンちゃん。うちのクソガキ二人と違って優しいのね」

「先に言われたただかもん……」

不機嫌そうにエツコはほおを膨らませている。

「シンジ君。学校の方、騒がしくなつてごめんね」

「あ、別にいいんです。嫌な目にはあつてませんから」

「「「行つてきます」」」

シンジは二人と別れて第壱中学校に向かった。

他の二人は第弐中学校に通っているのだ。

なぜシンジだけが第壱中学校なのか。

その理由はパイロットにふさわしい学力を身に付けるためと説明する事でお茶を濁した。

「おいおい。あれが？」

「ああ、あいつが噂の」

「パイロットには見えないね」

シンジが通学路を歩いていると、遠巻きに注目が集まる。

しかし、シンジに直接話しかける生徒はいない。

警備の人間がいて近寄りにくいからだ。

ミサトがシンジの正体を明かしてしまつてから、学校中にその噂は広まつてしまい、テロに備えてネルフの保安部が厳しい目を光らせなければならず、不審者がシンジに近づかないように警戒を強めてしまつたからだつた。

ミサトはできるだけ保安部に物々しい警備にしないように申し入れているが、ネルフの命令は強かつた。

「碇が来たぞー！」

シンジが教室について席に座ると、とたんにクラスメイトが周りを取り囲んだ。

警備の人間も教室までには入って来れないからだ。

「ねえねえ、パイロットになるために試験とかあるの？」

「あの怪獣について何かわかった？」

「昨日の戦闘訓練は上手くいったのか？」

ミサトからとくに秘密にするように言われていないので、シンジはクラスメートの質問について正直に答えてしまう。

転校してずいぶんたつのにまだ人気は衰えないでいた。

「みんな、授業が始まるわよ！碇君に迷惑がかかるじゃない！早く席について！」

そばかすが魅力的なおさげ髪の少女が群衆の後ろから怒鳴りつける。クラスメートたちがしぶしぶ席に戻ると、教室の扉が開けられた。担任の老教師の根府川先生ではなく、ジャージ姿の少年が入ってきた。

「トウジ！？」

「鈴原！？」

「久しぶりやな。ケンスケに委員長。……ケンスケ。聞きたいことがあるんじゃない、あのロボットのパイロットというのは、どこや？」

「ああ、あそこにいるあいつだけど……」

トウジに問いかけられたケンスケはシンジの後ろ姿を指差す。

トウジは怒った顔でシンジに近づいていく。

その気配に気づいたシンジがトウジの方に顔を向けた瞬間、シンジは顔を思いつきりトウジに殴られた。

大きな音が鳴った。

椅子ごと倒れたシンジはほつぺたに走る痛みに困惑しながらトウジ

を見上げた。

「すまんなあ転校生。ワシはお前を殴つとかなければ怒りが治まらんのや」

「どうしてだよ？」

いきなりわけも分からず殴られたシンジはトウジをにらみつける。

「ワイの妹がな……。この前の戦闘でガレキの下敷きになって怪我をしたんや……。命に別条は無いつて話やけどな……」

鈴原トウジの妹、鈴原ナツミは使徒サキエル戦が起こった時、トウジが目を離れたすきに行方不明になってしまっていた。

その後のネルフからの連絡によると、倒壊したビルに巻き込まれ大けがを負って病院に収容されたとトウジは父親から聞かされていた。

トウジの父親も母親もネルフの仕事が忙しいので、妹の世話はトウジ一人でするしかなかった。

それで今まで学校を休んでいたのだ。

「ミサトさんは大けがをした人は誰一人居なかったって！」

「そんなん知るか、お前が暴れたせいや！ そないなお前がチャホヤされてええ気になつてんのを見ると、虫酸が走るわ！」

「……僕は別に自慢するためにエヴァに乗っているわけじゃないのに……」

トウジは再びシンジの胸倉をつかみ上げる。

「鈴原！」

ヒカリの声にトウジはシンジを荒っぽく解放した。
その時、使徒襲来を告げる緊急事態宣言のサイレンが鳴り響き、シンジはネルフへと急いで戻った。

<ネルフ第一発令所>

正面スクリーンに巨大なイカのような姿をした使徒が映し出された。

「総員第一種戦闘配置！」

ゲンドウが不在のため、冬月副司令が号令をかける。

「現在、目標は接近中」

「迎撃システムの稼働率35%」

オペレーターたちの声が慌ただしくなる。

「非戦闘員、民間人の避難は完了したの？」

ミサトの問いに青葉が答える。

「はい。完了したとの報告を受けています」

<第三新東京市 第334シエルター>

このシエルターには、トウジ、ケンスケ、ヒカリをはじめとした第

壱中学校の生徒たちが避難していた。

「あーあ、何も映らない。俺達には何も教えてくれないんだな」

携帯テレビモニターを覗きこんだケンスケはそう言ってため息をついた。

「生のドンパチを見たいっていうのはお前ぐらいや」

「なあ、外へ出て見ないか？」

「アホか、死にたいのんか！？」

ケンスケの言葉にトウジが大声を上げると、ケンスケは慌ててその口を塞いだ。

「いいかトウジ、お前は碇を殴ってしまったんだ、碇本人が否定したのにな」

「そりゃあ、おとん達があいつが大暴れしたからやって……」

「今度は人から聞いた話じゃなく、お前自身の目で戦いを見守る義務があるんじゃないか？」

「そうかもしれへんな」

ケンスケに説得されたトウジはシエルターを抜け出す事にした。

<ネルフ 初号機ケージ・エントリープラグ内>

「なんで、僕はこれに乗っているんだろう。人を傷つけてまで」

シンジは先の戦闘でどうやって使徒を倒せたのか、思い出せなかつ

た。

だからミサトの怪我人は居なかったという話も信用できなかった。

「シンジ君。聞こえる？」

「はい」

ミサトへの返事にシンジはいら立ちを隠せなかった。

「敵のA.Tフィールドを中和しつつ、パレットガンで攻撃、分かったわね？」

「はい」

シンジの暗い表情にミサトは疑問に思ったが、使徒が接近する前に出さなければ遠距離攻撃の意味が無い。
気にかけている時間は無かった。

「発進！」

出撃した初号機は兵装ビルからパレットガンを取り出して構える。
使徒はゆっくりとした動きで接近をしてきている。
エヴァ初号機と使徒の対峙する姿をトウジとケンスケの二人は少し離れた裏山から眺めていた。

「目標をセンターに入れてスイッチ、目標をセンターに入れてスイッチ……」

シンジがバレットガンを乱射する……巻き上がる煙。
煙が治まった後、使徒は無傷で立っていた。

「シンジ君、予備のパレットガンがあるわ、使って！」

そう言い放ったリツコにミサトがつかみかかる。

「リツコ、全然効いてないじゃないのよ！ 遠距離で安全に使徒を倒せるからって条件だから、私は出撃を許可したのよ！ あれじゃあシンジ君がまた痛い思いをするじゃない！」

予備のパレットガンを取りだしたシンジは、使徒のムチ攻撃により足元をすくわれて、倒されてしまう。

シンジは倒れたまま、使徒が接近してくるのを見上げていた。再び使徒のムチが振り下ろされる。

初号機は後ろに飛び退いてなんとか攻撃をかわす。しかしムチは初号機の電源ケーブルを引き裂いた。

「アンビリカルケーブル切断！ 内部電源に切り替わります」

着地した初号機の足に使徒のムチが絡みついた！

初号機はムチに引き寄せられて引きずられ、一気に持ち上げられ、空中に放り投げられた！

轟音が鳴り響きエヴァ初号機は山の斜面に背中から着地した。

「シンジ君！？」

「初号機のダメージは？」

「大丈夫です、損傷度軽微」

ミサトが叫び声をあげた。

オペレータのマヤはリツコの質問に対してそう答えた。

その時エヴァ初号機を通じてネルフの発令所のモニターに映像が映し出された。

エヴァ初号機が地面についた手のひらの指の間に二人の人影があっ

た。

「シンジ君たちのクラスメート!?」

「どうしてこんな所に!？」

ミサトはオペレーター席に居る青葉をにらみつける。

……民間人の避難は完璧に完了したって報告はなんだったのよ!

すっかりしなさいよ! とミサトは心の中で怒っていた。

しかし青葉の方も困った顔をすることしかできなかった。

「仕方無いわねシンジ君、その二人をエントリープラグに入れなさい!」

「リツコ、何を言ってるの!? エヴァが動かなくなったらどうするの?」

異物を入れたらシンジとエヴァのシンクロにかなり悪影響が出て、操縦が難しくなる。

またLCLも汚染を受けてシンジの身に後遺症が残るかもしれない。

以前にそう説明をしていたリツコの言葉とは思えないミサトは食ってかかった。

「でも、あれではシンジ君は動けないわ。まさか見捨てるつもり?」

「そうじゃなくて、誰か人をやって助けに行けばいいじゃないの!」

「……エヴァに踏みつぶされる危険があるのに、出て行く人は居ないわ」

言われた通り、ネルフのスタッフを始め、偵察行為を行っている戦

略自衛隊の人間もトウジ達を助けようと動こうとする気配は無かった。

「……なんですって!?　ちっ、じゃあ私が行く。ルノーをあそこの近くの出口に用意して」

……ミサトを除いて。

「加持一尉!」

冬月が止める声を見捨ててミサトは発令所を飛び出してしまった。

シエルターから抜けだした裏山で、初号機の指の間で震えながら使徒を見上げているトウジとケンスケ。

「なあ、転校生のやつ、なんで敵の攻撃を避けへんのや」
「きつと僕らがここに居るから、身動きが取れないんだ!」

初号機は一方的に使徒のムチ攻撃を耐えていた。そこに土煙をあげて青いルノーが到着する。

運転席のドアが勢いよく開け放たれ、ミサトが飛び出す。

「二人とも、早く乗って!」

「ミ、ミサト先生!?!」

トウジたちを乗せた青いルノーが悪路をものともせず猛スピードで立ち去って行く。恐るべきミサトのドライビングテクニク。

ミサトは運転しながらなぜトウジ達が外に出ていられたのか考えて

いた。

シエルターの出口はネルフの兵士が見張っているはずだったからだ。青いルノーが走り去るのを見て、シンジはやっと使徒の攻撃をかわすことができた。

しかし内部電源は残り数分。不利な状況に変わりはない。

「今よ！ シンジ君。後退しなさい。回収ルートは34番。山の東側に後退して」

「リツコさん。僕が退却したらどうなるんですか……エヴァはこれ一休しか無いと聞いてますけど……。もしかして、なにも考えていないんですか？」

「そ、それは……」

図星を突かれたリツコは、何も言い返すことができないまま、しばらく時間が流れた。

「リツコさんたちは！ 負けた原因を僕に押し付けようとしているんでしょう！？ ……ミサトさんも、みんな、嘘つきだ！」

「シンジ君……私が嘘をついているってどういうこと……？」

救出したトウジ達を預けて、発令所に戻ったばかりミサトはそのシンジの言葉にショックを受けた。

自分は嘘をついた覚えは無い。

なのに何でシンジは自分を憎んでいるのだろうか？

「もう……どうなっても……いいや」

信じる者を失ったシンジには憤りだけが残っていた。

「うおおおお！」

初号機はプログナイフを装備すると、使徒に向かって真正面から駆けだした。
自殺覚悟の特攻である。

「シンジ君！バカなことはやめなさい！」

ミサトが怒鳴りつけても、使徒のムチが何度初号機を打ち付けても、初号機は使徒に向かって突進していく。
ついに初号機の握りしめるナイフは使徒のコアにまで達した。

「エヴァ活動限界まであと10秒、9、8、7、6、5……使徒、完全に沈黙しました」

オペレータのマヤが使徒殲滅を告げ、発令所はほっとした空気に包まれていた。

しかし、ミサトは別のことが気になって頭から離れなかった。
使徒殲滅後からエヴァの活動限界までの数秒後、映し出されたエントリープラグの映像では、シンジがつつむいて泣いているように見えたのだ。

<第三新東京市 第壱中学校>

「……もう三日目やなあ」

2-Aの教室でトウジはため息をつきながらケンスケに話しかけた。

「……トウジ、やっぱり気になるのか。お前は不器用だからな。殴ったこと、早く謝りなよ。電話番号はミサト先生から教えてもらってるんだろう?」

ケンスケはパソコンをいじりながらそう答えた。

トウジとケンスケはあの事件の後、ミサトにたつぷりとしかられた。そしてシンジの苦しい立場を聞かされたトウジは、知らないとはいえシンジに妹の怪我の責任を押し付けてしまったことを恥じていた。

「……この電話は電波の届かないところにあるか、電源が切られています」

「なんや、いつ電話しても通じんな……いったいどうなってるんや」

トウジはシンジの電話に向かって何度も発信するが、結局シンジに電話が通じる事は無かった。

第四話 虹、逃げ出した後

<第三新東京市 加持邸>

「シンジ君、今日も帰って来ないわね……」

ミサトは、主の居なくなった部屋の、『シンちゃんのお部屋』と書かれたプレートを見てため息をつく。

シンジは先の戦闘の後、ネルフ本部から加持邸に戻ったはずなのだが、実際には加持邸に戻らず、途中で行方不明になっていた。ネルフの諜報部は優秀であり、本来ならシンジを見失うわけではないのだが、不思議とネルフ諜報部からの報告はなかった。

ミサトはさすがにシンジの行きそうな場所に心当たりは無く、二人の子供や知り合いなどにも搜索を依頼したが、未だにシンジを見つけれないでいた。

玄関のドアに取り付けられている鈴が鳴った。

誰かが来たようだ。

「もしかして、シンジ君？」

ミサトが急いで玄関に向かうと、そこに立っていたのは2-Aの生徒である鈴原トウジと相田ケンスケの二人だった。

「ミサト先生、おはようございます」

「あの時は厳しくしかってごめんなさいね」

ミサトは初号機と使徒との戦闘中にシエルターの外に出てしまったトウジとケンスケに小一時間も厳しく説教していた。

ネルフがひた隠しにしている初号機の戦闘の様子を直に見たいと言

う気持ちは解らないでもないが。

「あの時は本当にご迷惑をおかけしました……」

鈴原トウジはそう言ったきり黙りこんでしまった。

「おいおい、俺たちは転校生のことが気になったからここに来たんだろう？」

「実は！ あれから碇君がずっと休んでいらっしやるので気になって見によらせてもつたんですが？」

……来た。この質問が。

しかしミサトは表向きネルフとは関係ない元教え子たちに本当のことを言うわけにもいかない。

「うっん、シンジ君はね、今ネルフの訓練施設に居るの」

ミサトは嘘も方便と言っ言葉を知っているが、嘘をつくときは少なからず胸が痛む。

「ああ、そうですか」

「あつ、これ机に溜まってたプリント。碇君に」

そう言っ二人は帰って行っ。ミサトは笑顔で手を振って見送る。とりあえずこの場はごまかすことはできたようだ。

「諜報部のバカ！ ……ああ、シンジ君。今ごろお腹を空かせて居ないでしょうね……寒さに震えていたり……」

ミサトは冷たい雨が降り注いでも、しばらく濡れたまま玄関に立ち

つくしていた。

<?????>

その頃、ネルフから逃げたシンジは、戦略自衛隊の制服を着た兵士たちに捕えられ、監禁されていた。なぜか、その中にネルフ諜報部の制服を着た兵士も混じっている。

「何で……こんなことをするんですか……」

しかし、シンジの問いかけには誰も答えなかった。

「……ここから出て、帰らなきゃ。……でも僕に帰る場所なんて、あるのかな……」

シンジは先日の使徒戦の後のミサトとの会話を思い出した……。

「シンジ君。何である時、正面から無防備で使徒に突っ込んでいったの？」

ミサトはシンジをネルフの兵舎の一室に呼び出していた。

「……ごめんなさい」

「あなたが私の作戦に従ってくれなければ、あなたの身に危険が及ぶの。……確かに、少しの間だけど作戦指揮席を離れてしまった私

にも非はあるわ。……だけどね、あなたのとった行動は自殺行為に等しいのよ。」

「わかってますよ、ちゃんと。もういいじゃないですか。勝ったんだから」

「そんなことを言ってるんじゃないの！ 自分の命を粗末にするんじゃないっていつてるの！ 親からもらった大切な命なんだから！ 世の中にはね、生きたくても死んでしまう人がいるのよ！」

「でも、エヴァには僕しか乗れないんでしょう？ どうせミサトさんも僕に利用価値があるから構っているんでしょう？」

シンジは先ほどからミサトと目を合わせようとしない。

ミサトは先の使徒戦の中で言われたことは聞き違いだと思っていたかったが、これで決定的になってしまった。

「ねえ、私が嘘つきって、どういうこと？」

「学校でトウジって子に聞きましたよ。最初僕がエヴァに乗って戦った時、妹が大けがをしたって」

「それって、本当なの……！？」

ミサトはシンジの最初の使徒戦の様子をモニターで見ていたし、戦後処理の現場にも立ち会った。

そこでは怪我人が居たという話も聞かなかったし、N2地雷の犠牲にならずにすんだシエルターの住民たちからネルフへの感謝の言葉を受けたくらいだ。

ネルフの病室に最近入院した女の子と言えば、交通事故でネルフの高等な医療技術でしか救えないほどの重傷を負ったって聞いていたけど……まさか、あの子が！？

「う、ごめんなさい。私は本当に被害者はゼロだって聞いていたの」

「……そうやって人のせいにしてごまかすんですね」

ミサトの事情を知るはずもなく、ネルフに対する怒りで目がくもっていたシンジは、ミサトの言葉を信じる事ができなかった。

「シンジ君とつてエヴァに乗ることが辛い事でしかないなら、もう乗らない方がいいわ、命に関わるもの」

「でも、僕が乗らないと綾波さんに全部押し付けることになるんでしょう？ 乗りますよ」

「人の事はどうでもいいの！ ……あんたみたいなやつばちな気持で乗られるとみんなに迷惑がかかるのよ！」

ミサトはシンジにあえて厳しい言葉をかけた。もちろんパイロットは必要だが、シンジを無理やり乗せるといふ司令部と技術部の意向には反対していた。

シンジがミサトとの事を思い出している間に、監禁されている建物全体が騒がしくなった。

「侵入者だと！？」

「……たった一人で、化物か！？」

シンジが居る部屋の外からは銃撃戦の音が聞こえる。

シンジには何が起きているのかさっぱりわからなかった。

その頃、ミサトは赤いジャケットをひるがえして戦略自衛隊の制服を着た男たちと銃撃戦を繰り広げていた。

たくさん銃弾がミサトに向かって降り注ぐ。

しかし、ミサトの居た場所の壁はハチの巣になっているが、姿は消

えている。

ミサトの放った銃弾は狙い変わらず男たちの腕を撃ち抜く。

ミサトは決して相手の命を奪う急所に銃弾を撃たない。

それは、過去にゲヒルンの懲罰房に入れられた時に一人の女性から聞いた言葉がきっかけであった。

「生きていこうと思えば、幸せになるチャンスは、どこにでもあるわ」

その言葉を思い出しながら、ついにミサトはシンジが居る場所までたどり着いた。

「あんたたちの味方はすべて私が無力化したわよ。大人しく降伏して、ちよつちいじつとして居てくれると助かるんだけど」

部屋に踏み込んだミサトの言葉に対する返事は、銃弾だった。

ミサトは頭に向けられた銃弾を体をエビぞりにしてかわすと、男たちの肩に銃弾をたたきこんだ。

「シンジ君、助けに来たわ。怖かったでしょう」

ミサトはシンジを監禁していた連中のうちの一人が内部情報をリークしたことによってこの場所を探し当てたのである。

「ミサトさん、怪我をしているじゃないですか！ 血が出ていますよ」

ミサトは銃撃戦で傷ついたのか、服の所々に血だまりができている。

「大丈夫よ、私は普通の人よりタフなんだから」

そう言ってミサトは笑顔を作る。

しかし、シンジにはそれは痛みをこらえているとわかった。

シンジはミサトの運転するルノーに乗って、第三新東京市まで戻って来た。

しかし、第三新東京市を見渡せる展望台に差し掛かった時、ミサトの顔色は悪くなっていた。

「……はあ、はあ。シンジ君。ちよつと疲れたからここらへんで休憩しましょうか」

雨はすっかりあがり、すっかり晴れていた。

ミサトは重い体を引きずるように運転席から出て、展望台のベンチに腰を下ろす。

そしてオロオロしているシンジを手招きする。

「見て、シンジ君。綺麗な虹よ……」

シンジはミサトの隣に腰をおろして一緒に虹を眺めていた。

「私は今まで辛いことが多かったわ……でもね、生きていれば必ずいいことがある。涙を流した後はそう思うようにしているの」

「ミサトさん。僕は……またミサトさんの家に帰っていいですか？
エヴァのパイロットじゃない僕でも」
「もちろんよ……」

ミサトはそう言ってシンジの頭を抱き寄せて、おでこにそつとキスをする。

「これは、家族に対する親愛のキスよ。……大人のキスは好きな子にしてみらいなさい」

シンジは慌ててミサトから離れた。顔は赤くなって首を振って否定する。

「わかってるわよ。レイとはまだそんな関係じゃないって。……でも、レイの方はどうかしらね。ピンチを救ってくれた白馬の王子様」
「なんてね」

「ミサトさん！」

「そんなに怒りなさんなって。そうだ、もう一人シンちゃんのお嫁さん候補がいるの。ドイツのリヨウジの所にいる子なんだけどね……」
「……」

突然、ミサトの体から力が抜けて、目を閉じて黙り込んでしまった。慌てたシンジが体を激しく揺さぶる。

「……ミサトさん、ミサトさん、どうしたんですか、ミサトさああん……」

「……ん？ 今の声、転校生の声じゃなかったか？」

「ワシにも聞こえたなあ」

シンジの悲鳴を聞いたケンスケとトウジが声の聞こえた方に向かうと、そこには叫び声をあげているシンジと、ぐったりとしたミサトの姿があった。

「ミ、ミサト先生、どないしたん？」

慌てる二人をよそに、ケンスケはミサトの脈をとってさらにミサトの顔をしばらく眺めると、ほっと息を吐き捨てた。

「……寝てるだけだよ」

「「な、なんだって!」」

ほっとしたシンジとトウジは膝を折ってへたりこんでしまった。

とりあえず三人はミサトをそのままにしておくわけにはいかないの
で、ケンスケの電話でネルフに連絡して迎えに来てもらうことにし
た。

「転校生、ワシを殴れ!」

迎えを待っている間トウジはそんなことを言い出した。

「え?」

「なんも知らないのにお前の事どついてもうたしな。このまま借
りを作ったままだと気色悪いし、これでチャラにしようや」

「……じゃあ、僕の友達になってよ」

トウジとケンスケはシンジの言葉に、笑顔で手をシンジに差し出し
た……。

第五話 人を繋ぎしもの

<ネルフ 病棟>

ガラガラガラ……ストレッチャーに乗せられたミサトが病室に運ばれる。

「ミサト、今回も手ひどくやられたわね。……でも『そんな体』だからって、痛みは感じるんでしょう？」

ミサトは痛みで再び目を覚ましたのか、薄目を開けている。

「あたしも神経は人間並みってことね」

「しかし、解らないわね。敵対する連中の命を助けて、何の得になるのかしら」

「……私は信じているわ。人は間違いを犯してもやり直すことができる。その可能性を」

ミサトが3日後に病院を退院した時は、体に傷一つ残って居なかったという。

彼女自身はこの『体』の事を快く思っては居なかった。周りの人間が死滅しても、彼女一人だけ生き残ってしまうのだから。

<ネルフ 司令室>

その日、ネルフ総司令碇ゲンドウはネルフドイツ支部に派遣されている加持リョウジの元に電話をかけていた。

「変な気は起こしていないだろうな」

「これは結構なお言葉ですね。私の命はあなたにつなぎ止められていると言っのに」

彼自身の命の他に、愛する妻と子供たちもネルフに監視されている。逆らうことができないことは、ゲンドウもよく知っている。

「彼らが情報公開法で請求をしていた資料ですが、ダミーを混ぜておきました。政府は裏で根回しを進めておりますが、こちらが先手を打っておきました」

「ふっ、さすが仕事が速いな」

リョウジの報告を聞いて、ゲンドウは笑みを浮かべた。

「で、例の計画ですが、やはり実行するのですか？」

「君の指図を受ける言われは無い、余計な口出しは無用だ」

ゲンドウの正面のモニターにロボットの画像が映し出される。

「……それでは筋書き通りに」

リョウジは結局この謀略の事を妻のミサトに伝えることができない自分を責めるしかなかった。

<第三新東京市 加持邸>

「おはようございま……す!?!」

起床してダイニングルームに来たシンジは一気に目が覚めてしまった。

ミサトが裸にエプロンという格好でキッチンに立っていた……いや、正確には下着らしい服を着てはいたけれども。

「興奮しちゃダメだ興奮しちゃダメだ興奮しちゃダメだ……」

シンジは必死に父ゲンドウの顔を思い浮かべると少しだけ落ち着くことができた。

娘のエツコの方もタンクトップにホットパンツという格好で椅子の上にあぐらをかいて座っている。

同居人のヨシアキの方を見ると『平常心』と書かれたＴシャツに短パンで涼しい顔をしている。

「あ、あの、この家ってこんなにサービス過剰と言うか開放的と言えがいいのか……それでいいの？」

「最近シンジ君が居たからキチンとした服を着てただけ、持たなくてさ。僕は慣れたけど、君には辛いだろうね」

シンジはそれ以上何もいうことができず、幻影の中に浮かぶ父ゲンドウに助けを求めながら朝を過ごした。

綾波レイの姿がちょっと浮かんだだけで顔が真っ赤になったりしてしまったりはしたが。

「くくはあ！朝一番はやっぱりこれよね！」

ミサトとその娘のエツコはコーヒーを飲み干した。ドイツに住んでいた頃からの習慣だとか。

「さーって、食後はみんなではしのごろ寝タイム」

「ミサトさん、食べてすぐ寝ると牛になるって言いますよ」

「いいのいいの。家にはマナーなんて言葉ないから。放任教育よん」

ミサトを含む加持家の三人は床でゴロゴロと転がり出した。

……シンジは自分もこの家のカラーに染まってしまうのかと思うと、気が重くなったが同時に何か暖かさも感じていた。

「……本当に僕の進路相談をしなくていいんですか？」

「いーの、いーの。あたしも元教師なんだし、して欲しいならたっぷりしてあげるから……本当はね、シンジ君にも職業選択の自由はあるはずんだけど、ネルフの息のかかった企業にしか就職させてあげられないの……。だからたっぷり学生生活を満喫しなさい」

「はい。ありがとうございます」

加持邸の玄関のベルが鳴る。

「「おっはよー碇君」」

玄関からトウジとケンスケの元気な声が聞こえる。

「ミサトさん、そんなかつこうで出て行ったら教育に悪いですよ」

「だいじょうぶ、学校ではしっかりしてるからさー。プライベートではサービス、サービスよん」

シンジは赤くなって玄関へかけていく。

「「「いってらっしゃーい」」」

加持家の三人は部屋から手だけを出して見送る。

ミサトの娘と息子はシンジとは別の中学校に通っている。

「ミサト先生。行つてきます」

トウジとケンスケの元気な声が玄関に響いた。

ミサトはそれを見送ってからガードをしている諜報部に電話をかける。

「シンジくんは、今クラスメートの二人と家を出たわ。……そう。

例のクラスの生徒。写真で確認は取れるわよね。難しい相談だけど、当たり障りの無い距離でのガードをお願い。……責任は私がとります……ええ、うん」

「あれが……僕が倒した使徒、か……」

シンジが先の戦闘で倒した使徒は、^{シャムシエル}自爆しなかったため、原形をほとんど止めたままになっている。

教室の窓から使徒の残骸をながめていたシンジは、駐車場にすごいスピードで車が入ってくるのを見た。

案の定……車から降りてきたのはミサトだった。

「うわあ、ミサト先生だ」

「相変わらずかっこいい」

「あんな美人の先生に引き取られてる碇がうらやましいぞ」

校舎の生徒たちは授業そっちのけで窓から身を乗り出してながめている。

女子生徒たちの反応は複雑だった。

ミサトに憧れを持っていた反面、強力なライバルが減ったと喜んでいたからである。

「やっぱりええなー。ミサト先生は」

「うんうん」

「トウジとケンスケは家でのミサトさんを目当てに来てるんだな」

…」

シンジも健康な男子。

トウジとケンスケの気持ちはわかるが、ため息が出る。

「えー、今日からまた非常勤講師ではありますが、加持先生に英語の科目を担当してもらいます。」

担任の根府川先生がミサトを紹介する。

シンジを引き取ってからミサトは教職に復帰することを希望していた。

そこで根府川先生に相談して、第壱中学校の教師の復帰を願い出たのである。

彼はミサトが至らない部分はフォローすることを快く引き受けてくれていた。

<旧東京都心>

翌日。

ミサトは単身ネルフの代表として日本重化学工業共同体の実験機「ジェット・アローン（J A）」の完成披露記念会に参加していた。本来ならば赤木リツコ博士も呼ばれていたのだが、過密スケジュールなどの理由により辞退。

ミサトに厄介事をネルフは押し付けた形だ。

会場に居るのは反ネルフの政治家や企業の役員たち。

「みなさん、今日は次世代決戦兵器J Aの完成披露記念会にご参加いただきありがとうございます。操縦の様子は後ほど御覧に入れますが、ご質問のある方はどうぞ」

壇上にはJ Aの開発責任者である時田シロウ博士が尊大な様子で立っていた。

「ご質問が無いようなので、続けさせていただきます。J Aは150日間連続で戦うことができます。ここが5分として戦えない某組織の決戦兵器と違う所です」

時田シロウ博士はそう言って真ん中のテーブルに一人で居るミサトをちらつと見る。

周りの人々も満足したように笑い声をあげる。

……ミサトもちろんエヴァをバカにされて平気なはずもない。嫌がらせのように数本だけ置かれたビールに手を伸ばさないように必死に抑えていた。

「パイロットに精神汚染を引き起こす可能性のある某組織の兵器よりはよっぽど人道的ですね、みなさん？」

再び時田シロウ博士が発言すると、またもや会場に笑いと拍手が巻き起こる。

ミサトはついに禁酒の自戒を破りビール瓶に手をかけてしまった。大量のコーヒ―は禁酒の努力の証だったのだ。

「先の戦いでは制御不能になり暴走まで許すとは……手に負えませんな」

その後も時田シロウ博士は得意満面になってベラベラとしゃべっていた。

そして、ミサトのビールの量も一升を超えてしまった！

「うつせえなあ、さつきから自慢話ばかりウダウダと！」

豹変したミサトの様子に会場は静まり返った。

「ここは、みんな右へならえの集まりか！」

ミサトは思いつきりテーブルをひっくり返す。

「あ、あの……ネルフの葛城さん！？」

時田シロウ博士が呼びかけても、ミサトは正気を取り戻す様子はない。

周りの客達からも悲鳴が上がった。

S Pが慌てて暴れるミサトを取り押さえようとするが、投げ飛ばされてしまった。

ミサトが近づくと人が波のように引いて行く。

プシューー。

スプリングラーから水が思いっきりミサトに降り注いだ。

「あれ、私ったら何を……？」

冷や水を浴びてミサトは正気を取り戻したようだ。

時田シロウ博士を始め、会場の面々はほっと胸をなでおろした。

落ち着きを取り戻した時田シロウ博士はJ Aの起動実験を開始する。
J Aを固定していたものが次々と外されて行く。

「歩行、前進微速。右足、前へ！」

「了解。歩行、前進微速、右足前へ！」

J Aがゆっくりと歩き出す。それを窓から望遠鏡を使って眺めている人々は歓声を上げた。

「へえ、ちゃんと動いてる」

ミサトは壁に寄りかかってながめている。
すっかり酔いは覚めたようだ。

その時、異常を知らせる電子音が鳴り響いた。

「どうした？」

「変です、炉内の温度が急激に上昇しています」

「冷却水の温度も上昇中」

「バルブを解放しろ！」

「効果がありません！」

「緊急停止、動力閉鎖！」

「停止信号発信……ダメです！」

「そ、そんなどうすればいいのだ……」

想定外の事態に膝を折ってしまった時田シロウ博士。

そうしている間にもJ Aは要人や開発スタッフのいるこの建物を目指して近づいて居る。

途端に周りから悲鳴が上がる。しかしJ Aが爆発すれば今から逃げてもとても間に合わない。

「そ、そんなバカな……」Aには様々な危険をシミュレートしてプログラムが組み込まれているはずだが……」

そのプログラムがネルフの作業員の手によって書きかえられていることは、時田シロウ博士は知っているはずもなかった。ゲンドウはここで反ネルフ勢力を一網打尽にする気でいた。しかしさすがに被害を出すわけにはいかないので、爆発の直前ギリギリで止めて危険性を最大限ある演出だけの計画だった。

「何を手をこまねいているんですか！」

いつの間にかミサトが時田シロウ博士の居るコントロールルームまで足を踏み入れていた。

「こうなつては自動停止を待つしか手はありません……」

時田シロウ博士はつぶやくようにミサトに答えた。

「その確率は？」

「0・03%です。奇跡でも起こらない限り無理ですよ！」

ミサトに尋ねられたオペレータの一人がそう答えた。

「奇跡は待つものじゃない、人の手で起こすものなのよ！」

ミサトは高らかにそう宣言をする。

その姿に見とれてしまった人々も居るようだ。

「停止手段を考えて！」

「方法は全て試した。後は制御棒を内部から直接押し込むしか……」

「……それだわ、私がやります」

「しかし、あなたには無理だ！」

「……そうね私一人では無理ね。制御棒を押し込むには何人か一緒に入る必要があるわ」

時田シロウ博士は、その言葉を聞くと拳を握りしめた。

「加持一尉、私も」A内部に乗り込む決死隊に加えてもらえないか」

「時田博士……」

「あなたには、この事故の責任は無い。それでも我々に救いの手を差し伸べてくれた」

「私も参加します！」

「私も！」

さらに」Aの開発スタッフの数人も立候補して、頭数は揃った。

後は」Aの動きを止めるだけ。

ミサトは心苦しかったが、エヴァの力を借りることにした。

「あ、日向君？ 厚木基地に話は通したから、レイと零号機の運搬をお願いできる？」

ミサトはネルフの発令所に連絡を入れた。

<ネルフ 第一発令所>

シンジはエヴァに再び乗るつもりで発令所に来ていたが、まだ乗る決心が固まらずにいた。

そんなとき日向二尉の元に、ミサトからエヴァの出撃要請の連絡が入った。

「エヴァの出撃は許可できん」

「し、しかし、それでは加持一尉とそこに居る人たちが……」

ゲンドウはこの騒動が茶番だと言うことは解っている。
だから知らないふりをしてやり過ごすことにしていた。

しかしミサトの行動は予想外だった。

「今、使徒が現れたらどうする？ 代わりのエヴァは居ないのだぞ」

ゲンドウは発令所に来たまま黙ってうつむいているシンジを見ると満足げに顔を歪ませた。

「僕が、初号機に乗って出撃します！」

「シ、シンジ君！？」

リツコはこの気弱な少年がそんな強い決心をするとは信じられなかった。

「……ミサトが彼を変えたのね。これでは、司令の計画も修正が必要になってくるわね」

リツコは誰にも聞こえないようにそうつぶやいた。

「ミサトさんが危ない目にあって……今度は僕がミサトさんを助ける番だ！」

シンジはそう言って、ゲンドウをにらみつけた。

日向マコトはすでに厚木基地の輸送機と連絡を付けていた。

「日向二尉、出撃は許可できんと言っているだろう！」

ゲンドウがそう大声で怒鳴っても、マコトは輸送機の出撃に向けた準備を止めなかった。

マコトをはじめ、ネルフスタッフのほとんどはミサトを敬愛している。

ネルフ内部の命令系統が乱れていると外部に思われては面倒なので、しかたなくゲンドウは折れて初号機の出撃を許可した。

<輸送機>

エヴァ初号機をぶら下げた輸送機の中ではミサトとシンジ、決死隊に立候補した時田博士とＪＡ開発スタッフのメンバーが顔を合わせていた。

「ＪＡは後七分で炉心融解の危険があります。シンジ君は建物に居る人たちが踏みつぶされないようにＪＡを押し止めて」

「ミサトさんたちはどうするんですか？」

「私達はエヴァを介して、後方からＪＡ内部に乗り込みます」

「危なすぎますよ！」

「大丈夫。エヴァなら万が一の直撃にも耐えられるわ」

「じゃなくて、ミサトさんたちが！」

「やれること、やっておかないとね。後味悪いでしょ」

ミサトはそう言ってシンジのほおをなでた。

「目標、確認！」

「さあ、行くわよ」

「エヴァ、投下位置！」

エヴァ初号機の手のひらには防護服を着たミサトをはじめ、決死隊のメンバーたちが乗っている。

「ドッキングアウト！」

「了解！」

着地したエヴァ初号機は夕日を背にJ Aの後ろ姿を全力で追いかける。

「追いついた！」

「後五分も無いわ！ 後ろから乗りつけて！」

初号機はJ Aの背中をつかみ、動きを止める。

ミサト達が初号機を伝って、非常ハッチから中に乗り込んで行く。

「気を付けて、ミサトさん」

ミサトはシンジの声にVサインで答える。
その姿は希望に満ちていた。

「ここです、加持一尉」

時田博士がそう言って、制御棒のある部屋に向かう。

「さあ、時間が無いわ、一か八かやってみましょう！」
「おー！」

ミサト達は制御棒を押す体に力を込めた。
じりじりと少しずつ制御棒が押し込まれて行く。
シンジは初号機から、J Aから蒸気が噴き出すのを見た。
やっぱり間に合わないのか。

「ミサトさん、逃げて！」

シンジは初号機の中でそう叫び声をあげた。

「動け、このおおおー！」

ミサト達は力を込めて制御棒を押し続けていた。
すると、制御棒は引っ込み、J Aから噴き出す蒸気も止まった。
これはゲンドウの計画によるもののだが、メインコンピューター
に接触していないミサト達は誰一人気がつかなかった。

「おおー！ 彼女がやったぞ！」

「ネルフの女神が私達を助けてくれたのか！」

いつの間にかミサトがネルフのアイドルから女神に格上げされている。

とりあえずここに集まった反ネルフの要人がミサトに感謝している
のは確かである。

シンジも興奮した様子でエヴァの中からミサトに呼びかける。

「ミサトさん凄いや、僕改めてミサトさんを見直しました、奇跡っ
て起こせるものなんですな！」

「奇跡はあたし一人が起こしたものじゃないわよ」

「他のみなさんも、凄いです！」

「すまない……私のせいでこんな危険な目にあわせてしまった……」

時田博士をはじめ、ＪＡの開発スタッフはミサトに頭を下げた。

「でも……人は間違いを犯してもやり直せるはずですよ。……ＪＡも問題点を見直せばきつと役に立てるはずですよ」

ミサトの言葉に時田博士たちは嬉しそうに顔をあげた。

「よし、戻ったらＪＡの見直しだ！」

「おー！」

ＪＡ開発陣は元気を取り戻した。

多分戻ったら様々な方面からしかられることになるだろう。
しかし彼らはそれを乗り越えてくれるに違いない。

「みんな、もう一度、加持ミサト一尉に向かって、敬礼！」

ミサトとシンジは歓声に見送られて実験場を後にした。

彼らは二人の味方だ。

……たとえこれからどんな事があっても。

<ネルフ 司令室>

ネルフの司令室でゲンドウは事件の報告を受けていた。

「初号機は無事回収しました。汚染の心配もありません。加持一尉の行動以外は全て計画通りです」

ゲンドウに報告するリツコの隣にはJ Aの開発スタッフの一人が立っている。

彼がネルフの工作員だろう。

「日本重化学工業共同体や反抗的だった日本政府の要人たちもネルフに対する協力を申し出てきました」

「思わぬ誤算だったな、碇」

リツコの報告を聞いて、ゲンドウの隣にいたコウゾウはからかうように声を掛けた。

「すべては筋書き通りです」

「嘘を付け」

ゲンドウの言葉にコウゾウは苦笑するのだった。

第六話 熱戦、第三の少年

<ネルフ 発令所>

「JA事件からしばらく経った日の事。

正八面体の姿をした巨大な物体が第三新東京市に接近していた。

「碇、未確認の飛行物体が接近中だ。たぶん第五の使徒だな」
「総員、第一種戦闘配置」

ゲンドウはそう言ってリツコに視線を送った。

「初号機は240秒後に出撃させます」

シンジは素早く初号機に乗り込む。

使徒は動きが鈍いし、距離もかなり遠かった。

先ほどネルフの技術部が開発したポジトロン・ライフルを使えば、遠距離から先制攻撃ができる。

そう考えたミサトはエヴァを即座に出撃させる判断を下した。

「発進！」

ミサトの号令と共に、初号機が射出される。

初号機が地表への通路を突き進んでいる、その時。

「目標内部に高エネルギー反応！」

オペレーターの青葉シゲルが声をあげた。

「なんですって！」

「円周部から収束して行きます！」

「すぐに初号機を格納庫に戻して！」

しかし、ミサト達の判断は数秒遅かった。

第五使徒ラミエルのレーザーはすでに初号機に向かって発射されていた。

シンジは反射的に両腕を前に出して体をかばう。

初号機もその動きに連動し、フィードバックの痛みがシンジの両腕に走る。

「うわあああああ！」

シンジの悲鳴が発令所に響き渡る。

次の瞬間、初号機は地中に収容された。

ミサトは自分の判断の甘さを悔やんでいた。

使徒がどんな攻撃をしてくるかわからなかったのに、簡単に出撃させるのでは無かった。

シンジの怪我の具合が心配だったが、ミサトは作戦を練らなければならなかったので、病室に行くわけにはいかない。

そこで、発令所で戦闘の様子を眺めていた綾波レイにシンジの病室に行くように頼んだ。

「レイ、病室にシンジ君の様子を見に行ってくれないかな？」

「加持一尉、それは命令ですか？」

「特別命令よ」

「命令なら、そうするわ」

レイはそそくさと病室に向かおうとする。

しかし、それをゲンドウが止めた。

「レイ、勝手な行動をするな」

「レイ、ニンニクラーメンチャーシュー大盛りをご馳走するから」

「司令の命令と……ニンニクラーメン」

レイはさっさと発令所を出て行っただ。

ゲンドウはがっくりと肩を落とした。

確かにミサト君の料理はうまい時はうまい。

この前食べたおはぎは絶品だったな……いかん、これでは司令としての面目が断たないではないか！

プライベートではミサトに手なずけられそうになっているゲンドウと冬月コウゾウだった。

運ばれて行くシンジに付き添ったレイによると、外傷は無く、命に別条も無いと言う。

ミサトはホッと胸をなでおろした。

使徒ラミエルは第三新東京市の中心、ネルフ本部の直上で動きを止めた。

そしてドリルのようなものを地中に向かって伸ばし、掘り進んでいた。

ネルフ本部にドリルが到達するのは明日の未明だということだった。

ミサトは使徒の攻撃能力を探るため、まず巨大な気球を無人で使徒に向かって飛ばした。

あっという間に使徒のレーザーにより気球は蒸発した。

「次！」

戦略自衛隊の戦闘機が三機同時に攻撃を仕掛ける。

ミサイルの一つが使徒ラミエルに命中する前に、レーザーによって破壊された。

残りの二つは使徒に到達したが、A・T・フィールドに阻まれて、効果が無かった。

戦闘機は旋回運動を繰り返し、なんとか三機とも使徒ラミエルのレーザー攻撃を回避できた。

「なるほどね。日向君、どうおもう？」

「使徒は一定の範囲内に入った敵を自動排除するものと思われます」

「素早くて小さいもので、直線的な動きではないものには対応できていませんね」

「同時に二つの敵に攻撃もできないみたいです」

マコト、シゲル、マヤが意見を述べた。

「私の作戦は後で言うとして、あなたたちは何か思いついた？」

「使徒に敵として認識されなければいいんでしょう、気配を殺すと言うのはどうです？」

「敵のレーザーを見切って交わしながら攻撃を仕掛けると言うのはいかがですか？」

「エヴァのどちらかがおとりになって、もう片方が攻撃を担当すると言うのはどうでしょうか」

ミサトの言葉にマコト、シゲル、マヤが作戦を進言した。

しかしどれもミサトは満足がいかないようだった。

「日向君の作戦は、兵装ビルみたいに風景の一部に溶け込もうってことだろうけど、全く動かないって言うのも無理があるわね。青葉君の案は、使徒が正八面体の形をしているからどこを狙っているか解りにくいから難しいわね。マヤちゃんはい線突いてるわね、あたしの考えと似ているわ。でも、もうひと押しね」

マコト、シゲル、マヤは息を飲んでミサトが作戦を言うのを待ち構えていた。

「あたしはねえ、使徒の射程距離外からの長距離射撃で一点突破を狙う作戦を考えているの」

その後司令室ではミサトが作戦の概要を説明し、実行のための許可を求めた。

「……MAGIの意見は」

「賛成が2、条件付き賛成が1でした」

コウゾウに尋ねられたリツコはそう答えた。

「そうか、それなら反対する理由はない。存分にやりたまえ、加持一尉」

ゲンドウの承認を得られたミサトは発令所に戻った。

「全く、ミサトも大胆不敵な作戦を立てたものね」

「後8時間30分以内に実行可能な作戦と言えば、これしか思いつかなかったのよ」

「ネルフのEVA用ポジロン・ライフルでは、こんな大出力には耐えられないわよ」

「まっかせなさい。あたしにアテがあるわよ」

ミサトは戦略自衛隊の知り合いである河本軍曹に電話をかけて、戦自研のポジロンライフルを借りることを約束した。

先のJA暴走事件をミサトが解決したことは、戦略自衛隊にも伝わっていて、ミサトのシンパが増えていた。

「しかし、大量の電力をどうします？　ATフィールドを貫通するには、最低でも180万KWは必要ですよ？」

マコトの質問にミサトは胸を張って答えた。

「ジェット・アローンよ」

ミサトは先の暴走事件で時田博士と親密に連絡を取り合うようになっていた。

もともと時田博士の方が、一方的にミサトに憧れているようだったが。

「150日の連続戦闘可能なエネルギー。通常発電力約130万KW、最大瞬間発電力約500万KW。格闘戦には不向きでも、発電所としてはイけるんじゃない？」

「防御手段としては、ネルフ技術部で盾を制作したわ。これで使徒のレーザー攻撃にも17秒はもつはずよ」

「それは結構。狙撃地点は？」

「変電設備などから双子山山頂がよろしいかと思われます」

「後は、パイロットの問題ね。初号機パイロットの容体は？」

「外傷は無し。ただし、フィードバックによるものか、手に強い痛みをうつたえています」

「それじゃあ、射手を担当してもらうのは、無理か……司令、零号機の出撃を要請します」

ミサトはそう言って発令所の高所の席に座るゲンドウの方を仰ぎ見た。

「君はパイロットを危険な目にあわせない、というのが信条ではな

かったのか？」

「はい。それは安全が保障されない出撃に關してと言つことです。今回は初号機に防御を担当してもらいます」

「わかった。しかし、零号機に傷一つ付いたら、責任を取ってもら
うぞ」

<ネルフ中央病院 第3外科病棟>

「……ここは……綾波？」

シンジがベッドの上で目を覚ますと、側にはレイが座っていた。
レイはシンジの様子に気づくと、電子レンジからリゾットを取り出
してシンジの前に突き出した。

「食事。目が覚めたら食べるようにって。温かいうちに食べて」
「痛ててて。手がしびれて上手くスプーンが握れないよ」

レイはシンジからスプーンを奪い取ると、リゾットをすくってシン
ジに向かって差し出す。

「碇君。口を開けて」

「あ、綾波、こういうのは……」

レイの赤い瞳にじっと見つめられて、シンジは仕方無く口を開いた。

「熱っ！」

「次からは冷ますわ」

レイは息を吹きかけてからリゾットをシンジの口に運ぶ。

そしてリゾットはすっかり空になった。

「綾波。こういうことは親子とか、こ、恋人同士で普通はするものだよ」

「そう。でも、命令だったから」

「変わった娘だな」

シンジのレイに対する第一印象はこんな感じだった。

そこに電話のベルが鳴り響く。

どうやら発令所のミサトからのようだ。レイが応対している。

「明日午前0時から発動される作戦のスケジュール……」

レイから作戦のスケジュールを聞き終わったシンジはしびれる手をおさえながらうめく。

「また、エヴァに乗らなきゃならないのか」

「ええ、そうよ」

「綾波もエヴァに乗って怖い目にあったらそんな平気ではいられないよ」

「じゃあ逃げれば？ ……作戦なんて、射手の私だけで十分なもの」

「あっ」

「さよなら」

レイはそう言って、病室を出て行った。

「逃げちゃダメだ……」

そうつぶやいたシンジは慌てて着替えてレイの後を追いかけるのだった。

<双子山山頂>

エヴァ零号機と初号機は双子山の仮設基地に到着した。
ミサトとリツコが作戦の細かい内容を説明する。

「零号機には射手を、初号機には防御を担当してもらいます」
「シンジ君が先の攻撃で手を痛めてしまったからよ」

初号機の腕に防御用シールドがくりつけられていた。
シンジの手の痛みは治まってきたが、まだ少ししびれているからだ。

「レイ、照準の設定はMAGIが行ってくれます。あなたはトリガーを引くことだけを考えて」

「はい」

「じゃあ、もし外れて敵が攻撃してきたら？」

冷静なレイとは対照的に、シンジは不安になったのか質問をする。

「今は余計な事を考えないで」

リツコの言葉をさえぎってミサトがシンジを安心させるために話しかける。

「……大丈夫、初号機のシールドで使徒のレーザーを防ぐことができるから」

「僕は零号機を守ればいいんですね」

「そう、お姫様を守るのは騎士だって昔から相場が決まっているの

よ」

そしてシンジとレイの二人は更衣室でプラグスーツに着替えていた。

「私一人で大丈夫なのに」

「何でそういうこと言うんだよ」

「死んだって、別に構わないもの」

「綾波は死なないよ、僕が守るから」

時計が午前0時を告げる。作戦開始の時間だ。

「ジェット・アローン稼働開始！」

時田博士の合図とともに、ジェット・アローンがうなり声をあげる。エネルギーは全てポジトロン・ライフルに注入されるので、寝かされた格好のままだ。

「陽電子流入、順調なり」

「最終安定装置、解除」

「撃鉄起こせ！」

ミサトの合図とともにレイはポジトロン・ライフルの引き金を引く。

「全エネルギー、ポジトロン・ライフルへ！」

「発射まで、10、9、8、7……」

発射までのカウントダウンが迫ったさなか、使徒の体が光り出した。

「目標に高エネルギー反応！」

「なんですって？」

使徒のレーザー光線とポジトロン・ライフルからのビーム光線が同時に発射された。

光線はお互いに正面からぶつかり合った！

「こちらの方が押されている？」

使徒のレーザー光線がまっすぐに向かってくる。

零号機に乗っているレイは貫かれる痛みを想像して目をつぶった。

しかし、レーザーはやって来ない。

不思議に思ったレイが目を開くと、初号機が盾を構えて必死に耐えていた。

もうほとんど盾は溶けていて、レーザーは初号機自身に降り注いでいた。

「碇君……！」

「もっと、出力をあげられないの？」

「ジェット・アローン、バルブ全面開放。出力最大へ。そうだ、機体が焼き付いても構わないから出力をあげるんだ！」

ジェット・アローンから大量の蒸気が上がる。

安全起動数値をかなり超えているようだ。

ポジトロン・ライフルから発射されるビーム光線が使徒のレーザー光線を押し戻していく。

使徒の方のエネルギーが尽きたのか、突然レーザー光線が止んだ。ビーム光線が使徒の中心を貫き、使徒は崩れ落ちた。

同時に初号機も地面に倒れこむ。

「碇君！」

零号機は熱を帯びている初号機のエントリープラグを素早く引き抜いた。

エントリープラグは変形していて、ハッチが勝手に開いた。

レイは零号機から降りてシンジの元に駆け寄った。

シンジは目を覚ましてのぞきこんでいるレイの姿を見ると、笑顔を見せた。

「……どうして、笑っているの」

「綾波を守れて嬉しいからだよ」

「私、何の価値もないのに。私が死んでも、代わりはいるもの」

「そんなこと言っなよ。死んでもいいなんて。生きていればきっといいことがあるよ」

「私が、碇君に会えたように……？」

シンジはレイの最後の質問には赤面してしまって、答えることができなかった。

第七話 レイ、恋心の向こうに

<ネルフ 第二試験場>

「起動開始」

ゲンドウの号令と共に零号機の起動実験が開始された。それは定期的に行われる、ただの確認作業のはずだった。

「絶対境界線まで、後0・5、0・4……」

オペレーターの声を聞きながら、実験に立ち会っているリツコとゲンドウも何の心配もなく起動実験の様子を眺めていた。

「パルスが逆流しています！」

オペレーターの悲鳴にも似た声にゲンドウとリツコにも動揺が走る。零号機は激しく身動きをして拘束を解こうとしている。

「実験を中止しろ、電源落とせ」

ゲンドウの命令により零号機のコードが抜かれた。

拘束を解いた零号機は胸のあたりをおさえて苦しんでいるように見えた。

「心臓が苦しいのかしら。でもおかしい、レイには心臓の疾患は無いはず……」

リツコはそう独り言を呟きながら考え込んでいた。

零号機に乗るレイは、この前の使徒戦の事を思い出していた。

放たれる使徒のレーザー、守ってくれた初号機、そして最後に見たシンジの笑顔……。

特にシンジの笑顔を思い出すと、とても落ち着かない気分になるのだ。

「自動排出装置、作動しました」

レイの乗るエントリープラグが零号機から飛び出した。

零号機は動きを止めたが、エントリープラグは地面にたたきつけられた。

「レイ！」

ゲンドウはそう叫ぶと、エントリープラグまで走って行き、素手でハッチをこじ開けた。

レイは心配そうな顔で自分をのぞきこむゲンドウに向かって笑顔を見せた。

リツコはそんな二人を上から複雑な表情で眺めていた。

「リツコ！ 零号機の起動実験が失敗したって本当？」

「ええ。推測ではパイロットの精神的不安定が原因だと思われるわ」

零号機の起動実験の失敗を聞いたミサトが駆けつけていた。

「精神的不安定？あのレイが？」

「彼女にしては信じられないほど乱れたのよ」

「何があつたのかしら」

「でも、まさか……」

「リツコ、心当たりがあるの？」

「いいえ。ミサトは？」

「レイも恋を自覚したんじゃないかしら」

「……シンジ君に？」

「だとしたらいい傾向よね」

「あら、ミサトはアス力を応援するんじゃないの？」

「それはシンジ君が決めることよ。アス力には悪いけど」

<第三新東京市>

「これが……僕たちの敵なのか」

シンジは第五使徒ラミエルの死体処理の現場に来ていた。

「半分以上原形をとどめている。劣化もしないしとても良い検体だわ」

リツコは嬉しそうに解体作業の指揮をとっている。

金属に近い生命体なので第四使徒シャムシエルと違って腐敗もほとんど無い。

「で、何かわかったの？」

「使徒の遺伝子は人間の遺伝子と99・89%似ていることが解ったわ」

「それって……」

「そう。人間の進化の違う可能性ってことも考えられる」

「人と同じような思考能力とかもあり得るってことね……」

ミサトは対使徒戦の作戦に過去の戦場で培った知識も取り入れることを考えはじめていた。

シンジは目の前をゲンドウとコウゾウが通り過ぎるのを見た。そして、ゲンドウが手のひらにやけどを負っていることに気がついた。

「シンちゃん、どうしたの？ 司令の事をじっと見て」

「あ、父さんの手はどうかしたんですか？ 怪我しているみたいですよ」

「今朝の零号機の起動実験が失敗したのは知っている？」

「はい、ミサトさんが教えてくれました」

「碓司令が加熱したハッチを素手でこじ開けて、レイを助け出したのよ。自分がやけどするのにも構わずにね」

父さんが、そうまでして綾波を助けた？

まさか……父さんは綾波の事が好きなのかな。

シンジは新しい母親としてレイをゲンドウに紹介される光景を想像して冷汗が出た。

< 第壱中学校 >

翌日。シンジの通う中学校では男子が校庭、女子はプールサイドで体育の授業を行っていた。

「やっぱ、ミサト先生の水着姿は最高やな」

「ああ、碓もよく拝んでおけよ」

家ではもったときわどい恰好を毎日見ているよ。

シンジはそう思った。

トウジとケンスケをはじめ、男子はミサトの水着姿に釘付けになっている。

ミサトは第壱中学校の水泳部の顧問の英語教師として赴任していた。軍隊では英語と水泳は必要なものだったからである。

しかし、シンジはミサトとは別の人物の事を眺めていた。

過去を抹消だなんて何か訳があるのかな……ミサトに聞かされたレイのプロフィールを思い出していた。

「碇は、綾波狙いか」

「意外と渋い趣味しとるな」

「からかわないですよ」

放課後。シンジは勇気を出して、レイに声を掛けた。

「綾波！ これからネルフに行くなら、一緒に行かない？」

「……勝手にすれば」

レイは冷たい口調でそう言ったが、拒絶はしなかった。

レイと一緒に下校する所をクラスメートに冷やかされ、シンジはドキドキしていたが、レイはいつもと変わらない表情で歩いていた。

「また、起動実験をするんだ。今度は成功するといいね」

「ええ」

「……綾波は怖くないの？ エヴァに乗るのが」

「碇君は怖いのか？」

「そりゃ怖いよ、怖くない方がおかしいんじゃない？」

「お父さんの命令が信じられないの？」

「わからない。父さんが僕をどう思っているかなんて」

「自分が思っていることをお父さんに伝えればいいのよ」

「でも、父さんと話すなんて……」

シンジはそう言って黙り込んでしまった。

「そう。わかったわ」

「え？」

レイとシンジの二人はネルフに到着し、エヴァのある第六ケージでそれぞれの機体のメンテナンスを行っていた。零号機の側に居るレイの元に、ゲンドウは近づいていく。

「レイ、今度の起動実験は絶対に成功する……」

ゲンドウはレイに優しい言葉をかける。

それをシンジは初号機から眺めていた。

父さんは僕に優しい言葉をかけてくれない。

母さんが死んで、父さんが僕を捨てるように伯父さんたちに預ける前はどうかっただらう……。

シンジは今までも小さい頃の事を思い出そうとしたが、父親に捨てられる以前の事は全く思いだせなかった。

レイはゲンドウと言葉をかわしながらシンジの方もチラチラと見ていた。

碇司令も、碇君も、好き。

なんで二人が仲良くできないんだらう。

悩んだレイはミサトに相談することにした。

「……食事会、ですか？」

「そ、うちは広いし、会場にもいいかと思って」

またこの人は突拍子もないことを思いついて周りを巻き込むんだから……。

シンジは内心でため息をついた。

「じゃあ料理は母さんや僕がつくるの？」

「あたしは人様に食べさせられるほど料理は上手くないわよ」

発言したのは、このところ全く出番が無かった加持ヨシアキと加持エツコ。

「今回のお客様をもてなす料理は、シンジ君とレイに作ってもらおうと思います」

「えっ、綾波？」

加持邸の玄関のベルになる。

ミサトは出迎えに駆けだしていった。

「こんにちは。加持一尉」

「グットタイミングね。さあ入って」

ダイニングキッチンに入ってきたレイは、割ぱう着を着ていた。そんな服装で外を歩いて来たと言うのか。

「あちゃあ、ここで着替えるように言ったのに」

ミサトもレイの行動に苦笑していた。

「お客様は和食が好みだろうから、おみそ汁と肉ジャガ盛りがいいわね」

「そんな簡単な料理でいいんですか？」

「だって、料理初心者の子が居る事だし、素朴な料理の方が心に届くのよ」

ミサトはネルフ食堂のオバちゃんというネットワークを使って、今日の招待客の好みをつかんでいた。

「ところでミサトさん。今日は誰を呼ぶんですか？」

「ふふ、秘密よ」

ミサトは猫のようないたずらっぽい笑みを浮かべている。

シンジは聞く事は諦めて調理に入ることにした。

「碇君といると……心がポカポカしてくるの」

レイは料理を作りながらそんな言葉を呟いていた。料理が完成し、食事会の準備が整った。

しかし自分たちを除いて、お客さんの席はたった一つだけ。

ミサトさんやヨシアキ、エツコの知り合いがたくさん呼ばれるんじゃないかと思ったシンジは首をかしげた。

一人だけなら、多分リツコさんかな。

シンジはそう考えていた。

しかしその予想は大外れだった。

加持邸の玄関のベルが鳴り、ダイニングキッチンのテーブルに腰かけたのは父親の碇ゲンドウだった。

レイとシンジの席はゲンドウの向かいにある。

レイが特に驚かなかった所を見ると、シンジはミサトとレイにはめられた、と思った。

ミサトの家に招待された時、ゲンドウはためらったが、ミサトの料理が食べられるならばと結局行くことにした。

息子のシンジの事は無視していればいい。

彼はそう考えていた。

出てきた料理がご飯と肉ジャガとみそ汁だったのには驚いた。

ミサトが作った料理とは到底思えない。

ゲンドウはがっかりした気持ちになったが、とりあえずみそ汁を一口飲んで、肉ジャガをほうばった。

すると自然に言葉が出てしまった。

「ユイの料理の味がする……」

「え、それって母さん？」

「ああ」

「母さんってどんな人だったの、本当に写真とかないの？」

「すべては心の中だ。今はそれでいい」

「今は……？」

シンジのつぶやきにゲンドウは答えなかった。

三人は言葉を発することは無いまま食事は進んで行った。ミサト達はその重すぎる空気に、陽気に振る舞うこともできなかった。

「……うまかったぞ、シンジ」

「ありがとう、父さん」

最後にはぎこちないが二人とも笑顔になれた。
見ていたレイはそう思った。

「ミサトさん。今日はありがとうございました」

「お礼ならレイに言ってあげて。シンジ君とお父さんの事を気にしていたの、レイなんだから」

ゲンドウとレイが帰った後、シンジはミサトに感謝の言葉を告げていた。

「父さんと話ができただなんて、初めてです。なんか昔も父さんと話せていた気がしました」

「そう、それはよかったわね……」

ミサトは少し表情を硬くした。

「それで、僕、ミサトさんともずいぶん前にあった気がするんですけど、気のせいですよね？」

「シンジ君、まさか、思い出したの？」

「いえ……」

「そう。あんな悲しいことがあったもんね。すっかり忘れてたくなるはずだわ。いいのよ、無理して思い出さなくても」

「でも、とても大事な事も忘れてしまっている気が……」

シンジは気になって、その夜はなかなか眠れなかった。

第八話 アスカ、再来日

<太平洋艦隊 OTR旗艦>

加持リョウジと惣流・アスカ・ラングレーはドイツ支部から日本の本部に異動するため、式号機とともに国連艦隊の戦艦に乗り込んでいた。

アスカは幼い頃に一時期日本に滞在していたことがある。久しぶりの日本だった。

「アスカ、甲板の上は風が強いぞ。ワンピースはまずいんじゃないか？」

「いいの、一番のお気に入りを見せるんだから」

上機嫌のアスカに保護者であるリョウジが話しかける。

「それに、そんな色あせたりボンでいいのか？」

「この赤いリボンはその……大切なものなのよ」

アスカはいとおしそうにくたびれた感じのリボンを撫でた。

アスカはシンジの写真が貼られているネルフの書類をニコニコして眺めていた。

そして赤いS・DATを大切に手に取ると、耳にかける。

リョウジは出発前にミサトからレイとシンジの仲が良い事を聞いている。

アスカに結局そのことを言えなかった自分を責めていた。

一方シンジはミサトとレイと一緒に同じ艦に乗り込んでいた。

ケンスケがいくら頭を下げてお願いしても、ミサトは民間人を連れて来るわけにはいかなかった。

シンジとレイ、どちらかが使徒に備えて本部で待機していなければならないのに、

ゲンドウから許可が出た方がミサトには不思議だった。

ミサトはアスカとレイが出会ったとたんに喧嘩しなければいけないけれど……と心の隅で心配した。

心の大部分は他のことでいっぱいだった。

「やっと会えるわね。リョウジ……」

へりから降りたシンジとレイは並んで甲板をゆっくり歩く。

それに対しミサトは猛牛のごとく目標に突進していた。

先に甲板に立っていたアスカとリョウジの二人は向こう側から紫色の髪をなびかせて接近してくる人影に驚いていた。

リョウジはその迫力に押され回れ右をして逃げた。

「ミ、ミサト……！」

ぼうぜんとするアスカの横をミサトがさっそうと通り過ぎ、ミサトはリョウジの後ろまで迫っていた。

振り向いたリョウジにミサトはフライング・ボディー・アタック。

押し倒すと同時にミサトはリョウジと唇を重ねていた。

「ミサトって相変わらず愛情表現が過激よね……」

それを眺めていたアスカはミサトの事を思い出し、このくらいは普通だと考えた。

「君がセカンドチルドレンの惣流さん？　僕はサードチルドレンの……」

アスカの後ろから声かけられる。

サードチルドレンと言う言葉に声の主はシンジだと思い、アスカはとびっきりの笑顔を浮かべて振り向いた。

「久しぶりね、シンジ！」

アスカはシンジの隣にレイが立っているのを見ると、その顔が太陽から大嵐に変化した。

「な、何よ、その娘は！」

「ああ、同じエヴァのパイロットの……」

「そう言う意味じゃない！」

アスカはシンジに平手打ちをくらわせた。

その時、強風が吹き、アスカのワンピースがまくれ上がった。

「きゃああああ！」

「……」

「な、なんでアンタ、アタシのスカートの中を見ても平気なのよ！」

「ミサトさんで慣れちゃってるから……」

「まったく、なんて教育してるのよ、ミサトは！」

シンジは加持家の生活ですっかりそういう方面に耐性が付いてしまった。

「ところで、初対面でいきなりビンタするなんてひどいよ、惣流さ

ん」

「え……？ アタシの事覚えてないの？ ……それって新しい冗談よね？」

アスカはシンジの肩をつかんで激しく揺さぶった。

「碇君。セカンドとどういう関係なの？」

「この……バカシンジ！」

アスカがもう一度シンジに平手打ちをくらわせる。

蒼い目から涙がこぼれ落ち、うつむいたきり何も言わなくなってしまった。

ミサトとリョウジが驚いて駆けつける。

ミサトはアスカをリョウジに任せて、シンジとレイと共にブリッジに向かった。

「おお、ミサト君かね。すっかり大きくなって。うん、予想通りの美人になったな」

「いやですわ、おじ様。誉めても何も出ませんよ」

ミサトとOTR艦長は笑顔で握手を交わす。

シンジは二人が古くからの知り合いのように見えた。

事実、ミサトは14歳の頃、OTR艦長と戦争を共にしている。

「私の方も久しぶりに若いものと共に戦えて嬉しいよ」

「この度はエヴァ式号機の輸送に志願してくださってありがとうございます
ざいます」

「ああ、礼は要らない。私も君に会いたかったしな。輸送ぐらいしか助けることができてすまない」

「エヴァの為にこんなにもたくさん的大型戦艦をそろえてくださっ

てありがとうございます」

ミサトは決して予知能力者ではないが、式号機の輸送中に海上で使徒に襲われることを想定した作戦を前もって考えていた。

エヴァの水中戦闘は今のところ無理だ。

水中用装備を作る時間も予算もない。

そこであるべく足場を増やそうとしていた。

そして艦隊のフォーメーションも常識を裏返したものにしていた。

戦艦同士を鎖のようなものでつなぎ、なるべく離れないようにした。これは、三国志演義における赤壁の戦いで曹操軍が用いた連環の計そのものである。

ブリッジから出たミサトたち3人は、食堂で休憩を取ることにした。別れていたリョウジとアスカも合流した。

「おかわり」

レイはすごい早さでハンバーグを平らげていく。

積み上げられた皿の数は10枚を軽く越えていた。シンジはせっせとレイにハンバーグを運んでいる。

アスカは赤いS-DATを握りしめながらそれを苦い顔で眺めていた。

ミサトとリョウジは久々に出会えた感激からか、すっかり見つめ合っていた。

そうしているうちに、やっとレイは動きを止めて満足げにお腹をおさえた。

シンジが席に座る。

アスカはこの時がチャンスとばかりにシンジに話し掛ける。

「ねえシンジ、S・D・A・Tは持ってきてないの？」

「あ、そういえば、ネルフに来たばかりの頃はよく持ち歩いて聞いていたけど、最近はみんなと話している方が楽しいから、持ってきていないな」

「ひどーい、アタシはコレをシンジだと思って、肌身離さず持ってきてるのに！ シンジはアタシを捨てたんだ！」

アスカは顔を真っ赤にして怒った。

シンジは逆に青い顔をしてしまう。

「僕は……アスカを知っていた……？」

そう呟くとシンジの顔色はさらに悪くなった。

「碇君？」

「シンジ君？」

レイとミサトがシンジの顔を心配してのぞきこんだ時、船体が大きく揺れた。

「水中衝撃波？」

「多分、使徒だな」

「アスカ、レイ。あなたたち2人は、弐号機に乗って使徒に備えるのよ」

「えー、なんでアタシの弐号機にファーストが乗るのよ？」

「アスカはまだ、実戦経験がないでしょう？ レイは格闘戦が苦手。アスカ、レイの目の前で華麗な操縦テクニックを披露してあげなさい」

「そういうことなら……仕方無いわね。行くわよ、ファースト」

アスカとレイが食堂を出て、弐号機の元に向かっていく。

「アスカのプライドの高さをうまく利用するとは……ミサトはやっぱり先生に向いているかもしれないな」

「リョウジ、私はブリッジで指揮をとるわ。シンジ君をお願い」
「わかった。新しい家族の事は任せとけ」

ミサトも食堂を飛び出していく。

リョウジの携帯電話が鳴った。

表示を見てみると碇ゲンドウからだった。

例の積荷に関する指示だろう。

リョウジは電話には出ず、携帯電話の電源を切った。

彼にしては珍しいゲンドウに対する反抗である。

アスカとレイは弐号機の元にたどり着いた。

使徒は今のところ艦隊からは離れているようだ。

2人は急いでプラグスーツに着替える。

少しでもレイより優位に立ちたいアスカはエヴァの自慢を始める。

「零号機、初号機は試作機。でも弐号機は違うわ、これこそ実戦用に作られた真正正銘のエヴァンゲリオンなのよ」

「そう。よかったわね」

あっさりレイにスルーされてしまったアスカはずっこけた。

そしてアスカはレイと弐号機に乗り込む。

また船体が大きく揺れた。

使徒が艦隊に体当たりしているようだ。

「アスカ、電源を甲板に出したわ。人がいる建物を踏みつぶさないように取りに来て」

「了解。エヴァ弐号機、着艦しまーす」

アス力はゆっくりと甲板の上を伝って歩いて行った。

使徒が体当たりをしているとはいえ、鎖で繋がれた艦隊の揺れはそんなに大きくない。

弐号機は悠々と電源の接続に成功した。

一方使徒の方は、目的である艦隊の中心部にある旗艦になかなか近づくことができずに、ついに空中に高く飛び上がってしまった。

アス力はそれを見逃さなかった。

プログナイフを構えて、使徒の体を切り裂く。

傷を負った使徒は甲板に打ち上げられ、まな板の上の鯉となってしまった。

跳ねまわり水中に戻ろうとしたが弐号機にめった刺しにされて息絶えた。

多少壊れた戦艦はあったが、ほとんど被害も出ず、使徒戦は大勝利に終わった。

食堂に残ったリョウジはそこで使徒撃破の報告を受けた。

シンジは青い顔をして座っている。

「シンジ君。無理に思いだすことは無い」

「僕と……アス力のお母さんは、溶けてしまったんですね。初号機と、弐号機に」

「思い出してしまったのか……だけど、過去の悲しい出来事に囚われてはいけない。君とアス力は生きているんだからな」

「今だけは、泣いていいですか？」

「ああ」

リヨウジは泣きじゃくるシンジを優しく抱きしめた。

<第壱中学校>

「ミサト先生がホームルームを担当するなんて、なんですか？」

翌日。2 - Aのクラスの教壇には現在の担任の根府川先生ではなく、前担任のミサトが立っていた。

ミサトはイベント好きだ。

面白い出来事があると参加せずにはいられない。

根府川先生はいつもの表情で教室の隅に立っていた。

「みんな、驚け！今日は転校生を紹介するっ！」

ミサトがそう言うのと、シンジとレイにとっては見覚えのある少女が入ってきた。

「惣流・アスカ・ラングレーです。よろしくお願いします」

「アスカ、猫かぶってるよ……」

シンジは自己紹介をするアスカを見てそう呟いた。
とても平手打ちをする少女には見えない。

「じゃあ、質問のある人は言ってね」

ミサトがそう言うと、クラスの男子の一人が発言する。

「惣流さんって、彼氏いるんですか？」

「彼氏はいませんが、好きな人はいます。碇シンジ君です！」
「ええー!？」

クラスから叫び声上がる。

「碇、綾波だけじゃ飽き足らず、転校生にまで手を出すんじゃないだろうな」

「そら、ぜいたくちゅうもんや」

「碇君……そうなの？」

ケンスケとトウジとヒカリの三人に詰め寄られたシンジは必死に言い訳を考える。

「ち、違うよ。アスカはただの幼馴染で、ただ一緒にミサトさんの家で暮らしてる同居人だよ！」

シンジの言い訳は逆効果だった。

クラスは収まりがつかないほど大騒ぎになった。

ミサトはその光景をニヤニヤしながら眺めていた。

いやー青春しているわねえ。

ホームルームの時間が終わり、一時間目の社会の時間になって根府川先生が声を掛けても、ミサトはしばらく教壇から退くことはなかった。

<ネルフ 司令室>

司令室ではゲンドウが一人でデスクに座ってリョウジを待ち受けていた。

組まれた手の中で親指は激しく動いており、イラついているように見える。

リヨウジが小さなカバンを持って中に入ってくると、せかすように手招きした。

「何故、私の帰還命令を無視した」

「はは、ただ遅れただけじゃないですか」

「君は私の駒だと言うことを自覚してくれなければ困る」

リヨウジはためらいながらもカバンを机に置いて開いた。

「これがネブカドネザルの鍵か」

ゲンドウは食い入るように見つめていた。

「ええ、あなたの人類補完計画の要ですね」

リヨウジが”あなたの”と言う言葉を強調して話すと、ゲンドウは声を荒げる。

「君の役目は終わった、立ち去れ」

リヨウジは礼をして退席をしようとした。

しかし、彼の心にはんの少しだけいたずら心が芽生えてしまった。

「息子さん、昔の事を思い出したようですよ。奥様の事も、アスカの事も」

リヨウジが部屋を去るまでの間、ゲンドウは石像と化していた。彼は硬化が溶けた後、慌てて電話をかけた。

「……碇。計画に必要な例の物は手に入ったんだな」

「……」

「おい。黙っているのは、わからんぞ？」

「先生、私は……」

冬月コウゾウは深いため息をついた。

この男は何処までも不器用なのだ。

第九話 瞬間、心、通わせて

<ネルフ リツコの部屋>

一人の女性がイラついた様子でキーボードを叩いている。
その女性はネルフ技術部の長、赤木リツコである。

普段冷静で知られる彼女が落ち着かない原因は、後ろで二人の世界を作っている男女にあると思われる。

「リヨウジ、今度は一緒に居られるのね？」

「ああ、弐号機の輸送任務が終わったら本部に転属になってな」
「これからが楽しみね」

リツコはついにこらえ切れなくなって、ミサトとリヨウジに怒鳴り散らした。

「加持君。あなたは私にあいさつに來ただけでしょう！？」 そう言うことはミサトの部屋でやってくれるかしら」

その言葉にミサトは口をとがらせる。

「まあ、リツちゃんも辛い恋をしているからなあ」
「司令はユイさんを捨てきれないからね」

この二人に相談を持ちかけたことをリツコは後悔していた。
もっとも相談したところでどうにかなるものではなかったが。

「出て行きなさい！」

ミサトとリョウジはリッコに蹴り出された。
その時、警報がネルフに鳴り響いた。

「警戒中の巡洋艦より入電！ 宗谷岬の北方40kmの沖で正体不明の移動物体を確認」

<北海道 稚内市 宗谷岬>

輸送機に乘せられたエヴァ三機が到着したとの知らせを受け、戦略自衛隊の兵士たちは歓声を上げる。

「日本に来て最初のデビュー戦、一緒に頑張ろうね、シンジ」

「セカンド、私も居るわ」

「うっさいわね、レイ。それと、アタシをセカンドと呼ぶな！」

アスカとレイは常日頃から小さなことで争っている。

争いの種の当事者であるシンジはそんなことには気づかず、ため息をついていた。

「敵は遠距離攻撃はしてこないようだけど、どんな攻撃をしてくるか不明よ。まず、レイのポジトロンライフルで様子を見て……」

ミサトの作戦内容にアスカは不満で一杯だった。

自分の格闘技術を振るう機会がないと思ったからだ。

レイのポジトロン・ライフルが弾を放つ。

弾は使徒のコアと思われる光の球を貫いたが、使徒は動きを止めずに近づいて来た。

ミサトはその様子を見て、自分の無力さに顔をしかめた。

辛そうな表情をしながら命令を下す。

「アスカ、その使徒には遠距離攻撃は無効みたい。先制攻撃で一撃必殺、頼むわよ」

「OK、ミサト！」

アスカは見せ場ができた喜び勇んで使徒に向かっていった。ミサトはアスカの格闘能力を高く評価している。

「てやあっ！」

アスカの叫び声と共に飛び上がった式号機は使徒に手刀を振り下ろした。

使徒は真つ二つに切り裂かれ、動きを止めた。

「どう、アタシの活躍見てくれた？」

アスカは初号機の方に振り返って、嬉しそうに声をあげた。

「アスカ、後ろっ！」

シンジの叫び声に反応したアスカは急いでその場を飛び退く。

そこに使徒のかぎ爪が振り下ろされた。

アスカは後ろに下がりシンジとレイの居る場所まで戻り、体勢を立て直す。

「こんなの、インチキだわ。人間の遺伝子に近いものを持っている使徒がアミーバみたいに分裂するなんて、科学的にあり得ない……」
「光球が三つあるから、おかしいとは思っていたけどまさか分裂するとはね」

「ミサトさん、何かいい作戦は思いつきませんか？」

「そんな、急には考えつかないわ！ 私任せにしないであなた達も考えなさいよ！」

ミサトは予想外の事態に苛立っていた。

それは、同じ戦闘指揮車に乗っているオペレーターの三人とリツコ、リョウジにも伝わってきた。

「コンピュータシミュレーションを繰り返さないと、使徒の弱点を分析するのは無理だわ」

リツコの言葉はミサトに届いていたが、ミサトはまだ作戦を考える事に没頭していた。

こちらにはエヴァが三機。

もし、使徒が三体に分裂しても数の上では互角。

そのことが撤退の決断を遅らせたのかもしれない。

アスカとシンジは前面に出て、格闘戦が苦手なレイを守る形で使徒と向き合った。

突然使徒が手のようなものを一番上にある光球に近づけると、眩しい光を放った！

「うわ、まぶしい！」

「め、目がくらんで……！」

「た、太陽の光……？」

エヴァに乗っていた三人、稚内市内に配置された作戦指揮車に居たミサトたち、ネルフ本部の発令所でモニター越しに戦闘を見守っていたメンバーは目がくらんでしまった。

……ただ一人、サングラスをかけて司令席に座っていた男をのぞいて。

ゲンドウは使徒が三体に分裂し、そのうち二体がシンジとアスカの後ろに回るのを見た。

「やっと目が見えてきた」

「何だったのよ、いったい」

シンジとアスカは目の前に立ったままの使徒をにらみつけた。

「使徒がエヴァの後ろに回り込んでいます！」

マヤは警告を発したが、もう遅かった。

初号機と弐号機は後ろから羽交い絞めにされて、使徒につかまれて持ち上げられ、投げ飛ばされた。

そして使徒三体は零号機に向かってゆつくりと歩き出した。

それを見たミサトはオペレーターの一人、日向マコトに告げる。

「至急、戦略自衛隊に言つて、N2爆雷を投下するように頼んで」

「それは、どういうことですか？」

ミサトはその問いかけには答えず、作戦指揮車を飛び出し、側に止めてあった青いルノーに乗り込んだ。

そのミサトの行動の意味を察したりヨウジは戦略自衛隊の知り合いに電話を掛ける。

「戦闘機を一機、用意してくれ。なるべく足が速いやつを頼む！」

投げ飛ばされた初号機と弐号機は仲良く摩周湖に水没していた。

水面に落下したので、機体自体の損傷は少ないようだ。

一方、零号機はオホーツク海の海岸で、迫りくる三体の使徒から逃げ回っていた。

追っている使徒の動きは非常にゆったりとしたものだったが、三
一では分が悪すぎる。

そこにミサトの運転する青いルノーが波打ち際に姿を現した。
驚いたレイは声をあげる。

「加持一尉？」

「レイ、そこから退却しなさい」

作戦指揮車からリツコの通信が聞こえた。

「でも、加持一尉が……」

「これは、命令よ」

リツコの『命令』という言葉にレイの体は勝手に動き出す。

零号機は海岸から離れていく。

それを確認したミサトは『力』を覚醒させる。

目が赤色に変わり、髪は紫を帯びた黒髪から銀髪へと変わる。

すると三体の使徒は零号機では無く、ミサトの運転するルノーを追
いかけはじめた。

ルノーに先導され、四体の使徒は一丸となってオホーツク海に向か
っていく。

ルノーは海面を滑るように進んで行く。

戦略自衛隊の戦闘機もN2爆雷を投下する準備が整ったようだ。

突然、使徒の先に行くルノーの動きが止まった。

「ああっ、こんな時に燃料切れなんて、あたしとしたことが抜かつ
たわ！」

ルノーの運転席に座っているミサトは毒づいた。

使徒との距離は縮まっている。

ここでN2爆雷を投下されたら確実に巻き込まれる。
戦略自衛隊の作戦司令部もパニックになっていた。

「あのままでは、ミサトさんが巻き込まれます！」

「しかし、使徒を足止めする機会はこのタイミングしかない。彼女は身を犠牲にして使徒を止めると言ってきたのだ」

「N2爆雷投下まで後20秒」

「一同、ネルフの戦女神に敬礼！」

戦略自衛隊の作戦司令部にいるものたちの中には涙を流す者も居た。以前は敵対することのあった組織だが、ミサトの数々の偉業は伝わっていたのだ。

誰もがミサトの死を受けとめようとしていた。

しかし、その時戦略自衛隊の戦闘機がマッハを超えるスピードで飛来した。

気づいたミサトはルノーから飛び出し、機体になんとか捕まることのできた。

機体がロシアの空に消え去った直後、N2爆雷は使徒に向かって投下された。

使徒は構成物質の45%を焼却され、再度侵攻までしばらく時間が稼げるとの報告がなされた。

<ネルフ 作戦会議室>

「ああ、生きて帰れたのはいいいけど、水陸両用に改造したルノーちゃんが無くなったのは痛かったな……」

無事に生還したミサトはゲンドウに出頭命令を受け、作戦会議室まで出向いた。

「使徒は分裂して互いを補完し合っているようです。これを撃破するには、使徒の三つのコアを同時に攻撃する必要があります」

「加持一尉。何か作戦はあるかね」

「はい。エヴァ三体でユニゾンを行い三つのコアに対して同時攻撃を行います」

「それで、気ままに動く使徒にどうやって同時攻撃が行えるのか、答えたまえ」

「先日の海上の使徒戦の時のために、技術部で作成した強化網を使って使徒を一網打尽にする作戦があるのですが……」

「君にしては歯切れが悪いな。何か問題点があるのか？」

「はっ、ユニゾンに使用する最適な教材が見つからないのです」

「……そうか。全てこちらに任せたまえ。行っていくぞ」

ミサトはゲンドウのその言葉に敬礼して作戦会議室を辞した。室内にはゲンドウとコウゾウの二人が取り残される。

「……どういうつもりだ、碇？」

「そんな怖い顔をしてどうしました、先生」

「活躍の機会ができたからって、調子に乗ってはいまいか？」

「……そんなことはありません」

「外交はワシに任せきりだろう。機密保持の件は加持君と赤木君任せ。お前は何の役にも立ってないではないか」

「……問題ありません」

ゲンドウは凶星を指摘されてかなり焦っていた。

戦略自衛隊よりネルフ司令である自分の時代が来たと思ったのにそれは他人のフンドシだったのか。

なんとかせねば……。

<第三新東京市 加持邸>

「ええっ、アタシとシンジが一緒に住んでいいの？」

アスカはとても嬉しそうに両手を胸の前で組んだ。

「そう、次の使徒戦にはユニゾンが必要になるの。だから生活を共にしてお互いのリズムを整えるの」

「セカンドが夜中に碇君に襲いかかったらどうするんですか？」

レイは険しい表情をしている。

「大丈夫。レイ、あなたも一緒にユニゾンをするんだから、このうちに泊まり込みよ。エツコとヨシアキのやつは修学旅行で留守にしているから、部屋も空いているしね」

「レイがこのうちに住むなら、アタシはシンジと同じ部屋に……」

「こらこら。そんなことするのは一年早いわよ」

「加持一尉。そういう時は十年早いと言っくんじゃないでしょうか」

「たはは。あたしはそんなこと言える立場じゃないからね……」

「……この好色」

「リツコが教えたのね、あんちくしょう」

荷物を置いて、落ち着いたシンジたち三人は頭にねじり鉢巻きをさせられていた。

ミサトもお揃いだ。

「ミサトさん、この鉢巻きはなんですか？」

「日本人はね、形から入るものなのよ」

加持邸の玄関のベルが鳴る。

誰かが来たようだ。

「おっと、ユニゾンダンスのコーチが来たようね」

ミサトの後に続いてリビングに入ってきたのは、銀行強盗が被るような覆面をした、筋肉質に海水パンツ一枚と言う服装の怪しい男だった。

白い覆面の額には『G』と書かれており、ピンクの手袋をしている。

「今回、ダンスの振り付け指導をしてくださる、『G』さんです！」

ミサトは面白がって紹介をしたが、シンジたちはまだ石像で固まってしまう、動くことができなかった。

「はい、ではまず、ダンスの前の柔軟体操から」

ミサトと覆面男は柔軟体操を始めたが、シンジたちはまだ石像と化している。

「するなら早くしろ、でなければ出て行け！」

覆面男の声はくぐもっていたが、シンジたちはその口調から正体に気づいたようだった。

「やっぱり、司令よね？」

「……父さんだね」

「シンジ、無駄口を叩くな！」

「何で、僕の名前を知っているんですか？」

「うるさい、黙れ！」

覆面男の中の人物は、自分の正体がばれないと確信しているのか、いつもより大きな態度をとり、よくしゃべるようになっていた。

「それじゃあ、ミュージック・スタート！」

ミサトがラジカセのスイッチを入れた……。

ヤーレンソーランソーラン……ラジカセからはソーラン節が流れ始めた。

「アスカ君！ 恥ずかしがっているんじゃない！ もっとこう、船をこぐようにするんだ！」

ニシン来たかとカモメに問えば……

「シンジ！ リズムが乱れているぞ！ ここは一定の間隔で腰を揺らすんだ！」

チヨイヤサエツエンヤ……

「レイ！ もっと力いっぱい引っ張るんだ！」

覆面男Gとシンジたちの特訓は每晚遅くまで、連日にわたって行われていた。

最初はとても嫌そうな表情でソーラン節を踊っていた三人だった。しかし、今では真剣に、そして楽しそうに踊りにのめりこんでいる。

「凄いわ、三人とも。だんだんとユニゾンができている」

「父さん、ありがとう。僕、父さんに物を教わったのは初めてだよ」

「おじ様も結構やるじゃない」

「司令。……素敵」

「わ、私は碇ゲンドウではない……頑張るんだぞ三人とも」

覆面男Gは最後に三人と固い握手を交わして去って行った。

「碇のやつ、苦情処理を全部ワシに押し付けよって……！」

コウゾウはUNからの請求書、被害にあった各団体からの陳情書の処理に追われていた。

ミサトは人気があるのでそちらの方には行かなかったようだ。

使徒に対して攻撃を仕掛ける日の前夜。

アスカはシンジの部屋に忍び込んでいた。

シンジはぐっすりと眠りこんでいて、起きる様子は無かった。

「ふふ。シンジったら可愛い寝顔しちゃって。今日こそシンジはアタシのものだってわからせてやるんだから」

アスカは寝ているシンジに唇を近づけていく。

そして二人の唇が重なる直前。

「セカンド。碇君に何をしようとしているの」

「レ、レイ！ アンタ見てたの？」

アスカの叫び声にシンジも目を覚ましてしまった。

「あ、アスカ？ 綾波？」

「抜け駆けは許さない……」

「わ、わかったわよっ！」

「ダメ。あなたは信用できない。だから私が碇君の側で一緒に見張っているの」

レイはシンジを引っ張って押し倒す。

「ダメ！シンジはアタシといるの！」

アスカは反対側からシンジに飛びついた。

「ああ……綾波とアスカの匂いがする……」

シンジはうつとりとした表情を浮かべて寝転がったまま固まってしまった。

二人は話し合いの結果、シンジを抱きしめたまま寝ることにした。

<ネルフ 発令所>

三機のエヴァ。

三人のパイロット。

対使徒足止め用ネット。

耐閃光衝撃サングラス。

全ての準備が整ったネルフは三体に分裂したイスラファエルが再び移動を開始したとの報を受けて迎撃地点へと急いだ。

その上空に位置する加持リョウジが搭乗する戦闘用ヘリコプター、

AH-2には対使徒足止め用ネットがくりつけられていた。まず、ミサトが乗った戦闘機が使徒たちの注意を引きつける。素早い動きで使徒の攻撃を次々と交わしていく。そして、使徒がある程度の範囲にまでまとまった。

「今よ、リヨウジ君。ネットを投下して！」

リツコの合図と同時に網が使徒に覆いかぶさる。

パニックになった使徒は必死に網を振り払おうともがき、さらには閃光まで発したが今のシンジたちには効果が無かった。

「ミュージック、スタート！」

ヤーレン、ソーラン……

音楽に合わせてシンジたちはゆっくりと力強く網を引っ張って行く。網がすばまり、三体の使徒同士の距離が少しずつ縮まって行く。

わたしや立つ鳥 波に聞け チョイヤサ エッエンヤ……

網が最大限まで強く引っ張られた。

使徒同士の体はきつく締めあげられている。

ハー ドッコイショ ドッコイショ

「……どっこいしょ！」「……」

「……どっこいしょ！」「……」

歌詞と同時に三機のエヴァは二回ユニゾンして使徒イスラフェルのコアに向かってキックを叩きつけた。

使徒三体から火柱が上がり、火が治まった後には使徒は燃えカスとなっていた。

小説の本文の中に、北海道民謡「ソーラン節」の歌詞を使わせて頂いています。

（50年以上前の民謡なので問題は無いと判断させて頂きました）

2011/08/05 小説家になろう運営グループからの告知
を受けての追記です。

第十話 スキューバダイバー

< 2000年 南極 葛城調査隊 >

「葛城博士、本当に娘さんを乗せるつもりですか？」

葛城博士は黙ってうなづいた。S2機関をもった眠れる巨人アダムの調査隊の執念はついに埋もれていた『彼』を発見した。眠れる彼の魂を呼び起こすには彼の娘が必要だったのだ。

葛城博士がスーパーソルノイド理論を学会に提唱したのは四年前。無限のエネルギーを生み出すなどと言う理論は笑い物にされた。秘密裏に博士を支援するゼーレによって実験モデルが製作されたが、失敗に終わった。

ゼーレからの圧力もあってあせった葛城博士は調査隊を本格的に結成した。

そしてアダムに関する研究を続け、ついに起動実験の今日に至る。

葛城博士は著名だったため、ミサトの家族を含めてバッシングを受けていた。

ミサトの母親は最期まで博士の研究は正しいと信じていた。

ミサトも死んだ母親と同じく世間を敵に回しても、父親のことを信賴していた。

今回の実験の協力も進んで引き受けた。

プラグスーツを着て、使徒アダムを起動させるためのエントリープラグにミサトは入る。

形状は現在のエヴァンゲリオンの物と似ている。

エントリープラグが閉じられ、いよいよミサトとアダムのシンクロが始まる。

「絶対境界線、突破！」

次の瞬間、使徒アダムの腕が拘束具を引きちぎり、ミサトの乗るエントリープラグをわしづかみにした。
ひしゃげて握りつぶされるエントリープラグ。

「ミサト！」

葛城博士は悲痛な叫び声をあげる。

握りつぶされたエントリープラグを中心に爆風と閃光が広がって行き……南極大陸は融解した。

ミサトは皮肉にもゼーレの隠しアジトがある南米大陸最南端の街、ウスアイアの近くに漂着していた。

そしてゼーレの諜報員によって保護、いや拉致されてしまったのである。

ミサトはこのごろあの時に起きた出来事を夢に見るようになった。汗びっしょりになって目が覚めると、隣に居るリョウジが優しく抱きしめてくれる。

そうすると彼女は再び安心して眠ることができたのだ。

もつとも、ミサトとリョウジがベッドを共にする理由はそれだけではないけれど。

<第三新東京市 繁華街>

「二人とも手を離してよ。恥ずかしいな」

シンジは右手をアスカ、左手をレイと繋ぎながら歩いていた。両手に花状態である。

周囲の突き刺すような視線と冷やかすような眼差しが痛い。

使徒イスラファエルを撃退したシンジたちは報酬として休暇をもらっていた。

アスカとレイはチャンスとばかりにシンジをデートに誘うことにしたが、抜け駆け禁止協定を破って邪魔されると面倒なので、仕方なく三人でのデートとなった。

器の広さを見せようと言う見栄もあつたかもしれない。

「……まずは、水族館ね」

「まあ、レイにしては上出来よね。綺麗な魚も見えるし、デイトスボットの定番じゃない」

シンジの抗議などこれっぽっちも聞き入れず、三人は水族館へと足を踏み入れた。

三人はいろいろな水槽を見て回る。

「熱帯魚ってきれいな」

「うん、いろいろな模様があつて見ていて飽きないね」

「……おいしそう」

「うわあ、大きい魚ね」

「こんな魚が居るなんて驚いちゃうよね」

「……お腹一杯になりそう」

「うわあ気持ち悪い。何、この魚」

「深海魚だね。光の届かない所で暮らしているからこんな姿になるんだ」

「こっちの深海魚は模型なのね。深海 6、000m……凄い所に住んでいるのね」

「深海魚は浅い所に上がると『減圧』によってほとんどが死んでしまいます。だって」

「……これはおいしくなさそう」

レイにとって魚は全て食べ物に見えるらしい。
水族館のチケットを用意したのはレイ。

「碇君は、どの魚が一番美味しそうだった？」

「え、えっとそうだね。フグとかかな……」

イルカのショーまで鑑賞して感想がこれでは水族館の飼育係に同情する。

アスカはレイを見直したのに失望していた。

さて、次はアスカが持ってきた映画のチケットだ。

題名は『セプテントリオン』。

同じ船が沈没する物語である『タイタニック』よりアクション性が高いことで有名だ。

客席が暗くなり、開演のブザーが鳴り響き、いよいよ上映が始まる。
レイはアスカから音が出ない食べ物と言うことでポップコーンを大量に買い与えられて居た。

映画の主人公は若い医者。

看護婦の若い女性と結婚し、新婚旅行で豪華客船に乗っているという設定だ。

しかし、嵐による大波で船は転覆し、船内に水が浸水していく。

船客のほとんどが転覆時の衝撃で壁にたたきつけられたり、天井に落下したりして死んでいたりひどい有様だ。

わずかに生き残った人々を仲間にして、主人公の若い医師は船内を進んで行き、ついに離れ離れになった妻との再会を果たす。

そして脱出に向けて動き出す。

「ボイラー室は地獄だ！この先に行くのは危険すぎる！」

主人公たちの前に機関長が立ちはだかる。

「危険でも、我々はボイラー室を抜けて脱出しなければならないのです！ さあ、アデラ、みんな、行きましょう！」

主人公たちは機関長の忠告を振り切ってボイラー室に向かう。
途中足場が途切れている場所を仲間たちは飛び越えて進んで行く。

「さあ、アデラ、君の番だ！」

主人公の言葉に妻である若い看護婦はうなずいて、彼の待つ向こう側の足場に飛び移ろうと跳躍した。

しかし、その時ボイラー室の中で爆発が起こり、船が大きく傾いた！ 距離が足りずに穴の底に落下していく看護婦。

その腕を間一髪でつかむ主人公。

だが、彼自身も不安定でこのままでは穴の中に引きずり落ちそうだ。

「あなた、手を離して！ このままだと二人とも死んでしまうわ！」

「嫌だ！ 決してこの手を離したりしない！」

看護婦の方から主人公の若い医者の手を振り払おうとしたが、そのとき主人公は仲間たちに引っ張られて看護婦共々救出された。

そして、船の上に脱出することに成功した主人公とその仲間たちはその後軍の船に救助された所で映画は終了した。

「ぐす……いい映画だったわね。シンジも船に乗ってアタシが事故にあったら、助けに来てくれる？」

「うん……でも、僕は泳げないから、船に乗るのは嫌だな」

「大丈夫。二号さんも私が助けてあげるから。泳ぎ、得意なもの」

こうして、シンジたちがデートを楽しんでいるころ。

ネルフに深海探査艇から怪しい巨大生物を発見したとの報告が入った。

送られたデータを分析した結果、羽化前の使徒であることが判明し、この事実に関係する上部組織であるゼーレは色めき立った。

<ネルフ リツコの研究室>

「ふう、気が重いわ」

「落ち込んでいるミサトなんて、気味が悪いわね」

「いつまで、隠し続けていられるか、不安なのよ。特にアスカは頭が良いし……」

ミサトはここ最近リツコの研究室に立ち寄り、弱音を吐くようになった。

彼女が包み隠さず本音を吐けるような相手は夫のリョウジを除くとリツコしか居ない。

もちろん、リョウジと話す事もあるのだが顔を合わせる機会はリツコの方が圧倒的に多い。

「次の作戦、A-17が発令されるそうね」

「ええ、上層部の意見に私は反対したんだけど、通らなかつたわ」

<ネルフ 司令室>

照明の落とされた司令室では日本の責任者である碇ゲンドウ、ドイツのキール・ローレンツ、

アメリカ、フランス、イギリス、ロシアの責任者が出席したゼーレのモニター会議が行われていた。

議題は日本海溝の奥深くで発見された使徒サングルフォンの幼生についてである。

「使徒の捕獲とは、リスクが高すぎます」

「生きた使徒のサンプルの重要性は理解しておろう、碇」

「十五年前の悲劇をお忘れですか？」

「これはチャンスなのだ。使徒の検体はあるだけあった方が良い。二体だけではまだまだ足りん」

「いいな、失敗は許さんぞ」

キールがそう言うて場を締めると、ゲンドウ以外の五人のメンバーは姿を消し、

司令室にはゲンドウとコウゾウだけが残った。

「……碇、お前が反対に回るとは意外だったぞ。例の計画を進める好機ではないか」

「先生。失敗したら人類は滅亡します。そんなリスクは負うわけにはいきません」

コウゾウは表情が全く変わらないように見えるゲンドウの顔をしげしげと眺めながら話を続けた。

「もしかして、シンジ君たちに情が移り始めたのではあるまいな。あれほどユイ君に狂っていたお前が」

「狂っているのは先生も同じでしょう。計画を立案したのは同じ分野の研究者である先生だ」

「ここまで来てしまったからには、引き返えす事は出来んど、分かってるな、碇」

「先生、ここでは私はあなたの上司です。口のきき方には気を付けてください」

コウゾウはこの言葉に浮かび上がった疑念が確信に変わった。ゲンドウは周りに認められ自信を付け始めている。

ゲンドウの気弱な一面、ユイを失った孤独な心を利用して味方に引き入れたのだが。

歳をとったコウゾウはそう簡単に信念を曲げることができないほど硬直化していた。

<第三新東京市 加持邸>

「えー！修学旅行に行けない？」

「そう。使徒が現れたから、ごめんね、仕方が無いの」

ここは加持家のリビングルーム。

修学旅行に行けなくなった事をミサトに告知されたチルドレン三人の反応は、それぞれ違った。

アスカは怒り、シンジとレイは諦めた顔でお茶をすすっている。

レイの前には空の皿とまんじゅうが山になっている。

レイはユニゾンダンス特訓の日以来、アスカが抜け駆けしないようにアスカと相部屋にしている。

「せっかく修学旅行のスキューバダイビングを楽しみにしていたの

に！」

「そんなに海に潜りたいのなら、潜らせてあげるわ」

「それってどういう意味？」

ミサトはアスカの疑問には答えずに、顔をそらして深いため息をついた。

「ま、使徒戦の事もあるけど、クラスのみんなが修学旅行に行っている間に、三人ともこれをいい機会だと思って勉強するのよ」

そういつてミサトは三人の名前が書かれたフロッピーを差し出す。

「私の担当科目の英語だけやっていればいいってわけじゃないのよ？」

アスカの成績は国語が最悪。

シンジは数学と理科、レイは美術以外がひどい有様だった。

「旧態依然とした減点式のテストに何の価値があるのよ！」

「数字を見ると眠くなってしまうんです」

「……私には必要の無い絆だもの」

それぞれに言い分があるようだが、式号機用のD型装備の準備が整うまでの間、三人は教師のミサトの下で夏期講習をおこなうことになった。

「艦長、この度は危険な作戦に巻き込んでしまい、本当に申し訳ございません」

「いやいや、立候補にした艦隊の中で、オーバー・ザ・レインボウを選んでくれたことは光栄に思うよ。また力になることができたかな」

太平洋上へのエヴァの輸送任務。

もし作戦が失敗したときはN2爆雷で使徒ごと焼き殺される。

そんな危険な任務に名乗りを上げる艦隊は十を超えた。

戦略自衛隊のトライデントも協力を申し出たのだが、今回は付き合いの古いOTR艦隊にお願いをした。

「今回の作戦は、使徒の捕獲が目的だけど、それが無理だと判断したら、直ちにせん滅作戦に切り替えるわ。いいわね」

「OK。ミサト、こんなの楽勝よ！シンジとレイが着いてくること無かったのに」

特殊装備ができない零号機と初号機は甲板で待機することを命じられていた。

もちろん、前回のようには船舶同士は連環の計で結んであるので広い足場が確保できた。

「アタシの式号機。格好が悪いけど、我慢してね」

D型装備に身を包んだ式号機がワイヤーでつり下げられて、海溝の中を沈下していく。

シンジは戦略自衛隊の戦闘機が空中を旋回しているのが見えた。

「あの飛行機はなんですか？」

「戦略自衛隊の爆撃部隊が戦闘待機しているの」

リツコがシンジの質問に無機質な声で答えた。

「アタシたちの援護をしてくれるの？」

「いえ、作戦が失敗したときに私たちごと使徒を焼き払う爆弾を積んでいるのよ」

ミサトの言葉にアスカが黙って息を飲み込んだ。

そうこうしている間に式号機の深度が1,000mを越えたようだ。

「ついに真っ暗になって、何も見えなくなってしまったわ」

「アスカ、CTモニターに切り替えて」

「了解」

「……使徒はやっぱり底の方に居るのかしら。そうすると目標は深度約8,000m。まだまだ長いわね」

深度4,000m。ここで式号機はプログナイフを喪失してしまった。

「アスカ、ナイフが落ちたわ！」

ミサトが叫ぶと、アスカは余裕で答える。

「大丈夫よ、ミサト。いざとなったらアタシの空手の技を叩きこんでやるから」

アスカの一言で降下は続行された。そして深度7,000m。もう少して使徒と遭遇と言うところで……。

「第一ワイヤーが断絶されました！」

「リッコ、すぐに式号機を引き揚げて！」

マコトの報告を聞いたミサトはアスカの安全を考え直ちに作戦を中止しようと進言した。

しかし、リッコはミサトの要請を拒否して首を横に振り、作戦続行を宣言する。

「大丈夫よミサト、ワイヤーは後三本あるわ」

「……居たわ」

アスカの目の前に転がる巨大な卵のような黒い影。
どうやらこれが使徒サンダルフォンの幼生のようなのだ。
アスカは両手に持った電磁柵発生装置を構えた。

「式号機、電磁柵を展開、目標の捕獲に成功しました！」

マヤが歓声の入り混じった声で報告をした。

「よく頑張ったわね、アスカ」

「案ずるより産むが易しって言うし。こんなの楽勝よ」

OTR全体に安堵した空気が流れた。

式号機を吊るしたワイヤーがゆっくりと引き上げられていく。

「でも、こんなスキューバダイビングは楽しくないなあ。もっときれいな魚とか見たい」

「使徒との戦いが終わったら、いくらでも連れてってあげるわよ」

アスカにミサトはそう答えた。

その様子を見たリッコが安心してつぶやく。

「緊張がいつぺんに解けたみたいね」

室内に警報ブザーの音が鳴り響いた。

電磁柵に囲われた使徒がもぞもぞと動き出した。

「どうしたのよ、これ!？」

「使徒が羽化を始めたの!？ …… 計算より早すぎるわ!」

リツコは信じられない様子で叫び声を上げた。

「アスカ、電磁柵は？」

「今にも破られそう!」

「捕獲作戦を中止、ただちに使徒せん滅作戦に切り替えます、アスカ、やっちゃって!」

式号機は使徒に手刀を叩き込むが、固い装甲に阻まれてダメージは無い。

そうしている間にも、使徒は触手を伸ばして式号機に絡みついた。

「うわっ、何よコレ!」

「アスカっ!」

ミサトは使徒を倒す方法を思い付かず焦った。

すると式号機のアスカから通信が入った。

「ミサト、この前水族館で深海魚を見てね、『減圧』って言うのを知ったんだけど……」

「ナイス、アスカ! そうよ、『減圧』よ! 思いっきり速いスピードで式号機のワイヤーを巻き戻して!」

沈下した時の何十倍ものスピードでワイヤーが巻き戻される。

使徒は目に見えてぐんぐんと弱っていき、水面に出るころには命が尽き、ぼろぼろに崩れ去ってしまっていた。

室内のスタッフ達から歓声が上がる。

しかし、次の瞬間それはピツタリと止んでしまう。

巻きあげた勢いで弐号機を吊っていたワイヤーが全て切れてしまったのだ。

弐号機は空中に飛ばされたが、再び着水し、海の底に向かって沈んで行く。

「そんな、これからだって言うのに、もう終わりなの？」

その時、アスカは弐号機が何かに手をつかまれて引き上げられる感覚がした。

アスカはこの前見た映画の内容を思い出し、助けてくれた白馬の王子様に向かってお礼を言う。

「ありがとう、シンジ。無理しちゃって……」

「……碇君じゃなくて、私よ」

弐号機をつかみ上げたのは、初号機では無くて零号機だった。

「ほへっ？ あ、ありがとうレイ」

「助けるって約束したもの」

助かったのは嬉しいが、やはりシンジが助けに来てくれなくて残念に思うアスカだった。

「なんでシンジは助けに来なかったのよ！」

「だ、だって僕、泳げないから」

「情けない男、行きましょう。レイ」

「うん。ニンニクラーメン、チャーシュー大盛りが食べたいわ」

二人に置いてきぼりにされたシンジはミサトに頼んでせめて少しは泳げるようになるうと決意するのだった。

第十一話 制止した、闇の中で

<第三新東京市 第壹中学校>

その日、HRの時間に2 - Aの教室に入ってきたのは担任の根府川先生では無くミサトだった。

クラスの生徒たちはまた転校生が来るのかと色めき立った。その予想は当たった。

「みんな、今日は転校生を紹介する！」

「霧島マナです、宜しく願います！」

クラスから歓声が上がった。

マナは2 - Aに転入するなり明るく活発な性格でクラスの生徒たちから好かれた。

しかし、親の仕事の都合という名目ですぐに転校してしまったのだ。ミサトは霧島マナの突然の転校に疑念を抱いていた。

「加持三佐、この前の一件は済まなかった。そこで、友好の印として戦自からの研修生として霧島君を君の所に送りたいのだが」

そう言つて戦略自衛隊の幹部から頼まれたのだが、ミサトにはその魂胆はお見通しだった。

ミサトは戦自で秘密裏に行われている計画の尻尾をつかむために敢えて受け入れたのだ。

この瞬間も霧島マナの事を監視して目を光らせている。

休み時間。

マナはそんなことを知ってか知らずかシンジの席の側にやってきた。

「わたくし、霧島マナは、本日碇シンジ君のためにこの制服を着て参りました！ どう、似合う？」

「えっと、とてもかわいいと思うけど……」

突然声を掛けられてシンジは戸惑いながら答えた。
そんなところに二人の少女が割って入る。

「……学校に制服を着て来るのは当たり前的事だわ」

「アンタ、いきなりシンジに馴れ馴れしくしてどういうつもりよ！」

「惣流さんは、シンジ君の恋人なの？」

「まあ、まだ幼馴染以上恋人未満の関係だけど……」

「私も碇君の恋人候補……」

「じゃあ、私もシンジ君の恋人候補に立候補しちゃおうかなー」

図星を突かれたアスカとレイは言い訳ができない。

アスカとレイの間でマナは使徒よりも厄介な存在として認識された。

「霧島さん、こんな所で何の用？」

放課後、トイレに向かったシンジはその帰り道マナに手を引かれて屋上まで連れ出された。

ミサトの監視の目は届かず、アスカとレイも男子トイレまで着いて行くわけにもいかなかったので、マナにとってはチャンスだった。

「シンジ君はエヴァのパイロットなんだよね？」

「うん、そうだけど。でも僕はあまりエヴァに詳しくないから、レイやアスカに聞くといいよ」

「違うの。私はシンジ君の事を何でも知りたいの」

「どうして？」

「私、生き残った人間なのに何もできないのが悔しい。羨ましいの

よ。そして好きになっちゃった、シンジ君が」

マナはポケットから赤く淡い光を放つペンダントを取り出した。

「見て」

「このペンダントは？」

「私がシンジ君につけてあげるの」

そう言っマナはシンジの首にネックレスを掛けた。

シンジは硬直してそのまま二人の間に沈黙が流れる。

ミサトはこっそりと二人の後を付けてそれを見ていた。

あのペンダントに盗聴器でも仕掛けてあれば、マナがスパイだと言う決定的な証拠となる。

しかしそれはシンジとマナを悲しませる事になると言う事実にはミサトは心を痛めた。

なるべく傷つかない方法を考えなければ。

屋上に複数の人物が登って行く足音がした。

それはシンジを探しに来たアスカとレイだった。

「シンジ、トイレに行くはずがどうして霧島さんと屋上に居るの？」

「おかしいわ……」

「えっと……」

アスカとレイに問い詰められたシンジは口ごもった。

「霧島さん、アタシとシンジはこれからお仕事でネルフ本部へ行かなくてはなりませんの」

そう言っアスカとレイはシンジの腕を引っ張りその場から立ち去って行った。

<リニアレール車内>

シンジはネルフ本部の入口の最寄りの駅に通じるリニアレールの車内で、長椅子に両脇をアスカとレイに挟まれる形で座っていた。

「あの霧島って子はいやらしいわね、来たそうそう男にちよっかいだしちゃってさ」

「……そうね」

アスカとレイの気迫に押されてシンジが何も言えないでいると、別の車両からマナがやってきてシンジたちの前に立つ。

「えへへ、ついて来ちゃった」

「霧島さん、授業中じゃないの？」

「学校に居ても退屈だから、私もネルフへ行きたいな」

マナは結局ネルフ本部の入口のゲートまでやってきてしまった。

「入ろう？」

「霧島さん、これから先はＩＤカードが無いと通れないんだよ」

「こうすれば、大丈夫じゃない？」

シンジの背中にピッタリとマナが抱きついた。

「アンタ、何やってるのよ！」

「……碇君から離れて」

アスカとレイは慌てて二人でマナを力いっぱいシンジから引き離れた。

シンジは思いっきりしりもちを突いた。
気を取り直してレイがＩＤカードをゲートのカードリーダーに通す。
しかし、ゲートは無反応だった。

「おかしいわ、電源が通っていない」

「ネルフが停電なんて、そんなことあるの？」

レイの言葉にシンジが問い掛けた。

「もしかして、敵対する組織の攻撃かもしれないわね、霧島さん？」
「私、何も関係ありません！」

アスカがマナをにらむと、マナは力いっぱい否定した。

「とりあえず、ネルフの緊急対策マニュアルに沿って行動しましょう」
「う」

レイの判断は素早かった。

アスカとシンジは慌てて歩き出したレイについて行く。
マナも遅れて後をついて行った。

「どうして、アンタまでついて来るのよ！」

「アスカ、霧島さんを一人、ここに置いてはおけないよ」

シンジの言葉にアスカはしぶしぶマナが同行する事を承知するのだった。

<旧東京 府中 総括司令本部>

戦略自衛隊の本部発令所ではモニターに巨大な蜘蛛のような使徒、マトリエルの姿が映し出されていた。

「何、ネルフとの連絡が取れないだろ？」

「通信が一切繋がりません！ ネルフで事件があったと思われます」
「それなら、直接行くんだ！」

戦略自衛隊のヘリコプターが慌ててネルフに向かって飛び立っていく。

「それでは、どうやって使徒を倒す？」

戦略自衛隊の高官たちがパニックを起こしかけている時、彼らに近づく男の姿があった。

その名はアサヒ中佐。

父親のコネで戦自に幹部候補として入隊し、巨大ロボットに憧れてトライデント計画を発案して進めたのも彼だった。

「こんな時こそ我々の出番です。『雷電』、『震電』の二機のロボットが使徒を打ち倒すでしょう」

アサヒ中佐は自信満々に胸を張って宣言した。

彼は有言不実行で不誠実で、特にロボット兵器のパイロットである少年兵たちを物のように扱うため、周りの評判は非常に悪い。

時田博士とミサトをライバル視しているようだがとんでもない勘違い

い男である。

戦略自衛隊の高官たちは彼がやられてもいい厄介払いになるし、上手くいけば使徒の足止めぐらいは出来るだろうと言う打算で出撃を許可した。

「クソガキども、出撃だ。遅れるんじゃないぞ」

二人の少年兵、ムサシ・リー・ストラスバークと 浅利ケイタは不服そうな顔をして雷電と震電に乗り込んだ。

この二体のロボットは操縦性がとても悪く、過去に何人ものパイロットが振動によって体を壊している。

アサヒ中佐はつい最近になってやっと改善に向けて重い腰をあげたのだが、パイロットの不満は限界に達していた。

出撃した二機のロボットは、使徒迎撃地点の熱海方面にたどり着いた。

目前に長い足を持った使徒がゆっくりと歩いている。

「よし、ガキども、あの使徒のやつにありったけの弾丸を撃ち込んでやれ」

アサヒ中佐の攻撃合図と共に肩部のミサイルランチャーと機首の機関砲から攻撃が使徒に向かって浴びせられる。

弾丸とミサイルの雨が止んだ後、使徒は動きを止め、ゆっくりと崩れ落ちた。

エヴァ無しで使徒を撃破したのは初めての事だった。

「やった、俺のロボットが使徒を倒したぞ！ 俺様最強伝説がこれから始まるのだ！」

喜ぶアサヒ中佐。

しかし、二体のロボットは司令部に背を向けて走り出した。

「お、おい。ガキども、どこへ行くんだ！ 帰って来い！」

二機のロボットは第三新東京市の方向へ向かっていた。

<ネルフ R - 18 通路>

四人は先頭がレイ、アスカ、シンジ、マナの順でほく前進しかできないような狭い空気口などを通りながら発令所を目指していた。

「ねえ、シンジ君。キスしよっか」

「えええ、キス？」

マナの声は小さいものだったが、シンジはあまりの事に大声で叫んでしまっていた。

それを聞きつけたアスカがあわてて引き返す。

「アンタ、なんてこと言うのよ！」

「えー、だってしたいんだからいいじゃん」

アスカは怒り心頭に発してマナの腕に思いっきりつかみかかった。

「こうなったら強引にシンジ君の唇を奪っちゃおうかなー」

マナが明るい口調でそう言うと、アスカは震えだした。

その震えはつかみかかれたマナや体の一部が触れているシンジに

も分かった。

「お、お願い。それだけはやめてよ……」

アスカは涙声になっていた。

シンジはプライドの高いアスカが泣いてまで他人にお願いをするという事に驚いていた。

暗闇でまったく見えないが、アスカはたくさんの涙を流しているのだろう。

マナもあわてて前の発言を撤回した。

「わ、わかったわ、アスカさん。そんなことは絶対にしないからね？」

アスカが落ち着くのを待つて、四人は再び進み始めた。

しばらく進むと、発令所へと続くR-18通路まで出た。

ここまでくればあと一息だ。

その時シンジたちの耳に拡声器でマコトが叫ぶ声が聞こえてきた。

「使徒接近中、繰り返す、使徒接近中！」

街に買い物に出ていた日向マコト二尉は戦略自衛隊のヘリコプターが使徒接近のアナウンスをしているのを聞きつけ、選挙カーを強奪してここまで来ていたのだ。

「シンジ君たち、ここまで来てくれたのね！」

発令所に着くとリツコたちネルフのスタッフたちがシンジたちを迎えた。

しかし、ミサトとリョウジの姿が見当たらない。

「ミサトは？」

「この停電で立ち往生しているのかもしれないわ」

「使徒が接近中だって言うのに……エヴァも動かせないし」

「大丈夫。エヴァは動かせるわ。人の手でね」

シンジがケージを見ると、エヴァの整備スタッフたちがワイヤーでエントリープラグをつりあげている。

その中には、汗を流すゲンドウの姿もあった。

「父さん？」

ゲンドウの姿を認めたシンジはゲンドウが引っ張っているワイヤーと同じものをつかんで引こうとする。

「シンジ、タイミングを合わせるのだ」

「あのユニゾンダンスの時みたいにだね！」

シンジは嬉しそうな顔をして答えた。

「私はソーラン節など踊ってはいない」

ゲンドウは顔をそむけて否定したが、冬月コウゾウが見れば照れているのは一目瞭然である。

ネルフスタッフたちの手によってエントリープラグが固定されたころ、使徒が戦略自衛隊の新兵器によって撃破されたとの報告が入った。

MAGIの分析によってもそれは誤報ではないようだった。

発令所の空気は重くよどんでいたが、人々の心は軽くなった。

エヴァを出撃させる必要は無くなったのだ。

これでは電源の復旧だけだ。

「しかし、停電の原因はなんだったのだ？」

「あ、もしかして先輩の研究室ですか？」

コウゾウの呟きについて正直に答えてしまう伊吹マヤ。

リツコが黙らせようとしたが遅かった。

「赤木君、また怪しげな実験をしていたな！」

リツコにコウゾウの雷が落ち、辺りは笑いに包まれた。

しかし、逃走した二体の戦略自衛隊のロボットがまた騒動を起こす事になる。

第十二話 輝石の価値は

<第三新東京市 加持邸>

その日は穏やかな夜だった。

アスカは入浴中、シンジを含むその他の加持家の家族たちはリビングルームで談笑していた。

静寂を打ち破ったのは戦闘機の編隊飛行の音だった。

そして地面が大きく揺れる。

異変を感じたアスカがベランダに出ると、巨大な物体が歩きながら移動しているのが見えた。

アスカはネルフから支給されている携帯電話を手にとった。

何の反応も無い。

「なんで、ネルフの非常事態宣言が発令されないのよ!」

「使徒じゃないと、エヴァの出撃はしないみたいなんだよ」

大声でわめくアスカに答えるシンジ。

アスカははっとして振り返る。

アスカと目があったシンジは誤魔化し笑いを浮かべながらこう言った。

「アスカ、そのままだと風邪を引くよ」

「きゃあああっ!」

アスカはシンジを蹴り飛ばして、荒々しく息をする。

「アタシの裸を見たんだから、絶対に責任を取ってもらっからね!」

アスカは大きめのバスタオルをひつつかむと体に巻き付けてミサトたちの居るリビングへと向かった。

リョウジとミサトは難しい顔をして小声で話しあっている。

「リョウジ、やっぱりあれって……」

「心当たりを調べたんだがな、証拠がつかめない。お前の方も知り合いを当たって……」

アスカは二人に話しかけるのは諦めて、窓から外を眺めているレイに声をかける。

「レイ、あれって使徒じゃないの？」

「違うみたい、私が見た限りでは大きなロボットのようだったわ」

「避難勧告が出ていないのはなんでよ？」

「ネルフと戦略自衛隊の上層部の判断みたい。加持三佐も戸惑っている」

ネルフからの非常事態宣言も待機命令も出されていないため、シンジ達は通常通りの生活を送ることになった。

<ネルフ 発令所>

「総司令と副司令が不在？」

「そう、二人そろって南極に行っているわ。だから今ネルフで一番の責任者はミサトね」

ネルフに出勤したミサトはリツコから報告を受けた。
そこに府中の戦略自衛隊から連絡が入る。

相手は戦略自衛隊のアサヒ中佐。
総責任者であるミサトは嫌でも応対しなければならない。

「実は我々のトライデント計画の実験機のパイロットが反乱を起こしましてね。二体ほどそちらに行くんで処理をお願いします」

まるでピザを注文するような言い方にもミサトは腹が立ったが、それよりも憤慨したのは子供を道具のように使う計画が中止されずに進行していた事だった。

「あ、そちらの方で手に余るというようでしたら、サラツとN2爆雷で片づけてしまっんで。その場合、中に乗っているガキどもは死んでしまっでしょっかね」

ミサトには質問する暇も与えられず回線は切られてしまった。
少年兵たちの命を人質に取るとは最低の手だ。

ミサトはパイロット救出のためエヴァを使う事を決めた。

ゲンドウとコウゾウが不在だったのは幸いだった。

二人が居たらエヴァを動かすことなど反対されたに違いない。

ミサトはシンジたちをネルフ本部へ呼び寄せた。

シンジたちがネルフに到着し待機任務に就いた直後、逃走していた二体のトライデント計画のロボットのうち一体が滝つぼに沈み込んでいるのが発見された。

どうやら崖から足を踏み外して転落したらしい。

ミサトの指示で、リョウジが式号機と共に現場に急行した。

「アスカ、ロボットの様子はどうだ？」

「胴体にハッチのようなものがあるけど」

「よし、開けてみてくれ」

アスカが胴体中央部のハッチを開けると、パイロット席には同い年くらいの少年が座っていた。落ちた衝撃でどこかを強くぶつけたのか、気を失って鼻血を流した跡がある。

救急隊員が手際よく少年を担架に乗せ運んで行く。

連れ込まれたドクターヘリには戦略自衛隊の略称が刻まれている。

「アスカ、パイロットはどうなったの？」

シンジとレイは現場で作業をしたアスカに詳しい話を聞くために式号機のケージまで来ていた。

「驚いた事に、乗っていたのはアタシたちと同じぐらいの年齢の子だったのよ。もう一つビックリしたのは、収容されたのが戦略自衛隊病院だって事」

「えっ、ネルフの中央病院じゃなくて？」

「……おかしいわね」

「頭に来るじゃない、アタシたちにも事情を教えてくれないんじゃない？」

<戦略自衛隊病院>

翌日。

アスカとレイとシンジは見舞客を装って戦略自衛隊病院まで来た。た。

そして集中治療室の一室に寝かされている少年の姿を発見する。

「彼があロボットに乗っていたパイロット？」

「第三新東京市を目指していたってことは、多分エヴァを潰そうと
していたんだわ、アタたちネルフの敵ね！」

「たまたま逃げた方向にあっただけってことも……」

「シンジ、アタシの推理が信じられないっていうの？」

アスカがシンジに詰め寄っていると、廊下の陰からマナが飛び出して
きた。

急いで走って来たのか、息が乱れている。

「違う、あそこに居るのは私の友達なの！」

「はーん、霧島さんはそれが目的でシンジに近づいたってことね」

「そうなの？」

「そうよ、私が出たエヴァの情報は戦略自衛隊の開発部に届けられ
て、操縦席の改善のために使われるの。ネルフにはトライデント計
画を中止したって嘘を言っていたから、おおぴらに情報交換出来
なかったんだ」

「霧島さんは僕を利用するつもりでいたんだ」

「最初はそうだったけど、今はシンジ君の事が好きだから、それは
信じて！」

必死に叫ぶマナをレイが押し止めた。

「……とりあえず、落ち着いて」

シンジたちが集中治療室の前の廊下で話しこんでいると、向こう側
から戦略自衛隊の軍服を着た男たちがやってきた。

中心に立つ身長の高い人物は階級が高いのか金色の装飾がなされた
白い立派な服を着ている。

「アサヒ中佐！」

マナはその男を見て大声をあげた。
憎しみがこもった目で彼をにらみつけている。

「おい、くそガキ。なぜ貴様がここに居る。碇シンジからエヴァの秘密を聞き出すんじゃないかったのか？ 任務放棄とみなしてケイタと一緒に賤をしてやる」

「まさか、ケイタを連れ戻しに来たんですか？ 止めてください！」
「やかましい！」

アサヒ中佐はムチを取り出してマナを殴りつけた。
マナの顔に赤い筋が走る。

それを見たアス力はアサヒ中佐のたるみ切った腹にキックを叩きこんだ。

もんどりうつて倒れこむアサヒ中佐。
騒ぎを聞いて集まった看護婦たちが歓声を上げる。

「こいつら全員ぶつ殺せ！ 逆らう奴は降格だぞ！」

側についていた戦略自衛隊の士官たちはためらいながらも銃口をシンジたちに向けた。

看護婦たちが悲鳴をあげてこの場から逃げてゆく。

シンジはアス力をかばうように立ちはだかり、戦略自衛隊の士官たちをにらみつける。

「ア、アス力を撃たせるもんか！」

シンジは震えながらも、その言葉には確固たる意思が感じられた。
戦略自衛隊の士官達も、少年相手に撃つ事にためらいを覚えていた。

均衡状態を破ったのは一発の銃声だった。

戦略自衛隊の士官たちのうちの一人が肩をおさえてうずくまる。

「シンちゃんたち、大丈夫？」

姿をあらわしたのはミサトだった。

ミサトは旧知の戦略自衛隊病院の医師からこの事を聞いて駆けつけたのだ。

ミサトの姿を見た戦略自衛隊の士官たちはアサヒ中佐を放り出して先を争って逃げ出した。

「い、命だけは助けてくれ……」

「あんたの命なんて奪う価値も無いわ、行きなさい」

アサヒ中佐は滝のような汗を流して走り去って行った。

シンジたちはケイタの事はネルフの諜報員たちに任せ、ミサトの運転する車でネルフに戻ることにした。

車内では、ミサトがマナにトライデント計画の事を聞き出していた。話が途切れたころ、シンジがマナに話しかけた。

「なんで、あのロボットのパイロットたちは逃げ出したの？」

「最初、私たちは栄光あるパイロットに選ばれたって喜んでいたわ」

マナは写真を取り出した。

マナを真ん中にして隣には二人の少年が立っている。

「私の仲間はムサシとケイタ。訓練をこなすうちに親しくなったの」

そういつてマナは悲しそうな顔をしてお腹をおさえた。

「でも、ロボットを操縦する時の激しい振動で私は一カ月もしないうちに内臓をやられちゃった」

「じゃあ、マナは……?」

「うん、私はもう長くは生きられないの。……そんな悲しそうな顔しないで。私は今、恋ができて幸せなんだから」

ミサトはその言葉を聞いてハンドルを握っていない方の手で自分の下腹部をなでていた。

「いつまでもつのかしら……」

暗い表情で誰にも聞こえないような小さな声で呟きながら。

「そんなある日、私を外の世界で自由にさせたいって、ケイタとムサシは一緒に私に柵を越えさせようとしたの。でも、それではロボット計画が外に漏れてしまう可能性がある。アサヒ中佐は私を毒殺しようとした。それに気づいた二人は私の安全と引き換えにロボット計画に協力していたんだけど……。私がスパイとして第三新東京市に行くのを、二人はチャンスだと思ったみたいね」

ミサトの運転する車がネルフの入口までたどり着くと、ゲンドウとコウゾウが待ち受けていた。

「加持三佐、使徒に関係ない事件にエヴァを出動させるとはどういうつもりかね!」

コウゾウが不機嫌全開と言う様子で声を荒げて言う。

「しかし、事態を收拾しなければ……」

「どうせ、パイロットの人命保護とやらにこだわっているのだろう。」

あんなものに関わっている暇は無いはずだ」

言い争うミサトとコウゾウの間にマナが割って入った。

「あのロボットのパイロットは私を探しにきているはずですが、だから私が彼を呼び出します！」

「マナ、あなたにそんな危険な事をさせるわけには……」

「お願いです、ミサトさん、やらせてください！」

「……わかった、あなたに任せるわ」

話し合うミサトとマナの後ろからいらだったコウゾウが割り込んできた。

「勝手に話を進めるのではない！許可できないと言っているんだ！」

「……やるなら早くしろ」

ゲンドウは直立不動のまま、表情を変えずに言い放った。

「了解しました、司令！」

ミサトは嬉しそうにゲンドウに向かって敬礼をした。

マナはシンジにゆっくりと近づいて話しかけた。

「私があげたペンダント、大切にしてね。それから……たまにでもいいから私のこと思い出してね」

そう言つてマナはミサトの方に向かって駆けだした。

「ちょっと、マナ、アンタ何言つてんのよ？」

「私、アスカさんが羨ましい、シンジ君と一緒に幸せにね！」

そう言つてマナはミサトと遠くへ消えていった。

「……私はまだ、碇君のことは諦めない」

レイは静かな闘志を心の底で燃やしていた……。

<ネルフ 発令所>

次の日。

ロボットの潜伏先と見られる芦ノ湖でマナが投降を呼びかけると言う作戦が行われるはずだったが、偵察衛星が衛星軌道上に現れた使徒サハクイエルを発見する。

ネルフは作戦から手を引き、戦略自衛隊が行うことになってしまった。

「うわ、これは凄い」

「常識がまるで通じないわね」

モニターに映し出された使徒の姿にマコトとミサトは驚きの声をあげる。

巨大な使徒の体の一部がちぎれて落下していくのが見えた。着水地点の太平洋では大きな波とクレーターが発生した。

「先輩、これはまるでミサイルみたいな使徒ですね」

「とりあえず、最初の攻撃は太平洋に、でも、二時間後の第二射が東京湾。だんだんと誤差は修正されているわね」

「なるほど、使徒に学習能力があるわけね」

「……本体ごと落ちてきたら、巨大な湖になって太平洋と繋がるわね。……で、作戦部長の意見は？」

ミサトは発令所を出て作戦を上申するために司令室に向かった。部屋ではゲンドウとコウゾウが待ち受けていた。

「……撤退だと？」

「はい、MAGIも全会一致で賛成しています」

「しかし、第三新東京市は使徒迎撃の中心だぞ」

セントラルドグマに閉じ込めてある使徒リリスやダミープラグの工場の移転など出来るものではない、とコウゾウは心の中で付け加えた。

「副司令、我々が生きてさえいれば、建物は壊れてしまってもまた建て直すことができます！」

言い争うミサトとコウゾウをゲンドウは制止する。

「……加持三佐、撤退する必要は無い。そして我々も死ぬ必要もない」

「碇、まさかロンギヌスの槍を使うのか？」

コウゾウは先ほど南極海から持ち帰ったばかりのロンギヌスの槍を手放す判断をしたゲンドウにあきれた。

だが他に撤退せずに済む作戦が思いつかないのだから仕方が無い。コウゾウは仕方無くロンギヌスの槍についてミサトに話した。

「わかりました。でも念のため、D-17を発令させてもらえますか？ あと松代のMAGIにバックアップを」

「許可しよう」

ミサトはそう言って司令室を辞して発令所へと戻った。帰り道、ミサトの胸の内はネルフ上層部への不信がさらに育まれていた。

やはり上司は都合の悪いことを隠している。

全ての秘密を知るにはゲンドウ並み、いやもっと高い階級にならないといけないのかもしれない。

その気持ちに後にミサトに重大な決意をさせることになる。

発令所は次々と体を引きちぎって攻撃する使徒の姿にパニックを起こしかけていた。

「みんな、落ち着いて私に使徒を倒す秘策があるわ！」

ミサトがそういうと、発令所は落ち着きを取り戻した。

ネルフの女神だとまで言われているミサトの発言に戦略自衛隊の面々も安心を取り戻したようだ。

「レイ、セントラルドグマに降りて、槍を使って。司令の許可は得ているわ」

「了解」

「初号機と弐号機は射出場所で待機。使徒がレイの攻撃で倒せなかったときは、あなたたちの手で使徒を受け止めるのよ」

「手で、ミサト、そんなことできるの？」

「大丈夫。使徒は分裂を繰り返してかなり小さくなっているみたいだから。シンジ君、使徒を倒したら霧島さんを助けに行きましょう。だから今は使徒戦に集中して」

「はい、分かりました」

セントラルドグマから出てきたレイは手にロングノースの槍を持って

いた。

使徒は衛星軌道上から分裂させた体の一部を落下させる攻撃を続けている。

爆発音が響く。

どうやら第三新東京市の市内に使徒の欠片が落下したようだ。

「レイ、MAGIが軌道計算をしたわ。ガイドの通りに投げて！」
「投てき開始！」

ミサトの号令と共に零号機はロンギヌスの槍を投げ飛ばし、槍は衛星軌道上に位置する使徒のコアを貫いた。
発令所に歓声が満ちる。

シンジはマナをおとりにしたロボット捕獲作戦の方が気になっていた。

戦略自衛隊からの連絡を受けたミサトは顔を青ざめた。

「シンジ君、落ち着いて聞いてくれる……？」

「どうしたんですか、ミサトさん。霧島さんに何かあったんですか？」

「湖から出てきたロボットはね、霧島さんの乗る車ごとつかんで逃走しようとしたそうよ」

ミサトはそこで言葉を詰まらせる。

「ロボットが逃げた所にね、あの使徒の体の一部が落ちてきて直撃して……高熱で溶けたロボットの金属の塊しか残っていなかったそうよ」

「う、嘘だっ……！」

シンジは初号機のエントリープラグで悲痛な叫び声をあげた。

発令所の中でもすすり泣いてるネルフのスタッフが何人も居た。

<第三新東京市 芦ノ湖周辺>

「カプセル、見つからへんな」

「……ごめん、一晩中つきあわせて」

「やっぱり、脱出カプセルのようなものは無かったのよ」

シンジは翌日、アスカ、レイ、トウジ、ケンスケ、ヒカリと共にロボットが消失した場所の近辺を搜索していた。

ロボットにはたいいてい脱出用のカプセルがついている。

だからマナとムサシと言う少年二人とも脱出できたはずだと主張していたシンジだったが、日が落ちてからは自信をなくして塞ぎこんでいた。

携帯電話にミサトからの連絡が入る。入院していたロボットのパイロットの一人、ケイタが死亡したという知らせだった。

さらにその翌日。

シンジ、アスカ、レイの三人はミサトと共に今回の使徒の攻撃の着地点に居たため亡くなってしまった犠牲者たちの慰霊碑の前までやって来た。

慰霊碑の前には遺族たちが置いたのか、様々なものが安置されている。

シンジはペンダントを外すとそとマナたちの名前が刻まれた慰霊碑の前に置く。

「霧島さん。僕を好きだと言ってくれたこと嬉しかった。でも、僕には他に好きな子がいるんだ。ごめんね」

シンジが慰霊碑に向かって話しかけると、ペンダントにはめ込まれた赤い輝石はキラキラと淡い光を放ったように見えた。マナが返事をしているみたいだとシンジは思うことにした。

「……碇君。霧島さんのお別れは済んだの？」

「シンジの好きな子って誰よ？」

「おや、アスカは自信が無いのかな？」

シンジはアスカとレイと冷やかすミサトと共にゆっくりと立ち去った。

<第三新東京市 仙石原駅>

使徒戦の日、リョウジはマナ、ケイタ、ムサシの三人を市外に出る電車の駅まで見送りに来ていた。

実はシンジの予想通り脱出力プセルはあったのだ。

「すまん、俺たちじゃあアサヒ中佐のシンパの目をこまかすために、君たち三人を死んだように見せかけることしかできなくて」

「ううん、いいんです、リョウジさん」

「シンジ君たちには、会っていかなくていいのかい？」

「アスカさんが側に居ますから。病院で戦自の士官たちに撃たれそうになった時、シンジ君がアスカさんの事をどれだけ想っているかわかりました」

そして、マナはムサシの方に視線を向けた。

「ムサシが私のことを大切に想ってくれている事もわかったので」

「そうか。じゃあ元気でな」

リョウジはにこやかに手を振って、マナたちの乗る電車を見送って行った……。

第十三話 使徒、漫食

<ネルフ 第一発令所>

「さすがマヤ、速いじゃない」

今日はMAGIの定期メンテナンスが行われる日。

オペレータ席ではマヤが素早い指さばきでキーボードを叩いていた。その姿を感慨深げに見つめるリツコ。

リツコが母親のナオコの姉弟子としてマヤを指導し続けて数年。母親の元に、

「ナオコ博士みたいな立派な科学者になりたいんですう」

と目を輝かせて押し掛けて来たマヤは当時、理数系の大学生だった。そしてマヤは、ネルフのオペレータとして立派に育ってくれた。

「待つてそこ、A-8の方が速いわ」

リツコが身を乗り出してキーボードを叩く。

マヤのそれより数倍も速い。

「ああん、先輩。さすが速いです（ハート）」

マヤはそう言つてリツコの腕に絡み付いて来る。

リツコは強い力でマヤを振り払った。

ちよつと目を掛けすぎてしまったのかとその点ではリツコは後悔していた。

二人きりでいるのが気まずいと感じたリツコが、リフトで上がって

来たミサトの姿を見て顔をほころばせる。
反対にマヤは不機嫌そうに顔をしかめた。

マヤはミサトの事を上司としては尊敬しているが、リッコを巡っては対立（ミサトはそう思っていない）しているのだ。

「リッコ、今日のテストに備えてMAGIのメンテナンスはパーペキにしといてね」

「ええ、もう少して終わるわ」

「そーか、そーか。じゃあ頑張った二人にはコーヒーをご馳走しちやおうかな」

ミサトは懷からコーヒー豆が入った袋を取り出す。
リッコとマヤの二人はたちまち目を輝かせた。

「加持さんのコーヒーはいつも楽しみにしてます。……はっ、だからと言って赤木博士は渡しませんからね！」

「まーたマヤっちは妄想しているの？ 相変わらずね、この子は」
「ええ……」

MAGIのメンテナンス終了の合図がネルフ内に響き渡ると同時にマヤとリッコはミサトのコーヒーを堪能した。

「じゃあ、あたしは他のスタッフにもご馳走してくるから、また後でね」

恋の相談から仕事後のコーヒー、食事会などミサトに餌付けされているネルフ職員はかなり居るだろう。

ただ、ネルフの忘年会が中止されたのはミサトが原因だと言う噂がまことしやかにささやかれていた。

「異常無しか……母さんは今日も元気なのに私は年を取るだけなのかしら」

女子トイレの洗面所で顔を洗いながらそう呟くリツコ。

トイレの中と言うのは意外に音が響く。

先客にその呟きが聞こえてしまったようだ。

個室の扉が開け放たれ、ヒールの音を響かせてこちらにやって来た。

「みんなと一緒に年を取れるっていうのは、幸せなものなのよ」

「ミサト、聞いていたの？ ……ごめんなさいね」

「いえ、嫌味を言ったのはあたしの方。ほら見て、肌だってまだ10代のよう。まるで化け物ね！」

「それ以上、自分を責めるのはお止めなさい」

リツコはキツとミサトを叱りつけた。

「ご、ごめんなさい、リツコ」

ミサトは恥ずかしそうに顔を赤くしてトイレを出ていった。

<ネルフ プリズナーボックス実験室>

「えー、裸になるの!？」

アスカの不満そうな言葉が響き渡った。

リツコが通信でそれに答える。

「そうよ、監視カメラは切ってあるから、プライバシーの保護は万

全よ」

「違う、シンジの裸をレイに見せるなんて、嫌よ！ 見て良いのは過去も未来もアタシだけ！」

「二号さん、独占はいけないわ」

「僕の裸つて、小さいころだけじゃないか」

「だいたい、なんで裸で実験しないといけないのよ！」

「このテストはプラグスーツの補助無しに、直接肉体からハーモニクスを行う趣旨なのよ」

抗議を聞き入れないリツコにシンジたちはしぶしぶ裸のままエントリープラグに入った。

それをモニターから見守るミサトは手にした書類を読みながら訪ねる。

「この実験の元になった計画ってやつは、パイロットの肉体にダメージを与えたって言うけど、大丈夫なんでしょうね？」

「ミサト、何度も説明したように、過去の計画とは違うわ。この実験が成功すればエヴァの反応速度は格段に上昇するわ」

実験テストはほとんどMAGIが行っている。

オペレータ三人衆もマヤ以外の二人は参加して居なかった。

「確認はしているんだな？」

「ええ、一応」

「まったく、赤木君の癖にも困ったものだ」

モニターに第87タンパク壁が映し出される。

そこには黒い猫がペイントされていた。

モニターをのぞき込むコウゾウと操作をしているシゲルは同時に大きなため息をついた。

「塗られた部分が微妙に発熱しています。なぜなのでしょうね？」
「どうせ赤木博士が変な材料でも使ったんだろう？」

別のオペレータ席に座っているマコトがうんざりとした顔で言う。

「レイ、どうしたの？」

モニターを眺めていたミサトが、レイの表情が固いのを見て心配して声を掛けた。

「何でも……ありません」

「レイ、もしかして、体が痛むの？ ……リツコ、実験をすぐに中止して！」

「まさか、そんなはずは……事前に汚染が起こらないように確認したのに」

リツコは舌打ちしてケースを叩き割り、非常停止ボタンを押す。直後にネルフ内に警報が鳴り響く。

実験テストとは違うモニターを監視していたシゲルが声をあげる。

「第87タンパク壁が凄いスピードで変質していきます！」

「汚染領域が拡大！」

「レーザー照射を早く！」

レーザービームが汚染された第8パイプに向かって照射されたが、赤い三角形のフィールドに跳ね返された。

「まさか、使徒？」

「間違いありません、パターン青、使徒です！」

「この区域は破棄！ 全員、退避急いで！」

ミサトの号令の元、ネルフのスタッフたちは慌てて部屋から駆けだして行く。

リツコだけが信じられないと言った顔で立ち尽くしていたが、ミサトはリツコをひつつかんで担いで部屋から脱出した。

その直後、部屋のガラスが割れ完全に浸水した。

「リツコ、しっかりしなさい！」

「助かったわ、ミサト」

発令所ではゲンドウがエヴァ全機を射出するように命令を下していた。

シンジたちのテスト用エントリープラグはジオフロントの湖に射出されてプカプカと浮かんでいた。

「ねえ、シンジ、寒いからもっとギュッと抱きついて温めてよ」

「……碇君。私も寒いの」

「興奮しちゃダメだ興奮しちゃダメだ」

シンジは裸のアスカとレイに抱きつかれて必死に抑えていた。

ミサトのだらしなさのおかげで女性の裸に近いかっこうを見るのは慣れていたが、裸の女の子に抱き付かれる事は無かった。

使徒とは別にこっちはこっちで大ピンチだった。

ネルフ内に鳴り響いていた警報が突然止まった。

誰も警報を止めるような操作はしていない。

疑問に思ったオペレータたちが原因を探ると、コンピュータの一部がハッキングを受けている事に気づく。

シゲルはハッキング元を探るべく必死にキーボードを叩く。

「ハッキング元はプリズナーボックスの使徒です！」
「まさか！」

モニターに映し出された使徒が幾何学模様に変化していく。
使徒イロウルはドンドンと進化・増殖を拡大していった。

「碓司令、MAGIのデータ消去をさせてください」

「何を言っているのミサト、MAGIの喪失は本部の喪失と同じなのよ！」

「組織とは人が集まって出来るものよ、MAGIだってまた作りなおせばいいじゃない！」

「いいえ、技術部で解決できる問題です」

「反対するって言うなら、あたしがぶっ壊してやるわ！」

「待ちたまえ、加持三佐」

MAGIに照準を合わせて銃の引き金を引いたミサトをゲンドウが押し止めた。

「赤木君、もし君がこの問題を解決できないようなら、加持三佐の言う通りMAGIを破壊する。いいな」

「碓、何を言っている、MAGIを破壊するなど！」

「はい、お任せください」

リツコ、ミサト、マヤの三人は連れ立ってMAGIの機心ルームに来ていた。

普段は開けられることのない扉が開けられると、脳みそが水槽に浮かんでいた。

ミサトはぎょつとした表情を浮かべ、マヤは口元を抑える。

「リツコ、これって……！」

「これがMAGIの正体。ブレインコピーって知っている？ ミサトなら戦時中に聞いたことあるでしょう」

「ええ、人道的に開発が禁じられている人格データをパソコンに移すプログラムね」

「MAGIには母さんの脳が使われているの。いわば母さんそのもののよ」

「そんな、リツコのお母さんは病気で亡くなったって……！」

「母さんは自分が直らないことを知って、自分の脳を移植することに決めたのよ」

それはリツコ直属の部下であるマヤも知らない事だった。

マヤはさらにショックを受けたのか涙を流し始める。

ミサトが優しく抱きとめた。

「とにかく、今は時間が無いのよ、落ち込むなら後にして」

「リツコ、マヤっちにそんなこと言わなくても」

「いいえ、私がしっかりしないとダメなんです」

マヤは顔をあげて涙をぬぐうとミサトから離れて立ち上がった。

「でも、なんであたしを連れて来たの？ そりゃあ多少パソコンと使えるけどさ、リツコやマヤっちには遠く及ばないわよ」

「ミサトの体の中に存在するアダムの遺伝子情報が必要なのよ。そしてね……」

リツコから聞かされた使徒イロウルの撃退作戦は驚くべき内容だった。

なんと、ミサトの身体を直接MAGIに接続して、ワクチンにしようと言うのだ。

ブレインコピーをする時間が残されていないからだった。

ミサトの身を犠牲にしてMAGIを守るような作戦にマヤは反対をしたが、リツコにとってMAGIは母親そのものであり、心の支えでもあるのだ。

ミサトは引き受けることにした。

「ありがとう。じゃあマヤ、作業を始めるわよ」

「は、はい」

マヤは戸惑ったが、今すぐに行わないとミサトの決意も無駄になってしまう。

ミサトはベッドに横になる。

マヤはミサトの体にプラグを接続していく。

「人工知能メルキオールから自律自爆が提起されました……否決、否決」

機械音声がネルフに響いた。

作業中にも使徒によるMAGIのハッキングは続いていた。

メルキオールは他の二体、バルタザールとカスパーにハッキングを仕掛ける。

「先輩！」

「大丈夫、まだ時間はあるわ」

ミサトの電子化の作業は終わったようだ。

アダムの遺伝子データを使って、使徒イロウルを服従させると言うのが今回の作戦である。

ミサトの接続先は浸食の少ないバルタザールに決まった。

接続に向けての調整に入った時、また機械音声がネルフに響く。

「人工知能により自律自爆が決議されました。三者一致の後、四秒後に行われます」

カスパーの浸食が予想以上に速かったようだ。
二体は残る一体、バルタザールに攻勢を仕掛ける。
リツコのひたいには滝のように汗が流れる。

「母さん、持ちこたえて！」

リツコはいつの間にか大声で叫んでいた。
その叫び声に応じるかのように浸食のスピードが半減した。

「先輩、準備できました！」

「接続開始！」

「くうううううう！」

苦しみの声をあげて苦痛にもだえるミサト。

「あたしは子供たちのためにも、負けられないのよ！」

ミサトがそう叫ぶと同時に全身が光り出した。

そしてその光が治まった時…… M A G I の浸食、ネルフの施設の汚染は完全に止んでいた。

使徒は完全に制圧されたようだ。

「ミサト、あなたのおかげで助かったわ……さすが母親の力ね」

「ナオコさんも、母親としてリツコの呼びかけに応えてくれたじゃない」

「私は科学者としての母さんは尊敬してたけど、母親や女としては嫌いだったわ」

「先輩、加持三佐の電子化解除の作業を始めますね」

ミサトの物質化作業が終了し、MAGIの機心ルームを出ていくミサトとマヤ。

最後に出ていったリツコは部屋を出る直前、水槽を優しくなでた。

「ありがとう、母さん」

<ネルフ ジオフロント>

「あんたたち、何を裸で抱き合ってるのかしら、子供を作るのはまだ早いわよ」

「ミサトだつてアタシの年ぐらいで出産してんじゃないのよ!」

シンジたちは先ほどの状態のままシンジ用のエントリープラグに三人でいる所を救助された。

「それは、ちょっと特別な事情があつてね」

「……これ以上ミサトのやつに追及しないでくれ」

ミサトが普段見せない影のある表情とリョウジの説得によりアスカはそれ以上言うのを止めたようだ。

「さあ、三人とも服を着て、今日は家に帰ってゆっくりとお風呂であつたまりなさい。風邪引くわよ」

シンジたちの姿が見えなくなると、ミサトはリョウジにしなだれなかった。

「ねえ、あの子には使徒の細胞は移ってないわよね」

「ああ、何度も検査しているから大丈夫さ」

「あたし、もう一人ぐらいあなたの子を産みたかった」

「おいおい、二年前に俺が戦場で巡り合ったあの子が居るじゃないか。そして新しい三人の子供たちも、な」

「そうね、でもあたしは……」

そのうち完全に人ではなくなるかもしれない。

と言う言葉をミサトは必死に飲み込んだ。

鈍い痛みが広がる自分の下腹部を押さえながら。

第十四話 ゼーレ、新議長の座

<ドイツ ネルフ支部 通信会議室>

ドイツネルフ支部は表向きはネルフの支部であるが、実質的にはネルフの上部組織であるゼーレの本部と同義だった。

ホログラフであるが、日本支部のゲンドウを除く全員が終結していた。

モニターには今までの使徒戦の戦績が表示されている。

「使徒は順調に倒されているようですな」

「何も問題は無いように見えますが」

「キール議長、我々をこうして集めた訳をお聞かせ願いましょうか」

ゼーレのメンバーたちは静かにキールの言葉を待つ。

発言を促されたキールはゆっくりと話した。

「実は、ネルフが加持ミサトを中心にまとまりつつあるらしいのだ」

「それは良くない事態ですな。内部を固められると手を出しにくい」

「碓ゲンドウ。彼がネルフの長ではなかったのですか？」

「どうやら奴も上手く丸め込まれているらしい」

ゼーレのメンバーたちは腕を抱え込んで考え込む。

一人だけ余裕の構えを崩さないキールを見て、メンバーの一人がキールに声を掛ける。

「議長は何かお考えがございますかな？」

「加持ミサトをゼーレの顔役にしようと思っただが」

ゼーレのメンバーはキールの発言の真意がサッパリわからず、思考を停止してしまった。

長い長い沈黙が会議室に染み透っていく……。

キールは穏やかに次の言葉を紡ぎ出す。

「理由は、まず碇ゲンドウに焦りを与え、加持ミサトと対立させるため。そしてゼーレの印象を変え、表世界からも資金を集めやすくするためだ」

「これは奇策にして妙案ですな。しかし奴が応じますことやら」
「そう上手く我々の操り人形になってくれますかね」

ざわめき立ったゼーレのメンバーたちをキールはゆったりとした態度で鎮まるのを待つ。

静まり返ったのを見てキールは話を再開する。

「加持ミサトは階級が低い事を理由に機密情報を知らされない事にかなり不満を抱いている。またゼロ・チルドレンの秘密や家族の事など弱みをかなりこちらが握っている」

「しかし、人類補完計画の事を深く追求されると困る」

「なあと、しょせんは肩書だけのお飾りだ。作戦立案などの用事が山積してゼーレにはほとんど顔をださないだろうよ」

「最後には全ての罪を被って……というシナリオですな。さすがキール議長、人が悪い」

「加持ミサトが応じればそれでよし。断ってもゲンドウの耳に入れば、穏やかではないはずだ」

こうしてゼーレの意見が一致し、会議はひとまず解散となった。

<ネルフ本部 エヴァ実験棟>

そのころ、日本のネルフ本部では零号機と初号機のパイロットを入れ替えて起動する相互起動実験が行われていた。

「レイ。どう？ 初めて初号機に乗った感想は」

「……碇君と一つになった感じがする」

「なんですって、よくもまあそんなずうずうしい事が言えるわね！」

レイにシンジを盗られた気分になったアスカは怒り心頭に発したように、同じく実験を見学していたミサトに噛みついた。

「ねえ、ミサト。アタシも初号機に乗せてよ」

「アスカ、無理言わないでよ」

「テストの邪魔をするなら出ていきなさい、迷惑よ！」

リツコの一喝によりアスカはおとなしく椅子に座った。

次はシンジの番だ。

「シンジ君、どう？ 初めて零号機に乗った感想は」

「何か暖かい、まるで母さんに優しく抱かれている感じがする」

「レイ、良かったわね、お母さんに見られていて」

アスカはテストを終えて戻って来たレイに嫌みたっぷりに言った。

「うん、それでも碇君と一緒に居られるならそれでいい」

「へこたれない子ね」

アスカは盛大に椅子からずっこけた。

「二号さん、今夜はニンニクラーメンをお願い。チャーシュー大盛りだね」

「なんでアタシがそんなもの作らなきゃならないのよ!」

「だって私はお母さんだもの、クスクス」

「うるさい、静かにしないと叩き出すわよ!」

リツコのこめかみには青筋が立っていた。

アスカとレイは冷汗を流しながら椅子に座り直す。

「シンクロ率は初号機の時とそう変わりませんね」

「これで例の計画も実行できるわ」

「ダミープラグですか? 私は反対です」

「マヤっち。あたしはなるべくあの子たちにエヴァに乗って戦って欲しくないと思っているの。これからもつと強力な使徒が出てくるかもしれないし、あの子たちが傷つくなんて事、あつてはならないもの」

ダミープラグ計画はミサトが積極的に推し進めていた。

しかしミサトはダミープラグの素体が綾波レイであることを知らずに、オートパイロットと同じく人工知能、最悪でもブレインコピーの技術が使われているのだろうと思い込んでいた。

零号機のエントリープラグに座っていたシンジは、映像のようなイメージが自分の脳に直接流れ込んでくるのを感じていた。

「なんだこの感じ……綾波レイ?」

笑っているシンジ。

泣いているシンジ。

怒っているシンジ。

照れているシンジ。

色々な自分の顔が浮かび上がってくる。

「綾波」

「綾波？」

「綾波！」

「綾波……」

今度はレイを呼ぶ自分の声が聞こえて来た。

「綾波がこんなにも僕の事を考えていたなんて」

「……父さん？」

父ゲンドウの様々な表情が浮かび上がり、レイを呼ぶ声が聞こえてくる。

「笑っている父さん。頭を優しく撫でている父さん。綾波は僕の知らない父さんをたくさん知ってるのか」

「碇君、私と一つになりましょう。それはとっても気持ちのいいことなのよ」

シンジの目の前に一糸まとわぬ裸の綾波レイのイメージが現れた。気がつくと自分も生まれたままの姿になっていた。

レイはシンジに向かって滑空するかのように迫って来た。

「綾波、止めてよ！」

シンジがレイのイメージを拒絶すると、意識が無くなるのを感じた。実験棟に警報が鳴り響く。

「実験中止、電源を落として！」

「停止まで後30秒！」

制御不能に陥ったエヴァ 零号機は今まで無い出力で実験棟の強化ガラスを叩き破った。

その場所はアスカとレイが座る席の正面だった。

レイは衝撃で部屋の隅に飛ばされたようだが、アスカは椅子や機材の下敷きになって挟まれて動けなくなってしまった。

「アスカ、危ない！」

アスカは機材ごと零号機につかまれて持ち上げられてしまった。アスカの周りを囲んでいる機材が音を立ててひしゃげていく。

「アタシ、シンジに握りつぶされて死んじゃうんだ……それもいいか……」

アスカを助けようとミサトが力を解放しようとしたその時、零号機は動きを止めた。

「零号機がアスカを殺そうとしたの！？」

「シンジ君は意識不明状態だからそうとしか考えようがないわね」

リツコとミサトが暴走の原因を探っている様子をレイは眺めていた。マヤは震えるアスカを医務室に連れて行っていた。

「あれは私が心の奥底で思っている事……？」

レイは停止した零号機をにらみ付ける。

「いえ、私は彼女を憎んではない。エヴァの中に居る『誰か』の仕業ね。私の心を読み違えたの？」

実験棟から引き揚げた早々ミサトはリョウジから呼び出しを受けた。

「何？重大な連絡って」

「ミサト、ゼーレって知ってるか？」

「確か、あたしのお父さんの研究資金を出した組織よね。噂ではネルフの上位組織だって言う」

「そこから新議長指名の打診が来ている」

「なんで、あたしがトップに？」

「さあな、ただ裏社会に生きる組織だけあって一筋縄ではいかない連中だぞ。引き受けるのか？」

「そうね、引き受けるにしてもただでは引き受けないわ」

ミサトは不敵な笑みを浮かべてそう答えた。

<ネルフ本部 司令室>

司令室に居たゲンドウとコウゾウの二人は突然ゼーレからその通達を受けた。

落ち着いた姿勢を崩さないゲンドウに対してコウゾウはいらだった様子だ。

「碇。これはお前をバカにした行為だぞ」

「ふっ、これはゼーレの安っぽい挑発ですよ」

「加持三佐の地位がお前より上になるんだぞ、命令を聞かなくなったらどうするつもりだ」

「彼女はそこまでごう慢じゃありませんよ」

ゲンドウはこの策略がネルフの内部混乱を狙ったものであることを

見抜いていた。

<ネルフ 301病室>

アスカは検査の結果、全く怪我などはしていないことは判明したが、零号機に握りつぶされそうになった恐怖からベッドの中で震えていた。

自分の分身として頼れる存在だったエヴァがこんなに怖くなることがあるとは、全く想像できなかった。

アスカは正面からシンジに、背中からレイに抱きしめてもらっていた。

「アタシは、あんなものに乗って戦わなくちゃいけないの……」

後日、アスカはなんとかエヴァに乗れるまで復帰したが、以前より大幅にシンクロ率が低下してシンジに追いつかれそうになっていた……。

第十五話 嘘と本心

<戦闘用ヘリ>

羽のブレード音が響く狭いヘリコプターの室内でゲンドウとコウゾウは第三新東京市を見下ろしながら会話を交わしていた。

「昨日、キール議長から俺の所へ直に計画が遅れていると文句が来たぞ。そうとう腹にすえかねている様子で、お前の解任まで示唆していたぞ」

「そんなことはない、人類補完計画は他の計画と繋がっている。ダミープラグの開発も始まった、何が不満なのだ」

「まあ今はその点は構わん、問題なのは加持三佐の方だ。夫婦で妙な動きをしているそうじゃないか」

「好きにさせておくさ。マルドゥック機関と同じだ」

「好き放題にさせていたのがこの結果だ、わかっているのか、碇！」

コウゾウはゲンドウを怒鳴りつけたが、ゲンドウは返事をしなかった。

<府中 戦略自衛隊本部>

戦略自衛隊のとある士官の部屋。

そこで親しく言葉をかわす士官たちと加持リョウジの姿があった。

「さて、そろそろ本題に入ろうか」

「ここには目も耳も無い。安心してくれ」

「マルドゥック機関について詳しい事はわかったかい？」

「ああ、日本各地に居る隊の同志に調べさせたが、108ある企業のうち107個全てダミーだった」

「マルドゥック機関。エヴァンゲリオン操縦者選定のために設けられた人類補完委員会直属の機関か」

「取締役欄の名前は、ほとんどお前さんの組織の幹部たちの名前だった」

「そうか……すると……すまないな、危ない橋を渡らしてしまって」

「それは情報を漏えいしているそちらも同じでしょう。あなたたち夫妻にはお世話になりました。奥さんにもよろしくお伝えください」

<第三新東京市 第壱中学校2 - A教室>

「えーっ！ せっかくの日曜日なのにデートに行けないの？」

「う、うん。行かなくちゃいけない所があるから」

アスカの大声はクラスの注目を浴びてしまったようだ。

アスカにレイいつも両手に花状態であるのにデートに誘われて断るとはなんとけしからんやつだと思われていた。

「碇君。アスカと一緒にその場所に行く事はできないの？」

ヒカリがなんとか親友の願いをかなえようと助け船を出す。

レイが用事で今週の日曜に出かけると聞いてから、アスカはシンジと二人つきりでデートをするために最近毎日のようにシンジを誘っているのだ。

「ダメだよ、アスカを連れて行くなんて絶対無理」

シンジは取り付く島が無いほど頑なに拒否していた。
アスカは強い拒絶についに泣きそうになってシンジの側を離れてしまった。

慌ててついて行くヒカリ。

しばらくして気持ちが落ち着いたのか、着いて来たヒカリに話しかける。

「ねえ、ヒカリ。確かお姉さんがデートの仲介をしているって言うていたわよね」

「えっ？ そうだけど……」

「じゃあ今週の日曜日さ、誰か紹介してよ」

「だって、アスカには碇君がいるんじゃないの？」

「シンジのやつなんて、大っ嫌いよ！」

あまりに大きい声で言ったので、そのアスカの声はシンジの耳にも届いていた。

「アスカ、あんまりワガママ言わないでよ」

「ふんだ、嫌い嫌い嫌い、大っ嫌い！」

のっしのっしと鼻息を荒くして立ち去るアスカとは対照的に、シンジは真っ青な顔をして立ちつくしてしまっていた。

「セ、センセ大丈夫か？」

「ケンカなんて、初めて見たな……」

「僕はアスカに嫌われちゃったんだ……」

その後トウジやケンスケがいくらシンジを励ましても、顔が晴れる事が無かった。

<ネルフ エヴァ実験棟>

「アスカのシンクロ率低下は相変わらずひどいわね。シンジ君も調子が悪いみたい」

「なんか、クラスの子からケンカしたみたいだって聞いたけど」

ミサトとリツコはシンジたちのエヴァの起動実験を眺めながら、雑談に花を咲かせていた。

「パイロットたちの監視もあなたの仕事じゃない」

「あたしは家族してアスカとシンちゃんを見ているの。監督日誌なんて支給されたその日に破り捨てたわ」

「シンクロ率の起動指数は越えてるから問題ないとして……それにしてもミサトは結婚式の仲人の仕事が多いわね」

「リツコの時は最優先でしてあげるわよ」

「……当分無理ね」

「ま、まあ頑張ってね、としか言えないわ……」

「シンジ君、大丈夫なのかしら。明日でしょう？」

「そうね、明日ね。アスカの事引きずらなければいいんだけど……」

テストを終えたシンジはレイと同じエレベーターに乗り合わせていた。

アスカは徹底的にシンジを避けているようだ。

「綾波。明日父さんと会うんだけど、何を話したらいいのかな？」

「……なぜ、私にそんな事を聞くの？」

「零号機に乗った時、僕の知らない父さんの色々なイメージが流れ

込んで来たんだ」

さすがに裸のレイに迫られて拒絶した事までは言えなかった。

「多分、何を話しても碇司令は喜ぶと思うわ」

「そ、そうかな……うん、ありがとう」

「役に立てて良かったわ」

「綾波に相談すると心が落ち着くんのだ。……お姉さんみたいだ」

「私が碇君のお姉さん……」

レイはほおを赤くした。

「碇君って突然とんでもない事を言うのね……」

<第三新東京市郊外 加持邸>

「「ただいま」」

「おかえり」

シンジとアスカがケンカをしているため緊迫した空気が加持邸全体に広がっているみたいで、ミサトとリョウジがそろって帰宅した時にリビングに居たのはアスカだけだった。

ミサトとリョウジは顔を見合わせてため息をつきながらリビングの椅子に腰かける。

「ねえねえ、明日のデートにつけていくから、ラベンダーの香水貸してよ！」

アスカはやけにハイテンションな大声でミサトに絡んでくる。
おそらく部屋に閉じこもっているシンジに聞こえるように当てつけて話しているのだろう。

ミサトにはシンジに構って欲しいアスカの本心がわかっていた。
だが明日のシンジの会談をぶち壊しにされるわけにはいかない。
それまでは嘘で塗り固めておかなければならなかった。

「アスカにはまだ早いわよ」

「そうだ。そういうのは大人になってからするもんだぞ」

「ミサトもリョウジさんもケチーっ、明日のデートには大人っぽい服装で行こうと思ったのにー！」

その後も夜遅くまでアスカのわざとらしい大声が加持邸に響き渡った。

「……それじゃあ、行ってきます」……

ミサトとリョウジは結婚式に出席するため礼服、シンジは休日なのに学生服で、アスカは緑色の落ち着いた服装だった。

お気に入りのレモン色のワンピースを着ていないところからわかりそうなものなのだが、シンジはアスカが本気でデートをするものだと思います。

<第三新東京市 東京プリンスホテル 結婚式会場>

大きくそびえるウエディングケーキ。

新郎新婦によるケーキ入刀。

友人たちによる隠し芸の披露。

「それでは、司会兼仲人のこの加持ミサトが！ 僭越ながらスピ―チを行わせていただきます。皆の衆、拍手をお願いします！」

大きな歓声と拍手が巻き起こる。

「えー、人と人間の違いはですねー、人は人の間にある限り無力な存在ではないと言うことで……」

お祝い事大好き人間のミサトは仲人だけでなく司会の地位まで強引に奪い取って場を盛り上げていく。

アルコールがほとんど入っていないのにこのテンションの高さだ。まるで自分の事のように喜んでいる。

元司会者は苦笑いを浮かべながらひっそりと料理を口に運んでいる。まあ何もしないで給料がもらえるのだからもうけものだ。

ミサトとリツコの共通の知人だと言うことで、リツコも結婚式に出席している。

ミサトはせわしく動いているので、リョウジは主にリツコと食事と会話をしながら時を過ごした。

「あー、今日の結婚式は楽しかったわね」

大任を終えたミサトたちはネルフ内のバーで飲み直していた。

街で飲むのはミサトがリョウジにたしなめられて自重している。

ネルフ施設内なら多少暴れても問題は……無い。と思う。

「リョウジ。あたしたちも結婚式やりたかったわね」

リョウジはミサトが少し早いペースで飲んでいる事に気付いた。リツコを避難させることにした。

リヨウジの合図を受けたリツコは席を立ちあがった。

「まだ仕事が残っているから私は行くわね」

「そりゃ仕方無いな」

「付き合い悪いわねー」

リツコがそそくさと出て行った後、リヨウジはバーの従業員たちにも目配せをし、店内はミサトとリヨウジの二人きりになった。

リヨウジは覚悟を決めて空いたミサトのグラスに酒を注いでいく。

「使徒戦が終わってさ。ネルフやゼーレから何もかもから解放されて自由になったら、ゆっくりすればいいじゃないか」

「自由か……。自由って、いいわよね」

「あたし、やっぱり父さんの敵討ちをするために使徒と戦っているのかもしれない」

「ミサト。その事を考えるのは止めるんだ」

「自分のためにシンジ君たちを利用している最低の女なのよ、あたしは！」

「やめろ！」

リヨウジは暴れるミサトを抱きしめて、唇でミサトの言葉を遮った。

<ネルフ ジオフロント 集団共同墓地>

I K A R I Y U Iと刻まれた墓標の前でゲンドウとシンジの二人は立っていた。

シンジはもっていた花束を墓に供えると、ゲンドウの方に振り向いた。

「父さん。二人っきりで僕と話したいってどういうこと？」

シンジは突然、ゲンドウからの電話で母親碇ユイの命日に墓前で話したい事があると連絡を受けていた。

アスカやレイ、コウゾウなどが居ない場所で二人きりと言う事だったのでシンジはアスカを連れていくことをかたくなに拒否したのだ。

「シンジ、私の方を見るのはもうやめろ」

ゲンドウは無愛想になるべく冷たい声で聞こえるようにそういった。

「私が側に居るとお前を傷つけるだけだ」

突然の拒絶の言葉に何も告げられないシンジにゲンドウはさらに言い放った。

「でも、僕は父さんと話せるようになってたかなと思って……」

「シンジ。私のようにはなるな」

「どういう意味？」

「私は赤木君の気持ちには応えてあげることができないのだ」

「なんで、リツコさんが？」

わけがわからずに固まっているシンジにゲンドウは言葉を吐き捨てて背を向けて立ち去った。

「過去の不幸に引きずられて、今目の前にある幸せを逃すな」

ゲンドウは大声でシンジにそう言い放つと、離れた場所に待機して

いた大型輸送ヘリに乗り込む。

客席には先にレイが座っていた。

これから行われるダミープラグの実験のために来ていたのだ。

「司令。碇君に大事な話はできたのですか？」

レイにはゲンドウが必死に悲しみをこらえているように見えた。心配になったレイは返事をしないゲンドウに何度も呼びかけた。

「お前には、関係の無い事だ」

やっと聞こえた返事は、とても冷たい言葉だった。

しかしそれとは裏腹に、ゲンドウの瞳は悲しみにあふれているようにレイには見えた。

その後ネルフ本部に到着し、セントラルドグマに設置されたダミープラグ実験槽にレイが押し込まれる時になっても、ゲンドウは押し黙っていた。

<第三新東京市郊外 加持邸>

意気消沈したシンジが帰宅した時、誰も家には居なかった。

シンジは自分の部屋に駆けこむと枕を抱えて声を殺して泣きはじめる。

「う、うつつ……父さん、何で僕を拒絶するの？」

シンジが帰宅してそう長く経たないころにアスカが帰宅した。

乱暴にシンジの靴が脱ぎ散らかされているのを見て、アスカは妙な

胸騒ぎがした。

アスカは慌ててシンジの部屋に向かった。

シンジの部屋のドアは閉じられていて、中にシンジが居る気配がする。

焦ったアスカはノックもせずにドアを開けた。

「シンジ、どうしたの？」

シンジは枕に顔を突っ伏したまま返事をしない。

「もしかして、泣いているの？」

アスカはシンジに近づくと、その頭を自分の胸に抱き寄せた。

シンジは違和感を感じて顔をあげた。
するとアスカが優しく微笑んでいる。

「何も言わなくて良いわよ、シンジの涙は全部受け止めてあげるから」

アスカがそう言うと、シンジは泣きじゃくるのだった。

第十六話 死に急ぐアスカ、そして

<ネルフ本部 エヴァ実験棟>

ネルフ本部ではシンジ、アスカ、レイの三人の定例シンクロテストが行われていた。

リツコは三人のシンクログラフを見比べて、嬉しそうな表情を見せた。

それに対して、ミサトは険しい表情を見せる。

「シンジ君。今日のシンクロテスト、あなたがナンバーワンよ。頑張ったわね」

「本当ですか!？」

シンジは純粹に喜んでいる。

アスカもシンジのシンクロ率上昇を誉める言葉を口にしたが、表情はどことなく寂しそうだつた。

ミサトはそんなアスカの様子を察して慌てて、リツコをたしなめる。

「ダメよりツコ、そんな言い方をしちゃ」

「私、何か悪い事言つたかしら?」

どうやらリツコは自分の発言の意味に気がついていないらしい。

ミサトは困つた顔でリツコを見てから、笑顔でアスカに声を掛ける。

「いい、別に順位が高いから偉いってものじゃないの。協力して、敵に当たることが大事な事なのよ」

「すいません、ミサトさん。勝手に喜んでやって」

シンジはすぐに反省の言葉を述べたが、アスカの表情は影を帯びたままだった。

やはりアスカにはテストの結果を伏せるべきだった。

「ごめんなさい、アスカのプライドを傷つけてしまったわね」

リツコはミサトにそつと耳打ちをした。

「そつでもないのよ」

ミサトはまだリツコが思い違いをしていると指摘した。

ミサトはアスカを元気づけるためにさらに声を掛ける。

「女の子はね、好きな男の子を守るためならいくらでも強くなれるの。ぶつつけ本番で頑張っちゃいなさい！」

「わかったわ。ありがとう、ミサト！」

アスカの表情はぱつと明るくなった。

レイも言葉の意味がわかったらしく、顔を少し上気させている。

リツコは感心した表情でミサトの方を見た。

「私もゲンドウさんの為に、魔法の剣、振るえるのかしら」

「さあね。あたしはリョウジのためなら月でも真つ二つにしてやるわよ」

「ミサトが言うところにもならないから、やめなさい」

リツコはそう言ってため息をついた。

チルドレンたち三人は家に戻ったらシンジのシンクロ率トップのお祝いをするそうだ。

何か明るく騒ぎたい名目が欲しいのだろうとミサトは思っていた。アスカもすっかり元気になった。

ミサトはそう思っていた。

しかし……それは浅慮だった。

<府中 戦略自衛隊本部>

「突然、空中に黒い球体が出現しただと？」

戦略自衛隊の司令部は、空中に突然出現した使徒レリエルに驚いた。しかし今回の使徒は非常にゆっくりとしたスピードで第三新東京市に向かって浮きながら移動しているだけ。特にそれ以外攻撃してくる様子も無かった。

「ふん、使徒なら第三新東京市に向かうはずだ。ネルフに連絡を入れておけ、無視してかまわん」

そう命令を下す戦略自衛隊の高官に太った制服の男が近づいて来る。

「司令。また私の部隊が使徒を倒して御覧に入れましょう」

「ふん、誰かと思えばアサヒ少佐か。本来君の身分ならここには入れないはずだが？」

「しかし、以前私のロボット兵器が蜘蛛のような使徒を倒したのはお分かりでしょう」

「そのロボットのパイロットが逃走して、騒動の責任を取って降格させられたのではないかな」

アサヒ元中佐は父親が戦略自衛隊の幹部であり、シンパが多くいた

ためロボット兵器が暴走するような騒ぎが起きても少佐への降格処分だけで済んだ。

だが、アサヒ少佐がミサトに銃を突きつけられて、泣きながら逃げ出してしまった事は知れ渡ってしまっていた。

そこで今回も使徒を倒して返り咲きを狙っているわけである。

「私が開発した新型戦車が使徒を打ち倒すでしょう」

「そうか……では君に任せよう」

今度の戦略自衛隊の使徒攻撃部隊は、アサヒ少佐自身が戦車に乗り込み、周りのスタッフも全てアサヒ少佐のシンパで固められていた。他の人間は誰もアサヒ少佐に協力しなかったからである。

アサヒ少佐が乗る特別製の重戦車が使徒の近くまで迫った。

戦車の動きも遅かったが、使徒の動きもかなり遅かったのだ。

「主砲をぶっ放せ！」

アサヒ少佐の合図で戦車から弾丸が空に浮かぶ黒い球体である使徒に向かって発射される。

命中した瞬間、使徒が戦車の真上に瞬間移動した。

そして戦車を包み込んだ。

戦車は飲み込まれて消えてしまった。

残ったのは着地して動かなくなった黒い球体……使徒だけだった。ため息をついた戦略自衛隊の高官は、ネルフに緊急通信をしたのだ。

<ネルフ 作戦会議室>

「何ですって、使徒にそんな無謀な攻撃を？　どうしてあなたは止めなかったの！」

ミサトは戦略自衛隊の士官からアサヒ少佐が独断専行して攻撃を仕掛け、全滅した報告を聞いた。

通信電話の向こうでは、士官が必死に謝っている。

ミサトは気分を落ち着かせるため深呼吸をする。

「ごめんなさい、あなたを責めても仕方が無いわね。データは技術部に送ってくれる？　……ありがとう」

ミサトはそう言っ、電話を切るとまた怒りがぶり返してきたのか、大きな声で怒鳴る。

「まったく、とんでもない事だわ！」

「ミサトさん、もう怒るのは止めましょう。僕たちはそんな思いやりのあるミサトさんを慕っておりますから」

マコトが自分の執務室にいるミサトをリツコたちの居る作戦会議室に連れていくため、迎えに来たようだ。

「僕は、の間違いじゃないの？　ごめんね、あたしはとっくに売約済みだから」

「はは、ミサトさんにはかありませんね」

冗談を交えながら、いつもの調子を取り戻したミサトにマコトは安心した。

ミサトとマコトが作戦会議室につくと、チルドレン三人とリツコとゲンドウ、コウゾウ、マヤ、シゲルが待っていた。

リヨウジはミサトの代行としてゼーレに行くことが多くなっている。ミサトとしては出来るだけ多くの真実を探って欲しいと思っているからだ。

「エヴァンゲリオンの出撃命令が出ている…… エヴァ三機は直ちに
出撃せよ」

「そんな、まだ使徒の事が何もわかっていない状態で出撃ですか？」

ミサトの反論にチルドレンの三人も同意した。
信用できない目でゲンドウをにらみつける。

「使徒の解析はこれから技術部が戦略自衛隊の攻撃データをもとに
行っわ」

「命令は出撃することだけだ。 攻撃しろと言う命令は下されていない
い」

「……わかりました」

ミサトはシンジたちの方を向いて申し訳なさそうな顔をして、手を
合わせる。

「ごめんなさいね、あなたたちには窮屈な思いをさせるけど、エヴァ
アに乗って本部の側に待機してもらっわ。 いい、決して使徒に手を
出さないで。 また動き出して、本部に近づいても絶対によ」

ミサトの言葉にシンジたちうなずいてはエヴァに乗り込み、地表に
射出されてそのまま待機となった。

アサヒ少佐と戦車を飲み込んだ使徒は依然として動かず戦闘待機が
何時間も続いた。

その間リツコたちネルフ技術部は使徒の正体に迫るため、測量デー
タの分析を行っていた。

「使徒の正体はブラックホール？」

数時間後。発令所で使徒についての分析結果を報告するリツコの姿があった。

ミサトの驚く声を背に受けながら目の前に座るゲンドウとコウゾウに報告を続ける。

「はい。簡単に言えば、生きているブラックホールのようなものです。攻撃してきた対象を包み込んで吸収してしまうものだと思います」

「今、動きを止めているのはどうしてなのかね？」

「食事を終えたからだと思われます。現在飲み込んだ大型戦車を完全に消化しきった時、また移動を開始するのではないかと……」

「で、何か作戦はあるのかね？」

コウゾウの言葉にリツコは目を伏せる。ミサトもすぐに答えることは出来なかった。

「日本に現存する4042個のN2爆雷を集めて、内部から爆発させればギリギリで破壊できるという計算が出ています」

「そんなたくさんN2爆雷を短時間に集めるなど、とんだ絵空事だな」

「どうやって、使徒の内部に運ぶの？ まさか、誰かを特攻させるなんてことを考えているんじゃないでしょうね」

ミサトとコウゾウに厳しい指摘をされて、リツコは黙り込んでしまった。

ミサトが何かを思いついたようにリツコに問いかける。

「エヴァのA.Tフィールドを使って倒すことは出来ないの？」

「バカね、攻撃を加えた瞬間、エヴァが使徒に取り込まれるわよ。後、少なくともエヴァが爆発するぐらいのエネルギーが必要な。ミサト、私の説明を聞いていたの？」

「う……ごめんなさい。あたしもリツコの事、責められないわね」

発令所のやり取りは外で待機しているシンジたち三人にも聞こえていた。

未だ作戦が決まらない状況に、不安は募るばかりだった。

「大変です、使徒が動き出しました！」

オペレータのシゲルの声に発令所やシンジたちに緊張が走る。やはり使徒はゆつくりだが浮きながらネルフ本部を目指している。

「ミサトさん、僕たちはどうすれば……」

「くっ……待機命令は続行よ」

「でも、このままじゃ本部が」

「いざとなったらみんなを退避させるわ、今はこらえて」

使徒はシンジたちの肉眼で見えるほど接近してきた。

すると、アスカの乗る式号機が前進した！

「シンジ、さよなら」

そう言つてアスカはパレットガンを使徒に向かって発射する。反応した使徒はたちまち式号機を包み込んだ。

「アスカ!？」

「まさか、使徒の内部でエヴァを自爆させる気!？」

ミサトとリツコは驚きの声を上げた。

驚き過ぎて声も出ないシンジたちの前で式号機は使徒に取り込まれた。

そして使徒は満足したかのように着地して動かなくなった。

「アスカ、返事をしてよ、このっ、アスカを返せ！」

シンジは使徒に接近して直接キックを喰らわせる。

しかし、使徒はブヨブヨと形を変えるだけで手ごたえが無かった。

「レイ、シンジ君を取り押さえて！」

暴れる初号機をなんとかレイは取り押さえてネルフ本部に帰還した。エントリープラグから出たシンジは依然としてアスカの名前を呟いて泣くばかり。

「アスカ……魔法の剣の使い方を間違えるんじゃないわよ……」

レイに付き添われて病室に向かうシンジを見送りながらミサトはそんな事を呟くしかなかった。

<エヴァンゲリオン式号機 エントリープラグ内>

アスカは自分が無事だと言うことがわかると、自分は自爆に失敗したのだとわかった。

エヴァの自爆レバーを引いても作動しない。

使徒の力がそうさせているのだろうか。

「何か、気持ち悪い。周りには何も無い、無の世界か……ふふ、アタシの死に場所はこんな寂しい所か」

アスカは死を覚悟して、ゆっくりと目を閉じた。
すると不思議な夢を見た。

「ほら、まだ汚れが落ちてない、こんないい加減な仕事で許されるとおもってるの!？」

「う、ごめんなさい」

清掃員の服を着ているアスカがネルフの制服を着た女性職員にほおをはたかれた。

「お前なんかエヴァに乗れなければただのガキなんだよ!」

別の男性職員に口汚く罵られたアスカはついに泣きだしてしまう。

「泣けば許してもらえると思ってるのか、このただ飯喰らい!」

アスカを取り囲む野次馬が笑い声をあげた。

こらえきれなくなったアスカは目をこすって泣き出す。

「誰かアタシを助けてよ……シンジ……!」

アスカが自分の叫び声で目を覚ますと、風景はエントリープラグの中では無かった。

加持邸の食卓で、アスカは自分そっくりの紅茶髪の少女と向き合っている。

「アンタ、こうなることを怖がっているの？」

アスカにそっくりな少女が話はじめた。

「そうよ、アタシが足手まといになったら、みんなアタシを見捨てるの」

「シンジは側に居てくれないの？」

「みんなはアタシより、レイの方がシンジに相應しいと言うにきまつてるわ」

「それで、シンジを諦めるんだ」

「レイが側にいてくれれば、シンジは大丈夫だから」

「でも、アンタの望みは違うんでしょう？　ずっと側に居たい。だけど裏切られるのが怖い。嫌われるのが怖い」

アスカはその言葉に耳をふさいで頭を激しく振った。

「アタシは、シンジを守った女の子として、一生を終えられれば最高ののよ！」

アスカがそう叫んだとき、優しい声がアスカの頭に響いた。

「そんなの良くないわ、アスカちゃん……」

アスカが顔をあげると、そこはまだ加持邸の食卓だった。

目の前にはアスカそっくりの少女が座っている。

キッチンの方からアスカの見覚えがある女性が料理を乗せたお盆を持って現れた。

「さあ、ご飯を食べてゆっくりお話ししましょう。アスカちゃんも、あなたも」

「もしかして、……ママ？」

アスカは思わず身を乗り出した。

「ええ、そうよ。大きくなったアスカちゃんところやって話せるなんて夢みたいだわ。ありがとう」

キョウコはアスカの頭を撫でながら、もう一人のアスカに似た少女に声を掛ける。

すると少女の外見が変化して、黒髪の少女の姿になった。髪の色以外はレイに似た感じの線の細い儚そうな少女だった。

「私……レリエル……あなたたちの敵である使徒です……」

無表情にそういうレリエルに対して、キョウコは穏やかな笑みを浮かべながら首を振って否定する。

「あなたは敵じゃない。人の心に興味を持って、こうして私達と話そうとした。違う？」

「……はい。先ほどのヒト達は私を見るなり殺そうとしました。だから今度は自分を守るために相手そっくりに姿を変えたんです」

「アサヒ少佐、相手がか弱い女の子でも容赦ないのね……！」

アスカは怒りに身を震わせた。

「心と言うものがあるなら、私は心を持って生まれた最初の使徒かもしれません。リリスがそう言っていました」

「リリスって何？」

アスカの質問には答えずにレリエルは話を続ける。

「私はリリスに還るために長い旅を続けてきましたけど、私とこうして話してくれるヒトはあなたたちが初めてです。もっとヒトの事が知りたい。どうしてあなた達ヒトは弱いのに、私たちの兄弟の使徒を倒せたんですか？」

その質問にアス力が答えに困っていると、キョウコが代わりに答えた。

「私たちは自分の事を『人達』とは呼ばないの。『人間』って言うのよ」

「ヒトとニンゲン……同じじゃないのですか？」

「人は人の間にある限り、無力な存在ではないと言うことで、力を合わせて……」

キョウコの説教を聞きながら、アス力はミサトも確かそのような事を言っていたと思慮していた。

ミサトを母親や実の姉のように感じるのはこのためではないかと思い、改めて人間の絆についてアス力は考えさせられる。

「人間って素晴らしいものを持っているんですね。私たち使徒には無いものを」

レリエルはキョウコの説教を聞き終わると、感心したようにうなづいた。

「次の時代を生きて行くのにふさわしいのは、私たち使徒では無くて、あなたたち人間です」

レリエルは自分の首に手を掛けた。

「ちょっと、レリエル、アンタ何をしようとしているのよ！」

アスカが慌てて駆け寄ってレリエルの手を振りほどく。

「私にとって、生と死は等価値なんです。おとなしく死なせて下さい。でないとあなたたち人間が減んでしまう」

「何をわけのわからない事を言っているのよ！」

「私も、人間に生まれたかったな……」

二人の様子を見ていたキョウコは、アスカに優しく声を掛ける。

「アスカちゃん、レリエルちゃんとお友だちになれると思ったのね？」

「だって、こんなに話すことができるんだから……敵とは思えないわよ、ママ……どうすればいいの？」

「トモダチ？ 私にも絆ができたのですか？」

「そうよ、レリエルちゃん」

レリエルはキョウコの言葉を聞くと、嬉しそうにアスカの手を取って自分の首に持って行く。

「アスカさん。トモダチからのお願いです。私の事を覚えていてくれるために、あなたが首を絞めてください」

「……解ったわ、仕方が無い事なのね」

そう言つて涙を流しながら、アスカはレリエルの首を絞めていった。

「苦しい」

レリエルがついもらしてしまった一言で、アスカは手を緩めた。
思いつきり咳き込むレリエル。

「ごめん、やっぱりアタシには温もりのある命を奪うなんて事できないわ」

レリエルは涙を流して謝るアスカに対して微笑む。

「いいんです、私が自分で自分を消す勇気が湧かなかったから、アスカさんに甘えてしまったんです。もう、大丈夫です。私は自分の力を全て解放させて消滅します」

そして周りの空間が歪んで行った。

「もし私が生まれ変わったら、アスカさんのトモダチに……」
「うん……」

レリエルの声にアスカはそう答えた。
そして、真っ暗になった視界の中でアスカの頭の中にキョウコの声が聞こえてくる。

「アスカちゃん、レリエルちゃんの分もしっかり生きるのよ。私は弐号機からあなたを見守っています」

「ママ。わかったわ、エヴァの意味も」

空間が元に戻るとそこは弐号機のエントリープラグの中で、目の前には使徒に吸収される前に居た第三新東京市の光景が広がっていた。

<ネルフ 第一発令所>

アスカが使徒に吸収されてから、ネルフでは発令所のモニターで使徒の様子を観察しながら、アスカ救出のための作戦の話し合いが行われていた。

しかし、ミサトを初めネルフのスタッフが総員で考えるものの、どうやれば吸収されたアスカを無事救出させられるか作戦が思いつかない。

コウゾウとリツコはミサトには秘密裏にN2爆雷やJA改の徴収を行っていた。

使徒が動きを止めている間にアスカごと破壊してしまおうと言う考えのようだ。

リツコも全く心が痛まないわけではない。

非情に徹すると決めたゲンドウも愛する息子の大事な幼馴染を殺す命令は下せなかったに違いない。

使徒が動きを止めて相当長い時間がたち、N2爆雷も4000個以上貯まり、シロウ博士率いるJAチームがネルフに到着した。

そしていよいよ使徒破壊作戦が発動されようとしていたその時、使徒の体に変化が起きた。

黒い球体だった使徒が、粉雪のように太陽の光を受けてキラキラと輝きながら霧散したのだ。

式号機を包むダイヤモンド・ダストにうつとりと見とれてしまう人もかなり居た。

アスカが無事だと言うことが確認されると発令所は歓声に包まれた。しかし、エントリープラグから出たアスカを待っていたのは鬼のような顔をしたミサトだ。

「アスカ、シンジ君に対して何てひどい事をしたのよ、さあ、すぐに謝りに行くわよ！」

アスカの手を取ってミサトはずんずんとシンジの居る病室の方へ向かっていく。

あまりのミサトの気迫に、人々が道を開いて行く。病室の中に居たシンジは泣き疲れて眠っていた。

ベッドの側で椅子に座っているレイもかなり疲れているようだった。

アスカが部屋に入ると、レイが無言で抱きついて来た。

アスカはレイが落ち着くまでしつかりと抱きしめた。

レイが離れると、アスカは横たわるシンジの体を持ち上げて、自分の胸に優しく抱き抱える。

シンジが目を覚ますと、そこにはアスカの笑顔があった。

「アスカ……さよならなんて、言わないでよ……」

「ごめんね、シンジ……アタシ二度とあんなこと言わないから、許して……」

シンジたちは気持ちが落ち着くと、アスカが使徒レリエルの体内で起こった出来事を話すのを、ミサトを交えて興味深く聞いていた。

ミサトはリリスの事を聞くと、アスカからさらに詳しい話を聞こうとしたが、あまり詳しく知らないとなると、落胆していた。

「だから、初号機の中でも多分、シンジのママが生きていると思うのよ。そしてA.Tフィールドで守ってくれているのよ」

アスカは嬉しそうにシンジにそう話しているが、シンジはそんなに嬉しそうではないようだ。

「僕は……母さんが好きじゃないんだ。アスカのお母さんを巻き込んで、危険な実験をさせて、アスカから奪って！ 立派な研究だか何か知らないけど、他人を巻き込んで冗談じゃないよ！」

アスカとミサトはシンジの言葉に顔色を暗くした。

ミサトは自分の父の事を思い出した。

彼も、そうだったのだと思い知らされた。

「シンジ君……ごめんなさい。全ての発端は多分、あたしの父が原因だわ……葛城博士……彼から続く負の連鎖」

頭を下げたミサトにシンジは慌てて取りなそうとする。

「ミサトさんは悪くないですよ。多分、ミサトさんのお父さんもみんなを幸せにする方法を少し間違えただけなんですよ」

「そうね、ここで悲しみの輪を断ち切るために頑張らないとね。いやあ、参ったわね、逆にシンジ君に励まされちゃうなんて」

元気になったシンジに安心してミサトは笑顔で病室を出て行った。アスカは廊下でミサトを呼びとめた。

「ミサト、もしかしての話だけど……アタシがエヴァに乗れなかったらどうなるの？ やっぱリネルフ本部には居られないわよね」

ミサトは何をバカな事を言ってるんだか、と言ったような表情でアスカの不安を笑い飛ばす。

「アスカ。大学を出るほど頭がいいんでしょう？ ネルフの技術開発部でも活躍できるし、使徒戦でシンジ君やレイの戦いを間近で見ているんだから、作戦部としてもアスカに来てもらいたいぐらいよ」

その言葉にアスカはとても安心した。

エヴァが無くてここに居られる。

でも、シンジは母親に心を開くことはできないのだろうか。

アスカはそれが少し心配だった。

第十七話 「三人目」は不適格者

<ネルフ本部 エヴァ実験棟>

ネルフではシンジたち三人の定期シンクロテストが行われていた。
ミサトとリツコは三人のシンクロデータを見て、思わず顔をしかめてしまった。

「アスカのシンクロ率は調子がいいけど……シンジ君の下がり方はやばいわね」

「ええ、かろうじて起動指数を上回ってはいるけど……」

リツコはモニターを見て深いため息をつく、ミサトに告げた。

「新しいパイロットを補充するように司令に進言するわ」

「また不幸な子供を増やすつもりなの!?!」

ミサトはリツコにつかみかかった。

こうなることを予想していたからミサトには言いづらかったのだ。

「ダミープラグはまだ完成していないし、わかってはもらえないかしら?」

「私は作戦を立てることしか、子供たちを守れないってことね」

ミサトは悔しそうに唇をかんだ。

リツコはそんなミサトを残して報告のために司令室へと向かった。

<ネルフ本部 司令室>

「四人目を使うだ?」

「はい、残念ながらサードチルドレンは現時点では戦力になりません」

コウゾウはリツコのこの報告を受けて動揺した。

初号機が使えないとなると、計画が危うくなってくる。

「使徒殲滅を最優先……新しいエヴァとパイロットを補充せねばならん」

「しかし、バチカン条約はどうするのかね碇? 三体以上の保有は禁止されているぞ」

「初号機を凍結させれば問題ない……」

コウゾウは反論しようとゲンドウの方を見たが、彼は引き下がる気はないようだ。

仕方無くコウゾウは反対の言葉を飲み込んでゲンドウに質問を浴びせる。

「新しいエヴァについてはどうするのかね?」

「アメリカから参号機を購入する。それで問題は無い」

「素直に売却に応じてくれるかわかんぞ」

「先生、あの国は失業者アレルギーですからね。心配することはありません」

アメリカ政府はエヴァ参号機を日本に売却すると返事してきた。しかし、それは法外な値段だった。

ネルフだけで負担するのは重すぎる金額だ。

「パイロットの選定とコアは俺がやっておく。碇は予算についての連中と交渉してくれ」

「わかりました。先生、後はお願いします」

ゲンドウが日本政府と国連との交渉のためネルフを出発すると、コウゾウはリツコに耳打ちする。

「初号機と弐号機にダミープラグを搭載したまえ」

「ですが、完成度は低く実用には耐えません」

「それでいい、エヴァが動けばいい」

「しかし、司令の許可を取らないと……」

「碇は私に全てを委任して行ったのだ。……その意味はわかるな」

「はい、命令に従います」

リツコはコウゾウに頭を下げた。

<第三新東京市中央病院 012号室>

この病室には使徒戦に巻き込まれて重傷を負った少女、鈴原ナツミが入院していた。

ナツミの怪我は完治の判断が難しいということで、経過を見るため長い入院生活が続いていた。

トウジも欠かさず見舞いに訪れていた。

病院が寝静まった深夜。

その病室にこっそりと入るリツコとネルフ諜報員たちの姿があった。リツコはぐっすりと眠っているナツミを見て安心すると、諜報員たちには合図をした。

「使徒に勝つためには新しいエヴァが必要な……仕方が無いのよ……ごめんなさい」

諜報員たちがナツミをベッドから運び出そうとした時、ペンライトの光がリツコの顔を照らした。

リツコがペンライトを持っていて人物を確かめようと振り向くと、ミサトが立っていた。

「リツコ、バカな事は止めなさい」

「ミサト……」

ミサトが退出の合図を出すと、諜報員たちは戸惑いながらも静かに部屋を出た。

ゲンドウの命令とミサトの命令、どちらに従うか少しの間悩んだようだったがミサトの方が勝ったようだ。

ミサトとリツコもナツミを起こさないようにひっそりと部屋を出た。

ミサトは泣きだしたリツコを抱えて、裏口に止めてあるネルフのワゴン車まで運んで行った。

「ミサト、止めてくれてありがとう」

車の助手席に座らされたリツコは呼吸を落ち着けて、やっとしゃべることができた。

諜報員たちはいつの間にか四散していた。

任務失敗と報告に行くのだろう。

「リツコが自分であたしの所に密告したんでしょう？」

「やっぱり命令とはいえ、無関係の子を誘拐するなんてできない……」

……」

「リツコ、やっぱりあんたに悪人は無理よ。突っ張るのは髪の毛を染めるぐらいにしておきなさいよ」

「ミサトのような友だちがいて、助かったわ」

泣きやんだリツコのほおをハンカチで優しくふいて、ミサトはリツコの肩に手を掛ける。

「そんな無茶な命令、撤回してもらいましょう。副司令に直訴に行くのよ」

ミサトとリツコがコウゾウの所に行くと、コウゾウはほっとしたような顔で話しかけて来た。

「赤木君、葛城君。コアがたった今確保されたよ」

「何ですって!?!」

驚くミサトとリツコに女子高生の写真が貼られた書類が手渡される。名前は洞木コダマ。

ミサトには震える手で書類をめくると、フォースチルドレン、洞木ヒカリと記されていた。

「どうして、この子なんです!」

ミサトは自分の教え子がエヴァのパイロットに選ばれる可能性は100%だと言う事は覚悟していたが、特に親しかったヒカリが選ばれたことにショックを受けて叫んだ。

コウゾウはそんなミサトを手で制して説明を続ける。

「先の使徒戦で、戦略自衛隊の新型戦車に挽かれて重体だったが、手術の甲斐も無く助かる見込みはないと宣告したそうだ。ネルフの

技術で命だけは助けられると提案したら、彼女の方からエヴァに乗ることを承諾してくれたよ」

「何が起こったのです、副司令!？」

リツコもその話は全く聞いていなかったようで、言葉の出ないミサトに代わって聞き返した。

「アサヒ少佐の独断専行で、猛スピードで向かっていたため、転んで道路にうずくまっていた彼女を避難させる前に通過したらしい、気の毒な話だ」

「副司令、フォースチルドレンはエヴァに乗る危険性などをわかったうえで承知したのですか？」

リツコの言葉にコウゾウは気まずそうに視線をそらし、リツコとミサトに背を向けたまま話を始めた。

「まあ……パイロットが反抗しないように説得は担任である加持特佐に一任する。素人のシンジ君でもあれだけ戦えたのだ、問題はなかるう」

ミサトは言葉を発することができないほど怒りに震えていた。

コウゾウは用件だけ伝えたと、リツコに任せてそそくさと退散してしまった。

リツコはミサトの怒りが静まるまで、振るえるミサトの肩をそっと抱きしめていた。

「どうして、そんな命令を下せるの……」

ミサトはやつと言葉を絞り出した。

今回の事件に関わった諜報部員たちは現場でミサトの命令に従って

くれたが、理不尽な命令が下される現状に苛立っていた。

<ネルフ本部 ジオフロント 空中庭園>

リツコがネルフ本部に帰還してコウゾウから報告を聞いたとき、すでに作業は後戻りできない段階まで進んでいた。

リツコは犠牲を無駄にしないため、コアの確実性を高める作業に集中するしかなかった。

一方、ヒカリの説得をコウゾウに丸投げされたミサトは思案した結果、チルドレンたちに一連の事情を話してしまおうと考えた。

身勝手な大人の命令は許されることではないけれど、信頼し合っている子供たちならきつと乗り越えてくれる、そう思った。

戦略自衛隊病院からネルフに連行される形で連れてこられたヒカリだが、ミサトの計らいで妹のノゾミ、トウジとケンスケ、シンジ、アスカ、レイ、そして退院することができたトウジの妹ナツミが行することが許された。

本来は無関係の者をネルフ本部に入れることは禁止されているが、コウゾウも良心がとがめるのか許可を出した。

人工とは言え生い茂る緑の自然、晴れ渡った青空が美しい空中庭園。しかしその風景とは正反対に休憩所のベンチに腰掛けた皆の表情は暗かった。

ミサトも憔悴しきったヒカリと彼女の妹のノゾミになんと声を掛ければいいのか分からず、黙り込んでいてしまった。

「……何でヒカリがエヴァのパイロットになるのよ」

口を開いたのはアスカだった。

問いかけられたミサトはどんな大義名分を並べても、結局は言い訳

に過ぎない。

答えが見つからずミサトは謝る事しかできなかった。

「……ごめんなさい」

「何よ、ただ謝る事しかできないの！？ 他の大人みたいに醜い言い訳の一つでもしてみなさいよ……」

アスカもミサトを責めてどうになるでもないということとはわかっている。

語尾は弱々しかった。

「いいの、アスカ！」

それまで黙っていたヒカリが顔をあげる。驚いた皆の視線が集中する。

ヒカリは感情が抑えきれないのか、立ち上がって拳を握りしめている。

「お姉ちゃんは使徒のせいで大怪我をしちゃったんでしょ！」

「元はと言えばそうなんだけど……」

やはり戦略自衛隊もネルフも事実を隠しているのか。

直接の証人であるアサヒ少佐の部隊は全滅をしているし、目撃者も多分証言を拒否すると踏んでいるのだろう。

ここで事実をヒカリに告げても怒りの矛先が変わるだけだ。

さらに直接的に戦略自衛隊に手を出してしまう危険性もあると考えたミサトは嘘を突き通すことにした。

戦自の過失の追及は使徒戦が終わった後に訴えてやるとミサトは決意した。

「私がお姉ちゃんの仇を取る、いいえ、そうできなくてもお姉ちゃんの受けた痛みの数分の一でも使徒に喰らわせてやる！」

突然暴れ出したヒカ리를アスカやトウジたちが抑えつける。

穏やかな地味なヒカ리가般若のような表情を浮かべるのをミサトは辛そうな目で眺める事しかできなかった。

「お姉ちゃん、いつものお姉ちゃんじゃないよ……怖いよ」

ヒカリの妹、ノゾミがそんなヒカリの姿を見て泣き出してしまった。トウジの妹ナツミがそんなノゾミの側に駆け寄る。

ミサトは止めなければと思い、優しくヒカリの手を握って話し始めた。

「ヒカリちゃん、あなたは復讐をするため、自分のためにエヴァに乗ると言うならネルフの誰が命令しようと私は乗せたりしないわ」

ヒカリはその言葉に目を覚ましたのか、気まずそうにうつむいてしまった。

ミサトはヒカリが落ち着いたことに安心して、刺激しないように優しい口調で話を続けた。

「アスカたちは自分の大切なものを守るために、絆に支えられてエヴァに乗っているの」

「絆……ですか……」

「戦いは一人でできるものじゃないの。もちろん、守ってくれる同僚のエヴァのパイロット。エヴァの整備をしてくれるスタッフ。ひいてはあなたのご飯を作ってくれる人の協力が無いとエヴァで戦う事はできないの」

「私……そんな大変な事だとは思いませんでした」

ヒカリに自分の言いたいことが伝わってくれたと思ったミサトは満足げに握っていた手を離した。

これでいい。エヴァに乗るかどうかは彼女自身に決めさせよう。乗ると言っても決して怒りに駆られての事ではないだろう。

ミサトはアスカの独断専行を思い出して、互いを大切に思う事を強く教えようと思った。

「もし一緒に戦う事になったら僕も委員長をサポートするよ。ねえ、アスカ、綾波」

「エヴァも四機になるからそんなにヒカリの出番はないかもしれないけどいいけどね」

ミサトは明るく振る舞うシンジを見て思わず顔を手で覆ってしまった。

いつかは言うべきだったのだが、何と間の悪い事か。

「それなんだけどね、シンジ君はしばらくパイロットの任務から外れてもらうことになるの」

「どういうことですか？」

アスカとレイも驚いた様子でミサトを目を剥いて見つめる。

「シンジ君のシンクロ率が最近落ちているから……このままだと戦闘中に動かせなくなる可能性が出て来るから、あたしとリツコで判断したのよ」

「やっぱり、そうなんですか……理由はわかっていますけど。そんな日が来るんじゃないかと思っていました」

シンジはそう言うと辛そうな顔をして走り去って行ってしまった。

アスカとレイも追いかけてしようとしたが、ヒカリの様子も気になって離れるに離れられない。

しかしアスカとレイが励ましても逆効果になるかもしれないので、ミサトは二人を制止した。

「碇君がエヴァに乗らなくなったら、アスカと綾波さん二人だけで使徒と戦うことになるんですか？」

ヒカリの質問にミサトは困った表情を浮かべるしかなかった。同情を引いてエヴァに乗せようとは思われなくなかった。

「私、碇君の代わりになれる自身は無いけど……やります！」

そう言うヒカリの目には強い決意が宿っていた。

「委員長、ホンマにええんか？ 女子が戦ってケガをするなんて、ワイには耐えられへんで」

「ううん、いいの。今まで碇君たちに私たちは守ってもらっていたんだから、そのお礼よ」

ヒカリはトウジの顔を見て顔を赤らめる。

「それに私にも守りたい人がいるから。……ね、ねえ鈴原。私を委員長じゃなくてヒカリって呼んでくれないかな？ そうすれば私もっと頑張れる気がするんだ……」

「へ？ なんでそないなこと……」

トウジは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。

「全く鈍感ね鈴原は。好きな相手に名前前で呼んで欲しいのが女の子

つてもものよ」

「さらに鈍感な鈴原君。すでにエヴァに乗って戦っている女の子は二人もいるのよ」

アスカとレイに鈍感呼ばわりされたトウジは赤い顔をしてヒカリの方に向きあう。

「今までケンカばかりして悪かったな。これからは仲良くしようや……ヒカリ」

「私も今までキツイ言い方をしてごめんね……トウジ」

こうしてヒカリは正式にフォースチルドレンとなった。

ヒカリの妹ノゾミの面倒はトウジの家族が引き受けることになる。ナツミも新しい姉妹ができたようで嬉しそうだった。

<ネルフ本部 ジオフロント スイカ畑>

空中庭園の休憩所から目をつぶったまま全力疾走していたシンジが疲れて動きを止めて目を開くと、周り一面がスイカ畑だった。

どうやら空中庭園に併設されているスイカ畑のようだった。

シンジが途方に暮れて立っている、ゆっくりと向こうから加持リョウジが歩いて来ていた。

「スイカ泥棒かと思ったら、シンジ君だったか」

「ジオフロントでおいしいスイカなんて作れるんですか？」

シンジは広大なスイカ畑を見てリョウジに尋ねた。

「いや、やっぱり人工の自然じゃ本物にはかなわない。やっぱり生きる者には太陽が必要なんだろうな……」

リヨウジはそう言っ、目を細めた。

「それにしても珍しいな、シンジ君は今日はアスカもレイも側に居なくて一人なのかい？　これからお茶でも一緒にどうだい」

「……僕、男ですよ」

「お茶と言えばナンパだと言う考えか。君ってば意外に古風なんだな」

リヨウジはシンジの言葉に笑った。

シンジはリヨウジに連れられて第三新東京市の一角にある古びた喫茶店に連れられた。

「シンジ君、やっぱり悩んでいるんだろう？　母親に心を開けない事が」

「ええ、エヴァで母さんが生きているってことをアスカから聞いて母さんに心の中で文句ばかり言っていました」

「シンジ君はユイさんの事が嫌いなのかい？」

「僕の事を家政婦さんにまかせつきりで研究に没頭していた母さんが嫌いでした。たまに帰ってきて優しくしてくれたと思うと、すぐに研究所にもどってしまう。僕は側に居てくれる普通の母親が欲しかったです」

「そうか。シンジ君はユイさんにもっと甘えたいんだな」

「この歳になって恥ずかしいですけど……そうかもしれない。アスカは自分の母親と話せたのに僕は話せない。焦るばかりでシンク口率もドンドン落ち込んで……これじゃあダメな人間ですよ、僕は」

顔を伏せたシンジの頭をリョウジが優しくなでる。母親が子供にしてあげるように優しくなで続けた。

シンジはしばらく為すがままになっていたあと、顔をあげてリョウジに微笑みかけた。

「……ありがとうございます、リョウジさん。でもやっぱり男の人の手って堅いですね」

「やっぱり母親の代わりはできないか。シンジ君はアスカに自分の弱さを見せたりはしないのかい？」

「いえ、アスカは僕に優しくしてくれています。でも、これ以上弱いところを見せて心配させるわけにはいかないから」

「へえ、前時代的なんだなシンジ君は。……まあ、そのうちユイさんにもいたたまれない事情があったって事がシンジ君にもわかるさ。これを機会に、今までエヴァにかかりきりでできなかった事をやってみると良い」

「例えば……どんなことですか？」

「シンジ君は剣道は学校の授業でやった事があるかい？」

「いえ、やった事無いです」

「学校ではやらないのか……軍では必修だったけどな」

リョウジはシンジに気落ちした生活を送らせないために剣道などの格闘技を習わせることにした。

これが後の戦いにおいて役に立つことになる。

<ネルフ リツコの研究室>

ヒカリの起動試験の日程も決まった後、アスカがリツコとミサトに話があると言うことで三人はリツコの研究室に集まっていた。

「アスカ、話とは何かしら？」

「えっとさ、アタシはもうエヴァとのシンクロに問題は無いと思うから、シンクロテストの時間を他に使ってもっとみんなの役に立てることがしたいの」

「どういうこと？」

「ミサトが前にアタシに言ってくれたでしょう？ 技術部と作戦部でも役に立てるって」

ミサトは頭を書きながら困ったような顔をしている。

リツコは少し呆れた顔でミサトを軽くにらんだ。

「そこでちよつとアタシも考えてみたの、まだ企画段階なんだけどね」

ミサトとリツコはアスカの差し出した二枚の紙を見て驚きの声をあげる。

「トライアングル・アタック？」

「マゴロク・E・ソードにポジトロンスナイパーライフル……」

リツコはそのうちの二か所を指差してアスカに質問する。

「このマゴロク・E・ソードっていうのは……」

「ああ、それはアタシのお祖父さん、惣流マゴロクから名前をもらったの」

アスカの祖父は東洋の武術に長けた格闘家で名前を惣流マゴロクという。

なのでアスカは使徒イスラフェル戦の時に見せたように空手や剣道

もそれなりに得意なのだ。

「でも、これって初号機用の武器ね。シンジ君は今はエヴァに乗れないと思うのだけれど」

リツコの言葉にアスカは穏やかに首を振って否定する。

「アタシは信じている。シンジはきっとまたエヴァに乗れるようになるって。ミサトもリツコもそう思うでしょう？」

「ええ、そうね」

「私もそう思うわ」

こうしてアスカのアイデアは採用されて、ネルフ技術部とネルフ作戦部は新兵器の開発に取り掛かるのだった。

第十八話 命の洗濯を／決戦、地球防衛バンド

<ネルフ エヴァ実験棟>

新しくエヴァ参号機のパイロットに選ばれたフォースチルドレン・洞木ヒカリは訓練のメニューを精力的にこなしていた。

「目標をセンターに入れて……スイッチ。目標をセンターに入れて……スイッチ」

午前中はエヴァのシミュレーターで戦闘訓練を行い……昼は体力作りのトレーニングと格闘訓練、そして夕方には学校を終えたレイと共にシンクロテストを行った後アスカと合流。

アスカ提案のエヴァ三機による連携技の特訓を重ねていた。

アスカが言うには槍はリーチが長く投げることができる応用性に優れた武器だと言うことでエヴァ用の槍が採用された。

ヒカリは学校も休学し、朝早くからネルフに顔を出し夜遅くになって帰宅すると言う厳しい生活を送っていた。

シンジ以上に真面目な性格が彼女をそうさせているのだろう。

アスカをはじめとする周囲の人々はヒカリがたくましくなった事を歓迎しつつも疲れた彼女の様子に困惑していた。

ミサトとリツコも心を痛めている人間のうちの二人だ。

シンクロテストの様子を眺めながらため息をついた。

「シンクロ率はそんなに高くないけど、十分だと思うわ」

「あたしもヒカリちゃんにはそう言っているんだけど、彼女は耳に入っていないようね」

エヴァのコアとなった彼女の姉である洞木コダマもパイロットであ

るヒカリもどちらもまだ新米なのだ。

そんなに高いシンクロー率を出せるわけも無い。
動かせるだけで十分だった。

ヒカリは明らかにオーバーワークしていた。

このままでは彼女は潰れてしまう。

しかし、ミサトがいくら説得しても彼女は肩の力を抜こうとしない。
ミサトはアスカやレイ、シンジ、トウジ、ケンスケといった彼女の
友だちの力を何と借りれないか考えていた。

一方シンジの方はアスカたちがエヴァの戦闘訓練をしているときは
戦略自衛隊の士官と共に生身での格闘訓練を行っていた。

種目は剣道、柔道、空手などである。

加持リョウジ自身はゼーレの調査で忙しかったためリョウジの旧知
の知り合いである戦略自衛隊の士官が引き受けたのだ。

訓練のたまものであるのかシンジの肉体も少しずつたくましくなっ
ていた。

シンジ自身はアスカのパンチやキックを受け止めやすくなったぐら
いしか実感していないようだ。

シンジは表面上は自分の格闘能力が上がったことで喜んでいたが、
心の底では初号機のコアである自分の母親である碇ユイにどうして
も心を開けない自分に悩んでいた。

このところ毎晩のように優しく抱きしめてくれた母親がすぐに自分
を置いて研究員と一緒に研究所に行ってしまう夢を見ている。

「僕は母さんにとってどうでもいい子なんだ……」

シンジは毎朝のようにそう呟いて涙を目にためて目を覚ます。

アスカやレイたちに弱気な姿を見せるわけにはいけないので涙を拭
いて明るく部屋を出ていく。

しかし、実際のところアスカやレイは泣きながら寝ているシンジの
姿を見て知っていた。

そのようなシンジやアスカ、レイの暗い感情はゼーレの死海文書に記されていない『ゲスト』と呼ばれる使徒を生み出すことになる。

<第三新東京市 第壱中学校>

いつもと変わらない根府川先生のセカンドインパクトに関する授業が終わった放課後。

2-A教室には副担任教師のミサトと久しぶりに登校してきたヒカリ、そしてアスカたちの仲良しメンバーが居残っていた。

「さあ、みんな。今月末の文化祭の出し物は何にするか決まった？」

「あのミサト先生、私は訓練が忙しいので文化祭には参加できないと思うんですけど……」

おずおずと答えたヒカリの肩をポンポンと叩いてミサトは笑顔でヒカリに諭した。

「確かに使徒に勝つ事も大事よ。でもねえ人間は争いに勝つためにだけ生きているわけではないわ。命の洗濯をしないと心がすさんじゃうわよ」

「命の洗濯……ですか？」

「たまには訓練の事は忘れて、みんなと息抜きをすることも必要よ。アスカたちにも大事だと教えているの。このままじゃあヒカリちゃん訓練にのめり込んでしまうしね」

ヒカリが納得したところで、皆落ち着いたようだ。

鈴原トウジが勢いよく手をあげる。

「はい、このメンバーでバンドを組みたいと思います！」

「いいわね、鈴原君！ 名案だわ！」

ミサトがそう言っ、ヒカリを除くメンバー達は示し合わせたように賛成した。

これにはヒカリも反対を唱えなかった。

そしてトウジたちは文化祭の出し物をバンドにすることで意見をまとめ、担当パートの話し合いに入っていた。

シンジがキーボードでトウジがドラム、ケンスケがギターと言うところまでは簡単に決まり、残る女子三人は初心者向けのベースかボーカルにしようと言うことになったのだが……。

「地味なベースなんて絶対に嫌、アタシにボーカルをやらせてよ！」

「私もボーカルがやれたら嬉しいかな」

「ボーカル楽しそうだからやってみたい……」

アスカ、ヒカリ、レイの三者とも自分がボーカルをやりたいと言って譲らなかった。

最初は遠まわしに相手の辞退をうながす感じだったのだが、だんだん熱が入って来た。

これはやばいと思ったシンジが三人の真ん中に割って入る。

ミサトとトウジとケンスケはシンジの動きを見てあちゃあと痛そうな反応を取る。

シンジはアスカとヒカリとレイの三人ににらまれる形となってしまうった。

「こうなったら、三人が歌って一番うまい人がボーカルってことにしようよ」

「やっぱり……ダメなのか？」

シンジがそう思って怒られる覚悟を決めた時、三人は納得したように頷いた。

とりあえずケンカになるような事は避けられたようだ。パンパンとミサトが手を打ってこの場を仕切り直す。

「じゃあ一週間後、音楽室で三人の歌を聴き比べてバンドのボーカルを決めるわよ」

「なんでミサトさんが仕切るんですか？」

「そりゃあ……面白そうだからよ」

それから一週間。夕方からはネルフの訓練があるものの、ヒカリは他のチルドレンと同じように学校に通い、平穏な中学生生活を送った。ミサトとリツコ、そしてマヤをはじめとするネルフのスタッフも安心して胸をなでおろしていた。

マヤもヒカリと一緒に歌詞を考えたり、シゲルもケンスケにギターを教えるなどシンジたちのバンド活動を応援していた。そしていよいよ運命の日がやって来た。

シンジたちの『地球防衛バンド』（トウジが勝手に命名）は放課後音楽室に集まった。

バンドに協力したマヤやシゲルも監修の名目で有給を取り見に来ていた。

ヒカリは姉と慕ったマヤの前なので張り切っていた。

一番手はレイだった。

レイはシンジのピアノ伴奏で『Fly Me to the Moon』を歌いだした。

透き通るような歌声とバランスの良さに聴衆たちからため息がもれる。

途中歌詞を間違えてしまったようだが反応は上々だった。

「ふーん、ファーストもなかなかやるじゃない。次はアタシの番よ、

心して聞きなさい！」

自信満々なアスカの態度に聴衆から期待の拍手が上がったが、シゲルのサックスの伴奏をバックにアスカが歌い始めるとその熱は一気に冷めてしまった。

「これはひどい」

「音痴やな……」

アスカはケンスケとトウジのつぶやきを聞いて途中で歌を止めてしまった。

シンジは歌詞カードを見て首をひねった。

「アスカ、一緒に考えた歌詞の途中で終わってるよ？」

「シンジ、アタシの歌はそんなにひどいの？」

アスカが青い顔になってシンジに尋ねる。

「そ、そんな事無いよ……声はアスカが一番可愛いよ」

それは止めの言葉だった。

アスカは思いっきりシンジを引っぱたいてステージを降りた。

シンジは今ごろになってあわてて泣きそうで涙をこらえているアスカの手を握っていた。

「じゃ、じゃあ気を取り直してヒカリちゃん行ってみようか！」

ミサトの声にあわててヒカリはステージへと向かった。

シンジはアスカに付きっきりだったので代打としてマヤがキーボードを引いた。

シゲルは渡された楽譜を見て驚いた。

『奇跡の戦士エヴァンゲリオン』 作詞：伊吹マヤ 作曲：相田ケン
スケとなっている。

マヤはミサトと同じ聴衆の席に座って興奮気味に歓声をあげている。
マヤちゃんに対する見方を改めないといけないなと思うシゲルだった。

「何よこれ…… ネルフの内部情報ダダ漏れじゃない」

「ごつつう凄い歌唱力や！」

「アイドル並みだよ」

ミサトとしては特務機関ネルフの情報満載の歌詞はマズイ思ったが、嬉しそうに興奮しているトウジたちを見て水を差すようなことはするまいと思った。

こうして、文化祭で発表する曲名は『奇跡の戦士エヴァンゲリオン』となり、ヒカリがボーカルに就任し、アスカが自称『リード』ベース、レイが第2のギターとなった。

ちなみにケンスケはギター、トウジはドラム、シンジはキーボードを担当する。

<ネルフ 第一発令所>

ネルフの発令所は突然絶対防衛線の圏内に現れた使徒の反応に騒然としていた。

冬月コウゾウと碇ゲンドウも予定外の使徒の出現に驚いていた。

「赤木君、これは一体どういうことかね？」

「使徒はセンサーに感知されにくい地下に潜伏していたものと思わ

れます」

シンジたちは第壱中学校に居たため、オペレータ席には日向マコト
しかないと言った有様だった。

直ちに非常事態宣言が発令されミサトたちにネルフ本部への緊急招
集がかけられた。

そして戦略自衛隊の戦闘機による武力偵察が行われた。

使徒はミサイル攻撃に対してA Tフィールドを張る様子も無く、胴
体を球体に変化させて防いだ。

使徒のデータがネルフ技術部により分析し始められたところでミサ
トたちが発令所に到着した。

「私が不在の折、あなた一人で適切な対応、頼もしく思うわ」

「ありがとうございます、加持特佐。どうやら使徒には遠距離攻撃
は通じないと思われます」

マコトの報告にミサトは満足したように頷く。

すでに頭の中にいい作戦が浮かんでいるようだ。

「球体になった使徒の装甲を貫ける強力な接近攻撃しか手は無いと
言うことね。……アスカ」

ミサトの言葉にアスカは堂々と胸を張って手を当てる。

ミサトの言おうとしている事が分かったようだ。

「トライアングル・アタックを使うのね？ わかったわ、特訓の成
果を見せてあげる！ 行きましょ、ヒカリ、ファースト」

「うん」

「わかったわ」

「みんな、気をつけてね」

三人のパイロットは勇ましく発令所を出ていく。
シンジの聲がアスカ達を送り出した。

使徒はゆっくりとした動きで、歩いてネルフ本部へと迫っている。
使徒の攻撃方法は鞭のように伸びた鼻と肩から発射されるビームの
ようなものと戦略自衛隊の戦闘機の再度の攻撃で明らかになった。
初の実戦となるヒカリでもATフィールドで防いだり、動きを見切
って交わせるものだを見てミサトはヒカリの出撃も許可した。

ヒカリが初めての实戦で緊張しすぎたり、混乱を起こしたりしない
かそれだけが心配だった。

ゲスト使徒戦はあっさりと勝利に終わった。

アスカがおとりとなり使徒を引きつけ、アスカが使徒の真正面、ヒ
カリとレイがアスカの両隣と言う位置取りになった。

「ヒカリ、ファースト、行くわよっ！」

アスカの号令と共に零号機、貳号機、参号機が一斉に槍を使徒に突
き刺す。

使徒は胴体を球体にしてアルマジロのように攻撃を防ごうとした。
しかし三本の槍が命中した収束点ではその装甲を貫くほどの破壊力
が生じていた。

それは使徒のコアを破壊するのに十分な強さだった。

使徒が消え去る時に強い発光現象が見られた。

戦闘を見守っていたネルフのスタッフたちのほとんどはただのまぶ
しい光としてしか認識して居なかった。

ただ、ミサトとシンジの脳裏には不思議とあるイメージが浮かん
できた。

ミサトには研究所員に脅かされて研究所に連れ戻される碇ユイ博士
の姿。

シンジの脳裏には涙を浮かべて自分を抱く母親の姿。

ただシンジにはまだその涙の理由がわからなかった。
しかし、忘れていた記憶のほんの一部だけ戻って来た事は確かだった。

「あたしは今までなんて大切なことを忘れていたの……シンジ君に伝えてあげなくちゃ。でも、傍観者だったあたしの言葉でどこまでわかってもらえるんだろう」

ミサトはシンジの横顔を見て思い悩んだ。

伝えるべき事だが慎重に告白しなければならぬ。

せめて何かきっかけがあれば……。

戻ったアスカ、レイ、ヒカリはこれで無事に文化祭の発表が出来る
と大喜びだった。

市街地への被害はそんなに多くは無かった。

リッコは参考機の装甲が少し損傷しているのが気になってアメリカ
支部から参考機用の予備装甲を空輸してもらうことに決めた。

「参考機の装甲換装とダミープラグの起動実験、松代でやるわよ」
「わかったわ」

リッコの言葉にミサトは満足そうに頷いた。

いつかチルドレンがエヴァのパイロットとして選ばれることが無く
なる……そんな事を夢見て。

ゼーレの改革は予算編成の方は十分な成果を見せていた。

ミサトは浮いた予算を戦災孤児などの福祉に回していた。

しかし、ダミープラグや人類補完計画など肝心の謎はリョウジの協
力を持つても知ることはできなかった。

ミサトはしよせんゼーレの老人たちの手のひらの中で踊っているの
にすぎないのだ。

……今の時点では。

ヒカリがボーカルである『地球防衛バンド』は第壱中学校の文化祭を盛り上げるのに一役買った。

ミサトとマヤ、シゲルはもちろんのことネルフで働いているケンスケの父親やトウジの両親などもバンドの応援にかけつけた。

アスカとレイ、シンジも一緒に綿あめを食べたり他のクラス主催のお化け屋敷に入ったり……楽しんだようだ。

バナナ早食い大会に碇ゲンドウが出場して準優勝まで行った事はネルフの皆にとって驚いたが、微笑ましい出来事の一つとして語られることになる。

< 松代市 ネルフ第2実験場 上空 >

松代市の上空をネルフの実験場に向けて飛行するアメリカの輸送機の姿があった。

輸送機はエヴァの装甲板をワイヤーでぶら下げている。

「航路上に積乱雲を確認、指示を頼む！」

「了解、積乱雲の気圧状態異常無し、航路を変更せずに到着時刻を守れ！」

輸送機は航路を変えずに積乱雲の中を突っ切ってネルフの実験場へと向かった……。

数日後、ネルフの第2実験場ではリツコとミサトの指揮の下ダミープラグ起動実験が行われた。

最初はパイロットによる通常起動を行い異常が無いと確認した後にダミープラグによる起動実験に切り替えるという段取りだった。

アスカとレイとシンジはネルフ本部で通常訓練と言うスケジュールとなっていた。

ヒカリの乗る参号機はいつも通り起動したように思われた。しかし、起動直後に異変が生じた。

参号機の付け替えた装甲から白い粘液のようなものが垂れだして来たのだ。

「参号機の装甲から高エネルギー反応！」

「なんですって？」

参号機を中心に爆発が広がっていく。

爆風を察知したミサトは皆を守るためにとつさにA Tフィールドを展開しなんとか爆風を抑え込んだ。

少しの間であったが、紫掛かった黒髪が銀髪に、黒い瞳が赤い瞳に変わったミサトの姿を目撃した実験場のスタッフはぼう然としていた。

「使徒を確認、ネルフ本部に連絡して！」

リツコの言葉に自分を取り戻したスタッフは慌ててネルフ本部へと連絡を入れた。

ネルフ本部に向かって駆けだしたエヴァ参号機はもう松代の実験場からは姿を確認できなかった。

その時ネルフ本部に居たアスカとレイは使徒出現の報告を受けて弐号機と零号機に乗り込んだ。

「ミサトが居なくて、使徒と上手く戦えるのかしら」

「戦闘の指揮は碇司令が直接取るそうだよ」

マコトの声に先ほどぐちったアスカだけでなくシンジも驚いて司令席の方を見上げた。

「父さんが……？」

「野辺山で目標を確認、メインモニターに回します！」

オペレータのシゲルの声と共に移動中の参号機が映し出される。

マヤは悲鳴をあげて顔を手で覆った。

マヤはバンド活動を通じてヒカリを実の妹のように感じていたからショックもひとしおである。

「やはり参号機か……」

「エントリープラグ強制射出信号を発信しろ」

ゲンドウの命令により参号機に信号が送られるが、参号機のエントリープラグは煙をあげるだけだった。

蜘蛛の巣のように参号機に絡みついた使徒の体に阻まれてエントリープラグは射出されなかった。

「無理です、射出信号は拒否されました！」

マコトがそう叫ぶと、マヤは大きく肩を震わせて涙を流し始めた。シゲルはそんなマヤの姿を見て慰めたいと思ったが、今は大事な戦闘の最中。

自分の仕事に集中するしかなかった。

「……パイロットの生死は？」

「生体反応はありますが、意識は失っているものと思われます」

マコトの報告にゲンドウは少しだけ手に力を込めた。その微妙な変化はコウゾウにしかわからないだろう。ゲンドウは意を決して大声で叫んだ。

「……エヴァンゲリオン参号機を破棄し、第13使徒とする」

驚いたオペレーターの三人はゲンドウの方を見上げる。
最初に反応を示したのは叫び声を上げたマヤだった。

「そんな！」

「エヴァ各機を野辺山へ向かわせろ、目標のせん滅を最優先だ」

マヤの反対も全く聞き入れない形でゲンドウはキツパリと命令を下した。

出撃したアスカはエントリープラグの中で沈んだ表情で使徒を待ち受けていた。

爆発に巻き込まれたミサトたちは無事だと聞いているがヒカリは怪我をしていないだろうか。

その事が不安だった。

「目標接近！」

「全機、戦闘準備！」

通信を聞いたアスカは意識をエヴァのモニターに集中させた。

「ええっ……これが使徒ですって！？」

「そうだ、倒せ」

「倒せって……ヒカリが乗っているエヴァじゃないの！」

夕日を背に受けて黒いシルエットとなったエヴァ参号機がゆっくりと近づいて来る。

「そんな……エヴァが使徒になってしまうなんて」

レイも接近する参号機を見て悔しそうに下唇をかんだ。

「使徒は移動、零号機へ接近！」

「レイ、式号機が来るまで接近戦は避ける」

「了解」

零号機は武器を槍からパレット・ライフルに持ち替えて崖の陰から出て来る参号機を待ち構えた。

ゆつくりと姿を現した参号機は零号機に背を向けて歩いている。

零号機はライフルを構えて参号機を撃とうとした。

しかし、頭を出しているエントリープラグを見てレイはライフルの引き金を引くのをためらってしまう。

参号機は突然歩みを止めて信じられないほどのジャンプ力で空中に飛び上がった！

エントリープラグの中で驚くレイに対して参号機はバック宙をして零号機の背後に着地し、間髪いれずに零号機を抑えつけた。

首根っこを参号機の右手につかまれて身動きの取れなくなった零号機の頭上に位置する参号機。

参号機は右腕から白い粘液を垂らし零号機の左腕にドロドロと注いでいく。

エントリープラグの中で苦痛に顔をゆがませるレイ。

「零号機の左腕に使徒が侵食開始！」

「左腕部を切断処置を急げ！」

「しかし、このままではフィードバックによる痛みがパイロットを……！」

マコトはゲンドウの方を振り返り苦言を呈するが、ゲンドウの表情は変わらなかった。

「はい……」

マコトは苦しそうな表情で零号機の左腕部切断の操作を実行した。エントリープラグの中のレイは左腕を押さえて激痛による叫び声を上げた。

零号機の左腕が抜け落ち、零号機の機体は前のめりに地面に倒れ込んだ。

エントリープラグの中のレイは左肩を押さえてうめくことしかできず、零号機を動かすことすらできなかった。

参号機は零号機が戦闘不能になったと判断すると、再びネルフ本部へ向かって歩き出した。

「零号機、損傷度が限界を超えました。戦闘続行は不能です」

アスカは式号機のエントリープラグの中で体を震わせながらシゲルの報告を聞いていた。

「そんな……」

「使徒が接近中だ。あと5秒で圏内に入る」

「でも……使徒と言ったって……」

アスカは言葉を濁らせて夕日を背にこちらにゆっくりと歩いて来る参号機の姿を見つめていた。

「ヒカリが乗っているんじゃないの……」

アスカが呟く間に、さらに参号機は接近してくる。

「アタシの大事な親友が……」

式号機はパレット・ガンを構えたままの形で正面から参号機を待ち受けていた。

参号機は一気に空中に飛び上がると式号機に向かってダイビング・キックをかます。

式号機はキックの衝撃に押され、後ろに倒れ込んだ。

参号機は蛙のように手を地面について着地に成功する。

アスカが驚いて正面モニターを見ると、至近距離に鬼のような参号機の顔があった。

視線を顔から背中にならずと、使徒にからまった参号機のエントリープラグが見えた。

「エントリープラグ……やっぱりヒカリが乗っているのね」

式号機はゆっくりと立ち上がった。

参号機はしゃがんだまま腕を長く伸ばし、式号機の首をつかんだ。そのまま両腕で式号機の首を締め上げていく。

エントリープラグの中に居るアスカも首を絞められるようなダメージを受けた。

「このまま、パイロットが危険です！」

「早く神経接続を切断しろ！」
「待て」

マコトの報告に慌てて指示を下すコウゾウをゲンドウが押し止めた。

「だが、このままではパイロットがショック死するぞ！」

「……なぜ反撃しない」
「だ、だって、ヒカリが乗っているんだから……」

ゲンドウの質問に苦しみながらアスカは答える。

「アタシは、大事な親友を殺したくなんかない！」

アスカがそう叫ぶとゲンドウは眉を歪ませて立ち上がった。

「問題無い、パイロットと弐号機のシンクロを全面カットしろ」

マコトとシゲルが驚いてゲンドウの方を見上げる。

マヤは震えていた体をピタリと止めた。

「ダミープラグ起動開始」

「ですが、ダミーシステムはまだ未完成で、赤木博士も使用には反対しておられます」

シゲルがそう言って命令を拒もうとするが、ゲンドウの眼光は鋭かった。

「手遅れになる前に早くしろ」

シゲルはゲンドウの迫力に押され、弐号機のダミープラグへの切り替え操作を行った。

周囲が突然暗くなり、アスカは弐号機のエントリープラグの中で倒れ込んだ。

「くっ……はあ、はあ」

エントリープラグの中が暗闇から赤い光に包まれた異変に気がついてアスカは顔を上げる。

座席の後ろの方からモーターの駆動音ののようなものが聞こえ、アスカは弐号機が再起動した事に気づく。

「何をしたんですか、司令！」

アスカの叫びにゲンドウは表情一つ変えず、何も答えなかった。

「システム解放……攻撃開始」

式号機の四つの目が赤く灯り……式号機は再起動した。

式号機は参号機の腕を軽く振り払い、逆に参号機の首を締め始めた。発令所からざわめきの声が上がる。

マヤはついにすすり泣きを始めてしまう。

「まだダミープラグは起動すると止められない問題が残っているのに……ごめんねヒカリちゃん……」

首をきつく締められた参号機は両腕をだらりと下に垂らした。

そして式号機は参号機を振り回し、地面に叩きつけて強く殴り始めた。

モニターで繰り広げられる式号機による参号機の蹂躞に発令所のメンバーは顔を凍りつかせながら見ていた。

マヤは顔を覆って泣きじゃくっている。

「やめて！」

「誰か止めてよ、ねえシンジっ！ 司令に頼んで止めさせてよ！」

アスカがエントリープラグで叫ぶ声は発令所のモニターにも届いていた。

「止まれっ！」

アスカがエントリープラグの中で止めようとしても、弐号機は動きを止めなかった。

そして弐号機は参号機のエントリープラグを右手でつかみ取る。アスカはそれに気がついた。

「ダメえーっ！」

アスカが叫ぶと同時に弐号機は参号機のエントリープラグを握りつぶし、弐号機は動きを止めた。

「使徒の反応は完全に消滅しました」

シゲルの報告と共に発令所は落ち着いた空気に包まれた。シンジはゆっくりとゲンドウに近づいた。

「父さん……」

「何だ、シンジ。お前も先ほどの命令に不満なのか」

「ありがとう、アスカを助けてくれて」

ゲンドウはその言葉に驚いて目を見開いた。

何も答えることのできないゲンドウにシンジは頭を下げて発令所を出てエヴァのケーシへと向かっていった。

ゲンドウはコウゾウに顔を背けたまま席を立ちあがった。

「先生、後はお願いします」

そう言ってゲンドウは司令室へと姿を消した。コウゾウはそんなゲンドウを見送って、ポツリと呟いた。

「鬼の目にも涙、か」

<エヴァンゲリオン式号機 エントリープラグ内>

作戦を終了してネルフに帰還したアスカは、エヴァから降りる事も出来ずに泣いていた。

「アスカ、ごめんなさい」

「ミサト、アタシはヒカ리를……司令が……アタシは止めてつていったのに！」

「アスカ、ヒカリちゃんは少し怪我をしているけど……無事よ」
「本当！？」

アスカは弾かれたように喜びの表情になって顔を上げる。

「よかった……ヒカリが生きてた……よかった……」

アスカはうわ言のように繰り返していた。

しかし、モニターの向こうのミサトの表情はとても悲痛なものだった。

「もしかして、死ぬよりも辛い事なのかもしれないのよ……」

ミサトはアスカに聞こえないように小さな声でつぶやいた。

ミサトはヒカリから聞いた体験を元におおよその実態は推測がついた。

ヒカリはエントリープラグの中でモーターのような起動音を最初に聞いたと言う。

おそらく真つ先にダミープラグが使徒に乗っ取られ、エヴァを動か

したのだろう。

そして次に白い粘液のようなものが自分の体に絡みついて来て意識を失ったと言う。

参号機がバラバラにされるほどのダメージを負ったはずのヒカリが大した怪我も無く無事であるのは多分……。

あたしと同じように使徒との融合が起きてしまっているから……。使徒の細胞は徐々に体を侵して行く。

ミサトはヒカリを自分と同じ存在にしまった運命の神を呪わずにはいらなかった。

第十九話 母の戦い

<ネルフ本部 第一発令所>

この日はシンジの強い希望により、初号機の起動実験が行われていた。

初号機のエントリープラグに居るシンジの表情は怒りに似た厳しいものだった。

「初号機のシンクロ率、上昇しません」

マヤは落胆した様子で消え入るような声で報告をする。

「もういいだろう。強制射出をしろ」

「だめです、内側から鍵がかけられています」

コウゾウは起動実験を止めさせるためにマヤに命令を下したが、シンジは続行の意思を見せた。

「シンジ君、これ以上続けると君の体が持たないぞ！」

マコトが必死にオペレータ席からモニターを通じてシンジに呼びかける。

「言われなくても自分の事は解りますよ」

シンジの冷たい闘志を秘めたような声が返って来た。

「僕は初号機を起動させなくちゃいけないんだ。使徒が来たらアス

カと綾波だけを戦わせるわけにはいかないんだ」

「今のシンジ君は頭に血が上っていますね」

シゲルが顔をしかめてため息交じりにそう呟くと、マヤは席から立ち上がってシンジに叫ぶように呼びかけた。

「シンジ君、話を聞いて、碇司令もあなたが無茶をしないということとを条件に実験を許可したのよ！」

「でも、僕はまだやれます！」

シンジはエントリープラグの中でそう咆哮を上げた。

「教えてよ父さん、僕の声が聞こえているんだろう？ 母さんは僕を愛してくれたの？ 答えてくれたっていいじゃないか！」

ゲンドウは何も答えずに腕を組んだままの姿勢で冷静にマヤに対して命令を下す。

「ＬＣＬを緊急排水」

「しかし、接続したままでは！」

マヤが驚いてゲンドウの方を振り返った。

「これ以上、息子の我がままに皆が付き合う必要はない」

マヤはゲンドウの言葉に頷いて命令に従った。

エントリープラグの中のＬＣＬの水位が下がって行く。

「い、息ができない、くそう……」

その言葉を最後にシンジは胸を押さえて意識を失った。

ゼーレの要請により使徒戦の状況を報告するためにゼーレに行っていたミサトとリツコは、ネルフに戻ってきてからシンジの実験の事を伝え聞いた。

ミサトは事情を詳しくオペレータの三人から聞くと、険しい顔をして司令室に向かっていった。

そのあまりの形相に心配したリツコも慌ててミサトの後について行く。

初号機パイロットに関する重要な話があると言う口実で、司令室のドアは開かれた。

ゲンドウはミサトの視線を跳ね返すような悠然な態度で二人を迎え入れた。

「用件は何だ、加持特佐。私は忙しいのだ、手短に頼む」

「司令、シンジ君から聞いたのですが奥様の記録の全てを処分したと言うのは本当ですか？」

リツコとコウゾウは驚いて息を飲んだ。

ネルフの中では碇ユイの事は口にする事さえタブーとされている。

「聞きたい事はそんなくだらないことか？」

「なぜ、奥様との大事な思い出の品々を捨ててしまわれたんですか？ そばに置いておくと奥様に甘えてしまっからですか？」

「加持特佐、口を慎みたまえ！」

コウゾウが怒鳴りつけるがミサトは怯まなかった。

ゲンドウも態度を変えずに黙したままだった。

いや、平静な態度を保つのが精いっぱいでも言葉が出なかったのかもしれない。

「奥様の匂いのするものを捨てても、司令から完全にユイさんの存在を消す事はできませんよ！」

ミサトはそう言って思いっきり息を吸い込んだ。

「司令の心の中で、シンジ君のお母さんは生きているんですから！」

ゲンドウは思わず自分の胸に手を当ててしまった。

「シンジ君を遠ざけたのだって、シンジ君を通してユイさんの事を思い出してしまうからではないですか？」

ミサトの言葉をそれまで苦い顔で聞いていたコウゾウの顔が青ざめて来た。

リツコはただ驚いて棒立ちになっているだけだった。

「シンジ君は、自分が母親に愛されていた事の『証拠品』を求めています。証拠が無いと信じられないなんて、悲しい事だと思いませんか」

「……そうか」

やっとの事でゲンドウが発した言葉はそれだけだった。

心なしかいつものゲンドウの声に比べて若干弱々しいとミサトやリツコにも分かった。

ミサトは人差し指を突き出してゲンドウに強く宣告をする。

「ゼーレの議長として出来る限り碇ユイに関するデータの提出を命じます。破棄したデータは出来る限り復元してください」

ゲンドウはゆっくりと席から立ち上がってリツコに視線を向けた。

サングラス越しではその表情までは読み取りにくい。

「データの破棄は赤木ナオコ博士に任せた……彼女の事だ、処理は完璧だろう。それでもやってくれるだろうか」

「えっ、私がですか？」

突然話を振られたリツコは目を見開いた。

「しっかりしてよ、シンジ君の新しいお母さんになるかもしれないんだから」

いきなり飛躍したミサトの発言に居あわせた三人は崩れ落ちそうになった。

確かにリツコがゲンドウに好意を抱いている事はネルフ全体の公然の秘密となっているが。

「司令、側に居る人に気持ち移ってしまうのは仕方ない事です。しかし、過去に縛られているのをユイさんも望んでいないはずです」「黙りたまえ加持特佐、ユイ君はまだ死んだとは決まっていらないのだぞ？ 彼女の反応は現にコアの中に存在している」

コウゾウが声を荒げてミサトとゲンドウの間に割り込む。

普段温厚で知られるコウゾウがここまで怒るのは珍しい事だった。

「ですが副司令、参号機のコアとなった洞木ノゾミのサルベージは実行されていないではないですか。必要が無くなったと言うのに」「加持特佐の言う通り、現在のネルフの技術力ではとてもコアからのサルベージは無理です。計画が順調に進んでも……何十年も後になるかと」

ミサトとリツコの言葉にコウゾウは言葉を詰まらせて下を向いて黙り込んでしまった。

ミサトは再びゲンドウの方に向き直った。

「過去の不幸に引きずられて、今目の前にある幸せを逃すな」

ゲンドウはミサトの言葉に目を見開いた。

「あなたの言葉じゃないですか。ユイさんは嬉しそうに私に話してくださいましたよ。その言葉で立ち直れたって」

「君は……ユイの護衛をした事があったのだな」

「ええ、ゲヒルン時代に任務で彼女と接触する機会がありました。シンジ君の家にも一度だけ行ったことをこの前のゲスト使徒戦の時に思い出しました」

ゲスト使徒戦の時の発光現象の事に心当たりがあるのか、眉を動かしただけでゲンドウは質問を挟まなかった。

「リツコ、シンジのためにもよろしく頼む」

「は、はい全力を尽くします」

ミサトとリツコは一礼をして司令室から退出した。

二人が完全に退出するのを見届けると、コウゾウは崩れるようにゲンドウの前に倒れ込む。

そして、膝について四つん這いになって謝る。

「すまん碇、ユイ君は俺が殺したようなものだ」

「先生、顔を上げてください。あの実験は予想し得なかった事故では無かったですか」

「いや、俺は……分かっていた。正常なシンクロ率の数値の4倍で

ある400%を超えるとどうなるかを……」

コウゾウは顔を床に擦りつけながらうめいた。

「俺は科学者としての欲望に負けてしまった……止める事はしなかったのだ……」

「そのような事は止めてください、私は先生を恨んではいませんよ。むしろここまで支えてくれた恩師であり盟友でもあるあなたが居てくれて感謝しています」

コウゾウはゲンドウに支えられてゆっくりと立ち上がった。

「ですが先生、その事はシンジに言わないでください。これ以上シヨックを与える必要はないでしょう」

コウゾウはゲンドウの言葉に納得したように深く頷いた。

一方ミサトとリツコはネルフ内を駆けずり回り、ついに赤木ナオコ博士の残した隠しファイルを探り当てた。

その隠しファイルの入ったディスクは宛て先にリツコの名前が書かれていた茶封筒の中に入っている。

ナオコ博士の研究室を移転する時に雑多な荷物として放置されていた物の中に存在していた。

運良く機密情報の調査員たちには押収をされなかったらしい。

「これは……」

リツコとミサトは隠しファイルの内容を見て驚いた。

碇ユイに関する映像・音声に関する記録を中心に綿密にまとめられている。

「母さんは何でユイさんの記録を残していたのかしら。普通自分が奪おうとしている男性の妻の記録なんて命令が無くても捨てたくなくなるはずよ」

「もしかして、ナオコさんは本当にシンジ君の母親になるつもりだったのかもしれないわね……そして病に冒された事を知った時、娘にその役目を託した」

リツコは遠い目をして頬杖を付いた。

「母さんは女としての本性をこらえて母親の感情を優先したのね……私はユイさんが死んだばかりのゲンドウさんに近づく母を軽蔑していたわ。昔から研究に忙しくて、ずっと家に帰って来ない事もザラだった。電話はしてくれるけど、当たり前障りのない会話ばかりしていたわ」

そして、リツコは研究室の花瓶に活けてあった一輪の花の茎をいじった。

「私は母の日に嫌がらせでカーネーションじゃなくてバラの花を贈ってあげたの。そしたら母さんはバラの方が好きだつて強がっちゃって……。それから意地になって毎年バラの花を贈っていたわ。もう少し素直になってあげたら良かったわね」

「あたしは父さんのS2機関の発表以来、家族で迫害を受ける事になっちゃったしね……。心労で日に日に衰えていく母さんを見るのは辛かったわ」

「人は科学の力のみ追い求める事に夢中になって、大切なものを失いかけているのかもしれないわ」

「特にこのビデオレター、シンジ君たちには絶対見せてあげないからね。不幸の連鎖はあたしたちの時代で絶ち切らないと」

ミサトとリツコは見詰め合って繋いだお互いの手を握りしめた。

<第三新東京市郊外 加持邸>

初号機の占拠とも言える行為を行ったシンジだが、オペレータの三人をはじめたくさんのスタッフたちの陳情もあり、シンジは罪に問われる事無くおとなしく家に帰ることが許された。

シンジがネルフから戻ると、リョウジとその娘のエツコと息子のヨシアキが三人でスイカ畑で水撒きをしていた。

「リョウジさん。一体何をしているんですか？」

「見れば分かるだろう？ スイカの水やりだよ。ミサトのやつの誕生日には上手いスイカを食べさせてやりたいからな」

「スイカ……がプレゼントですか？」

遠くの方でスイカの害虫駆除をしていたエツコが笑顔でヒョコヒョコと近づいて来た。

「うちは娘のあたしの洋服も買えないほど貧乏だからねー。父さんは毎年スイカでごまかしているの」

「お前はすぐに服が小さくなるんだ。おまけにすぐに破くしなあ」

「そんなのあたしのせいじゃないもん。破ける服を買う父さんが悪いのよ」

父娘が和やかに会話するのを眺めていたシンジは、突然とある事に気が付いて叫び声を上げる。

「そつえば、今日はアスカの誕生日じゃないか」

「そっぴゃ、そっぴゃな」

「ふーん、そっぴゃったんだ」

リヨウジとエツコは平然としている。

シンジはその様子を見て二人を急き立てる。

「誕生日会とか、誕生日プレゼントとか用意しないときつとアスカは悲しみますよ」

「あはは、あたしなんて誕生日なんて小学校の頃からスルーされてるよ」

「小さいころ散々誕生日を祝ってやっただろ？」

「そーだね、だから今さら誕生日会なんて……」

幸せそうな二人を見てシンジは視線を地面に落してしまった。

「僕やアスカは……父さんも母さんも小さいころに側から居なくなつたから祝ってもらつたことが無いんです」

リヨウジはそんなシンジの表情を見て、シンジの肩に手を置いた。

「そっぴゃ、そっぴゃったな。俺はドイツでアスカのお目付け役だったのに気づいてやれなかつた。今年は盛大にやるとするか」

「ねえ、そっぴゃえばヨシアキの誕生日も12月20日って聞いたけど、あたしたちここ2年間お祝いしてなかつたね。さみしかったのかな？」

腕組みをして考え込んでいたエツコが空を見上げながらそっぴゃ口に出した。

「シンジ君。俺たちはここでスイカを収穫することしかできない。

しかし、給料をもらっている君には出来る事があるはずだ」

「そうですね、お店が閉まらないうちにアスカにプレゼントを買ってきます……って結局お金は出さないんですね」

シンジが呆れ顔で真剣なまなざしのリョウジを見詰めると、リョウジは表情を和らげて肩に置いた手を離れた。

シンジが買い物に行こうと加持邸の門をくぐろうとしたところで、リョウジに呼び止められた。

「やっぱり、周りの人が苦しんでいるのを見るのは辛いかい？」

「はい」

「それでいい。他人の悲しみを自分の悲しみのように感じられる人間は、他人の喜びも自分の喜びのように感じられるからな」

「……何が言いたいんですか」

「もつと自然体で自分を大切にして出来る範囲で頑張ればいいってことさ。アスカの自爆未遂の件で、シンジ君にも分かっただろう？」

シンジは強く頷いて、第三新東京市の市街地へと向かった。

加持夫妻は給料や報奨金のほとんどを戦災支援金への寄付へと当ててしまったため、役職の割には慎ましい生活を送っている。

シンジはエヴァのパイロットとして相応の給料をもらっていたので、加持家の家計の負担を軽くするために食事代や光熱費は払っている。少しだけ残った自分の小遣いで、シンジは迷った末にアスカにアクセサリーを買う事にした。

「アスカ、ミサトお母さん、ヨシアキ誕生日おめでとう！ メリークリスマス！」

エツコの掛け声によって加持邸でのお祝いパーティが始まった。

12月にはお祝い事が集中しているので全部まとめてお祝いしよう

という強引なパーティーである。

ツリーなどの室内の飾りつけはされていなかったが、豪華な鳥料理とケーキは用意された。

「ヨシアキ、誕生日プレゼントだよ」

「あ、ありがとう」

ヨシアキがエツコから困惑した顔で受け取ったのは、肩たたき券と書かれた紙きれの束だった。

アスカの誕生日会だと招かれたトウジとケンスケとヒカリの三人はあきれ返ってそれを見ていた。

「見た目はカワイイ子なのに……ショックだな」

「小学生かいな」

「学校の成績だけが人の価値を決めるわけじゃない……きっとそうよ」

シンジはアスカにプレゼントを渡そうと包装された箱を取り出した。箱を見たアスカの目が輝く。

受け取ったアスカが箱を開けると中から出て来たのはベレッタ（髪留め）だった。

「アスカの髪はいつ見ても綺麗だから、ついこれを選んじゃって」

「……嬉しい。嬉しいけどさ……」

アスカはベレッタを頭につけると嬉しさと困惑が入り混じった表情をした。

「あたしとお揃いの髪型だね」

エツコがアスカの方を振り向いてはしゃいでいる。

「この能天気な娘と同じ髪型って言うのはどうかと思うわ」

シンジは浮かない表情をしたアスカを見て悲しそうに下を向いたが、アスカはシンジの腕を手にとって、笑顔になった。

「リボンと一緒に大切に作るから、ありがとうシンジ」

シンジとアスカが顔を上気させて見詰め合っているとレイがアスカの肩をつついた。

「二号さん、私も誕生日プレゼントがあるの」

レイがそう言ってアスカに手渡したのは、ゴム製のアレだった。

「二号さんが抜け駆けしちゃうといけないから……」

顔を赤くしながらモジモジと話したレイ。

和やかだった場の雰囲気が一気に凍りついた。

今まで談笑していた皆の動きが止まる。

「ま、まったくファーストってば誰にこんな冗談を教わったのかしらね？」

気まずい雰囲気をぶち壊そうと、アスカはごまかし笑いを浮かべてプレゼントを受け取った。

しっかり受け取るのかよ！ とシンジ達は心の中でツッコミを入れた。

ミサトはリツコと目を合わせると、シンジとアスカとレイのそばに

近寄った。

「シンちゃん、アスカ、レイ。見せたいものがあるからちょっとここに来てくれない？」

ミサトはそういつて奥の部屋へ案内する。

そこはリビングに入りきれなかったオペレータの三人とゲンドウとコウゾウが居る加持家の空き部屋だった。

ミサトがドアをのぞきこんで声をかけるとオペレータの三人が出てきて、ミサトたちは入れ替わるように部屋に入った。

マヤ、マコト、シゲルの三人はリビングのシンジたちの席に座り直し、ヒカリやケンスケ、トウジたちと談笑を始めた。

シンジたちが部屋に入ると、そこではゲンドウとコウゾウが待っていた。

そして正面には薄型テレビとブルーレイレコーダーがセットされていた。

「父さんたちと一緒に何かを見るんですか？」

「ブルーレイとはいずれぶんれトロな記憶媒体ね」

ゲンドウはシンジたちと視線を合わせたが何も答えず、リツコの手によってディスクがセットされた。

リツコはこのディスクを入手した時、現在の規格に再収録して編集しようと考えていたが、手を加えるとシンジたちに本当の暖かみが伝わらなくなると思い、そのままの形で再生することにしたのだ。

素人の手で撮影されているからか、お世辞にも洗練された画像とは言えない。

部屋の様子が映し出されると、そこには活発そうな金髪蒼眼のショートカットの女性と黒髪のおっとりとした長い髪の女性が仲良く赤ん坊を抱いて立っている。

「ユイ、黙って笑ってないで何か喋りなさいよ」

金髪の女性が黒髪の女性をせつつく。

「ええっと、本日はお日柄もよくお集まり頂いて……」

「バカユイ、結婚式のあいさつじゃないんだから」

シンジとアスカはテレビに映し出された二人の女性を見て驚いた。

「母さんが僕を抱いて嬉しそうにしている……」

「ママは幸せそう……」

部屋に居る誰もが言葉を発さずにモニターの中のユイとキョウコが楽しそうに話しているのを見ていた。

他愛も無い馬鹿馬鹿しい会話だったが、二人に笑みが絶える事は無かった。

「今度はゲンドウさんたちの番ですよ」

ユイの言葉と同時に体格のいい二人の若い男性が画面に現れた。

ゲンドウはあごひげを生やしているので一目でわかったが、サンダースは掛けていなかった。

その気弱そうな瞳にミサトとシンジは驚いたが、とてもゲンドウの事をからかう雰囲気ではなかった。

アスカの父親のジェイコブはアメリカ人とドイツ人のハーフで白人の中でも大きい方だったが、

ゲンドウもそれに負けず日本人の中では特大とも言える大きな体をしていた。

ジェイコブの方は上手くアスカを抱いてあやしていたが、ゲンドウ

がシンジを抱くとたちまちシンジは泣き声を上げた。

大笑いするジェイコブと対照的にオロオロしているゲンドウ。

ユイがまた画面に姿を現してゲンドウからシンジを受け取ると、ユイに抱かれたシンジはあっさりと泣きやんだ。

「怖がりながら抱くから、シンジも怖がってしまうんですよ」

「……ごめん」

その後画像は途切れ、今度はユイとキョウコが二人並んでカメラ視線で立っていた。

シンジとアスカはどこかに寝かしつけて来たようだ。

「キョウコ、やっぱり恥ずかしいよ」

「ユイ、こう言うのも楽しい思い出の一つよ」

顔を見合わせて二人は呟きあっていたが、意を決したようにユイがカメラの正面に立ち、キョウコが後ろに下がって笑顔を向けている。

「未来の私とシンジへ。私はシンジを正しく育てられていますか？ 私はシンジにお金持ちでも頭の良い子でも無くていいから、人の痛みや喜びが分かる、優しい子に育ってくれたらいいと思います。私に似たら将来は頭のいい学者さん、ゲンドウさんに似たらスポーツ選手になっていたらいいかね、なんてちょっと期待しています」

「シンジ君、うちのアスカちゃんがわがまま言っても、優しくしてあげてね」

キョウコがユイの後ろでカメラに向かって手を振っていた。

「シンジ、アスカちゃん。あなたたちに平和な生活を送ってあげられなくてごめんね。でも、きつと私たち大人が頑張つてこの戦いを

終わらせようと思います。もし私たちの手で使徒を倒す事が出来ないとしたら……勝手なお願いだと言う事は分かっています。あなたたちの手で平和をつかみとってください。そしてあなたたちの子供には平和な生活を送らせてあげてください」

ユイとキョウコが揃ってカメラに向かって頭を下げた。

「シンジ、生まれてきてくれてありがとう」

テレビの映像はそこで途切れた。

見終わった面々はなお余韻に浸るように黙っていたが、アスカがため息交じりに呟いた。

「アタシのママの動いている映像が見れて良かった。アタシの家が火事で焼けちゃった時、残ったママの品物はアタシが持ち歩いていた写真だけだったし」

「確か、アスカのお父さんの寝タバコが原因で出火したんだよね」

「アタシは今でもパパが寝タバコしたなんて信じられないけどね……」

……

アスカがコウゾウやゲンドウ、リツコが固まっている方に視線を向けると三人は慌てて視線を避けようとする。

アスカがネルフの大人を完全に信用しきれないのはアスカの母親が実験で式号機に取り込まれた直後に起きた火災に関する説明が原因だった。

「ユイさんはね、エヴァ初号機に取り込まれてしまうあの実験の直前に受精卵を摘出されたの」

リツコから初めて聞く事実にあスカとシンジは驚いた。

「ユイと私は男の子が生まれたらシンジ、女の子が生まれたらレイと名づけようと話していた」

「じゃあ、綾波は僕の……？」

「ああ、レイはお前の妹同然の存在……いや、れっきとした妹だ」

ゲンドウの言葉にシンジとアスカとレイは顔を見合わせた。

そしてお互い照れ臭そうになっ　こりほほ笑むと手を握り合った。

「改めてよろしく頼むよ……レイ」

「うん……お兄さん」

「アタシもこれからレイって呼ばないとね」

「分かったわ……お姉さん」

「お、お姉さんって！　まだ早いわよ！」

真っ赤になったアスカを見て部屋の中に笑い声が響いた。

「シンちゃん、あなたのお母さんの思い受け取れたかしら？」

ミサトがそう声をかけると、シンジは真面目な顔で頷いた。

「はい、エヴァンゲリオンと使徒との戦いは僕たちが終わらせます」

「アタシたちは次の世代に先延ばしにしたりしません」

シンジたちの誓いを聞いたゲンドウは席を立ちあがった。

「先生、後はよろしく頼みます」

「おい、碇」

「父さん、またそうやって僕の前から逃げるの？」

「お父様には失望したわよね。そう思わない、レイ？」

「司令、交代」

ゲンドウは肩を落として観念して着席した。
後にゲンドウの涙を見たトウジたち三人はいい父親だと印象を改める事になる。

「なんか、ミサトさんの誕生日なのに僕がプレゼントをもらったようですね」

ミサトは笑顔で人差し指を振りながら笑顔で答えた。

「家族の笑顔を見られるのがあたしにとって最高のプレゼントよ」

「でも、僕とミサトさんは赤の他人ですよ？」

「シンジ君、ミサトの家族はね、世界中に居るのよ」

リツコは不殺の精神を貫くミサトの苦悩を思うと心を痛めた。
家族同士が傷つけあう戦争と言う現実。

使徒との戦いが終わってもミサトの悩みの種は尽きないのだ。
戦争が無くならない限り。

<ネルフ本部 第一発令所>

加持邸でのパーティが終わって数日後。再び初号機の起動実験が行われた。

ミサトとリツコはシンクロ率を示すモニターを見て笑みをこぼした。
好調であるアス力を追い抜き、戦闘にも十分すぎるほどの数値である。

初号機で使徒と戦う事が出来るのはシンジにとって喜ばしい事だっ

た。

起動実験が無事終了した翌日、第三新東京市にまた新たな使徒が現れた。

空中に漂う使徒の目が光ると、十字架の形をした光の柱が巻き起る。

足止めのために威嚇射撃を行っていた地上部隊は一撃で壊滅した。

発令所に居たオペレータの日向マコトはぼう然として被害状況を示すモニターを見ている。

「特殊装甲を一瞬で破壊するなんて……化け物だ」

彼がそう呟くと同時に発令所のドアが開き、ミサトが姿を現した。

使徒を発見するのが遅すぎた……この様子では作戦を建てる時間がない。

すると、非常事態宣言の報を聞きつけて学校から駆けつけたシンジたちが到着し、エヴァに乗り込んだようだ。

エントリープラグ内からの通信が発令所に届く。

「ミサトさん、出撃命令をしてください！」

「でも、あんな強い使徒を相手にしたらあなたたちが……」

「今、アタシたちが出撃しないと手遅れになっちゃうわよ！」

「お願いします。出させてください」

シンジたちが言っている事は事実だった。

ミサトがここで迷っていたら使徒は確実に侵入してくるだろう。

ミサトは悔しそくに唇を噛んでマコトに命令を下した。

「エヴァの地上迎撃は間に合わないわ。三機をジオフロント内に配置して！」

エヴァ三機はジオフロントへと射出された。

次の瞬間、ジオフロントが大きく揺れた。

使徒がさらに攻撃を加えたようだ。

ジオフロントの天井に地上へと通じる大きな穴が口を開けた。

どうやら、今の攻撃で完全に装甲の層に穴が開いてしまったようだ。

使徒がその穴を通ってジオフロントに降下してきた。

一番使徒に近いのは初号機だった。

初号機はパレットガンで使徒を撃つが、効き目が無いように感じられた。

「コアに直撃しているはずなのに、どうして倒せないんだよ！」

シンジはエントリープラグの中でそう叫びながら、ロケットランチャーやバズーカ砲を発射する。

使徒が突然剃刀のような腕を初号機に向かって伸ばす。

そして、初号機の左腕は切り離された。

「うわああああ！」

シンジの肩に左腕をもがれたような痛みが走る。

シンジの苦しむ様子は発令所のモニターにも映し出された。

「初号機の神経接続を切断して！」

リツコの指示により、エントリープラグ内のシンジは痛みから解放された。初号機の戦闘不能を察知したのか使徒は移動を始めた。

使徒の行き先には式号機が居る。アスカがこのような痛みを味わい最悪の場合死んでしまうかもしれないと言う想像にシンジは寒気を覚えた。

「ここで動かないと、アスカが……ねえ母さん、僕を、アスカを、レイやみんなを助けてよ！」

モニターを見ていたマヤが驚いて叫び声を出す。

「初号機、再起動！ シンクロ率が猛スピードで上昇中です！」

「シンクロ率100%、150%、200%、止まりません！」

「まずい！」

マヤとシゲルの報告に、コウゾウは慌てて前かがみになりモニターを見詰めた。

ゲンドウの額にも汗がにじんでいる。

「シンクロ率400%、測定限界を超えました！」

「何だと……」

コウゾウは頭を抱えて倒れこんでしまった。

ゲンドウもあまりの事態に腰を浮かしてモニターを眺めた。

発令所に居る全員がぼう然としてモニターを見詰めることしかできなかった。

「エントリープラグ内にサードチルドレンの姿がありません！」

再びモニターに映し出された初号機のエントリープラグ内の映像は、LCLにプラグスーツの抜け殻が漂っているだけだった。

零号機のレイと弐号機のアスカがそれを目撃すると、頭を抱えて叫ぶ。

「お兄さん……！」

「シンジっ！」

レイとアスカはエントリープラグの中で気を失ってしまった。

第二十話 使徒のかたち 人のかたち

<ネルフドイツ支部 会議室>

ネルフドイツ支部の会議室では、ゼーレの会議が開かれていた。

「エヴァあのような形で自らにS2機関を取り込むとは予想外だな」

「エヴァ初号機は危険な存在となってしまった」

「初号機の物理的破棄を提案する。いかがかな、議長？」

ゼーレの幹部が注目する中、ミサトは毅然とした態度で言い放った。

「ネルフ本部では、サードチルドレンのサルベージ計画が実行中です、認めるわけにはいきません！」

「一人の子供の命と引き換えに全人類を脅威にさらすと言うのかね」

「現在、初号機は機能を停止しています。さらに凍結処理を行っているので安全性は保証いたします」

「議長がそこまで主張するなら一任しよう」

キールの鶴の一声で議会のざわめきは静まった。

ミサトは少し安心した様子で表情を緩める。

「ただし、失敗は人類の滅亡の危険をはらんでいる。責任はとってもらうぞ」

「はい……議長権限で、この件に関する議論は終了します！」

ミサトがそう宣言して議場から姿を消すと、残ったメンバーたちはさらに話し合いを続けた。

「そろそろお飾りも降ろす時が来たのではないですか？」

「左様。あやつのお陰で計画に必要な資金も集まった。また参号機の事件で新たな依り代もできた」

「成熟した大人より未熟な子供の方が道具としては使いやすい」

キールはそう言って唇をつりあげて笑った。

<ネルフ本部 エヴァ実験棟>

ネルフ本部の職員の間では、参号機の使徒化事件の際に松代の実験場に居合わせたメンバーを中心にひっそりと噂が広まっていた。

ミサトが人間ではない、ひょっとしたら使徒なのかもしれないという憶測がミサトの変身を目撃したメンバーから発信されていた。常日頃からミサトに絶対的に信頼を寄せる職員たちは笑い飛ばしたが、今でもその噂はまことしやかに囁かれる。

シンジを取り込んだ初号機はその後使徒を食いちぎり殲滅させたが、危険を感じたネルフの幹部メンバーの命令により、実験棟に設けられた檻にベークライトで固められて拘束されることになった。

「リツコ、エヴァがシンジ君を取り込むなんてどういう事よ！」

シンジのプラグスーツだけが漂うエントリープラグ内の様子を映したモニターを見て、アスカがリツコに詰め寄った。

「エヴァは人の魂が込められているの」

「それってまさか……！」

「そう、シンジ君のお母さんそのものが入っているの」

「じゃあ、アタシがレリエルの中で話したママは本物なの？」

「その可能性は高いわね。そして、今はユイさんがシンジ君を取り込んでしまった」

リツコの提案したサルベージ計画は、エヴァのエントリープラグに存在するシンジの魂に呼びかけ、溶けてしまった肉体を再構成するというものだった。

「自我境界パルスの接続を完了しました」

「サルベージ開始」

マヤから報告を受けたリツコは、サルベージ作戦進行の合図を送った。

そこへゼーレの会議を終えたミサトが駆けつけ、リツコの隣でモニターをにらみつける。

「だめです、自我境界がループ上に固定されています!」

マヤが上げた悲鳴に室内は騒然となった。スタッフたちの動きが落ち着かない慌ただしいものとなる。

「全波形域を測定してみてください?」

「大量の波が検出されました!」

「これは……シンジ君は安らぎの中に居てしまっているの?」

「リツコ、それってどういう事よ」

ショックで立てず、レイに抱えられたアスカは氣力を振り絞ってリツコに尋ねた。

「シンジ君はエヴァの中でお母さんと幸せな夢を見ているのよ……このまま覚めない可能性も……」

「そんな……シンジのママ、シンジを返してよ！ シンジ、帰って来て！」

響き渡るアスカの叫び声を、ミサトを始めとしたスタッフたちは胸を痛めて聞いていた。

<第三新東京市 コンフォート17>

「バカシンジ！」

「!?!」

シンジがベッドの中で目を覚ますと、そこは一般的な中学生の部屋の中だった。

「アスカ？」

「そうよ、アンタの幼なじみのアスカよ。寝ぼけてんの？」

「無事だったんだね！」

シンジは感極まってアスカに抱きついてしまった。

「キャア、エッチ馬鹿変態信じられない！」

驚いたアスカはシンジを突き放して平手打ちをする。

シンジのほおに紅い手形が刻まれた。

「ごめん……。」

シンジが謝るととりあえずアスカは機嫌を直したようだ。

「さつさと着替えて来るのよ！」

アスカはそう言って部屋を出ていった。

「アスカちゃん、毎日うちのシンジが迷惑をかけてごめんなさいね」

「いえいえ、そんな迷惑だなんて」

「シンジも自分で起きられないとは情けないやつだ」

ドア越しにリビングで交わされている会話がシンジの耳に届いてきた。

聞こえて来た声のうちの一つは父親のゲンドウの声だという事にシンジは気が付いた。

「リビングから聞こえてきたのはもしかして母さんの声なの？」

父が居て、母が居て、幼馴染のアスカが居る。

シンジは自分が夢にまでみた生活に涙ぐんだ。

「ほら、あなたも新聞ばかり読んで早くご飯を食べて下さい。シンジの事を言えないでしょう？」

「ああ」

母親のユイの声にシンジは慌てて着替えを始めた。部屋を出るとアスカがリビングの椅子に腰かけて待っていた。

シンジの方を見ると、アスカはシンジのシャツに手を掛ける。

「ボタン、段違いになってる。……これでよし、っと。やっぱりシンジはアタシが居ないとだめね」

「アスカちゃんがシンジのお嫁さんになってくれたら助かるわ……」

「ななな、何を言ってるんですかおばさま！ さあシンジ、遅刻しないように走るわよ！」

シンジはアスカにせかされて手を引かれて家を出る。

アスカに手を握られたシンジは感じた違和感をつい口に出してしまった。

「アスカの手って柔らかいね。パイロットの手じゃないんだ」

その言葉を聞いたアスカは顔だけでなく耳まで赤くして手を離れた。

「ばばば、バカシンジは何を言ってるのよ！ さっさと行くわよ！」

そう言うときアスカは思いっきり走り出し、シンジは慌てて追いかけた。

シンジがレイの事を聞こうとアスカに話しかけようとした時、アスカの方から口を開く。

「今日は転校生が来るって話なんだから、遅刻なんてみつともない所見せるわけにはいかないわ」

「えっ、また転校生が来るの？」

「ここが首都になるって報道がされてから、多いわよね」

「そうなんだ」

「シンジは転校生がかわいい子か気にならない？」

アスカが意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「僕はアスカが居るからそんなの関係無いよ」

シンジがそう言うと、アスカの顔はたちまち真っ赤になる。

「な、ななな何を言っているのよ、バカシンジ！ 今日のアンタは変よ！？」

シンジがそんなことは無いと否定しようとした時、通りの角から人影が飛び出して、シンジとぶつかった。

「痛い！」

シンジが驚いて衝突した人物を見ると、違う中学校の制服を着た綾波レイだった。

レイはシンジの視線に気がつくにあわててスカートをおさえる。

「エッチ！」

顔を赤くしたレイはそう言ってシンジをにらみつけ、素早く走り去って行った。

「レイが明るい子になっている……」

シンジは性格が全く違うレイに驚きを隠せないようだ。

アスカの方はレイに見とれていると思ったのか後ろからシンジをにらみつけている。

しばらくの間膨れっ面をしてしまったアスカだったが、シンジが必死に謝ると機嫌を直したようだ。

シンジが教室に入ると、トウジとケンスケがいつものように声を掛けて来た。

シンジは動揺しているのがばれないように自然に振る舞おうとした。その時教室の外から車の激しいブレーキ音が聞こえて来た。

シンジがトウジとケンスケと一緒に窓から駐車場を眺めると、止ま

ったのは青色のルノー。
中からスーツ姿のミサトが出て来た。

「やっぱりべっぴんやな、ミサト先生は。」

「ああ、最高にかっこいいよ。」

「ミサトさん、この世界でも先生になっているんだ……」

シンジは涙ぐみながらミサトがこちらに向かってピースサインをし
てくる姿を見つめていた。

ミサトが教室に入って来ると後ろにはレイがついて来ていた。

「今日の転校生は可愛い女の子よ!」

「綾波レイです、みなさんよろしくお願いします!」

レイはミサトに促され教壇に立ち笑顔であいさつをした。
シンジを目が合つと驚きの声をあげた。

「ああーっ、今朝のラッキースケベ男!」

「嘘は止めなさいよ、アンタが自分から見せたんでしょ!」

アスカが席から立ち上がってレイをにらみつける。

レイはその視線を跳ね返すようににらみ返した。

「何よその子をかばっちゃって、アンタはその子とできちゃって
わけ?」

「うるさいわね、そんなの関係無いじゃない」

「あらーアスカ、シンジ君ごちそうさま」

アスカにミサトを始めとしてクラスからひやかしの声上がる。
そして、いつものように学校生活を送り……家に戻ったシンジは惣

流家の家族を交えた夕食のだんらんを楽しみ、満足して眠りについた。

「これがシンジの願いなのね……」

「うん、僕はもうみんなが傷つけるのも、傷つくのも嫌なんだ」

目をつぶったシンジは頭の中に流れて来るユイの声にそう答えた。

「そう、じゃあここで私と一緒に暮らしましょう……」

再び母親のユイの優しい声が聞こえ、シンジの意識は再び遠のいた。

<ネルフ本部 エヴァ実験棟>

「パイロットの自我意識が薄れて行きます!」

マヤの絶叫と共に警告音が激しく鳴り響く。

「何とか融合を押し止めて!」

「無理です、エントリープラグ内の圧力が高まっています!」

リツコの指示のかいもなく、エントリープラグからシンジが溶け込んだLCLが溢れ出す。

LCLに流されたシンジのプラグスーツをアスカが拾って泣きながら抱えている。

「シンジが居なくなったら……アタシは……アタシは……!」

背中を丸めて泣きじゃくるアスカの背中をレイが優しくさする。

そんな二人を直視できなかったミサトがエントリープラグの方に目を向けると、座席にシンジが裸で横たわっているのが見えた。

「シンジ君！」

ミサトの歓喜と驚きが混じった声に振り向いたアスカとレイはシンジの姿を肉眼で確認すると、笑顔を浮かべてシンジの下に駆け寄った。

アスカはシンジの胸に飛び込んで両手をシンジの首に巻きつけた。それに気が付いたシンジはうつすらと目を開けた。

「アスカ……レイ……ミサトさん」

「シンジが戻って来た……」

「お兄さん……」

「シンジ君……」

シンジは胸にすがりついて泣いているアスカを見て、優しく語りかけた。

「アスカ、心配掛けてごめん。僕は母さんに甘えて幸せな夢の世界に逃げ込んでしまいそうになったんだ」

シンジは戸惑うアスカの腕をつかんで握り直して、アスカを強く見詰める。

「でも、母さんが言ったんだ。『生きていこうと思えば、幸せになるチャンスは、どこにでもあるわ』って」

「シンジ……」

「だから僕はこの世界でみんなと幸せを勝ち取るために戻って来た

んだ」

シンジは繋いだアスカの手を見詰めた。

「やっぱりアスカの手は固くなっちゃったね。パイロットの手だね」

「何を突然言うのよ？ シンジの手もそうじゃない」

「夢の中であったアスカの手は柔らかかったんだ。僕たちの子供にはこんな思いをさせたくないって改めて思うよ」

「こ、子供って……」

そう呟くとアスカの顔が紅潮して行く。

シンジもそれに気づいて顔を赤くした。

レイはいつもの通り無表情に見えるがよく見ると呆れ顔をしているような気もする。

そこへニヤニヤしたミサトが到着し、屈んでシンジとアスカの間に顔を割って入れる。

「お二人さん、再会していきなり家族計画の相談ですか？」

ちやかすミサトの声で実験棟は笑い声に包まれた。

<ネルフ中国支部>

ネルフ中国支部にはゼーレの幹部や一部の者にしか存在が知られていない、とある重要な生物を監禁するための地下室が存在した。

地下室に安置されているエントリープラグ型のカプセルに入れられた彼は、15年前南極で発見されてからここに運ばれて以来眠り姫の如く深い睡眠状態にあったのだが……。

彼は静かにゆつくりと目を開いた。

彼が目覚めたとき、モニターを監視するものは居なかった。

ゼーレからは嚴重な見張りをつけるように指導されていたが、中国支部の当局は目覚める事は無いと油断していたのかもしれない。

彼が赤い目でカプセルの窓から見えるコンピュータに視線を走らせると、『渚薰 KAWORU』と書かれたカプセルのふたが開いた。しかし、異常を知らせる警報は鳴り響かず、辺りは静寂に包まれている。

彼、いわゆるカラルは部屋のロッカーを物色すると予備のネルフの制服を見つけ笑みを浮かべた。サイズもちょうど良いようだ。

カラルは制服を身につけると悠然と部屋を出て、出口へと向かった。中国支部は費用を抑えるため、セキュリティのほとんどが放棄されていた。

ゼーレから回された予算のほとんどは建造中のエヴァ量産機の改造に使われていたのだ。

カラルは地下室から出る際に数人のネルフ職員とすれ違っただけで、誰にもとがめられず、余裕で脱出に成功した。

地上に出たカラルは高台に立ち、目前に広がる上海の市街を眺めていた。

「ねえみんな。僕は君たちからいろいろ教えてもらったけど、リリンというものがますます分からなくなっちゃよ」

カラルはそう言うのと近くの岩に腰かけ頼杖を突いた。

「争いの遺伝子を持つリリン。僕たちは神の代行者として彼らを浄化するために生み出された『使徒』という存在なのに、彼らに敗北を続けている」

そう呟くカラルの言葉に答える声は無かった。

しかし、カヲルは仲間にも話して聞かせるかのように話を続ける。

「レリエルが接触したりリンは僕たちを殺すことを積極的に望まなかった、どうしてだろうね」

カヲルはため息をつく、遙か上空を見詰めて笑顔で優しく囁きかけた。

「さあ行こうアエル、ラジエル、アルミサエル。彼らの心を探りに」

カヲルの両腕が翼へと姿を変える。

そしてカヲルは海に面した崖から飛び降り、翼を広げて日本に向けて飛び立って行った……。

第二十一話　せめて、人間として

＜第三新東京市郊外　加持邸　アスカの部屋＞

シンジが無事初号機から帰還し、加持邸でシンジやレイ、ミサトたちの家族と共に楽しく夕食をとったアスカは、幸せいっぱいの表情で眠りについた。

そんな彼女の見る夢は心地良いものだろうと思われたが、アスカの寝顔は苦痛で歪んでいる。

アスカは気が付くと、自分が制服を着て学校に居る事に気が付いた。目の前にはアスカと違う制服を着たレイが立っている。

教室にはアスカとレイの二人だけしかない。レイはアスカに視線を向けて話し始めた。

「……ねえ惣流さん」

「えっ、アンタいつの間にアタシをそんな他人行儀で呼ぶようになったのよ？　アスカでいいわよ、アスカで」

「私と友達になってくれたんだ」

レイはアスカの言葉に安心したように胸を押さえた。

「じゃあ、アスカに前から聞きたかった事があるんだけど……」

そう言つてレイは顔を赤らめる。

「アスカは、シンジ君の事どう思っているの？」

「そ、そんなの聞くまでもないじゃない……」

アスカは目を丸くして驚いている。

「私は、シンジ君が好き。シンジ君と喋ると暖かい気持ちになれるの。それからドキドキする。シンジ君は私が欲しかったものをくれるの」

アスカはごくりと唾を飲み込んだ。

「だから、私にシンジ君をちょうだい」

「ちよっと、いきなり何を……」

戸惑うアスカの前でレイは顔を手で覆って泣きだした。

「私にはシンジ君しか自分を見てくれる人が居ないの。シンジ君の代わりはこの世界のどこにもいないの。お願い……」

「そ、そんなアタシだって……」

そこへ扉を開いて真剣な表情をしたシンジが中に入って来た。

「シンジ、今のアタシたちの話を聞いて……」

「綾波！」

シンジはアスカの問いかけには答えず、レイの手をとって握りしめた。

「綾波がそんな思いを抱えていたなんて、僕は知らなかったよ。僕でよかったらずっと綾波の側に居るよ」

「シンジ君……」

涙を拭いてシンジに抱きつくレイ。そしてシンジはレイを抱えながら教室を出て行った。

「ちょ、ちょっと待ってよ!」

あつけにとられていたアスカは再起動を果たすと、二人を追いかけてようと教室を出ようとした。

アスカが肩に手をかけられ、押し止められる感触に驚いて振り返るとそこにはユイが立っていた。

「シンジのママ?」

「レイちゃんにはシンジが必要なの。だからシンジがレイを選んだ理由もあなたにはわかるでしょう? あの子は優しい子だから」

「そんな……」

「アスカさん、あなたは一人でもとても強い子よ。だから生きていれば幸せな人を見つけるチャンスはいくらでもあるわ」

「そんな事無い、アタシはシンジが居ないととても弱いのだよ!」

アスカは自分の叫び声で目を覚ました。

「何て夢を見るのよ……」

次の日からアスカの様子がおかしくなった。

特にシンジがレイと楽しく話している様子を見ているアスカの表情は辛そうに見える。

「アスカ、何か悩みでもあるの?」

「何でもないの……」

「でも、最近のアスカはちょっと変だよ」

「うるさいわね、シンジに相談してもどうにもならない事なのよ!」

アスカは怒った顔で肩にかけられたシンジの手をはねのけた。

それからしばらくの間シンジとアスカは親しく口をきくことが無くなってしまった……。

<ネルフ本部 エヴァ実験棟>

ネルフではシンジたち三人の定期シンクロテストが行われていた。ミサトとリツコは三人のシンクロデータを見て、思わず顔をしかめてしまった。

「シンジ君のシンクロ率は調子がいいけど……アスカの下がり方はやばいわね」

「ミサト、いい加減にアスカにシンクロ率低下の事を言った方がいいんじゃないかしら？」

「そうね、アスカにショックを与えないように黙っていようと思ったんだけど……」

シンクロテストが終了し、シンジとアスカとレイの三人はパイロットの控室に待機している。

ミサトは大きくため息をついて、アスカにとって辛い現実を告げるためにモニター室から出て行こうとした時、警報が鳴り響いた。

「使徒!?!」

警報を聞いたミサトはシンジたちをそのままパイロット控室に待機させ、発令所にメンバーを集合させた。

正面モニターには光り輝く鳥のような使徒が映し出されている。

「衛星軌道上から動きません」

「出現してからずっと静止しています」

オペレータのシゲルとマヤの報告を聞きながら、ミサトはモニターをにらみつけたのち、口を開いた。

「あなたたちはあの使徒の目的を何だと思うかしら？」

「前の使徒と同じように降下・接近の機会を窺っているのではないでしょうか」

「もしかして、超長距離攻撃を仕掛けて来るのかもしれませんが」

「こちらの注意をひきつけるダミーとも考えられます」

三人の言葉にミサトは納得したように深く頷く。

「とりあえず、日向君の言う通りなら一刻も早くエヴァを出撃させて落下に備えなければならいんだけど……」

「まさか、エヴァで使徒を受け止めさせる気!？」

「今度はロンギヌスの槍が無いのよ、それしかないじゃない」

リツコに、ミサトはそう返した。

そしてミサトは考え込んでつぶやく。

「でも、使徒が同じ手を二度も使うかしらね？ 使徒は学習をしているように私は感じるのよ」

「技術部で調査したデータによると、質量は前の落下してきた使徒に比べてとても少ないそうよ。直撃しても本部をえぐれる程ではないわ」

「となると……青葉君かマヤちゃんの案が考えられるか……」

ミサトが考え込む様子を他の四人は息をのんで見守る。

「こりゃあ、迂闊に手は出せないわね。どの道目標が射程距離内に近づいてくれないとどうにもならないわ」

「ロンギヌスの槍は無いけど、アスカが以前提唱した長距離用ライフルなら技術部で造っているわ」

リツコの言葉にミサトは頼もしい笑みを浮かべて、指示を出す。

「じゃあ技術部にライフルの完成を急がせるように要請して！パイロットはエヴァに乗って待機、いつでも出れるようにしておいて！」

ミサトの号令の下、発令所のメンバーは慌ただしく動き出そうとした。

しかし、その時マヤが緊迫した声で叫んだ。

「大変です、使徒から光線のようなものが……うっ！」

「どうしたの！？」

ミサトが大声でそう言ってマヤの側に駆け寄ろうとした時、ネルフ内に音楽が鳴り響いた。

「これは……ヘンデルのメサイヤの一節『ハレルヤ』？どこから流れているの？」

発令所のスタッフはミサトを除いてみな頭を抱えてうめいている。ミサトは近くに倒れていた職員の一人に駆け寄った。

「しっかりして！」

「触るな、この使徒め！」

ミサトに抱えられた職員の男は思いつき飛び退いた。
驚いて目を丸くするミサトに、職員の男は震えながら叫ぶ。

「お前が使徒に変身するのを、俺はこの目で見たんだぞ！　こんな化物の近くに居たら命がいくつあっても足りない、もう我慢の限界だ！」

そう言つて職員の男は発令所を出ていった。

その姿を見た数人の職員もミサトを指差して口々に罵倒の言葉を漏らして出ていく。

ミサトは顔を青ざめたが、涙をこらえてリツコの元へ向かう。

リツコはミサトを見ると狂ったような笑みを浮かべた。

「ミサト……私はあなたが憎らしくてたまらないの……」

「リツコまで……どうしちゃったのよ？」

「あなただけ加持君と一緒に幸せになつて……私はいつまでゲンドウさんの気持ちが変わるのを待てばいいのよ！」

リツコはミサトの手をつかむと、手の甲に爪を立てる。

「痛い、やめてリツコ！」

「きつといつも加持君と一緒に私の不幸を笑っているに違いないわ」

「そんな事無い、私たちはいつもリツコの幸せを願つて……！」

喚き立てるリツコの後ろからマヤが抱きつく。

「先輩……そんな報われない恋は止めて私の事を受け入れてください」

マヤを払いのける事に専念したリツコからミサトはようやく解放さ

れた。

だが、ミサトの腕を今度はマコトがしっかりとつかむ。

「ミサトさん、僕はあなたの事が以前から好きでした、どうか付き合ってください！」

「日向君、私には夫が居るのよ、あなたがそういう事を言うとはとても思えないんだけど？」

「それでもお願いします！」

真剣に頼みこむマコトにミサトは困惑するしかなかった。

マコトの腕を交わしながら辺りを見回すと、発令所の中は人々の言い争う喧騒で満ちていた。

「まさか……この精神攻撃が使徒の新しい攻撃だって言うの？」

ミサトの独り言に答えるものは誰も居なかった。

<ネルフ本部　パイロット控室>

エヴァのパイロット控室に居たシンジ、アスカ、レイの三人にもネルフ本部に鳴り響く音楽は聞こえて来た。

戸惑うレイの目の前でシンジとアスカは頭を抱えてうめきだした。

「どうしたの、二人とも？」

シンジもアスカもレイの声には答えなかった。

アスカには聞いた事の無い少年の声が直接頭に響いていた。

「君は何を望むんだい？」

「アタシはずっとシンジの隣に居たい……」

「それなら、いい方法があるよ。彼を君の人形にしてしまえば良いんだ」

アスカは暗い瞳をしてユラユラとシンジの方に接近して行く。

シンジもアスカの事は見ておらず、一人で泣きじゃくっている。

「ねえ、アスカは僕の事を嫌いになっちゃったの？ アスカも僕を捨ててどこかへ行ってしまふの？」

レイはシンジのその言葉を聞いてショックを受けるが、アスカの様子は全く変わらず、泣いていたシンジを押し倒した。そしてシンジの上に馬乗りになり、首に手をかける。

「彼を独占したいと思うなら、彼を殺してしまえばいい。人形となつた彼は決して君から逃げ出したりしない」

アスカの頭の中にまた声が響いた。

アスカはその声の命じるままにシンジの首を絞める力を徐々に強めていく。

レイは部屋の入口にネルフ中国支部の制服を着た少年が笑顔で立っているのを見て、彼をにらみつける。

「……これはあなたの仕業ね。二人を元に戻して」

「僕は、彼らの本性をただ解放してあげただけだよ。これが、リリンの真の姿なのさ、僕と同じ存在の君ならわかるだろう？」

「そうは思わない」

レイは首を横に振ってキツパリ否定した。

「ふん、君もリリンに毒されてしまったのか」

不機嫌そうな表情になったカヲルは素早く部屋を後にした。

カヲルを追いかけるよりアスカを止めなければならぬと思ったレイは、二人に近づこうとした。

するとレイの目の前で驚くべき事が起こった。

シンジが、首を絞めているアスカの腕をつかんでいた手を離して、アスカの頬を撫でた。

そしてアスカはシンジの首から手はずして、シンジの胸に倒れこんですすり泣いたのだ。

「シンジ……ごめんアタシ、変な声の誘惑に乗ってしまつて……シンジを殺そうとした」

「でも、途中から僕の首を絞める力に逆らつてくれたんだらう?」

シンジはアスカの頬をまた優しくなでた。

「僕も最近アスカが変だつたから、アスカが僕の事を嫌いなんだつて思いそうになった。でも、僕がアスカを嫌いになる事はどうしてもできなかったんだ」

「アタシはシンジの事を物のように独占しようとしたの。シンジの優しさをレイにも取られたくなくて一人占めしようとして……。そんなわがままな自分に最近イライラしていたんだ……」

穏やかな雰囲気に戻った二人にレイはホッと胸をなで下ろしてゆっくりと近寄る。

「ごめんねアスカお姉さん。私のはつきりしないせいで」

「レイにやきもちを焼くアタシの方が悪いのよ」

「うっん、碇君をお兄さんと呼ぶ事にした時から、私はふっ切っていたの。私はお兄さん以上に好きな人をいつか見つけるよ」

レイはそう言つて二人に微笑みかけて手を伸ばし、シンジとアスカは握手を交わした。

<ネルフ本部 第一発令所>

発令所の異変に戸惑うミサトの側に、ネルフの制服を着たカヲルが現れ、ミサトは驚いた。

ミサトは何の気配を感じていなかったからだ。

ただならぬものではないと思つたミサトは真剣な眼差しでカヲルを見据えた。

「こんにちは。君は非常に興味深い存在だね。リリンでありながらその体は僕たち使徒の物が混じっている」

「あなたは……人型の使徒？」

カヲルが視線をミサトに向け、その目を光らせた。

「胸がざわつく……何故？」

「君の心を解放してあげるのさ」

「やめて」

「君は本当はリリンを憎んでいるんだろう？」

「私はあなたとは違う」

そう言つて目を伏せるミサトにカヲルはさらにたたみかける。

「何度裏切られ、何度傷つけられ、君の心の中にはどす黒い感情が溜まっているはずだよ」

ミサトは齒を食いしばってにらみかえす。

「人間扱いされなかった事や大切なものを奪われた事が何度もあるだろうね」

「でも私は……人間自体を憎んでいるわけじゃない」

「リリンは遺伝子レベルで争いを好む種族だと過去の歴史が証明して居るんだよ。君はそんな愚かな種族の命を救おうとするのかい？」

「人という生物は愚かなのかもしれない……でも、私が出会って来た人達の中は、平和を願う人達もたくさん居たのよ！」

ミサトはそう言うのと、使徒の力を覚醒させた。

「感じるよ、君の力を……そうだよ、力を解放すればスッキリする。それでリリン達をなぎ払うんだね」

カヲルは空中に飛び上がってミサトを見下ろした。

ミサトはカヲルの言葉を否定して首を横に振る。

「大切な人達を守るため、私はあなたを討つ！」

ミサトは力強くそう言うのと、カヲルに向かってA.Tフィールドを収束された光線を放った！

その光線はカヲルの全身を包み込み、ジオフロントの天井部分を破壊し、さらにその光線は衛星軌道上に浮遊する使徒のコアを貫いた！使徒殲滅と共に音楽が消え、静寂が訪れた。

ミサトはカヲルが消え去った方向を見て呟いた。

「私は体が使徒になってしまっても、せめて心は人間として生きていくわ……」

第二十二話 ミサト、誕生日

<1995年12月8日 東京 葛城ミサトの家>

葛城家の茶の間では中心におかれているちゃぶ台の上にケーキが置かれていた。

その大きめのケーキを眺めて、少し嬉しそうに、そして寂しそうにこころ表情を変える黒髪の愛らしい少女が座っていた。

少女の名前は葛城ミサト。今日で10歳になるこの家に暮らす夫妻の一人娘である。

「おとうさん、今年もあたしの誕生日に帰ってきてくれないのかな」

ミサトは壁時計を見詰めながら母親に声をかけた。

「ごめんね。多分お父さんも研究の仕事が忙しいのよ」

「こんな大きなケーキを買ってくれて嬉しいけど、おとうさんが居てくれた方が嬉しいのに」

ミサトは小さいころから家族三人揃っての誕生日を迎えたことが無い。

毎年、母娘二人だけで祝う寂しい日。

大きなケーキは父親のせめてもの心遣いだった。

ミサトの母は優しく娘のミサトの手を握る。

「今年の1月に起きた大震災は知ってる？」

「うん、たくさん建物が壊れたんだよね」

「被災地にね、ボランティアの人が100万人以上も全国から集まったのよ」

「ふーん、いい人って結構居るんだね」

「だから、思いやりの心があれば地球環境もどうにかなるんじゃないかって、お父さんは信じているのよ。人の可能性を」

「おとーさん、立派なんだ……でもやっぱり、あたしの誕生日には休んで欲しいなあ……」

「……………ごめんね」

それ以上母親にはミサトに掛ける言葉が無かった。

二年後の1997年のとある日の朝。食卓で新聞を読んでいたミサトの父親は苛立たしげに声を荒げた。

「何が議定書だ！こんなものでは問題の先送りにしかない！」

よつぽど腹が立ったのかミサトの父は新聞を破り捨てた。それを見ていたミサトは父の怒りの形相に身震いする。

「父さん、ちよつと怖い……」

「ああ、すまんミサト。……研究が進まない苛立ちをぶつけてしまった」

「前みたいに無駄遣いをなくす研究は止めたの？」

「根本から変えないといけないと思ってな。石油に代わるエネルギーを研究しているのさ」

原子力、風力、太陽光……そして水素。

様々な研究を重ねたミサトの父だが、どれも実用的なレベルに至らず、満足がいかないようだった。

そんな日々が続いたある日、ミサトの父は目を輝かせて家に戻って来た。

「ついにやったぞ！」

「どうしたの、父さん？」

「ついにS2機関の理論を思いついたんだよ！」

ミサトの父は少年のようにはいしゃいでミサトの手をとって振り回す。

「このまま地球の人口が増え続ければ、食糧問題、環境問題、エネルギー問題が発生する……しかし、S2機関があればそれらの問題は解決するんだ……」

ついに念願なったり、といった様子で喜ぶミサトの父を、母と娘のミサトも嬉しそうに見守っていた。

しかし、確たる根拠も物的証拠もないミサトの父、葛城博士の『S2機関理論』に対する世間の風当たりは冷たかった。

葛城博士は狂人呼ばわりされ、それまでの功績も全て否定され、権威も職も何もかも失われても、彼はS2機関を諦めなかった。

「S2機関のサンプルは南極に眠っていると言うのに、なぜ誰も信じてくれないのだ……」

葛城博士は荒れた様子で家に戻ると、母と娘によく零していた。

二人も父親の真剣な様子に、そうであると信じていた。

「ミサト、父さんは立派な人なのよ……父さんを最後まで信じてあげてね……」

しばらくしてミサトの母は心労が重なったのか、病に倒れて息を引き取ってしまった。

だが、捨てる神あれば拾う神ありというのだろうか。

ドイツに本拠を構える『研究機関ゲヒルン』が葛城博士のスポンサ

ーになると言いだしたのだ。

再び生氣を取り戻した葛城博士の姿に、ミサトも喜んでゼーレに入隊し、少年兵となった。

研究機関ゲヒルンの元、2000年を目的に南極に眠る『アダム』を調査する葛城調査隊が組まれることになった。

しかし、南極に眠る巨人『アダム』を起動させるには、彼の魂にコインタクトを取る必要があった。

その適格者として少年兵として登録された葛城ミサトが選ばれ、彼女は父親のために進んでプラグスーツを着てエントリープラグに入り……件の悲劇が起こったのだった。

ミサトはセカンド・インパクトの爆発の衝撃により海に投げ出され、漂流し、南米最南端の街ウシュアイアよりさらに南の小さな村の海岸に流れ着いた。

村人は大災害の直後にもかかわらず、ミサトに寝床と食事を与えてくれた。

さらに奇跡的に日本語が話せる日系ブラジル人の女性が居て、ミサトの側に付いてくれていた。

ミサトがやっと人心地が着いたころ、運が悪いことに村にゼーレの諜報員が重要機密である葛城調査隊の生き残りを探してやって来た。ゼーレの諜報員は村に援助物資を送る事を条件に、ミサトの身柄の引き渡しを迫った。

村に蓄えられた食料が乏しくなっていたのは事実で、セカンド・インパクトによる災害によりさらに食糧事情が厳しいことは確かである。

「ごめんね……あなたを引き渡さないと、この村は飢えてしまうの……」

「うつん、あたしなんかでこの村の人たちのみんなを救えるなら喜んで行くわ」

涙を流して謝る村民の女性にミサトは笑顔で応えた。
ゼーレの諜報員に捕まったミサトはゼーレの基地できつい取り調べを受けた。

「さあ言え、葛城博士はなぜS2機関を思いついた！」

「私は……何も知りません……」

「では、なんでお前はあの爆発の中心に居て、たいした怪我を負っていないんだ？」

「わ……わかりません」

否定の言葉を吐く度にミサトは殴られる。

それでもミサトは質問に対して知らないと答えることしかできなかった。

取り調べ室に別のゼーレの職員の男が入ってくる。

「葛城博士の自宅からS2理論について書かれた書類が発見されたそうです」

「じゃあ、もうこいつに聞くことは無いな」

「この娘はどうしますか、口封じに始末しますか？」

その時、取調室の電話が鳴る。

電話をとった男は、入って来た男に命令した。

「懲罰房に入れて、そのまま放っておけ。食事などを与えなくていい」

「はっ？」

命令を受けた男は疑問の声を一瞬上げたが、そそくさとミサトを連れて出て行った。

< 研究機関ゲヒルン 懲罰房 >

ゼーレは基本的に表に出ない、秘密の機関であるので、表の顔はゲヒルンである。

ゲヒルンは研究機関という形式であったが、独自の警備としてゼーレの兵士を配備している。

ゲヒルンの建物内部にもゼーレ用の軍備施設が存在していた。

その懲罰房の一室にミサトは閉じ込められていた。

水も食事も与えられず一か月近くになるが不思議とミサトの命は尽きなかった。

事実を知るゼーレの見張りは気味悪がって、怪談までウワサされ始めた。

その警備の緩みの隙について一人の刺客が侵入した。名前を加持リヨウジという少年だった。

毒を仕込んだナイフを握りしめ、『殺害目標』である葛城ミサトの居る懲罰房に向かった。

「早く私を殺して……」

ミサトが部屋に静かに侵入したりヨウジに向かってそう呟くように呼びかけた。

冷静に仕事をこなすリヨウジもミサトの発言には少し驚いた。

暗殺者に向かって殺せと命じる人間は滅多に居ないからだ。

無言でリヨウジは持ち込んだ愛用のナイフでミサトの腕を斬りつける。

即効性の猛毒で、すぐ痺れがまわり数分で標的の命を奪うはずだ。

リヨウジはすぐさま立ち去ろうとして入口の方を振り返ったが、背後からミサトの声が聞こえ、心底驚いた。

「殺してから行きなさいよ……」

リヨウジは慌ててもう一度ミサトの腕を斬りつけて様子を見るが、相変わらずミサトは暗い目でリヨウジを見詰めて呟き続ける。

スマートな殺人術を好んでいたリヨウジは、仕方無く紐を使って思いつきりミサトの首を絞めた。

ミサトの呼吸が止まったのを確認して力を抜く。

「ゴホッ、ゴホッ……あんた、本気で殺そうとしてるの？」

「……毒も効かないし、首を絞めても死なない……本当に人間なのか……？」

とまどうリヨウジの耳に、外から近づいて来る足音が聞こえた。

「……しまった、長居しすぎたか……」

だが、その足音の主は懲罰房のドアを開ける事は無く、その前で立ち止まった。

「……ドア越しに話すだけですよ」

「ありがとう」

ミサトには片方の声が見張り番の一人の声だとわかった。
もう一方の女性の声は初めて聞く声だ。

「葛城ミサトさん。聞こえるかしら？」

「……………」

ミサトは視線を向けたが、何も答えなかった。

ドアに付けられた小さい窓越しに見詰め合うだけで時間が過ぎて行く。

「……そろそろ、やばいですよ。見つからないうちに」

見張り番にうながされた女性はミサトに向かって微笑みかける。

「生きていこうと思えば、幸せになるチャンスは、どこにでもあるわ」

二人の足音が遠ざかっていく。

リヨウジはふーっと安心して大きく息を吐きだした。

彼がミサトに目を向けると、ミサトが肩を震わせているのを見て驚いた。

「そうか……そうだったわね……フッフ……アハハハハハ！」

突然頭のネジがぶつとんだように笑うミサトにリヨウジはまるで宇宙人を見るような感覚にとらわれた。

リヨウジは早く逃げなければならなかったが、目の前で起こる想定外の出来事に頭の処理がついて行かない。

気がつくと、リヨウジの目の前の至近距離ににっこりとほほ笑むミサトの笑顔があった。

「よく見ると、あんたかつこいいじゃない。名前は？」

「……えっ？」

「教えたって減るもんじゃないし、教えなさいよ」

「……加持」

「加持君ね。よろしく」

「……なんでそんな話になるんだ？」

怪訝な顔でミサトをにらみつけても、ミサトの笑顔は曇る事は無い。先ほどの自分よりも暗い表情をしていたミサトとはまるで別人のスイッチが入ってみたいに感じる。

黙っていた分を取り戻すようにミサトはリョウジにペチャクチャと話しかける。

いつの間にかミサトに無防備に抱きつかれたリョウジは逃げるに逃げられなくなってしまった。

「あのね、あたしは、来月の8日誕生日なのよ」

「いきなり何を言い出すんだ、君は」

「一緒にお祝いしてくれる人がいると楽しいんだけど」

「楽しい？ 誕生日が？」

リョウジは貧しい家に生まれ、誕生日どころか楽しいと言う事自体を意識してなかった。

今回の任務も失敗したら死ぬことは当然だと思ったが、先ほどの女性の言葉とミサトの明るさに当てられて、生きる事にしがみつきたいと言う気持ちを初めて持つようになった。

「……俺からも一言、いいか？」

「なに？」

「……無理して、笑わなくていいからな」

「なんで……わかったのよ」

「仕事柄、相手の精神状態を読むことは戦闘に有利になるんでね」

「そんな仕事、やめちゃいなさいよ……でも、ありがと」

「はっ……私としたことが、長い間回想に浸っていたようね……」

ミサトは発令所でカナルが去った方向を向いたまま、立ちつくしていた事に気がついた。

誰かに服を引っ張られる感覚に、そちらの方を向くと、気まずそうに見上げるリツコの姿があった。

「ミ、ミサト……さっき、私が言ったことだけど……」

「まあ、誰だって虫も殺さない聖人君子ってわけじゃあないし。そう言うのは笑って流すもんよ」

「あ、ありがとう」

「貯めこんだストレスを発散できてよかったでしょ？」

ミサトがあっけらかんとした笑顔でいうと、リツコもつられて安心したような笑顔になる。

発令所のそこかしこで謝ったりする声が聞こえる。

見回す限り、もう言い争う声は聞こえない。

ミサトは安堵したが、戻って来ない職員の一部の空席を見て、ミサトは表情を曇らせる。

そこは、ミサトを化物呼ばわりした職員たちの席だ。

再びミサトは暗い思考の渦にとらわれそうになったが、はっと顔をあげる。

「私はシンジ君たちの様子を見に行くから、リツコはここをお願い！」

「わかったわ」

ミサトが声をかけると、マヤと話しこんでいたリツコは振り向いて答えた。

返事を確かめる間もなく、ミサトはエヴァパイロットの控室に走って向かっている。

エヴァパイロットの控室にミサトがたどり着くと、シンジたち三人はにこやかに談笑をしていた。

あまりにも和やかな雰囲気にもミサトは拍子抜けする。

「あなたたち、使徒の攻撃は受けなかったの？」

「ええ、僕たちにも音楽が聞こえて来たんですけど……」

シンジ、アスカ、レイからの話を聞いたミサトは感心したような、ほっとしたような表情で頷いた。

「……というわけで、僕たちは前に比べて仲良くなってしまっ……」

……

「そう。まさに、雨降って地固まるね」

ミサトは人間のさらなる絆の深まりに感動すら覚えたが、解決していない問題があった。

それはミサトに関する噂がにわかに広まりを見せている事である。月に穴を開けたのはミサトの仕業だと言う事も囁かれていた。

とりあえず、ミサトに関する処分は特になかったのだが……ネルフやゼーレの一部にミサトに対する反発が生じ始めていた。

<第三新東京市 第壱中学校>

その日、HRの時間に2・Aの教室に入って来たのはまたまた担任の根府川先生では無くミサトだった。

クラス生徒たちはまたまた転校生が来るのかと色めき立った。

2度あることは3度ある。
その予想は当たった。

「みんな、今日は転校生を紹介する！」

「山岸マユミです、短い間だと思いますけど、宜しくお願いします」

眼鏡をかけ、口元にホクロのある黒髪の少女は笑いもせず、無表情に静かに頭を下げた。

地味で真面目で暗い印象を受ける彼女に、クラスの反応は静かだった。

「ほらほら、男子！ 質問とかないの！？」

ミサトが盛り上げようとするが、オドオドして下を向いているマユミに誰も質問をしなかった。

「参ったわね。マユミちゃんもまだリラックスできてないのかしら……席はヒカリちゃんの隣が空いてるわね。そこに座って！」

「はい……」

隣の席に座ったマユミにヒカリは優しく声をかける。

「葛城先生って、明るくて楽しそうな先生でしょ？」

「は、はい……」

マユミは多少顔をこわばらせながらも笑みを浮かべた。
しかし、マユミは積極的に人とかかわり合おうとせず、休み時間も本を読んで近づきたい雰囲気は漂わせている。

中学校の体育の時間。

男子はグラウンドでバスケット。

女子はプールで水泳だった。

「さあ、今日の授業は二人一組よ！ みんな、各自でペアを組みなさい！」

水泳教師のミサトが大きな声で号令をかけると、2 - Aの女子たちは元気に返事をしてペアを組む。
やはり転校生のマユミだけが取り残されていた。

「アスカ……今日は……」

「そうだね。ヒカリは転校生の子と組んであげて。アタシは……仕方無い、ミサトの相手をしてやるか！ いつもサボってるし」

「酷い言い草ね、私は教師として監督をしているのよ」

「この前よだれ垂らして寝ていたじゃない」

「あれは、日差しが気持ち良かったから……」

アスカとミサトのやりとりに笑いが巻き起こる。

しかしマユミは固い表情で側にいるヒカリの方を見ようとしなかった。

「山岸さん、私と組みましょう？」

「……無理しないでいいですよ」

ヒカリが笑顔で話しかけても、マユミは視線を合わさずに暗い声で返事をした。

「……私なんかと居て楽しくないでしょう？ 惣流さんと組んであげてください」

「そんなこと言わないで」

「いいんです、みんな私といると楽しくなさそうな顔をするんです」

ヒカリがマユミに対して困惑した顔でいると、アスカが割って入って来た。

「アンタねえ！ 自分がつまらない顔をしているから、そうなるって事がわかんないの!？」

「そ……そんなこと言われてもっ……!」

マユミは泣きながらプールから出て行ってしまった。

「あーアスカが泣かした」

「惣流さん、ひどーい」

クラスの女子から非難の声が上がる。

もちろんこれは冗談半分だ。

「アスカって相変わらず、お節介よねえ」

「でもミサト先生。そこがアスカの長所であり短所なんですから…

…」

「ヒカリ、何気にそれって毒舌よ」

ミサトは腕を組んでしばらく考えた後……閃いたかのように手を叩いた。

「みんな、協力して、これから”E計画”を発動するわよ!」

「”E計画”?」

「そ、マユミちゃんに笑顔を与える”E（笑顔）計画”よ!」

ミサトのネーミングセンスには目をつぶり、2・Aの生徒たちは賛成し、計画実行に向けて動き出した……。

第二十三話 幸福を得るための資格

<ネルフ本部 第一発令所>

観測システムから異常なデータを受け取ったネルフ本部の発令所は緊張に包まれていた。

「パターンオレンジ、対象はランダムに点滅を繰り返しています」「もっと正確な座標を絞り込める?」

マヤの報告を聞いたミサトはマコトに尋ねた。

「これ以上は難しいですね……反応が微弱ですから……」「この前私の目の前に現れたヒト型の使徒なのかしら」

ミサトの呟いた言葉をリツコはにべもなく否定する。

「ミサトがみたっていう使徒だけど、どのセンサーにも反応が無かったわ」

「私の見た幻だって言うの?」

「違うわ、多分その使徒は反応を完全に消すことができるのよ。だから今回の使徒は異なるものと推測できるわ」

「深度約400メートルに反応あり!」

マコトの報告が聞こえるとリツコとミサトは話し合いを一時中断した。

「パターン青に変化しました!」

「やはり使徒……?」

報告したマヤの動きが途端にあわただしくなる。

「パターン青がロスト、すべてのセンサーから反応消失」

「これはどういうことかしら」

マヤとシゲルの報告を聞いたミサトは考えを巡らせた。

「私達の技術を計っているのかもね」

「使徒が戦術的判断をする可能性は十分に考えられる……か」

「生存本能と闘争本能のせめぎ合いが、人間に戦うための知恵、戦術というものを与えた。使徒がそれを手にしていてもおかしくないわ」

「使徒も生き延びたいのね……」

リツコとミサトの間で再び使徒の動きについての討論が行われた。

そしてミサトの最後の呟きは、エヴァに乗り込んで戦闘待機していたシンジ、アスカ、レイの三人にもかすかに聞こえていた。

シンジがほんの少しだけ顔をゆがめる。

「シンジ、暗い顔してどうしたの？」

「うん、いや……何でも無いんだ」

シンジはモニターのアスカとレイに向かって笑いかけたが、まだ表情は微妙に暗いものだった。

「エヴァの出撃準備は整っているけど？」

「やめましょう。得体のしれない敵に、下手に手を出すのは」

その後しばらくしても反応が無かったので、発令所にも安堵した空

気が流れるが、ミサトは一言いつて場の空気を引き締める。

「使徒の可能性が完全に否定されない限り、私たちは警戒を緩める事は許されないのよ」

ミサトの声に反応するかのように再び警報が鳴り響く。

「受信データを照合しました、パターン青、使徒です!」

「偵察中のヘリ、ホートレスより入電。我、停滞中の目標を発見せり」

「総員、第二種戦闘配置。動き出すまでくれぐれも攻撃はしないように戦自と国連に伝達して」

マヤとシゲルの報告にミサトは号令を下す。

「目標、モニターに映します」

マコトの声と同時に発令所の正面モニターに使徒の姿が映された。使徒は円盤状の物体が何個も折り重なり、巨大な提灯といった形状を持っている。

「使徒の能力は?」

「外見からわかるもの以外はすべて不明です」

「ずっと潜伏していたのに、今になって姿を現したのはどうして?」

マコトの報告を聞いたミサトは割合大きい声で呟いて考え込んだ。

「やはりこちらの攻撃を誘う罠なんでしょうか?」

「油断をさせておいて一気に動くのかもしれませんが」

「私は……今の状況からは何も考えられません」

ミサトはマコトとシゲルの言葉に頷いていたが、マヤの言葉を聞くと顔をしかめた。

「まったく、マヤっちはマジメなんだから。簡単に自分の限界を線引きして諦めちゃダメよ。負けず嫌いって気持ちを持たないとダメよ」

ミサトの言葉を通信越しに聞いたシンジはポツリと呟く。

「アスカって、負けず嫌いだよな」

「ええ、そうだけど？」

「……そこに僕は魅かれたのかもしれない」

「バ……バカっ。戦闘待機中に何言ってるのよっ!」

アスカの顔はたちまち真っ赤になった。

「はいはい、ノロケはそのくらいにして、警戒に集中してね」

ミサトは気負いすぎているシンジたちを見て、良いことだと思った。

長い時間強く緊張しているのはあまり良くないことだからだ。

「使徒の近くのエリアに人の反応があります!」

「なんですって!?!」

モニターに自転車に乗った少女、山岸マユミの姿が映し出され、すぐさまIDデータも表示される。

「あれは、山岸さん!?!」

さらに後ろから折りたたみ自転車に乗った少年が確認される。

「それに相田君まで!？」

モニターではマユミに追いついたケンスケが腕を引っ張って、抵抗しているマユミを連れ戻そうとしている。

「日向君、しばらくこの場の指揮を任せるわ!」

「ミサト、待ちなさい! 救助は付近に居る戦略自衛隊の隊員に任せるべきよ」

リツコが止めてもミサトは発令所を飛び出していた。

ミサトは自分専用を用意された車庫に入ると、新しい足となった蒼いバイクに乗り込んだ。

分裂使徒イスラフェルとの戦いでルノーが昇天してから、ミサトはリツコに頼んでさらに小回りのきくバイクを改造したものを愛車とした。

「おい山岸、シェルターに避難しないとダメだろう! それに、あそこに居るのは使徒って言うてな、とっても危険なヤツなんだぞ!」
「放っておいてくれませんか、私なんてどうなったっていいんです!」

ケンスケは腕を引きずってでもマユミを自転車に乗せようとするが、マユミの抵抗は激しい。

争う二人の側に蒼いバイクに乗ったミサトが土煙をあげて現れた。

「二人とも早く乗って!」

ミサトはそう言ってスイッチを押し、格納されていたバイクのサイドカーを引っ張り出す。

「ミサト先生!？」

「……いいんです、私なんか……」

ミサトとケンスケは二人で嫌がるマユミをサイドカーに押し込んだ。

「あの、俺は？」

「相田君は私の後ろ、しっかりつかまって!」

バイクに乗ったミサトの後ろで、ケンスケが遠慮しがちにミサトの腰に手を回す。

「そんなんじゃ、振り落とされるわ、もっとしがみつきなさい!」

「えええっ!？」

そう言ってミサトは後ろを振り向いてケンスケの体を抱き寄せ、また前に向き直った。

体を感じるミサトの感触にケンスケは一瞬だけ幸せを感じたが、次の瞬間恐怖に変わった。

もうスピードでバイクは走り出し、さらに視界は眩しい光に包まれた。

ケンスケはただ振り落とされないように腕に力を込めてしがみつくので精いっぱいだった。

「大変です、使徒が自爆しました!」

「目標の消滅を確認」

「パターン消失しました」

「そんな、ミサト達は!？」

「加持特佐も、民間人の二人もみんな無事です！」

モニターにミサトの乗る赤いバイクが映し出されると、発令所は歓声に包まれる。

しかし、目をつぶって必死にしがみつくケンスケの姿に笑いが起こった。

「相田君は必死ね」

「加持特佐の運転ですからね」

リツコがモニターに表示された被害状況の報告を見て驚く。

「あら、物理的被害がゼロというのはどういう事かしら？ あの使用徒の自爆は光と音だけのこけおどしでもいうの？」

ケンスケとマユミを乗せたミサトのバイクはネルフ本部にたどり着く。

ミサトは被害がゼロと言う報告を聞くと、ひとまずケンスケたちのことを優先することにした。

「使徒が来た時は、シェルターに避難しなければいけないのはわかっているわよね？」

ミサトは厳しくケンスケとマユミを叱りつけるように言った。

「山岸さんは悪くない……俺が、俺が彼女を無理やり連れて来たんです！」

「えっ……！？」

突然そう叫んだケンスケの発言に、小さな声で『ごめんなさいごめ

んなさい』と繰り返し、ミサトと目線をあわさずに下を向いていたマユミが驚いて顔をあげた。

「そーお。じゃあ悪いのは百パーセント相田君で、山岸さんは被害者ってわけね」

「あ、あの……」

ミサトは内線で電話をかけ、ネルフ本部の食堂で働いているヒカリを呼び出した。

「あ、ヒカリちゃん？ 山岸さんをネルフの方で保護したから、一緒に家に送って欲しいの……うん、ありがとうね」

ミサトは電話をかけ終わると、マユミの方を向いて微笑む。

「じゃあ、山岸さんはここで待っていて。私は相田君に厳重注意を与えないといけないから」

そう言つてミサトはケンスケの腕を引っ張った。

「あ、あの……相田君は……」

「シエルターを抜け出したのは二回目だからね。厳しい罰を与えないと」

「本当にすいませんでした、ミサト先生！」

そう言つたミサトとケンスケが姿を消すと、マユミの前にヒカリが現れた。

「山岸さん、驚いた？ 私も事情があつて、学校のない時はネルフの食堂で働かせてもらっているのよ。さあ一緒に帰りましょう」

「あの洞木さん。相田君ってどんな人ですか？」

「そうね……軍事マニアで変なヤツだけど、意外と人のことをよく見て結構気を利かせてくれるヤツかな？ ……どうして？」

「いえ、何でもありません……」

マユミはヒカリと一緒に電車でネルフからの帰途についた。

一方、ミサトに連行されたケンスケは、これからどんな罰則が自分を待ち受けているのか緊張していた。

「相田君くん、やるじゃないの、女の子をかばったりして、このっこのっ」

いきなりニヤケ顔になり腕で自分の脇腹をつつくミサトにケンスケは拍子抜けして驚く。

「ミサト先生、わかっていたんですか！？」

「だから私も相田君の男気を無駄にしないために演技したんじゃないの。んで、マユミちゃんのどこに惚れたの？ やっぱメガネっ娘だから？」

「ミサト先生、俺を勘違いしてませんか？ 俺はマニアなんですよ、軍事マニア！」

「普通の人から見ればどれも同じよ」

ミサトはケンスケの顔を眺めるとものすごい嬉しそうな顔をした。これは何かいたずらを思いついた子供の表情そのものだとかケンスケは直感した。

「よし、明日から相田君を軸として”E計画”を進めるから」
「ええっ！？」

突然ミサトに肩を叩かれたケンスケはびっくりして二の句が告げなかった。

「シンジ君やアスカやレイ、ヒカリちゃんにも伝えておくからよろしくねん」

手をひらひらさせて、そう言って立ち去るミサトをケンスケはただ見送るしかなかった。

発令所に戻ったミサトは、リツコたちと話し合いを重ねるが、結局使徒が自爆したらしいとの結論を出すしかなかったが、ミサトにはいまいち納得がなかった。

シンジたちの戦闘待機は解かれ、翌日から通常通り学校に行くことになった。

一方、ケンスケは自分の家に帰宅した後、ベッドの上で眠れずに思い悩んでいた。

「今日のことが気になって眠れないのかな……」

ケンスケは今日のマユミのことを思い浮かべた。

「あいつ……俺に似ているのかな。周りに気を使って謝ってばかりで。俺は周りのみんなが何を望んでいるのかなんとなく分かっちゃまうんだよな……」

そう呟いてケンスケは下唇を噛んだ。

「俺は……嫌われたくないから、自分の気持ち殺してまで他人のことを優先させちまう！ 惣流のことも、霧島のこと、俺は碇に譲ってしまっている……」

最後にケンスケはミサトの顔と、言われた言葉を思い浮かべる。

「自分の気持ちに正直に生きる……か。それができたらどんなにいだろうな。俺も碇や惣流のやつみたいになりたいぜ……」

ケンスケはゆつくりと眠りに落ちて行った……。

<第三新東京市 第壱中学校>

翌日の放課後。

”E計画” 実行部隊となったシンジたちは部活動やネルフの仕事も免除され、半ば強制的に計画に専念させられることになった。

「みんな、転校生の子は予想通り図書室に行ったわ」

レイの報告にアスカたちは活気立った。
ただ一人ケンスケを除いて。

「ほら相田、さっさと図書室に行った、行った」

「まったく、なんで俺がこんなこと……」

アスカに逆らっても無駄だとわかりきっているケンスケは、渋々図書室へと向かった。

「図書室にある軍隊関係の本は、ほとんど読んじまったしな……」

ケンスケが本棚を見回しながら歩いていると、本を読みながら歩いていたマユミとぶつかってしまった。

「うわっ」

「あ、ごめんなさい」

マユミの持っていた本が床に散らばった。

「私、よそみしていて、ごめんなさい」

「俺も悪かったよ」

マユミがしゃがんで本を拾っているのを見て、ケンスケもしゃがみ込む。

「手伝うよ」

「あ、いいんです。私が悪いんですから」

「一人だと大変そうだからさ」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「そんなに繰り返して謝らなくていいさ」

ケンスケとマユミの手が一瞬だけ触れ合う。

「ごめんなさい!」

「え、いや、そのな……」

お互い手を引つ込めてドギマギする。

「なあ、これだけの本、一人で読むのか？」

「はい、本が好きなんです。だって……」

視線をそらしたまま、そこまで話してマユミは言いよどむ。

「だって……？」

「いえ、なんでもありません」

本を拾い終えた二人はゆっくりと立ち上がる。

「ありがとうございます、本当に」

「いや、たいしたことじゃないさ」

「それじゃ……」

マユミは足早に立ち去っていく。

教室に戻ったケンスケの報告を聞いたヒカリとアス力は満足げに頷いた。

「相田君と山岸さん、いいムードじゃない？」

「相田にしてはなかなかやったわね」

「俺はもうこりごりだよ……」

「大変だね、ケンスケも」

「まあ、きばれや」

すでに出来上がってるカップル二組の他人事のような言葉に、ケンスケはため息をつくしかなかった。

翌日通学路を歩いていると、ケンスケは本屋から出て来るマユミを見つけた。

「あ……」

「あれ、朝から本を買いに来たのか？」

「ええ……昨日図書室で借りた本を読んだら続きが読みたくなくて

……」

「本の虫なんだな」

「だって、いろんな世界を見せてくれるから……」

マユミは伏し目がちにケンスケに尋ねる。

「その……相田君は本を読みますか？」

「まあ……よく読む方かな」

軍隊関係の本だけど、とケンスケは心の中で付け加えた。

「よかった……」

「どうしてだよ？」

「だって、趣味が同じだと楽しいじゃないですか」

「そうかもな」

悪いことしちゃったかな、とケンスケは心の中で独りごちた。

そんな談笑をしながら歩きはじめた二人だが、突然マユミは体内に異様な感覚を覚え下腹部を押さえて立ち止まる。

「私の体が別の生き物みたい……何が起こってるの？」

「どうしたんだ、大丈夫か？」

慌てたケンスケの問いかけに対し、マユミは笑顔で首を振って答える。

「あ、いえ。……別に何も……」

そしてまた何事もなかったかのように再び二人は学校へと歩き出した。

その姿を遠目から眺めたミサトやアスカたちはその展開にニンマリする。

「こりゃあ、私たちが手を出すのはヤボってもんね」

「まあ、ミサトが企画した転入生歓迎会を中止することは無いんじゃない？ 悪くない案だしさ」

今日の一時間目の授業は根府川先生の何回目か数える気にもならないセカンドインパクトの授業だった。

「そうですね、今日は転校生の山岸さんに答えてもらいましょう」

マユミ用の学習用パソコンのディスプレイに問題が表示される。

マユミは返答に困ってしまった。

本はたくさん読んでいるのだが、教科書はあまり読む気にもならず授業は苦手だったのだ。

「山岸マユミさん、どうしました？」

「あ、あの……その……」

マユミのディスプレイにメールが届き、答えが書かれていた。

「えっ……？」

マユミは答えをキーボードで打ちこむ。

「ああ、正解ですな。よく勉強してきていますね」

マユミが差出人を探して辺りを見回すと、ケンスケと目が合いマユミは頭を少し下げる。

ケンスケは照れた様子で顔をそらした。

「これが世に言うセカンドインパクトというものです。そのころわ

たくしは根府川に住んでいましたね。今では海の底になってしまいましたか……」

根府川先生がそこまで話したと同時に、毎回正確に計られたタイミングのように授業時間終了のチャイムが鳴る。

「シンジ……いい加減に何とかして欲しいわ……耳タコよ、ホント」

「僕に言われても困るんだけど……」

「先生、交代……」

「起立、礼」

ヒカリの号令で休み時間が訪れると、シンジたちはミサトが提案した転入生歓迎会の出し物についての話し合いを始める。

「よっしゃ、地球防衛バンド再結成や！」

トウジのその提案に、アスカが反対した。

「バンドなんてイヤよ！」

「惣流、ボーカルができないからって我がまま言っなよ」

「違う、アタシは前と同じ企画は嫌だっていつてんの！……そうね、歓迎のお菓子を作るっていうのはどうよ？」

アスカの提案にトウジとケンスケが難色を示す。

「アホか、お菓子作りなんて出来るか！」

「そうそう、さっそく音楽室で練習を始めようぜ」

ケンスケの発言でトウジもレイ、ヒカリも席を立って音楽室に向か

おうとする。

シンジも後に続いて席を立とうとしたのだが……蒼い目に涙をいっぱい浮かべたアスカに腕を引っ張られた。

「シンジい……アタシと一緒に菓子作りい……」

「仕方ないなあ、アスカの涙には勝てないよ……」

そして迎えた放課後。

加持邸で鼻歌を歌いながら菓子を作り始めたシンジとアスカだが、果物の皮をむくアスカの手つきは危なっかしい。

「アスカ、刃物を持つ時は慎重にならないと怪我をするよ」

シンジになだめられて、しばらく続けた後すぐに我慢の限界に達してしまった。

「あーっ、もうやめましょう！ お菓子作りなんて私の性格に合わないわ！」

そう言っアスカは作業を放棄してしまった。

「僕も菓子作りは得意じゃないんだ……アスカがやめちゃうと心細いよ」

シンジの言葉にアスカは考え込み、しばらくして笑顔を浮かべて玄関から外に出行こうとする。

「いったいどこに行こうっていうのさ？」

「学校に行ってくるっ！ シンジは菓子作りを続けていて！」

アスカは元気よくそう答えると姿をもう加持邸から消していた。
学校に残って音楽室で曲の練習をしていたトウジたちの元に、突然
アスカが現れる。

「なんやなんや？」

「ヒカリ、貰って行くわよっ！」

ヒカリはアスカに腕を引っ張られて、結局アスカたちのお菓子作り
を手伝う事になってしまった。
取り残されたトウジたちはぼう然となる。

「こうなったら、ボーカルを綾波に変更するしか……」

「ごめんなさい。私、風邪をひいて、のどが痛い」

「そら、無理させるわけにはいかな」

ボーカル不在のピンチを迎えた”帰って来た地球防衛バンド”。

ケンスケはいつもなら割り切ってしまうところだが、今回はなぜか
諦めたくなかった。

考えを必死に巡らせたケンスケはボーカルの候補として、ある女子
生徒の名前をあげた。

放課後遅くまで図書館にいたマユミを見つけ、膝をついて頼み込ん
でいるケンスケとトウジ。

「頼みます！」

「俺達のバンドのボーカルになってくれ！」

「私より可愛い子なんていっぱいいるのに……」

マユミはそう言われて困惑している。

「無理にお願いはできないけど……」

押し付けるのは良くないと思ったのか、レイは遠慮がちに頼んだ。
マユミは少し考えた後、ケンスケの顔を見詰めて答える。

「恥ずかしいですけど……私でよければ」

その日の晩。ベッドで寝ているマユミは、一人呟く。

「なんで、ボーカルなんか引き受けてしまったの……？」

やがてマユミは自分の心が映し出されるような不思議な夢を見た。
夢の中には、乗客のいない電車の座席で一人で座って本を読む自分
がいる。

「私は本が好き。本の中には、私の心の中に土足で踏み込んで来る
乱暴な人が居ないから」

「そう、よかったわね」

マユミの心の声が聞こえてくる。

しかし、自分の声の他にそれに答えるもう一つの声が聞こえてくる。

「私は家の中が好き。別に楽しい事も起きないけど、辛い事も起き
ないから、自分の好きなように出来るの」

「本当にそう？」

「めんどくさいから、話すのは嫌い。どんなに言葉を重ねても、
お互いの事は理解できないから」

「私はあなたのすべてが分かるわよ」

「でも喋らないと私は引っ込み思案で弱い子だと思われる。私はそ
んなイメージを押し付ける人は嫌い」

ふと気づくと、マユミの夢の中の自分が座っている座席の向かい側の席に、顔を伏せたケンスケが座っている。
ケンスケは下を向いて微動だにせず、マユミの方を見ていないようだ。

「相田くんみたいな人は今まで居なかった。だけど期待して裏切られるのは怖い。だから私は本に逃げ込む」

「そうやって諦めてしまえば楽なのね」

マユミの目の前の映像が断片的に浮かび上がっては切り替わっていく。

泣き叫ぶ幼いマユミ。

床にぐったりと泣き崩れて倒れている女性……それはマユミの前の母親。

背広を着た男性……それはマユミの前の父親だった。

いつの間にかケンスケの姿は消えて、電車の中に居るのは本を読んでいるマユミ一人になっている。

そして涙を流している自分に気がつく。

「……でも、涙が出てくるのはなぜなのかしら」

次の日、シンジたちが教室で授業を受けていると、突然外から爆発音がした。

「何や、事故かいな!?!」

トウジは驚いた声を出して、シンジとケンスケと一緒に窓へ駆けやる。

するとまゆのような形をした使徒が空中に浮遊しているのが見えた。マユミはその後ろで、突然腹部に苦痛を感じてうずくまってしまう。

同時に、緊急避難命令のアナウンスの音が鳴り響いた。
教壇で英語の授業をしていたミサトは、引き締まった顔でシンジたちに号令をかける。

「シンジ君、アスカ、レイ！ネルフ本部へ行くわよ！」

「はいっ！」

「頼んだで、シンジ！」

「エヴァの活躍、見せてくれよな！」

トウジやケンスケ、クラスメートの声援に見送られてミサトたちは教室を出て行こうとする。

しかし、マユミが鋭い声でミサトたちを呼び止める。

「先生、お願いします！ 私を殺してください、お願いします！」

「な、何言ってるのよ？」

ミサトは脈絡のない発言にただただ驚くしかなかった。

「わかるんです……。私の中にそこに居る怪物のコアが居るんです」

使徒が現れた次の日、マユミは腹部に違和感を感じていた。

この前の夜には心の中を覗かれるような奇妙な夢を見た。

そして、今日使徒が再び現れたとたん、また下腹部に強い苦痛を感じだした。

「そんな……？」

「だから早く私を殺して下さい、手遅れになる前に！」

ミサトをはじめ、シンジたち、そしてクラスメートは驚きすぎて全

く動けなかった。

「そんなこと、できるわけないだろ？」

固まったみんなの中で一番早く動いたのはケンスケだった。そう言つてマユミの肩を正面から力強くつかんだ。

「私、みんなに迷惑を掛けて、これ以上嫌われるのは嫌だから！ そんな事を考えてしまう自分も嫌！」

マユミは泣きながら顔を両手で覆つて、しゃがみこんでしまった。ミサトはゆっくりとマユミに近づいて頭を優しくなで撫でながら、穏やかな笑顔を浮かべてささやきかける。

「でも、駄目よ」

驚いた様子で顔をあげたマユミ。

「だって、死んじゃったら、好きも嫌いも、ないじゃない……ねえ、相田君」

ミサトに話を振られたケンスケは、照れた様子で慌ててマユミの肩から手を離す。

「クラスみんなは早くシエルターへ。相田君も私達と一緒にネルフについて来て。ネルフの病院で山岸さんをリッコに診てもらったら、側に居てあげて」

<ネルフ本部 103号病室>

ネルフへの移動中に下腹部の痛みがひどくなり気を失っていたマユミは、ベッドの上で目を覚ました。

「ここは……？」

「気がついたか、山岸」

「相田君……」

マユミの側にずっとついていたケンスケが声をかける。

「あの怪物は、どうなったの……？」

「なんか、殻に閉じこもったまま変化が無いみたいなんだ。碇たちはエヴァに乗って待機してにらみ合いが続いている」

時計はすでに夕方の時刻を表示しており、マユミは長い間眠っていたことに気がついた。

しばらくの間、静寂で部屋が満たされた後、騒がしい足音が部屋の外からこちらに向かってやってくるのに二人は気づいた。

ドアを開けて入って来たのは大人のネルフの職員たち数名。先頭に立っている人物の姿を見かけてケンスケは驚いた。

ケンスケの父親である、調査部所属の相田二尉だったからだ。

「パパ！」

「……ケンスケ、その娘から離れるんだ。使徒のコアが宿っているそうじゃないか、危険だぞ」

「なんで、その事を……まさか……」

ケンスケは父親のパソコンからデータを時たま盗んでいたが、それ

は逆にケンスケの情報も父親に知れる可能性があった。

「息子の安全を考えるのは父親としての務めだ」

そう言つてケンスケの父である相田二尉はベッドで起き上がつていたマユミの腕を手についた。

「嫌つ、離してください……………痛つ！」

相田二尉の腕を振り払つたものの、マユミは引き出しの角で手の甲を切つてしまったようだ。

赤い血がにじんで滴り落ちて行く。

「何をするんだよ、パパ！」

「邪魔をするな！」

相田二尉を制止しようとしたマユミを相田二尉が今度は殴り飛ばされた。唇の端が切れたのか、ケンスケの口からも赤い血が流れている。

「相田君！」

ケンスケに駆け寄ろうとしたマユミを相田二尉が今度は逃げられないようにしっかりとつかむ。

その時、病室のドアが開いてゲンドウとコウゾウが姿を現した。

「……………何の騒ぎだ」

「こ、これは司令……………なぜこちらに……………？」

「指揮は加持特佐に一任してある」

相田二尉は汗を垂らしながら弁明を始める。

「使徒は現在、まゆの中で成長を遂げている最中だと聞きました。そして、いずれは進化を遂げて再度侵攻を開始すると」

「機密情報が君のような部外者に漏れるとはな」

相田二尉はマユミを指差してさらに言葉を続ける。

「そこで考えました。使徒のコアをここで破壊し、災いの元をここで絶つべし、と。それが被害を最小限に抑える作戦です……」

そこまで話した相田二尉はゲンドウに殴られ、鼻血を流した。

「何が作戦だ……お前は加持特佐の苦しみがまるでわかっていない。そんなので加持特佐を使徒呼ばわりするとはな」

ゲンドウはうつろたえて自分を見上げる相田二尉と、一緒に居たネルフ職員たちの前で、相田二尉の血にまみれた顔を指差す。

「お前の血の色と、あの娘やお前の息子、そして加持特佐に流れる血の色……違う色をしているか……？」

「……………」

相田二尉を含めたネルフの職員たちは下を向いて黙り込む。

「人類の存亡を賭けた戦いに臆病者は無用だ……ここから……ネルフから出て行け！」

ネルフの職員たちは泡を食って出て行く。

相田二尉だけが固まったようにその場に立ちつくしている。動かない相田二尉にゲンドウは苛立っている様子だった。

ケンスケがそんな父親に向かって声を掛ける。

「早く持ち場に戻れよ、パパ」

「すまなかったな、ケンスケ」

相田二尉はそう言うと、ゲンドウに敬礼をして部屋を出て行く。

ゲンドウとコウゾウもお礼を言うケンスケとマユミに軽く声を掛け、病室を出て行った。

廊下に出たゲンドウはコウゾウに向かってポツリと呟く。

「……もう少しで相田二尉と同じ安易な過ちを犯す所でした、先生」
「他人のふり見て我がふり直せとは言ったものだ。加持特佐には見舞いに行ったと伝えよう」

病室に残されたマユミとケンスケの二人は、穏やかな表情で見詰め合っていた。

ケンスケはマユミの手を見ると、慌てて手当てをする。

「……上手いんですね」

「ああ、俺は軍事マニアだからな」

ケンスケはマユミの手当てをしながら独り言のように話を続ける。

「……もっと自分に自信を持てよ」

「……」

「自分の気持ちを通せばさ、他人には嫌われることはあるかもしれないけどな……俺も嫌だった」

「相田君と私って似ているのかもしれないね……」

「でもさ、自分が好きだって気持ちの方が大切じゃないか？」

「……」

「完全に嫌われないなんて無理な話さ。傷つくことを恐れてたら、相手を好きになる事もできないんだ」

「でも……」

「俺はもう自分の気持ちに正直に生きる事に決めたんだ」

ケンスケは手当てを終えて、マユミの手を強く握る。

「俺は……君のことが……」

マユミは突然気を失い、体から力が抜けた。

ケンスケには意識を失ったかのように見えたマユミ。

しかしその時マユミは自分の体から何かが消えて行くのを感じる。

「私はもうあなたに頼らなくても、心を満たすことができそうな気がする」

「そっ……残念ね……」

マユミが心の中で呼びかけると、以前に自転車に乗っていた自分を呼び寄せたあの声が聞こえた気がした。

ネルフの発令所では、使徒がまゆの状態のまま死滅したと騒ぎになる。

リツコやマヤたちの調査の結果、ネルフ本部内の病室にあった使徒の微弱な反応……すなわちマユミからの使徒のコアの反応が完全に消失したのが原因だと分かった。

詳しく体内の状況を調べられたマユミは使徒の細胞が確認されず、ミサトも安心して胸をなでおろした。

「あ、あのさ……山岸……俺は……」

「相田君。今度、地球防衛バンドで発表する曲の歌詞、私に書かせてくれませんか？」

「えっ……でも、もう3日しかないぜ？」

「できる所まででいいんです。それで……作曲の方をお願いしたいんですけど……」

それからケンスケとマユミの二人は退院したばかりにもかかわらず、精力的に作詞、作曲活動に埋没した。

地球防衛バンドのメンバーであるトウジ、レイも積極的に練習に参加し……転入生歓迎会当日を迎えた。

転入生歓迎会の会場は音楽室を貸し切って行われた。

そして2・Aのクラスメイトたちもそれぞれのグループに分かれて出し物を行う。

アスカとシンジとヒカリのグループは予定通りお菓子を振る舞っていた。

そして、いよいよケンスケたち、”帰ってきた地球防衛バンド”の出番になった。

ボーカルとして舞台上に立ったマユミは、軽く微笑んで挨拶をする。

「みなさん。今日はありがとうございました。この街に来て私は、いろいろな人の優しさに触れる事が出来た気がします。……そんなみなさんへの感謝の気持ちを込めて歌います。『君が君に生まれた理由』……聞いてください」

穏やかな音楽が流れ、作詞・山岸マユミ、作曲・相田ケンスケの『君が君に生まれた理由』が演奏され、マユミが歌い始める。

前の歌『奇跡の戦士エヴァンゲリオン』は明るく勇ましい曲だったが、今回の曲はしっとりとした美しさを感じさせる曲だった。

曲が終わった後、聴衆はうっとりとしたように余韻に浸っていたが、ゲンドウの力強い拍手を皮切りに、大きな拍手が湧きあがる。拍手の中でマユミは笑顔で頭を下げ、その歓声に応えていた。

「ふう、これで”E計画”は大成功ね」

ミサトはそう呟き、転入生歓迎会は大盛況のうちに幕を閉じた。しかし、マユミはまた転校することになってしまった。

もともとマユミの父親は国連の技術者で、技術交換のための短期的な滞在だったらしい。

ケンスケはミサトの計らいで、学校の授業を欠席して見送りに行くことが許された。

マユミの乗る予定の新幹線が到着し、乗降口の扉が開く。見詰め合う二人はお互いになかなか言葉が出なかった。

「……引越し先から手紙を書きますね」

「……ああ」

マユミはそれだけ言って、新幹線の中に乗り込む。

ミサトは後ろからこの不器用な教え子たちの様子を見て苦笑していた。

ケンスケとミサトに見送られて、マユミの乗る新幹線は発車し、遠ざかっていった……。

一方そのころ……教室ではシンジが浮かない表情をしていた。

「どうしたのシンジ、もしかして山岸さんの事が気になるの？」

アスカがやきもきしながら尋ねると、シンジは首を振って否定する。

「ううん、やっぱり生き物はみんな死にたくないのかな……って」

「そりゃそうね。ダンゴムシだって命の危険を感じれば必死に抵抗するわよ」

「小さな虫も五分の魂と言うわ」

アスカとレイの言葉を聞いてシンジはため息をついて、窓から蒼い空を眺める。

「使徒も、そうなのかな……」

シンジは悲しそうな顔をしてそうつぶやくのだった。

第二十四話 再度のシ者

<ネルフドイツ支部 会議室>

ネルフドイツ支部の会議室では、緊急のゼーレの会議が開かれていた。

「加持ミサト議長、これは我々ゼーレに対する背任行為ではないのか？」

ゼーレの会長であるキール・ローレンツは書類を取り出してミサトの席へ向かって乱暴に放り投げた。

床に散らばった書類に書かれているのはゼーレの支出報告書の明細。所々の金額の欄にマーカーで赤い印が付けられている。

「ゼーレの目的は使徒を倒すことだ。そのための経費は惜しむまい。だが我々は慈善団体では無いのだよ」

「左様。印がつけられた金額の支出。表向きはエヴァの整備や新技術の開発となっているが、実体は別の物」

「ダミー会社を使ってNPO法人や、戦災孤児保護団体への出資とは舐めた真似をしてくれる」

他のゼーレの議員たちも口々にミサトをなじる。

「加持ミサト君。篤志家を気取って自分の給料の中から寄付するのはいっつこうに構わんが、議会の資金に手をつけるのはやりすぎではないかね？」

「……はい」

ミサトはそう返事をして下唇を噛んだ。

ゼーレの議員たちは自分たちが生き残るために巨額の資金をエヴァ関係につき込むのはためらわない。

世界各国で同時に進められているエヴァ量産機建造計画もその例。またエヴァの新武装の開発についても概算要求額がそのまま通過する。

ミサトは目の前を通過する兆単位の資金に対して、議長権限を乱用し、社会奉仕団体へ寄付を行っていた。

しかし、ミサトもリョウジも軍事についてはプロフェッショナルだが、資金洗浄などの知識は浅かった。

幼稚な隠ぺい工作を今まで見逃してきたキール達だったが、今こそ時期到来とばかりにミサトの罪を暴いたのだ。

「ただいまをもって、君を議長から解任する」

キールの宣言に、ミサトは次はどんな罰則が下されるのか唾を飲み込む。

「ただし、使徒殲滅戦における指揮など今までの功績を考慮し、ゼーレの議員資格喪失以外の罰則は課さないものとする」

その言葉にミサトは驚いて息をのむ。

「なにか、不満でもあるかね？ 加持特佐」

ミサトはほっと安心した表情を浮かべる。

「いえ、格段の恩赦、ありがとうございます」

「では、今から君はゼーレの議員では無い。直ちに退席したまえ」

一礼をしたミサトは、足早に荷物をまとめて退出して行く。

「キール議長、やっと長かった茶番劇も終わりですな。しかし、なぜ加持特佐をお許しになったのです？」

質問した議員の男とは別の議員の男がいやらしい笑い方をする。

「あの女の安心しきった顔、それが苦痛にゆがむ様を見るのはまた格別かもしれませんな」

また別の東洋人風の年配の議員が二つのファイルを組み合わせ立てて、器用に『人』という文字を作る。

「支えを失った者ほどもろいものではありませんな」

老人が片方のファイルを引き抜くと、もう片方のファイルは音を立って倒れる。

「犬の始末は犬にやらせよう……」

キールがそう締めくくると、ゼーレの緊急議会は終了した。

<ネルフ本部 第一発令所>

ミサトがドイツ支部に出かけている間に、ネルフのセンサーが使徒を感じした。

「私はあと30分でそちらにつくわ。それまでなんとか持たせて」

ドイツから日本に戻るネルフ専用機の中で使徒接近の報告を受けたミサトは、そう指示を出した。

ネルフにとって悲劇だったのは、ミサトに代わるほどの指揮を執る逸材が存在しなかったことである。

自然と代理としてゲンドウが指揮を執る事になったが、独創的でもある作戦を思いつくこともなく、典型的な策をとる。

出現した使徒は輪のような状態のまましばらく進むと、動きを止めた。

「使徒は滞空して回転を続けています」

マコトの報告のように、発令所のモニターには滞空している使徒が映し出される。

「戦略自衛隊の戦闘機に攻撃命令を出せ」

ゲンドウの命令により戦闘機が接近し、ミサイルによる攻撃を加える。

ミサイルは使徒の本体に当たる前に、ATフィールドに阻まれて爆発した。

「目標のATフィールドは依然健在」

反撃もせず、使徒はゆっくりと回転を続けるのみ。

その緩い動きをみたゲンドウは、先手必勝とばかりにエヴァ三機の出撃を命じる。

「エヴァ三機は、目標を取り囲むように出撃。ATフィールドを中和し、一気に倒せ！」

ゲンドウの作戦は至極もつともなものと思えた。
オペレータの三人も次々とエヴァを地上に射出した。

リツコは胸の底で何か嫌な予感を感じていた。

確かに、物理的な攻撃でやってきた昔ながらの使徒が相手なら妥当な作戦だ。

しかし、最近の使徒は知恵や心と言ったものを備えつつある。

最初に地表に射出されたのは発射ケージから一番距離の短かった弐号機。

すると、エヴァに反応したのか使徒は輪の形を崩し、紐のような形になって弐号機に向かっていく。

「弐号機、応戦しろ！」

「だめです、間に合いません！」

オペレータのマコトの叫び声と同時に、使徒は弐号機のATフィールドを突き破り、弐号機の下腹部へと突き刺さった。

アスカは紐のような体の使徒をつかんでパレット・ライフルで攻撃するが数発撃つても効き目が無い。

遅れて初号機と零号機も地表に射出される。

発令所はエヴァの武器も効かない使徒を相手に緊迫を通り越して絶望に包まれそうになったが、弐号機のアスカから通信が入る。

「初号機用に作った、マゴロク・E・ソード、あれを使えば使徒も切り裂けるはずよ！」

「そうね、あの切れ味なら使徒を分断できるかも……シンジ君、ポイントX130Y470のビルに武器を射出させるわ」

「……はい！」

リツコに指定された場所に向けて初号機は走り出す。

レイは少しでも使徒を止めようと弐号機の方に直接向かっていく。

「使徒、弐号機と接触しました！」

「弐号機のATフィールドは展開されているのか？」

シゲルの報告に、ゲンドウも慌てて席から立ちあがる。

「はい、しかし使徒に浸食されています！」

「使徒がエヴァと融合しようとしているの？」

マヤの報告に、リツコはそうつぶやいた。

「……すまん、私のミスだ。安易にエヴァを出すべきではなかった」

自分の作戦の失敗を悟ったゲンドウは、謝りながら自分の判断を悔いた。

「くっ……くっく」

弐号機のエントリープラグの中で、アス力は強い痛みを感じている。

「弐号機の侵食度、5%！」

「早くしてくれ、シンジ！」

先発した零号機が使徒の攻撃圏内に入ると、弐号機に浸食した側と反対の使徒の体の先端が零号機にも襲いかかる。

だが、零号機に接触して間もなく初号機のマゴロク・E・ソードが使徒の先端を輪切りにして切り裂いた。

「いける！」

シンジの確信を込めてそう呟き、零号機の無事を確認すると式号機の元に向かう。

輪切りにされて多少短くなった使徒の先端は今度は初号機に狙いを定めるがまたシンジは輪切りにして切り捨てた。

そしてかなり式号機に接近してきた時、しなる様に使徒の先端がまた初号機の脇腹に突き刺さる。

慌てずシンジは自分の脇腹に刺さった使徒を切り裂こうとする。

「シンジ君、横に輪切りにしても結局はトカゲのしっぽ切りよ！縦に切り裂いて！」

「了解！」

リツコの指示に従い、シンジはマゴロク・E・ソードを構える。

その時シンジにだけはアスカの弱々しい声が聞こえて来た。

「タスケテ……シニタクナイ……」

その声は使徒から発せられたものだと思っただけ、声色はアスカそっくりだ。

「コロサナイデ……オネガイ……」

「目標、さらに浸食！」

「シニタクナイ、シニタクナイ、シニタクナイ！」

シンジはその声に、使徒にとどめをさせないでいた。

その間に式号機のエントリープラグ内のアスカの意識は遠のいて行った……。

混濁した意識の中、アスカは自分がオレンジ色に満ちた水たまり以外は赤い空しかない、不思議な空間に居る事に気がついた。

アスカの目の前にはプラグスーツを着たもう一人のアスカが居る。

「……アンタの命をちょうだい？」

目の前のアスカは無邪気な笑顔でそう言った。

「……イヤ、そんなの無理な話よ」

すると、アスカは胸に痛みを覚え、頭の中に眩しい光のようなものが広まったと思うと一面白い世界が広がる。

目の前にシンジの姿が浮かび上がると、幻のように消え失せる。

「……シンジ？……レイ……ミサト……ヒカリ……リツコ……リョウジさん……みんな……なんで突然思い浮かぶの？」

「アンタの心を壊しているの。アンタを消して、アタシがアスカになるの。……そうね、式波・アスカ・ラングレーとでも名乗ろうかしら」

「……そ、そんな……」

「アタシはアンタみたいに不完全な人間にはならないわ。自分一人で生きて行くの。他の人間と馴れ合うなんてまっぴらよ」

「……いやっ、私はそんなの認めないっ！」

「無駄な抵抗はやめなさいよ、このままじゃ人格が保てなくなるっ！」

「……いやっ、いやっ、いやーっっ！！」

アスカは自分の叫びと共に、白い空間も赤い世界も、自分の意識全てが崩壊して行くのを感じた……。

「シンジ君、早く使徒にとどめを刺して！ このままじゃアスカが！」

シンジはリツコの叫びにやっと意識を正常に戻した。
気がつけば命乞いをするアスカの声は途切れている。

「うおおおお！」

マゴロク・E・ソードを握りしめ、シンジは使徒の体を縦に切り裂いた！

切り裂かれた使徒はコアを失ったのか、ドロドロに溶けて消えて行く。

「大変です、弐号機パイロットの意識がありません！」

弐号機のエントリープラグ内でだらりと垂れるアスカに、発令所は騒然となった。

<ネルフ本部 303号病室>

ミサトがネルフ本部に戻った時にはすでに使徒戦もその後の事後処理も全て終わっていた。

急いでミサトは、アスカが運び込まれた病室に駆けつけた。

部屋の中ではベッドの横に居るシンジとレイ、そしてベッドで人形のように横たわるアスカが居た……。

「アスカお姉さんは、息はしているの。でも目を覚ましてくれないの……」

「僕が使徒にとどめをさすのが遅かったから……僕のせいだ！」

「そんなに自分を責めないで……」

ミサトがなぐさめてもシンジは自分を責める事を止めない。
そこでミサトは横たわるアスカの手をシンジに握らせた。
途端にシンジの体から力が抜ける。

「そう……こうやってアスカの手をずっと握ってあげなさい……アスカは生きてるんだから……」

「アスカの手……暖かい」

「ミサトさん……私も、反対側のアスカお姉さんの手を握っていいですか……？」

「もちろんよ。そうね……二人とも、アスカに話をしてあげなさい。そうすれば……戻ってきてくれるのも早くなるかもしれないわ……」

シンジとレイが頷くのを見て、ミサトは病室を立ち去った。

ミサトがシンジとレイに言ったことは何の根拠もない。

しかし、なによりもミサトはシンジとレイに落ち着いて欲しかった。発令所に戻ったミサトはリツコやゲンドウたちとアスカの異変の原因について話し合ったが、アスカが何らかの精神的ショックを受けたという推測しか得られなかった。

「悔しいけど、科学の力では人間の魂や精神のデータ解析はできないの」

リツコはそういって、発令所のコンソールを思いっきり叩いた。手を組んで黙って司令席に座っていたゲンドウがおもむろに口を開ける。

「……………シンジとレイの様子はどうか……………」

「相当なショックを受けています。今はアスカの側に居させる事で心を落ち着かせていますが……………」

「今の精神状態で二人をエヴァに乗せるのは危険と考えます」

ミサトの報告をリツコが補足した。

コウゾウが思わずため息と共にこぼす。

「エヴァ無しで使徒と戦えと言うのか……」

「元々使徒を倒すのは私の責任です。それを息子たちに背負わせてしまった……私は約束を果たすことができなかったのです」

「約束？」

ゲンドウの言葉にミサトが疑問に思っ て眉をひそめていると、ネルフ諜報部の人間がやってきた。

「何事？」

「赤木博士、加賀ヒトミの所在をご存じありませんか？」

聞かれたリツコは直ちにヒトミに電話を掛けるが、繋がらなかった。

「加賀ヒトミって、リツコんところの部下でネルフ技術課の、マヤつちと同じ年の子よね。彼女がどうかしたの？」

「……ここだけの話ですが、彼女には合成麻薬製造の容疑がかけられているのです」

「何ですって!？」

ミサトは諜報部の男の報告に驚きの声をあげた。

「この件に関しては加持リョウジ君と剣崎キョウヤ君にも調査を頼んでいた。どうやらゼーレが関与しているらしくてな。今まで巧妙に隠され、見つけられなかったのだ」

「しかし、ヒトミが麻薬密造なんて信じられません!」

ゲンドウの言葉の後にリツコがたまらず叫び声をあげる。
マヤも身近な人物の容疑にショックを受けているようだ。

「加持特佐がゼーレの議長を解任されたのも、それが影響をしているのかもしれない」

「有力な資金源を得られたから、切り捨てたと言う事か」

「麻薬の密売益でエヴァを建造するなんて、間違っているわ」

ゲンドウとコウゾウが呟く側で、ミサトは怒りをあらわにしていた。

「加持リョウジ君と剣崎君は優秀だ。そのうち奴らのしっぱをつかんでくれるだろう」

<長野県松代市 第2実験場跡地>

エヴァ参号機の使徒化事件で廃墟となったネルフの第2実験場。
そこにリョウジとキョウヤの二人は来ていた。

「いやあ、廃墟を隠れ蓑にして密造工場を作るとは敵さんもなかなかやりますなあ。すっかり裏を書かれたよ」

「……余計なおしゃべりはそれくらいにして、行くぞ」

ネルフ諜報部のスーツをきっちり着た男、剣崎キョウヤはそう言つてリョウジをにらみつけた。

もつとも、キョウヤはサングラスをかけているのでその視線はつかがい知れない。

「やれやれ、お堅いね……」

リヨウジはそう言っただけ肩をすくめると、表情を真剣な眼差しに変えて工場の奥へと続く階段を降りて行く。

工場の中は迷路のようになっていたが、リヨウジとキョウヤは生産設備を一つ一つ確認して行った。

奥深くの研究棟で、リヨウジは行方不明になっていた加賀ヒトミを発見する。

「彼女は……！」

「……加賀ヒトミ。意外な人物が首謀者だったとはな……」

「待てよ剣崎。俺は彼女が首謀者だとは思えない。協力しているにしても、誰かしら黒幕が居るはずだ。そいつを暴いて……」

キョウヤはリヨウジの額に拳銃を突きつける。

「……お前はここで、裏切り者として死ぬんだ」

「そうやって、いつまでゼーレの走狗を続けるつもりだ？」

「……生きる目的を見いだせない故の渴きをいやすためだ」

「生きる目的なんて、いくらでも見つけられるさ。そんなことを言っている、加賀君が悲しむぞ？お前は知らないと思うが、彼女は君のことを……」

リヨウジがそこまでしゃべった瞬間、キョウヤは拳銃を握る手に力を込めて引き金を引いた。

「即死だ、悪く思ふな」

撃たれて倒れたリヨウジに対してキョウヤは無表情にそう吐き捨てた。

キヨウヤが工場の建物から脱出して離れた後、背後で爆発が起きた。その爆発は工場ごと松代の第2実験場を吹き飛ばし、付近一帯はガレキも残らないほどまっさらに一掃されているだろう。

剣崎キヨウヤはネルフ本部のゲンドウに報告を入れた。

麻薬密造工場を発見、首謀者は技術開発部第一課所属、加賀ヒトミ。保安課報道課第一課所属、加持リョウジは組織の協力者だったと判明、危害を加えて来たため正当防衛行為により射殺。

その後工場自体が大破したため、関係者は全て死亡、物的証拠は消失、ゼーレとの関係は否定も肯定もできず、と。

<ネルフ本部 司令室>

司令室に呼び出されてゲンドウとコウゾウの前で剣崎が詳しく報告をするのを聞かされたミサトとリツコはあまりのショックに膝を折った。

「ねえ、リョウジが麻薬の密造組織に協力していたなんて、嘘でしょう！？」 嘘だと言ってよ、剣崎君！」

「……残念ながら事実です」

ミサトは剣崎のスーツの襟をつかんで泣きじゃくっている。

その姿はまるで悲劇に打ちひしがれる少女のようだった。

ゲンドウはここまで取り乱すミサトの姿をずいぶん久しぶりに見た気がした。

彼女の胸中を思い図って、ゲンドウは重いため息を漏らす。

リツコも信頼していた部下の犯罪行為とその死に胸が押しつぶされそうになり、必死に涙をこらえていた。

「……ネルフの最高司令官の部屋はここかな……失礼するよ」

少年の声に驚いて、室内に居た皆が声のする方向に視線を向けると、ネルフ職員の制服を着たカヲルが立っていた。

「あなた、生きていたの!？」

「あの時、僕はA.T.フィールドを張って、生き延びたのさ。かなり危なかったけどね」

ミサトが驚いた顔でそう言うと、カヲルは涼しい顔でそう答えた。

「この前現れた、反応の無かった使徒はあなたね？ 司令、早く侵入者排除の警報を!」

リツコにゲンドウは落ち着いた声で答える。

「渚君は私の古い友人だ。問題は無い」

カヲルは不機嫌な顔をして、ゲンドウの方を見る。

「誰だい、君は？ 僕は君みたいなリリンは知らないよ」

「……そうか、ではなぜ君はこの部屋に来たのだ？」

「僕はすぐにでもこの地下深くにあるアダムと接触してサードインパクトを起こすことができる。……でもその前にやりたいことがあるってね」

カヲルは不機嫌そうな顔から強く憤慨した表情に変えてゲンドウをにらみつける。

「僕の”兄弟”を殺したりリリンのリーダーにも、絶望を与えておき

たくてね」

「……復讐のための戦いは何も生み出さないわ!」

そう叫んだミサトの方にカヲルは視線を向ける。

「僕の今の気持ちは最高なんだ……君からも感じるよ……憎しみの心が。信じていた人間に裏切られて憎んでいるんだろう」

カヲルがそう言うと、リツコは気がついたように自分の胸を押さえる。

しかし、ミサトはキツと齒を食いしばってカヲルをにらみ返す。

「違う、私が今憎んでいるのは……信じていた人を一瞬でも疑ってしまった私自身の心よ!」

ミサトの叫びにリツコは再び息をのみこみ、胸に手を当てて呟く。

「そうね……私も彼女を……ヒトミを信じてあげないと……!」

「……何を言ってるのさ……君たちリリンが本当に分からなくなつた……イライラする」

カヲルはリツコを苛立たしげに見て、ポケットの中に突っ込んだ手を強く握りしめた。

「カヲル君……あなたは人間の美しい部分と醜い部分を同時に見ってしまった……だからその矛盾に耐えきれないのよ」

「こんな汚れた世界はいらない……もう残す価値もないんだ……」

ミサトが優しくそう諭すと、カヲルは頭を抱えてそううめき出した。

「……それがお前の本心か？」

黙って様子を見ていたゲンドウがカヲルに問いかけた。

「……何も無い孤独な世界を望む。それなのにお前は”兄弟”を失った悲しみを抱えているのだろう？ それは矛盾してはいないか？」
「僕にはもう悲しみが存在しないんだ」

「……そんなことはない、生きていれば幸せになるチャンスはいくらでもある」

「でも、僕は……」

「そういつて、自分で可能性を切り捨てしまうのか？」

「僕は、リリンとは違う存在なのさ……」

ゲンドウは椅子から立ち上がり、ゆっくりとカヲルに近づくと、ポケットに突っ込まれていた手を引きずりだした。

「俺は、お前を人間だと……今でも友人だと思っている」

「……やっぱり僕は君を知らないんだ、転生を繰り返して来たから」
「そうか……六分儀と聞いても何も思い出せないか……」

「六分儀……何か懐かしい感じがするね……」

カヲルは心地良さそうに目を細めて自分の手首をつかむゲンドウの手に自分の手を重ねた。

「……何だかりリンを滅ぼすなんてどうでも良くなったよ」

カヲルは軽くため息をついて、ゲンドウに向かって微笑みを見せた。
しかし、すぐに悲しそうな表情を浮かべる。

「でも、君と一緒に歩いていくことができなくて残念だ。……転生

の時期が近づいている。僕はもう少ししたら死んでしまっただろうね」

「渚……」

「そんなに悲しそうな顔をしないでくれよ。僕にとって死は生の始まりなんだ。ただ……死を迎える前に”友達”の君の力になりたいんだ」

カラルの言葉を聞いたゲンドウたちは急いでネルフの食堂で働いていたヒカ리를司令室に呼び寄せた。

「あの……ミサト先生？」

いきなり連れてこられたヒカリはとまどいを隠せず、体が少し震えていた。

「ごめん、後で詳しく説明するから、先生を信じて」

ヒカリが目隠しをされる間にも、ミサトはヒカリが心細くならないように手を握っていた。

ゲンドウが目配せをすると、カラルがヒカリの前に立ち、手をかざす。

カラルがA.T.フィールドを発生させると、ヒカリから光るほこりのような物がカラルに移動して行く。

全てが終わると、ヒカリは気を失ったのか体が崩れ落ちた。

ミサトが力を失ったヒカリの体を抱き止める。

「……これで使徒の細胞は全部無くなったはずだよ。ショックで気を失っているけど、怪我はすっかり治ってる。使徒の細胞の影響でリリンの細胞の回復能力も上がったみたいだね」

「ありがとう」

ミサトはカヲルに向かって笑顔でお礼を言った。

「残念だけど、君の細胞だけは取り除くことはできない。長い間の負傷を経て同化しているし、何よりも君は”マスター”に選ばれたリリンだから」

「……そう」

「では、最後に……式号機パイロットのことも頼む」

ミサトと顔を向かい合わせて話すカヲルにゲンドウが呼びかけた。カヲルはゲンドウの方を向いて、軽く頷く。

「分かったよ、魂だけなら直接会わなくても連れていける。……死ぬ前に僕からもお願いがあるんだ、僕が逝く瞬間まで手を握っていてくれないか？」

「……ああ」

カヲルに呼ばれたゲンドウはカヲルに近づき、手をしっかりと握った。

「僕がきつと最後の使徒だ。僕が消えたら、やつらが動き出す……気をつけて……くれ……」

カヲルの全身から力が抜けた後もなかなかゲンドウはその手を離そうとしなかった。

失われた手のぬくもりを自分の手で温めるかのように。

「アンタ、いつまで寝ているのよ、いい加減に起きなさいよ！」
「ん……?」

アスカが目を覚ますと、そこは赤い世界。

目の前には、プラグスーツを着たアスカと、ネルフの制服を着た少年……カオルが立っている。

「やっとお目覚めね、惣流さん」

「あ、アンタねえ……!」

「こつちが名前で呼んでやってるんだから、アンタも『式波』って名前で呼びなさいよ!」

「何よその偉そうな態度は、アタシを殺そうとしたことを謝るのが先でしょう!」

「やれやれ、ヒステリーは恐ろしいね……」

言い争う式波アスカと惣流アスカに突っ込みを入れたカラルは、二人のアスカのユニゾンキックで吹っ飛んだ。

「……ゴメン、アタシのせいでアンタをこんな目に遭わせてしまった……」

「何よ、急にしおらしくなって……怒ったり謝ったり忙しいやつね」

「そりゃ、惣流さんも同じでしょう」

「アンタさあ……いつまでアタシのそっくりさんを演じているわけ?」

「それがそうとも言えないのさ」

式波アスカとの話に夢中になっていた惣流アスカは突然復活を遂げたカラルに驚いた。

「輪廻転生って聞いたことあるかい？」

「……ん、何となく」

「魂は転生を繰り返す存在なんだ。ただ……この世に存在する器が使徒なのか、人間なのかの違いさ」

「だからさ今度はアンタが使徒になる可能性もあるわけ。わかる？」

「……アホくさ。アタシがあんな分裂したり、宇宙からおっこつてくる生物になるわけないじゃん」

「まあ、信じてもらえなくてもいいさ。もし、次なる世界の可能性があるなら、配役もいろいろ変わっているかもしれないね……惣流さんと式波さんがまた出会ったらうるさそうだけど」

クスリと笑うカヲルに惣流アスカは不快感を感じてむくれる。

「……そろそろ時間だよ。最後に惣流さんに何か言っておきたいことがあるんじゃない？ アルミサエル……いや式波さん？」

「シンジのやつを許してやってよ。そしていつまでも一緒に居てやって。……アイツは使徒の命まで気にかける……底無しのバカで優しいやつなんだからさ」

「そんなの、言われなくても。……でもシンジの優しさは全部アタシのものよ」

「ぜいたくね、同じアスカながら……」

あきれた表情の式波アスカと渚カヲルの姿はゆっくりと薄らいでいき……惣流アスカは赤い世界が崩れて、自分の目が覚めるのを感じた。

気がつくとは自分は病室のベッドの上に居て、両手を目の前で楽しそうに談笑するシンジとレイに握られている。

「……それでね、アスカったら自分でお菓子作りをするって言い出したのに、果物が上手く向けなくて投げ出したんだよ」

「そう、お姉さんは何でもできそうだけど、料理は苦手なのね」
「うるさいわねっ、今度は投げ出さないわよっ！」

起き上がったアスカは思わず握っていたシンジの手を振り払って、
シンジのおでこをはたいた。

「…………アスカ？」

「お姉さん…………」

シンジとレイの歓喜を含んだ驚きの声に、アスカは無言の笑顔で答えた。

その後、アスカの病室に顔を出したミサトはすっかり元気を取り戻したシンジたちの姿を見て笑みを浮かべた。

ミサトは安心すると、ゆっくりと病室のドアを開けて廊下に出て呟く。

「…………リョウジ…………私はまだ泣かない事に決めたわ…………やるべき事が残っているのに、あの子達を不安にさせるわけにはいかないから」

そしてネルフ本部には…………最終決戦の時が迫る…………。

第二十五話 Air Force One / 託される未来

<ネルフドイツ支部 会議室>

ネルフドイツ支部の会議室では、ゼーレの会議が開かれていた。

「約束の時が来た」

キールがそう告げると、それまでざわついていた会議室は静まり返り、緊迫した空気が流れる。

「我らの願いを妨げる使徒は全て倒された」

「しかし、我らの中に裏切り者が居る」

「碇ゲンドウは補完計画を我が物にしようとしている」

「手を打たねばならん」

ゼーレの議員が口々にそう述べる。

「ゲンドウとネルフに死を！ そして、人類に新生の道を！」

キールの言葉にゼーレの議員たちからシュプレヒコールが一斉に上がった。

「人は新たな世界へと進むべきである。その為のエヴァシリーズだ！」

キールがそう宣言すると、会議室のモニターには各国のネルフ支部に点在する輸送機にくくりつけられたエヴァ量産機たちの姿が映し出される。

輸送機は日本のネルフ本部に向かってゆっくりとしたスピードで飛び立つ。

それを見たゼーレの議員たちから歓声と拍手が上がり、キールはゆっくりと席から立ち上がり、熱い視線に見送られて会議室を退出して行く。

「素晴らしい演説でした、キール議長。私も心を動かされましたわ」
白衣を着たドイツ人の女性科学者がキールに端正な笑顔で話しかけた。

キールは彼女の言葉に眉一つ動かさずに答える。

「エルデ・ミツテ博士、世辞は要らん。ところで例のツェントル・プロジェクトの機体は完成したのか？」

「ええ、ウラジオストック基地に既に運んでありますわ。専用機を用意しました、お乗りください」

エルデ博士は自信たっぷりに笑いを浮かべ、キールと共に議長専用機に乗り込んだ。

その専用機はかつて米国の大統領専用機と同じ愛称でゼーレ内では呼ばれている。

専用機は、『God's in his heaven. All's right with the world……神は天に在り。世は全て事も無し』と書かれたネルフのシンボルマークが外されていた。

かつて、ノストラダムスの大予言で、1999年7月に人類が滅亡されるとされていたが、実際に宇宙より飛来したのは隕石一つだけであった。

しかし、死海に墜落したその隕石は普通の物では無く、オーバー・テクノロジー……すなわち超技術の塊だった。

その中にはこれから人類に起こりうる出来事を記した予言書もあり、それは『死海文書』と呼ばれた。

これに興味を持ったのは古くから存在する権力者と資産家が集いつくられた秘密組織ゼーレ。

人類補完計画の旗頭として新たにキールが議長になった。

「議長自ら日本に赴くとは驚きでしたわ。チルドレンを依り代に使用えば済む話ですのに」

「未熟な子供たちでは完全なる補完を行う事は難しい。だが俗欲にまみれた大人にも任せられん。私ならば真に平等な世界を作ることが出来る」

専用機に乗り込み、ゆつくりと座席に腰を下ろしたキールは向かいに座ったエルデ博士に話しかけられ、そう答えた。

「私は誰が神になろうと、一向にかまいませんわ。私が望むのはあの子の成長だけ……」

「我ら人類は汚れ無き存在で迎えないといけないのだ。審判の時を。悪く思ふなゲンドウ。私はただ人類という『種』をどうしても守りたいのだ」

うつとりと妄想に浸りはじめたエルデ博士を無視して、キールは視線を窓の外に移しそう呟いた。

『ウラジオストク基地まで4時間で到着、さらに1時間後には例の機体が起動可能です』

キールとエルデ博士への報告のアナウンスが機内に響いた。

<ネルフ本部 大会議室>

ゲンドウはゼーレからA-801が発令されたとの連絡を受けた。これは特務機関ネルフの特例による法的保護の破棄、及び指揮権のゼーレへの移譲を意味する。

A-801はゼーレからネルフに対する降伏勧告である。

降伏勧告をはねのけ、ゲンドウは全職員に退避命令を出した。

しかし、突然の理由無しの退避命令に不服を唱え、ネルフ本部に留まる職員も数多く居た。

ゲンドウは残った職員を大会議室に集め、撤退をするように説得することにした。

大会議室の席に着いたオペレータのマコト、マヤ、シゲルの三人は他の職員同様、ネルフの今後がどうなるのか推測して話しあっている。

「使徒はいないのに、どうして警報が発令されるの!？」

「僕だってわからないさ」

「結局、俺達は大事な情報は知らされていなかったんだな」

ミサトは高い壇上から職員たちを見下ろしながら、一人思いを巡らせている。

「出来損ないの群体としてすでに行き詰まった人類を、完全な単体としての生物へと人工進化させる補完計画か、まさに理想の世界ね。そのためにゼーレはエヴァを使うつもりなんだわ」

大会議室に職員の集合が終了したとの報告を受けたゲンドウとコウゾウはゆつくりと司令室を出て行く。

「先生、行きましょうか」

「人は生きていこうとするところにその存在価値がある。それが、エヴァに残ったユイ君やキョウコ君たちの願いだからな」

大会議室の壇上にゲンドウとコウゾウが姿を現すと、職員たちは私語を止め、室内は静まり返った。

「これからゼーレの軍隊たちがこのネルフ本部へ攻め入ってくる。目標はセントラルドグマにあるリリスと接触することだ」

突拍子もないゲンドウの発言に機密情報を知らなかった一般のネルフ職員たちは息を飲んだ。
耳を疑ったものも多かった。

「我々ネルフの軍は対人戦闘には慣れていない、その道のプロであるゼーレの軍隊の手にかかれば、ネルフ本部の防御網など無力に等しい」

「そしてゼーレの部隊は女性や非戦闘員など関係なく、容赦の無い殺戮を行うと聞いている」

ゲンドウとコウゾウの発言に、あちこちで悲鳴が起き、会議室は少し混乱が続いたがゲンドウの咳払いで辛うじて落ち着きを取り戻した。

「だから君たちはここから逃げて、生き延びてくれ。最後の私の命令を聞いてほしい……」

そう言って頭を下げるゲンドウに、席に座っていたマコトが立ちあがって叫ぶ。

「待つてください、それでは司令はどうされるのです！」

「私は……自らの手で大切なものを守り切れなかった無能な男だ、その事をやっと思ひ知った。もう……生きる事に疲れたのだよ」

ゲンドウは顔をうつむけさせてそう吐き捨てた。

「だが私にはネルフをここまで引きずってきた責任がある。こうなつた以上、単身でセントラルドグマに向かいリリスと共に自爆をするしかあるまい」

「そんな……司令、おやめください！」

ゲンドウの決意の言葉を聞いたマコトの叫ぶ声が続いて、大会議室に居る他のネルフ職員たちも口々に叫ぶ。

「司令、あなた一人責任がとれるほど、ネルフは軽い存在ではありません！」

「我らはネルフの一員、どこまでも司令と共に参ります！」

職員から湧きあがる声に、ゲンドウはそつと目頭を押さえる。

「……わかった、残りたいものはここに残れ。だが、無駄に死んではならん……非戦闘員の白兵戦はできるだけ避け、セントラルドグマまで後退できないのなら投降せよ」

「司令……」

「総員、第一種戦闘配備！」

ゲンドウの号令とともに、ネルフ職員たちはときの声をあげて大会議室を出て行く。

もちろん退避する職員もいたが、半数以上の職員は逃げずに配置に着いた。

壇上から退出する職員たちを見送っているゲンドウたちの耳に、警報が鳴り響いているのが届く。

リツコは共に行こうとするマヤを押し止め、一人でMAGIの機心ルームに向かう。

「MAGIの自律防衛は私と」母さん」に任せて。マヤは発令所で状況を職員みんなに報告してあげてちょうだい」

MAGIはドイツ・中国・アメリカ第一・第二・ロシアの支部から同時にハッキングを受けている。

ゼーレがネルフに対しMAGIの占拠を企てたのだ。彼我の戦力は5対1。不利は否めない。

「まずいな……MAGIを取られたら本部の施設はほとんど機能しなくなるからな」

コウゾウは焦った表情を隠さずにそう言った。

「無駄な抵抗になるのかもしれないのにね。バカなことをしていると思う？母さん」

MAGIの機心ルームでリツコはそう呟きながら、必死にキーボードを打ちつけている。

ピピピピピ ピー——ッ

モニターに映し出された、MAGIの状態を示す映像がオール・グリーンになる。

「奇跡は何度でも起こるものなのね。ありがとう、母さん」

リツコがそう呟いたところ、発令所のオペレータ席に座っているマヤ

は嬉しそうに声をあげる。

「MAGIへのハッキング停止しました！ ファイアーウォールを展開、これで外部からのアクセスは不可能です！」

「MAGIは前哨戦にすぎん、奴らの目的はセントラルドグマへの直接侵攻だからな」

コウゾウがそういうと、マヤの表情はまた暗くなった。マコトとシゲルは自分の銃の調子確かめている。

「相手は同じ人間なのに……撃つことができるの？」

マヤは二人の様子を見て話しかける。

「むざむざと殺されるわけにはいかないしな」

「私、人なんて撃てません」

「俺もそう思ったが、君を守るためなら仕方が無いさ」

「青葉君……」

ゲンドウは側に控えていたミサトに声をかける。

「至急、病室に居るシンジたちを避難させてくれ。連中の本命がエヴァの占拠ならまず、パイロットが狙われるはずだ」

「……！」

その言葉を聞いたミサトは息を飲んだ。

そしてすかさず発令所のオペレーター席に座っているマコトに声をかける。

「日向君。戦闘の指揮をお願い。ネルフ職員の命、あなたに預ける

わ

「……はい」

力強く返事をしたマコトに安心を得たミサトは体を発令所の出口に向けるが、再びマコトに呼び止められ振り向いた。

「あの……ミサトさん。戦いが終わったら一緒に食事でもどうですか？」

「そうね、一回ぐらい行っても良いかもね」

ミサトは穏やかな笑顔で答えると、再びシンジたちの居る病室に向かおうと発令所の出口へ向かう。

すると、出口の近くで下を向いて立ちつくしているネルフ諜報部員、剣崎キョウヤを発見した。

「……ゼーレとネルフのどちらに着くのか悩んでいるの？ 剣崎君にはその答えが分かっているはずよ。でなければ、ここに留まってはいいはず」

ミサトの言葉に、キョウヤはハッとして顔をあげてサングラス越しにミサトを見詰める。

「生きる意味を失っていた自分を拾ってくれた司令に報いることが全てだったな……」

「じゃあ、発令所のみんなを守ってあげて。ここはネルフの戦闘における生命線と呼ばれるところよ」

「……ああ。加持、俺は親友を……お前の夫を……撃った」

「今は、目の前のことだけを考えて」

ミサトは辛そうに顔をそむけて走り去ってしまった。

キヨウヤは自分の軽率な発言に顔をしかめたが、気合を入れ直し、武器を構えた。

<第三新東京市 第壱中学校 シェルター>

ミサトはアスカの病室に居たシンジ、アスカ、レイ、ヒカリを連れて、授業が行われている第壱中学校に向かった。

ミサトが元担任、現副担任を務める2 - Aの生徒は全員チルドレンの候補生だった。

チルドレンはゼーレに命を狙われているため、全員保護する必要がある。

また、比較的警備が薄いので、兵数が少ないゼーレの部隊に目をつけられやすいと判断した。

ネルフに関係のない生徒は直ちに帰宅させ、2 - Aの生徒たちは中学校の地下に隠されていたシェルターに集められた。

その入り口をミサトとネルフ保安部隊が固める。

「……ホンマにゼーレって軍隊がやって来るんやろか？」

「俺たちのクラス全員が、エヴァのパイロットの候補生だったなんて……」

「私たちは全てが終わるまでここでじっとして居るしかないのね……」

「大丈夫、ミサトはとっても強いんだから、どんな敵が攻めてきてもギッタギタよ！」

落ち込むトウジたちをアスカが明るく励ました。

しばらくすると、本当にゼーレの部隊が攻めてきたらしく、外が騒がしくなる。

「さすが加持特佐。あなたの奮戦振りを見ただけで敵は手出しを止めたようですよ」

「いいえ、まだ敵は侵攻の機会をうかがっている。油断はできないわ」

警備にあたっているネルフの保安部隊の口ぶりからうかがえるように、襲撃したゼーレの部隊はほとんどミサト一人に蹴散らされていた。

「ミサト先生すごい！」

「かっこいい！」

シエルターの中から外の様子を映しているモニターを見て、クラスメートたちは歓声をあげる。

シンジたちは一刻も早く戦いが終わる事を願っていた。

「父さんたち、大丈夫かな……」

「エヴァはダミープラグで起動させる予定だと、おじ様は言ってたわ」

シンジとアスカが不安そうに呟く中、レイは暗い顔をして黙ってうつむいていた。

「でも、やっぱり僕たちが動かした方がエヴァは何倍も力を発揮するし……エヴァ量産機は9体も居るんだろ？」

「いいのよ、戦いは大人の仕事！　っておじ様が言ってたでしょう？　エヴァの中のおばさまも、ママも、そう思ってるわよ」

シンジとアスカの言い争いはエスカレートしてきた。

「僕は、父さんやネルフのみんなに任せてここで震えているなんて嫌だよ！　僕が逃げたせいでみんなが死んだりしたら……」

「違う、シンジは逃げてなんかいないわ！　今まで頑張ったじゃない、使徒は最後まで倒したんだし！」

「そんな事無い、まだ敵が残っているじゃないか、どうしてアスカはそうやって他人事で居られるんだよ！　父さんも、母さんも戦っているのに！」

怒るシンジに、アスカは涙を浮かべて強く抱きつく。

「アタシは、シンジを失うのが怖いのよ！　ミサトだって、リョウジさんを失って悲しんでいる！　アタシはそんな辛い思いしたくないよ……」

「アスカ……でも僕は……後悔をしたくないんだ。エヴァに乗っても負けてしまいかもしれないけど、乗らないで後悔するよりずっといい！」

お互いに抱き合って涙を流すシンジとアスカに、レイは覚悟を決めた表情で話しかけた。

「お兄さん、お姉さん、ネルフ本部に戻りましょう。私たちが司令やネルフのみんなを助けるの」

「うん……わかった」

「……こうなったら、やるしかないわね」

シンジとアスカは涙を手の甲で拭って、レイを見つめ返した。

シエルターの中から姿をシンジたちにミサトは驚く。

「……ネルフ本部に戻りたいですって！？　バカなこと言わないで。」

だいいち、私がここを離れたらクラスのみんなを守りきれないかもしれないのよ？」

怒ったミサトににらまれて、シンジたちは下を向いて黙ってしまった。

「葛城先生、碇君たちを連れてってあげてください」

「根府川先生！？」

ミサトの声に驚いてシンジたちが振り向くと、後ろには穏やかな微笑みを浮かべる担任の老教師、根府川先生が立っていた。

「ここは私が引き受けますから、加持先生は乗ってきた車でエヴァ量産機が来る前に彼らをネルフ本部へ」

「……え？」

根府川先生はミサトのぼう然とした様子を見ると、物陰から様子をつかがっているゼーレの隊員へと接近して行く。

「奥義・春の舞」

彼の呟きと同時に、標的となったゼーレの隊員Aは跳ね上げられて、空中で木刀で滅多打ちにされ地面にたたきつけられる。命に別条はなさそうだが、どうやら気を失ったようだ。

「奥義・夏の嵐」

今度はゼーレの隊員Bが何も攻撃ができないうちに連続で突きを入れられ、突き抜けた後さらに背後から突きを入れられ、前のめりに倒れる。

その動きをみたゼーレの隊員たちはさらに離れて行く……。

「根府川先生……あなたは……」

「根府川先生とは、私の授業を聞いた生徒たちが勝手につけたあだ名。私の名前は惣流マゴロクと申します」

驚くミサトたちにマゴロクは穏やかな笑みを崩さずに話した。

「惣流マゴロクって……アスカのお祖父さん？」

「嘘っ、アタシ、小さいころに会っただけだから分からなかった」

「得体のしれない老人を、ネルフが2-Aの担任にするわけがないではないですか」

シンジとアスカも驚いてぼう然としていた。

2-Aのクラスメート全員が同じ心境だろう。

「さて、邪魔ものをどかしますので、加持先生はその隙に脱出してください」

「行ってくるわ、グランパ」

マゴロクの言葉に頷いたミサトは、シンジとアスカとレイと一緒に車に乗り込む。

「さあ、我が最大の奥義を食らいなさい！ 奥義・冬將軍！」

車の進路上に居たゼーレの隊員たちは蹴散らされ、ミサトたちの乗る車はネルフ本部に向けて走っていく。

「……お兄さん、お姉さん、嘘についてごめんなさい。ネルフのセントラルドグマにあるリリスの欠けた心。それは私。一体化すれば

みんなを救えるかもしれない。でも本当のことを言えば、みんなはきっと私を止める」

レイは誰にも聞こえないような声でそう呟いた。

<ネルフ本部 第一発令所>

ゼーレの部隊はネルフの職員が点在する末端の施設には目もくれず、ただひたすらに第一発令所への道を直進していた。

ゲンドウはネルフの職員たちに抵抗をすることを禁じていたが、ゼーレの部隊の前に立ちふさがろうとするネルフの保安部員もかなりいた。

ネルフの施設の一室でも、出撃しようとする男性士官とそれを引き止めようとする女性士官の姿が見えた。

「横田一尉、わざわざ死に行くようなマネは止めてください！」

「ミズホ、俺は無駄死にするつもりはない。一人でも、いやそれが無理でも腕一本でも、ゼーレの奴らを道連れにしてやる」

横田一尉は出口のドアの方を振り向き、ミズホ二尉に背を向けて言う。

「俺は父親として、お前とそのお腹に居る子供の二人の命を守るために出なければならぬ……」

「横田一尉！ 神田二尉のためにも、あなただけでも残って……！」

「……それ以上言っな、みんな行くぞ！」

横田一尉に声を掛けた若い男性士官たちと一緒に部屋を退出し、横

田一尉の小隊は発令所に通じる通路を守る。

しかし、ゼーレの部隊は金にものを言わせて各国の特殊部隊、それには戦略自衛隊も含まれる、のエリートを引き抜いてつくられた部隊だ。

現れたゼーレの部隊は横田一尉の小隊を蹴散らし、奥へ奥へと進んでいく。

通路のさまざまな場所に、ネルフの職員の遺体が転がっている。

「……シンジ君、アスカ、レイ。……気をしっかり持つのよ」

遅れてネルフ本部に突入したミサトは、その凄惨な光景を目の当たりにして後ろに居るシンジたちに声を掛けた。

シンジたちは口を手で押さえながらミサトの後へと続いて行く。

ショックを受けて立ち止まっている暇は無かった。

アスカとレイは足がすぐみかけているシンジの腕を引っ張り進んでいく。

一方、第一発令所の入口の側に居る剣崎キョウヤの元にもゼーレの部隊はたどり着いていた。

戦闘の技術については両者とも互角だったのかもしれない。

だが、発令所の入口を守るキョウヤの気迫は鬼気迫るものがある。

迫りくるゼーレの部隊を奮闘して撃退して行くキョウヤ。

「冬月先生、後は頼みます」

「碇……俺は戦うのには年を取り過ぎた。……行っても足手まといになるだけだな」

発令所の司令席の側に立っていたコウゾウは、そう呟いてため息を吐き、武器を構えてキョウヤの元に向かっていくゲンドウの背中を見送った。

入口を守るキョウヤにも疲れが見え始めた頃、後ろから人がやって

くる気配に振り向くと、そこにはゲンドウの姿があった。

「……司令」

「さあ、キョウヤ君。侵入者を蹴散らすぞ」

ゲンドウとキョウヤの攻撃により、発令所の間近に居たゼーレの兵士は全て倒れ伏した。

物陰から出て来た新たな気配にゲンドウとキョウヤが振り向くと、息を切らせたミサトとシンジ、アスカ、レイの姿があった。

「シンジ……なぜお前がここに居る」

ゲンドウが低い声でそう尋ねると、シンジたちは力強く返事をする。

「僕は……初号機パイロット、碇シンジです！」

「同じく……貳号機パイロット、惣流・アスカ・ラングレー！」

「……零号機パイロット、綾波レイ……」

その頃、発令所ではリツコの指揮の元、ダミープラグによるエヴァ三機の起動が行われていたが、エヴァは起動する気配が無かった。

「だめです、エヴァ三機とも起動しません！」

「何て事なの……！」

マヤの報告に、リツコは拳を握って悔しがった。

「ダメよりツコ、ママはアタシ達を待っているんだから」

アスカ達が姿を現すと、発令所は騒然となった。

そしてシンジ達が乗りこんだエントリープラグが挿入され、エヴァ

三機は起動された。

「エヴァ量産機、ロシア方面から日本の領空内に入りました！」

マヤの鋭い声の報告と同時に、発令所の正面モニターには陣形を整えた輸送機にぶら下げられた9体のエヴァ量産機が映し出される。そして、中央に自律浮遊する黒い人型兵器を見て、リツコが驚きの声をもらす。

「ツェントル・プロジェクトのX-MODEL試作機、メディウス・ロクス……完成していたのね……」

エントリープラグの中でその映像を見ていたアスカは、シンジに通信を入れる。

「……いよいよね」

「うん……僕たちの子供のためにも、頑張らないとね」

「バ、バカッ！ 聞かれたら誤解されるじゃないの！」

「僕たちの子供世代って意味だよ！」

「あーら、二人ともお盛んね。ごちそうさま」

ミサトの突っ込みに発令所に軽い笑いが起こった。

しかし、次の瞬間司令席に戻ったゲンドウの大きな声が響き渡る。

「圧倒的に不利な状況だが、我々は何としてでも勝たねばならない。

……チルドレンのために！」

「……チルドレンのために！！！！！！」

ゲンドウの声に続いて、発令所にいた全てのメンバーが復唱した。迫りくる9体のエヴァ量産機とメディウス・ロクス。これから最後

の戦いが始まる。

未来の行方はキールに託されてしまっのか、それともシンジ達が阻止できるのか？

まだそれはわからない……。

第二十六話 世界の中心でアイを叫んだもの／まごころを、あなたに

<ネルフ本部 第一発令所>

一時期、ミサトの乱入によって蹴散らされたゼーレの私兵部隊だったが、ミサトが発令所で指揮に専念するようになると、また勢いを盛り返してきた。

入口を守るゲンドウとキョウヤの二人にも疲れが見え始め、ゲンドウより先に一人で戦っていたキョウヤの体力はついに尽きてしまう。ゼーレ部隊の放った凶弾がキョウヤの急所を射抜いた！

血を流してどっと倒れ伏せるキョウヤ。

交戦中なのでゲンドウは彼の体を抱き止めることもできない。

「キョウヤ君！」

「俺は……ゼーレの人形では無くて……人間として死ねて幸せです……これで加持やヒトミとも胸を張って会う事ができます……」

キョウヤはそこまで言うと、血を口から盛大に吐き出して動かなくなった。

しかし、今のゲンドウには感傷に浸っている暇はない。

一分でも長く、ゼーレの私兵部隊の侵入を食い止めなければならぬのだ。

その後も戦闘は続き、ゲンドウの命運もつきかけたと思われたその時、ゼーレの私兵部隊を蹴散らして戦略自衛隊の隊員たちが現れた。今までゼーレの議員と結託していた日本政府がこのような判断を下すことにゲンドウは驚いた。

「日本政府では豊臣政権が崩壊して、徳川政権が樹立されました。ゼーレのA-801発動がこれまでの悪事が明るみになるきっかけ

となったのですよ」

「そうか。日本も政権交代が起き、新たな明日へと踏み出したのだな」

突入してきた戦略自衛隊の対人部隊の部隊長の言葉に、ゲンドウは感慨深くうなづいていた。

「しかし、遅すぎた……手遅れになってしまったのだよ」

ゲンドウは横たわるキョウヤの亡骸を見て、悲しそうにそう呟いた。

「戦略自衛隊と国連軍が、エヴァ量産機部隊に向けて攻撃を開始しました！」

すでに日本領空に入っていたエヴァ量産機とそれを輸送する輸送機は戦略自衛隊の航空部隊と海上部隊の洗礼を受けていた。

その様子をレーダーを見ながらマヤが実況する。

しかし、中心に位置する黒い人型起動兵器『メディウス・ロクス』の性能は凄まじく、なかなか輸送機を撃ち落とせずにいたが侵攻スピードはだいぶ鈍っている。

「戦略自衛隊の基地からトライデント改三機とJ A改一機がネルフ本部に向かっていているそうです。あと30分で到着予定です」

マヤの報告に、悲壮感に包まれていた発令所内は活気に包まれた。

「7対9。シンジ君たち3人だけに戦わせるだけより、ずいぶんマシになってきたじゃない？」

「そうね」

リツコの言葉にミサトは安心したが素直に喜べない複雑な心境で頷いた。

「加持特佐。OTR『オーバー・ザ・レインボー』の艦長から通信が入っています」

「繋いで」

「ミサト君、ワシらには足止めすることしかできん。必ず人類の未来を勝ち取ってくれ」

「おじ様……………」

ミサトはそれ以外言葉を掛けることができないでいると、爆発音がスピーカーに響き渡り、通信は途絶えた。

「OTR艦隊、全滅……………しました……………」

マヤの報告が、冷酷な事実を告げていた。

しかし、ミサトは涙を流すことは許されない。

ぐつと顔を引き締めて作戦の指揮に戻る。

戦略自衛隊の航空部隊や海上部隊にも多大な損害が出ていて、ミサトは胸を締め付けられる思いだった。

退けと言っても退かないことが分かっているだけに、ミサトはただ無事を祈るしかない。

30分後……………ネルフに応援部隊のトライデント改三機とJA改一機が到着した。

発令所にそのパイロットたちが迎え入れられる。

「時田博士、ご助力ありがとうございました」

「いいえ、こちらこそ力及ばず一機しか造ることが間に合いませんでした。私は屋外の戦闘指揮車で操作をいたしますので、これで失礼します」

「JA改のスタッフの元へ戻るシロウ博士をミサトたちは感謝の念で見送った。

次に後ろに控えていたトライデントの三人のパイロット達がミサトに近づく。

「お久しぶりです、ミサト先生」

「……あなたが生きているなんて、正直驚いたわ。しかもトライデントを極秘裏に復活させていたなんて」

近づいて頭を下げるマナにミサトは感心した表情で言葉をもらす。

「加持さんに言われたんです。敵を欺くにはまず味方からって。：

…シンジ君たちと話をさせてもらいますか？」

「ええ、良いわよ」

ミサトはマナとムサシとケイタの三人をエヴァとの通信のためのコンソールへと案内する。

「シンジ君、アスカさん、レイさん、聞こえる？ 私よ、霧島マナ。覚えている？」

「霧島さん!？」

「マナ!？」

「霧島さん……」

エントリープラグ内で待機している驚いたシンジとアスカとレイの三人の姿がモニターに映し出される。

「私たち三人も、あなたたちと一緒に戦うから!あなたたちの力になりたいの……ゴホッゴホッ」

マナはそこまで話すと、激しくせき込んだ。
ミサトもマナの顔色の悪さに今さらながら気付いた。

「霧島さん！ 具合が悪いんじゃないの？」

「……シンジ君、別にいいのよ。私、内臓がすっかり悪くなつて、もう長くは生きられないんだ。……残りの人生が半年だつて3分だつて同じことよ！ 私はシンジ君たちを守つて死ねるんだから、こんなにカッコイイことなんてないじゃない！」

笑顔でシンジに向かって語りかけるマナ。

その言葉を聞いたシンジは怒った表情でモニター越しにマナをにらみつける。

「……死ぬなんて言うなよ！ 半年しか生きられないんだつてわかつていても、精一杯生きてよ！ 霧島さんと一秒でも長く一緒に居たいって人だつているんだからさ……」

シンジの激白にマナは凍りついた顔で下を向いてしまった。

マナの後ろに黙って立っていたムサシがシンジに向かって礼を述べる。

「ありがとう、君は強いんだな。俺はマナにその言葉を言う事ができなかった。マナの生きる目的を奪ってしまう気がして……でも、それは間違っていたんだな」

「うっん、僕は強くなかないよ。それより、霧島さんを……」

マナはムサシとケイタの説得の結果、トライデントには搭乗せず、発令所にベッドを持ちこんで戦いの行く末を見守ることになった。

「我がまま言つて申し訳ありません、赤木さん」

「いいえ、でもあなたの体調が悪くなったら、集中治療室に戻ってもらつから」

マナはベッドに横たわりながらリツコに礼を述べた。

結局ネルフはエヴァ三機とトライデント改二機、J A改一機の合計六機で陣形を組み、向かってくるエヴァ量産機とメデイウス・ロクスを迎え撃つことになった。

<ネルフ本部 ジオフロント直上>

六体の機体は配置に着き、迎撃の準備は整った。

「エヴァ量産機、絶対防衛線を突破！」

発令所から聞こえるマヤの声に、シンジたちの緊張は最大限に高まった。

「敵機、メデイウス・ロクスから通信が入っています！」
「繋げる」

シゲルの報告に、司令席へと戻ったゲンドウが答えた。

「碇ゲンドウ。なぜ、人類補完計画を発動させようとしない。我らは人類は神の裁きの前に一つの完全な存在にならなければならないのだ」

「そうはさせませんよ、キール議長。初号機に眠る我が妻の魂は悪しき封印を破り、完全な形で覚醒しました。あなたのシナリオは崩

れたのですよ」

「そんなことは承知している。だから私自らが新たな魂となるためにここへ来たのだ、邪魔はさせんぞ」

「私は亡き妻に再会したいがため、愚かな道を進むところでした。」

私は友との旧き約束を守るためにここに立っています」

ゲンドウとキールの間で会話が交わされる。

シンジたち、いや、この会話を聞いているメンバーではゲンドウとコウゾウとリツコ以外内容をいまいち理解できていなかったが、何やら重要な話であることは感じ取っていた。

そこへ、メデイウス・ロクスにメインパイロットして搭乗していたエルデ博士が通信モニターに割り込んでくる。

「久しぶりね、赤木博士。これからメデイウス・ロクスの性能をたづぷり見せてあげるわ。あなたの大切なお仲間が傷ついて行く様子を齒ぎしりしながら見ているといいわ」

「エルデ博士……あなたはまだ、『A I 1<エーアイ・ワン>』に縛られていたのね……かわいそうな人」

「A I 1には、私の全てを注ぎ込んだの……私は、この子がどう成長するか見届けたいだけよ……」

そこでエルデ博士とリツコの通信が途切れた。

シンジたちにはやり取りする音声しか聞き取れなかったが、キール、エルデ博士と言う人物がどのようなことを考えているのか感じ取り、その勝手な言い分に闘志を燃やす。

「シンジ、こんなやつらを絶対に許しちゃいけないわ」

「うん……」

「そうね……」

シンジたちの視界にエヴァ量産機をつり下げた輸送機が姿を現し、目の前でエヴァ量産機は地面へと降り立った。

降り立ったエヴァ量産機は剣を構え、戦闘態勢をとった。

迎え撃つシンジたちの布陣は、J A改が前面の真ん中に立ち、左右をトライデント二機が固め、その後ろに守られるようにエヴァ三機が立つと言う位置関係だった。

「エヴァ量産機にもATフィールドがあるから、エヴァのようにATフィールドを中和しないとダメージを与えられないと思う」

シンジがパレットガンのようなエヴァの武装の弾丸にはATフィールドが張り巡らされている事、刀剣類もATフィールドに阻まれて効果が無いであろうことを説明する。

「じゃあ、力で押し倒してやるわ！」

接近してきたエヴァ量産機Aにムサシのトライデント甲が思いつきりタツクルを喰らわせる。

量産機Aはダメージこそ追わなかったが、後ろに突き飛ばされ、後ろから直進していた量産機BとCに激突し、量産機BとCはしりもちをついた。

重量には劣るエヴァ量産機だったが、素早さはなかなかのものだった。

ケイタの乗るトライデント乙に向かって量産機Dの持っていた剣が振り下ろされる。

「うわあっ！」

回避が間に合わないケイタは、機体の損傷を覚悟した。

腕を切り裂くと思われた量産機の剣は固い装甲で覆われたボディに

傷痕をつけたただけだった。

「へへっ、こいつらの武器はなまくらみたいだぜ」

ケイタの明るい声が通信から聞こえ、シンジたちにも少し安心した空気が流れる。

しかし、前面の三体の妨害をかくぐつてやってきた量産機Eの剣先が初号機の脇腹をかすめると、シンジは鋭い痛みを覚えてうめき声を上げた。

「ぐうつ！」

「シンジ、大丈夫！？」

量産機Eは背面から接近した式号機のスマツシュ・ホークを脳天に食らい、脳天から赤い血を吹いて倒れこんで動かなくなった。

「痛いけど、大丈夫……あの剣はATフィールドを紙のように突き破ってしまうみたいだ。気をつけて、アスカ」

「ええ、わかったわ」

「すまない、J A改の隙をついて抜けられてしまって……しかし、新しい技をお見せしよう」

シロウの声と共にJ A改の腕が垂直に伸び、大回転エルボーにより量産機F、G、Hが突き飛ばされて陣形が崩れた。

チャンスとばかりに初号機のマゴロク・ソードが量産機Hの胴をなぎ払い、二つに切り裂かれた量産機Hは身悶えした後に動かなくなった。

「アインツ」

「ツヴァイ」

「ドライ！」

戦っているメンバーの中でもアスカの格闘能力には目をはるものがあり、手刀やパンチやキックを叩きこんで量産機を鎮静化させることもあった。

「ほらほら……そんなデクノボーみたいな動きじゃアタシは倒せないわよっ！……これで終わりか。意外とあっけなかったわね」

横たわるエヴァ量産機のしかばねを見てアスカは勝利宣言をした。そんなアスカたちにメディウス・ロクスのエルデ博士から通信が入る。

「ふふ、それで勝ったつもり？　甘いわね……倒れた量産機を見てみなさい」

「えっ？」

アスカが胴をぶつ切りにされた量産機Hに目をやると、切られた部分からみるうちに元通りに下半身が修復され、何事もなかったかのように立ち上がる。

「これが私が開発した、自己修復機能を備えた自律性金属細胞『ラズムナニウム』よ。これとS2機関が組み合わされば、無敵の存在なのよ！」

エルデ博士の言葉に呼応するかのように全ての量産機が回復し、ムクリと立ち上がる。

「いつでも回復できるのに、アタシたちを騙したのね！」

「そして、このメディウス・ロクスに搭載された進化を遂げる人工

知能A I 1こそ、エヴァ量産機を統べるにふさわしい存在なのよ！」

エルデ博士の高笑いを残して通信は打ち切れ、再びエヴァ量産機が動き出した。

エヴァ量産機の剣はトライデント改やJ A改に致命的なダメージを与えられなかったが、パンチやキックは確実にそのボディにダメージを与えていた。

「こいつら、何度切りつけても再生するよ！ どうしようアスカ？」

初号機でマゴロクソードを振りかざしながらシンジがアスカに問いかけた。

「どうするって……復活しなくなるまで叩きのめすしかないでしょう！」

アスカはそう言いながらスマッシュ・ホークを量産機の脳天に振りかざす。

「やっぱり、私が……リリスの元に帰るしかないのね……」

誰にも聞こえないような小さな声でレイが呟く。

レイの撃つパレット・ライフルの弾は確かに量産機の体を貫いているのだが……量産機は一瞬身じろぎしただけでまた動き出す。

「畜生、これでも食らいやがれっ！」

トライデントに乗るムサシとケイタが無駄だと思いつつも肩のショルダーから中距離用ミサイルランチャーを叩きつける。

すると、先ほどとは違い、A Tフィールドに阻まれずに表層部にダ

メージを与えることができた。

「やった、ATフィールドが張られていない。通常兵器でもダメージを与えられるぞ!」

ムサシの言葉に発令所のミサトが悲観的な意見を述べる。

「違うわ……多分ラズムナニウムの回復機能の能力に自信を持っているからこそ、ATフィールドを張る必要が無いんだわ」

「いま技術部でエヴァ量産機のコアにあたる部分を探しているわ。

コアを潰されればS2機関やラズムナニウムがあっても多分倒せるはずよ」

リツコはそう言ってシンジたちを励まそうとするが、エルデ博士の横槍によってその芽生えた希望は摘み取られてしまう。

「無駄よ。コアは一部が破損しても、ご存じのように復活するってわけ。あなたたちの攻撃がラズムナニウムに勝てるのかしら?」

「こうなったら、火力を集中させて量産機のコアを細胞一片残さず粉々にするしかないわ!」

ミサトの号令の元、それまで物陰で戦いを見守っていた戦略自衛隊の部隊が再び動き出した。

しかし、戦車のほとんどが踏みつぶされ、戦闘機はハエのように叩き落とされる。

「アハハハ、どうしてそこまで無駄な抵抗をするのかしらね」

「それは……僕がここに居るみんなを守りたいからだっ!」

シンジは力強くエルデ博士の声が聞こえる『SOUND ONLY』

と表示されている通信モニターに向かって叫んだ。

「くっ、私はあなたみたいに恵まれて育った坊ちゃんみたいなのは嫌いだよ！　せいぜい苦しんで死ぬがいいさ！」

エルデ博士は一方的に通信を打ち切った。

そして、果てそうもない戦闘はしばらく続き……ついにケイタの乗るトライデント乙が動きを止めた。

量産機は機会到来とみたのか、無抵抗のトライデント乙をタコ殴りにしている。

「ケイタ、大丈夫か！」

「このままじゃ、ケイタがつ！」

トライデント甲に乗っているムサシと発令所に置かれたベッドの中に居るマナが反射的に悲鳴を上げる。

防戦で精一杯なのか、ケイタからの通信はなかった。

「ケイタ、今助けるぞ！」

親友の危険を感じたムサシは自分の身を顧みずに暴れるように攻撃を繰り返す。

同じ年齢のパイロットの危機を感じたシンジやアスカ、レイも焦りを感じていた。

三人とも息を切らしながらも戦う手を休めようとはしない。

すると、少し離れていたところで待機状態にあったメディウス・ロクスが突然動き出し、鋭い爪で量産機を切り裂きだした。

発令所にいるミサトたちはその動きをばう然として見ている。

「い、いったいこれはどういうこと！？　勝手に機体が動き出すな

んて！」

うろたえるエルデ博士に機内に居るキールが悔しそうに声を荒げる。

「学習したか…… A I 1は補完を拒む道を選択したということだ。何が成長する機械だ…… できそこないではないか！」

「なんですってえええつ、私はそんなこと認めないわ……！」

A I 1をできそこない呼ばわりされ、キールの言葉に逆上したエルデはキールの頭を思い切り殴りつけた！

軽い物音のあと、キールは力を失い、首をだらりと前に垂らした。キールはすっかり気を失ってしまったようだ。

暴走したように量産機を細切れにして行くメデイウス・ロクスに最初はとまどったシンジたちも、自分たちに攻撃が及ばない様子を見ると、量産機への攻撃へと参加して行った。

わずかに残った肉片も、戦略自衛隊の火器兵器によって再生不能な状態にまで処理されて行く。

全ての量産機が全滅すると、メデイウス・ロクスは動きを止めた。

「さあ、エルデ・ミッテ博士。エヴァ量産機無き今、人類補完計画は完全に失敗だ。大人しく降参してもらおうか」

ゲンドウがエルデ博士に向けて通信を飛ばすと、モニターには狂った目をしたエルデ博士の姿と、気絶しているキールの姿が映し出され、発令所は騒然となる。

「キール議長……！」

ミサトは気絶しているキールの姿を見て思わず息を飲む。

「認めない……私は認めないわ……私の見たかったのは、こんな結末じゃない……」

「自分の研究の失敗をいい加減に認めなさい、エルデ博士！」

映し出されたモニターの中で狂ったように呟くエルデ博士に向かって、発令所のリツコがきつく糾弾した。

エルデ博士の操縦するメディウス・ロクスは再び動き出し、凄じスピードでネルフ内部へと侵入する。

「大変です、メディウス・ロクスはセントラルドグマを目指しています！ 目標は……セントラルドグマです！」

オペレータのマヤが悲鳴に近い声で報告した。

そのスピードの速さはエヴァで追いかけるのは到底難しいものだった。

途中に設けられた防壁などもものともせず、メディウス・ロクスは突き進む。

「セントラルドグマを物理的閉鎖」

「だめです、間に合いません！」

コウゾウとシゲルのやり取りを聞いて、命令が手遅れだと判断したミサトは、マコトの席にそっと近づく。

「日向君」

「わかってます、本部を自爆させるんですね」

「ごめんなさいね」

「あなたと一緒に構いませんよ」

「……ありがとう」

マコトはそう言って操作パネルに手を伸ばす。
しかし、そこで動きを止めてしまった。

「日向君？」

震えたまま動かないマコトにミサトは声を掛けた。

「やっぱり、一度も加持特佐と食事を一緒にさせて頂かないまま死ぬのは嫌です……！」

「日向君、ごめんなさい……でもね……」

ミサトがマコトをたしなめようとした時、大きくネルフ本部が揺れた。

ついにメデイウス・ロクスがセントラルドグマの巨大な十字架にくくりつけられているリリスに接触してしまったのだ。

リリスの腹部に飛び込んだ黒い機体メデイウス・ロクスは溶けだし、その姿はLCLのゼリーのようなオレンジ色のアメーバのような物体へと変化して行った。

そして顔の部分はエルデ博士のような女性の姿に変化して行く。

「あはははっ、これが私の求めていたA.E.I.の姿だわ……！」

巨大なエルデ博士の姿に変化したリリスは、天井を突き破り、ジオフロント内に姿を現す。

メデイウス・ロクスを追ってネルフ本部内に入ったシンジとアスカとレイのエヴァ三機はその異様な姿を目の当たりにする。

「何よ……あれ……」

アスカが気持ち悪いものでもみたかのように顔をしかめた。

ジオフロント内にエルデ博士の勝ち誇った声が響き渡る。

「A I 1の本当の意味を教えてあげる。A I 1 i n 1……全てはA I 1と一つになるのよ！」

「なんて、自分勝手な考えなの……」

リツコは顔をしかめながら発令所のモニターをにらみつけた。

「私を認めなかった世界をA I 1で創り変えてやるわ！」

巨大化したエルデ博士は式号機に向かってその白い腕を伸ばした。そして式号機の首を絞めて行く。

「アスカっ！」

「お別れを言いなさい、あなたを取り巻く全ての物にねえ！！」
「ぐううう……」

つかまれてもがく式号機。

しかし突然、その白い腕の力が緩んだ。

「貴様の思い通りにはさせんぞ、エルデ博士。私はこの力を使って、人類を欠点のない完全な生命体へと進化させるのだ」

リリスの内部からキール議長の声がもれ出してきた。

気絶していたキール議長の魂が覚醒したようだ。

リリスは内部で意識の混乱を起こしていた。

その様子を見ていた零号機がリリスに向けて走り出す。

「……リリスの力を正しく引き出せるのは私だけ。お兄さん、お姉さん、ごめんなさい……。こんな解決法しか私には思いつかなかっ

たの」

零号機がリリースと融合すると、世界は白い光に包まれ……消え去った。

<宇宙空間>

目がくらむような眩しい光に包まれた後、シンジとアスカは自分たちが宇宙空間のような世界に立っているのを理解した。首を締め付けられる力から解放されたアスカは激しくせき込む。シンジは咳き込んでいる目の前のアスカの元に駆けつける。

「ゴホッ、ゴホッ……」

「大丈夫？ アスカ」

「はあはあ……アタシはもう平気よ」

そう答えるアスカにシンジは安心した表情を浮かべた後、周りを見回す。

「……ここは？」

「凄い星の数……」

「宇宙なのかな？」

「空気や重力があるのはどういうわけ？」

うろたえるシンジとアスカの前に光の粒が集まると、レイの顔をした人間サイズのリリース……白い微かに発光する体を持ったレイと言うのが一番的確だろうか……が姿を現す。

「私が新たな世界を創世してしまったの。その結果、世界はエヴァに守られているシンジお兄さんと、アスカお姉さんをのぞいて無に帰ってしまった……」

そう言つてレイは涙を流し始めた。

シンジとアスカは話の内容が全く飲み込めず、ぼう然と泣きはじめたレイを眺めていた。

「私は……サードインパクトを起こすべきじゃないと判断したのに……アスカお姉さんを助けようと思つて……こんなことを」

膝を折つて泣き崩れた始めたレイをアスカが優しく抱き止める。

「レイは悪くない。だつてアタシを助けるためにやったんでしょう？ アタシはレイに感謝している……」

「レイ……アスカを助けてくれて、ありがとう」

しばらく泣いた後、落ち着きを取り戻したレイはポツリポツリと説明を始める。

「……かつて、世界は無の空間だつた。その何も無い世界に突如として爆発が起こつたのをきっかけに、ほんの瞬きほどの間に時間と空間と物質と生命が創られたの」

「じゃあネルフも、第三新東京市もみんな消えてしまったつてことなの！？」

アスカが叫ぶ様に尋ねると、レイはゆっくりとした口調で話を切り出す。

「私たちの力があれば、新しい世界を創ることができるのよ」

「レイ、それは……」

レイの言葉にシンジは大きなとまどいを感じていた。

「これは多分二度とないチャンス。今なら、全てをやり直して、戦争のない理想の世界を創ることができるわ」

「そんな……レイ、何を言い出すんだ」

「お兄さん、なにをためらうことがあるの？」

黙って話を聞いていたアスカがうつむいたシンジに詰め寄るレイに向かって話しかける。

「あのさ、アタシそれは違うと思うんだけど……」

「なぜ、お姉さん？」

「今まであったことを全部無かったことにしても良い結果になるとは限らないと思う。アタシ、これまで何度も失敗して後悔することがあったけど、だからこそ、ここまで来れたんだもの」

アスカの言葉にシンジも首を縦に振る。

「そうだよ。僕だって否定したいことが無いわけじゃない。受け入れたくない出来事や目を背けたくなるような悲惨なことも世の中にはあるけど……でも、それでも僕は今までの世界が好きだよ」

シンジはそう言って息を大きく吸い込む。

「いや、世界のことなんて僕にはよく分からないけど……僕は第三新東京市にいるみんなが好きなんだ！」

「アタシもみんなが好きなんだ。シンジや、レイや、ミサト……。小さい頃のアタシを側で支えてくれたリョウジさんもね」

「間違っていることだってある世界だけど、きっとそれも正しい方向へ変えることだってできると思う。だから……生きているかぎり幸せになるチャンスはどこにでもあると思うから」

シンジがアスカとレイに向かって手を差し出すと、二人は何も言わずにその手を握り、アスカもレイと手を繋ぐ。

「……わかったわ。じゃあ私も……今までの世界を願う……」

シンジとアスカとレイの三人が意識を集中させると、またまぶしい光が辺り一面を包んだ……。

<ネルフ本部 第一発令所>

「……はっ!？」

「ここは……」

「あ……」

シンジとアスカとレイの三人は光が収まった後、自分たちが発令所に居ることに気がついた。

ミサトやリツコ、ゲンドウたちも強い光を感じたらしく、よろけながら立ち上がった。

シンジたち三人の目の前で、一人の女性が大声をあげて泣いているのに発令所に居たみんなは気付いた。

その女性はA E Iと一緒にリリースと融合したはずのエルデ博士だった。

キール議長は座り込みながら表情を浮かべずに黙って側でその様子を見ている。

「どうして……どうして私だけ残して消えたのよA I 1……あなた無しの世界で私はどうすればいいのよ……」

誰もがぼう然として弱々しくすすり泣くエルデ博士の姿を眺めていたが、ゲンドウは懷から銃を取り出し、エルデ博士とキール議長に狙いを定めた。

ミサトが素早くゲンドウの前に立ちはだかる。

「退くのだ加持特佐、災いの種はここで断ち切らねばならない！大犯罪を犯した者は死を持って償わなければならんだ！」

「赦すこと、受け入れることをせずに命を奪う。それでは、あなたもゼーレがやって来た事と同じ道を歩む事になります！」

ミサトの言葉にゲンドウは持っていた銃を床に投げ捨て、呟く。

「そうだったな、すまなかった……」

ミサトの背後ではエルデ博士がその騒ぎを知ってか知らずか、すすり泣きが続けている。

「いつそのこと私も消えてしまえばよかったのに……この世界は私を受け入れてはくれない。ずっと一人のまま……もう嫌なの、辛いのは……」

「エルデ博士……」

ミサトはエルデ博士の方へとゆっくりと近づいて行った。

「嫌なのよ……」

「顔をあげてください、エルデ博士」

「あなたは……」

エルデ博士は涙にぬれた目でミサトの顔を見上げた。
ミサトはしゃがみ込んでエルデ博士に顔を近づける。

「私は今まで様々な人々が自分勝手な考えで、過ちを犯すのをみてきました……しかし、全てが間違っているわけではなく、正しい事もやっていたはずです。罪を憎んで人を憎まずと言います。あなたも過ちを認めて心を開けば、そうすればあなたを慕ってくれる人が現れるはずですよ……」

「あ、り、が、と、う……」

「さあ……」

ミサトは優しい笑顔でゆっくりとエルデ博士に向かって手を差し出すと、エルデ博士はその手を繋いでゆっくりと立ち上がった。

エルデ博士は罪を犯した以上、刑罰は免れない。

ネルフの保安部員の連行要請にも素直に応じて歩いて行く。

黙って見ていたJ Aの開発者、時田シロウ博士がエルデ博士の背中に声を掛ける。

「あの……私も機械に心を持たせたいと考えたことがあります……
あなたのA I 1は素晴らしいものでした。今度よかったですらお話を……」

……

立ち止まったエルデ博士は振り返ってシロウ博士を見つめると、無言で頷いて立ち去って行った……。

次に残されたのはずっと黙り込んでいたキール議長だった。

「……まったく、とんだお人よしだな。あのような危険な思想の持ち主、生かしておけば何をするかわからないではないか」

黙っていたキール議長はやつと重い口を開いた。

「でも、彼女は今まで知らなかった人のまごころを感じ取ってくれました。将来、私たちの心強い味方になってくれるかもしれません」
「私は考えをそう簡単に替えるつもりはない。さつさと殺せ」

そう言ったキール議長の言葉に対してミサトは首を横に振った。

「いいえ、キール議長。生きると言うことは考えるということでもあるんです。今、私たちは正しい方向に進んでいると信じていますが、ふとしたきっかけで悪い方向に考えを変えてしまうかもしれません。私が過ちを犯した時、きっと誰かが正してくれると信じています」

「人類は不完全な群体だからこそ、過ちに気がつけると言うのか。私の人類補完計画とは正反対の考えだな」

「キール議長、あなたは人々を幸せにする方法を少し勘違いしただけですよ」

ミサトの言葉にキール議長は溜息をついて降参したように腕を前に出す。

「その馬鹿馬鹿しい考え、墓まで持って行け。貴様はとんだ大馬鹿者だ。私は死ぬまで今の考えを変えないからな！」

今まで冷静だったキール議長が怒ったようにミサトに怒鳴りつけた。ミサトは今まで無反応に近かったキール議長の変化にそつと笑みをこぼし、保安部に連行されるキール議長の後ろ姿を見送った。

<ネルフ本部 大会議室>

戦闘を終えた戦略自衛隊やJ A改、トライデントのパイロットの三人は、戦死者に対する悲しみを抱えながらも彼らの基地に戻って行った。

不思議なことにマナの内臓疾患は元から存在していなかったかのようになり、嬉しそうにムサシとケイタと一緒にシンジたちに再会を約束して帰って行った。

その後の調べで、エヴァンゲリオンは三機とも、量産機の残骸も、エヴァや使徒に関係するものは全て消え去ったことが分かった。

ミサトとレイも、自分の体から使徒の細胞のようなものが全て消え去っていたことを理解した。

「私の中に居たアダムも……旅立っていつてしまったのね……全てが終わったのね……リョウジ……寂しいわ!」

ゲンドウから今後のネルフの方針について話があると言う事で、ミサトの執務室にミサトを呼びに来たシンジは、ミサトが机に突っ伏して泣いている姿を見て声をかけずに引き返した。

会議室に一人で戻ってきたシンジにアスカとレイが不思議がって近づく。

「ミサトを呼びに行ったんじゃないの?」

「……ミサトさん、リョウジさんの名前を言いながら泣いていたんだ……この前の戦闘で無くなった人もかなりいるし……生き返らせてあげた方がよかったのかな……」

「お兄さん、その気持ちはわかるけど……あるがままの現実を受け入れるって私達は決めたのよ」

レイはゆつくりと会議室の真ん中に掲げられたネルフのシンボルマークを指差した。

そこには例の言葉が書かれている。

『God's in his heaven . All's right with the world 神は天に在り。世は全て事も無し』

<2016年 第三新東京市 第壱中学校>

議長キールが失脚したゼーレは、人類補完計画を行うと言う目標も失い、内輪もめの末、自然消滅して行った。

特務機関ネルフは、今後は世界の平和と地球環境を守ると言う任務を課せられた機関へと目標を変えて存続させられることになった。

ゲンドウとコウゾウはそのまま組織のトップとして残り、多くの職員も従っていった。

そして今は使徒との戦いから約1年後。

シンジとアスカ、レイは卒業生として卒業式に出ていた。

「ミサトもアタシたちと一緒に卒業するって予想外ね」

「うん。ミサトさんは戦争で孤児になった外国の子供たちに正しい正義を教える活動が続けるんだってね。日本に何年も帰って来れないのかもしれない」

「日向二尉は戻って来た時にまたプロポーズするって言ってたわ」
「嘘っ、まだ諦めてなかったの!？」

アスカの大声は厳粛な卒業式をぶち壊しにしてしまったようだ。壇上のミサトに思いつきりにられる。式の後、職員室に來いと

意思表示だ。

もつとも、呼ばれなくてもミサトの周りには生徒が集まってくるのだけれども。

放課後、夕方になりやっとミサトは集まった生徒たちから解放され、落ち着いてシンジたち三人と話すことができた。

「シンジ君、言わなくてもいいとわかっているけど、伯父さんたちに心を開いてあげれば、向こうもきつと応えてくれるはずよ。10年近くも面倒を見てくれたんだもの。お互い心を閉じたまままで終わるのは悲しいことだわ」

「はい、だから伯父さんたちは僕たちのことを引き受けてくれたんだと思います」

シンジとアスカとレイの三人は、外国に行く加持一家の代わりに伯父の家族と一緒に第三新東京市の郊外の加持邸でそのまま住む事になった。

多忙なゲンドウの代わりとして伯父一家はわざわざ引っ越してまでシンジたちと暮らすことを引き受けてくれた。

「伯父様たちが来るときには、歓迎の気持ちを表さないとね」

「今度は料理を途中で投げ出さないでよ、アスカ。そうじゃないと伯父さんたちが僕たちの交際を反対されるかもしれないよ」

「頑張つてね、お姉さん」

「そうねー、私も息子のお嫁さんは料理ができないと考えちゃうかもしれないわねー」

ミサトにちゃかされて、ふくれるアスカ。

職員室には笑い声が満ちていた……。

シンジとアスカとレイの三人は、第二東京市からやってくるシンジの伯父夫妻の乗った車が来るのを玄関の前で今か今かと待っていた。やがて、ネルフのシンボルマークが付けられた公用車が遠くからやってきて、シンジたちの前に止まる。

そして運転手の手によってドアが開けられ、シンジにとっては久しぶりに見る伯父夫妻の姿。

戸惑いの表情を浮かべ、目を泳がせてシンジの方をチラチラと見る伯父たちに対して、シンジは目をそらさずに笑顔で近づいて行く。そして、動きを止めた伯父に向かってシンジはゆっくりと抱きついた。

「シンジ君、いつの間にかこんなに大きくなっていたんだなあ……」
「シンジ君、ごめんね。私たちはあなたに家族らしいことを何一つしてあげられなかった」

そう言つて謝る伯母に対してシンジは伯父から体を離して優しく笑いかけた。

「いいんですよ、これからが始まりなんですから。僕は15歳、まだまだ伯母さんたちの力が必要な子供です。よろしくお願いします」
「そうですわ、伯母様。アタシたちに色々教えてください」

アスカがシンジの伯母に恭しく頭を下げると、シンジの伯母は愉快そうに笑い声を上げた。

それはシンジが初めて聞く伯母の笑い声だった。

「こんな可愛いお嫁さんが居るなんて、シンジ君はたくましく成長

したのね」

シンジの伯母の言葉にアスカは顔を赤くして俯き、その様子をシンジの伯父が微笑えんで見守った。

新しくできた家族は楽しそうに家の玄関へと姿を消して行った……。

涙

この作品は連載「チルドレンのためのエヴァンゲリオン 第八話 アスカ、再来日と第十九話 母の戦い」の補完的な話です。

<2005年 研究機関ゲヒルン日本支部 実験場>

特務機関ネルフの前身であるゲヒルンは、来るべきサードインパクト後に人類が生き残る方法を模索する研究機関でしか無かった。しかし、第一使徒アダムのコピーであるエヴァンゲリオンを造り出す計画が持ち上がると、エヴァの完成をもって軍事組織へと変わる事が予定されていた。

「ゲンドウ、心配するな」

「ジェイコブ……」

白衣を着て落ち着かない様子の所長のゲンドウに、同じく白衣を着た大柄の白人男性が声をかける。

この男性はアスカの父親であり、ゲヒルンの副所長のジェイコブだった。

「この実験が決まった時、ユイが受精卵を体外に摘出すると言い出したのだ。ユイは何か危険なものを感じ取っているのかもしれないのだ」

「それは、産まれてくる子供に対する悪影響を考えての事だろうか？ 実験が無事に終われば問題無いじゃないか、何だったらもう一人ぐらい作ったらどうだ」

アメリカンジョークも交えて、ジェイコブが大笑いをしてゲンドウの肩を叩いた。

二人の元に冬月教授とゼーレの幹部の一人がやってくる。

「ゲンドウ君、今回の実験は成功させてくれたまえよ。これでエヴァは今までの人工知能とは違う性能を持つことになる。ATフィールドを発生させることも可能かもしれないからな」

「私もオブザーバーとして実験に参加させてもらうよ」

今までエヴァのコアとなる部分は、高性能の人工知能を使って制御していたが、使徒の魂のデータを真似する事が出来ず、ATフィールドを発生させるなど奇跡に近い話だった。

そこで、ユイ博士とキョウコ博士の生のデータをコアに直接送り込む事になった。

そのためにユイとキョウコはLCLに満たされた透明のエントリープラグのような機械の中に入る事になっている。

しかし、以前から人体に対する悪影響が懸念されていて、非人道的な実験が行われないように、正義の人として知られる冬月教授が実験に立ち会う事になった。

ユイとキョウコのエントリープラグは実験場の中心に並べて置かれ、中の様子はあらゆる場所のディスプレイに映されて実況を中継されていた。

そして、エントリープラグの後ろには初号機と弐号機が直立不動の姿勢で安置されている。

ゲンドウの私室は実験場から近く、窓から実験場の中がよく見える位置にあった。

実験の準備でゲヒルン全体が騒がしい中で、この部屋に居たのは5歳になるシンジとアスカ、そしてお守り役を任された19歳のミサトだった。

「ミサトお姉さん、あのでっかいロボットって何て名前なの？」

「あれはエヴァよ」

「何に使うの？」

「アンタバカあ？ 悪いやつらをやっつけるのに決まっているじゃない！」

「へえ、アスカは知ってるんだ」

「えっへん」

シンジの前で誇らしげに胸を張るアスカを、ミサトは微笑ましく見守っていた。

ミサトにも同じ年の子供エツコがいる。

だから、ミサトがシンジとアスカの2人に好かれるのにそんなに時間がかからなかった。

「そうだアスカ、このおりボンをあげる」

シンジはアスカにそう言って赤いリボンを渡す。

「あれ、これはアタシがママに誕生日に買って欲しいっておねだりしていたリボンじゃない。どうしてシンジが？」

「えっと、母さんがアスカにあげなさいって」

「ふーん、ママとユイおば様の仕業ね。じゃあシンジは渡せって言われたから渡したの？」

「ううん、僕もアスカが赤いリボン付けると可愛いと思ったから」

慌てて言い訳をするシンジの姿にミサトとアスカは噴き出して笑い始めた。

「ありがと、じゃあママには別のものをおねだりする事にするわ、ワンピースとか」

アスカは赤いリボンをミサトにつけてもらって、そうシンジに向かって微笑んだ。

「あつ、2人のお母さんの実験、始まるみたいよ」

ミサトがそう言うと、アスカとシンジは窓に貼りつくように実験場の様子を見る。

エントリープラグは透明なので、プラグスーツを着たユイとキョウコの姿は直接見る事が出来た。

「ママー、頑張つて！」

アスカはキョウコに向かって大きく手を振った。

ユイとキョウコの2人は余計な情報をシャットダウンして集中するため、アイマスクとヘッドホンのようなものをさせられていた。

「ボーダーライン突破……シンクロ率上昇中」

オペレータの声が研究所に響く。

第一段階は成功のようだ。

しかし、まだ油断はできない。

「……シンクロ率99・89%に固定」

「被験者のデータ送信開始」

研究所の職員達の表情が目に見えて和らぐのが分かり、ミサトもホッと安心のため息をもらした。

しかし、しばらくすると実験場内に異常を知らせる警報が鳴り響く。

「何があつた!」

「大変です、シンクロ率が上昇していきます! …… 120%!
…… 130、140!」

アスカとシンジとミサトが息を飲んで見ている前で、エントリープラグの中に居るユイとキョウコが苦しみ出した!

そして、手の指先や足元からその体がＬＣＬへと溶けだして行く!

「ママ!?!」

3人の見ている前で、ついにユイとキョウコ存在は頭部だけになり、泡となってＬＣＬの中へと消えた。

……まるで童話の人魚姫のように。

「う……うえっ……」

「うあああん! 母さあああん!」

アスカの瞳から涙がこぼれる前に、シンジが大号泣を始めた。
驚いたアスカの涙は引っ込んでしまった。

「シンジ君、落ち着いて!」

「シンジ!」

ミサトとアスカがいくら言っても、シンジは泣くのを止めなかった。

<研究機関ゲヒルン日本支部 実験場>

ユイとキヨウコの姿が消えてしまった後、ジェイコブとゲンドウは肩を落としてぼう然としていた。

そこへゼーレの幹部の男が現れ、盛大な拍手をする。

「素晴らしい、これでエヴァンゲリオンは強力な力を持つ兵器となったぞ！」

「何をふざけた事を言っている、妻を返せ！」

そう言つてジェイコブはゼーレの幹部の男に殴りかかるうとしたが、ゲヒルンの警備員に取り押さえられた。

「これは実験の結果、予想外に起きてしまった事故だ。実験は被験者の安全を確保した上で行われた」

「そうなのですか、冬月先生？」

「……そうだ」

ゲンドウの質問に、冬月は迷い無くそう答えた。

「嘘だ！ この実験は俺達の知らないところで仕組まれていたんだ！」

警備員に取り押さえられながらも暴れてそう叫ぶジェイコブ。

「副所長は妻を失った事でショックを受けてつかれているようだ。自宅でゆっくりと休むがいい」

ゼーレの幹部の男はそう言ってジェイコブの退出を警備員達に命じた。

「お前もまさかこれが事故では無いと言うのか？」

「……いえ、私は冬月先生の言葉を信じます」

ゲンドウの言葉に、ゼーレの幹部は満足そうに笑顔を浮かべてうなずいた。

「まだ正式に決まった話ではないが、新しくできる組織のトップとして君を任命しようと思うのだよ」

「……私がネルフの総司令ですか？」

「そして副司令はジェイコブ君の予定だったが……彼はあの調子だ。誰か代わりの者に頼む事にしよう」

ゼーレの幹部はそこまで言うのと、改めてゲンドウを見つめて話し出す。

「さて、不幸な事故により2人はエヴァのコアに取り込まれてしまった。そこでパイロット候補は限られてくる」

ユイとキョウコの魂と高シンクロできる存在はその血縁にある者だとゲンドウにも理解できた。

「……私の息子とジェイコブの娘はまだ5歳です」

「パイロットの適性があるかどうかは私が決める。その子らの居る場所に案内してもらおうか」

ゲンドウは逆らう事が出来ず、3人はシンジ達が居るゲンドウの私

室へと向かっていく……。

<研究機関ゲヒルン日本支部 所長私室>

「所長！」

ゲンドウ達が室内に足を踏み入れると、困惑した顔のミサトが声を掛ける。

室内には大声を上げて泣き続けるシンジと何とかシンジを泣きやませようと必死に体をさするアスカの姿があった。

「泣き声を上げているのが君の息子かね」

「……はい」

ゲンドウと共に姿を現したゼーレの幹部と冬月にミサトは警戒感を強めた厳しい表情になる。

父親のゲンドウが来てもシンジは泣くのを止めようとしなない。

ゼーレの幹部は、そんなシンジを渋い表情で眺めていたが、アスカの姿を見ると、感心したようにゲンドウに話した。

「母親が消えたとしても、涙一つ流さず気丈な振る舞い……パイロットに必要な強さを持っているとは思わないか？」

その言葉を聞いて、ミサトとゲンドウの顔色が変わった。

「確か、ユイ博士は実験の前に受精卵を摘出したらしいな……よし、それで決まりだ」

ゼーレの幹部は冬月に耳打ちをして、部屋を出て行った。

「司令、実験で何が起こったのですか！？ 先ほどの男は？」

ゲンドウはミサトの質問には答えず、泣き続けるシンジを抱きしめた。

しかし、シンジは何の反応も示さずに泣く事を続ける。

「君はなぜ、泣かないのか？」

「シンジが……アタシの分まで泣いていてくれるから……」

アスカは右手でシンジの手を握りしめながらそう答えた。

「そうか……それでは私も涙を流すわけにはいかないな」

ゲンドウはアスカの言葉を聞いてそう答えた。

<2010年 特務機関ネルフ ドイツ支部 休憩室>

2005年のあの実験の直後に研究機関ゲヒルンは解体し、特務機関ネルフへと姿を変えた。

父のジェイコブ副所長を火事で失ったアスカはドイツ支部に引き取られ、式号機のパイロットとなる。

アスカはドイツ支部に出向していたリョウジと親しくなり、休憩所をよく話すようになった。

「あの時、シンジがアタシの悲しみを減らしてくれたから、アタシは取り乱す事も無かったんだと思う」

「アスカはシンジ君の事を話す時はとても嬉しそうだな」

「うん、日本に使徒が現れて、アタシが日本に行かなければならなくなつた時はシンジに会いに行くんだ……だからアタシはパイロットを首になるわけにはいかないの」

リョウジはシンジの事を楽しそうに話すアスカを見て、胸が痛んだ。ミサトから日本に居るシンジの状況は聞いている。

シンジはショックである事件の記憶をすっかり失って、ゲンドウの伯父夫婦に預けられて無気力な日々を送っていると云う話だ。

「そうだアスカ、シンジ君から10歳の誕生日プレゼントが届いているぞ」

アスカが嬉しそうにプレゼントの箱を開けると、赤いS・D・A・Tが入っていた。

「嬉しい、これをシンジだと思って大切にすると、ミサトに伝えておいてね！」

「ああ」

これはリョウジとミサトが話し合って考えた後ろめたい嘘の一つだった。

アスカにエヴァンゲリオンのパイロットを続けさせるための。

「使徒が現れるまで、後5年か……長いな。嘘をつき続けるか、それとも本当の事を話すか」

結局リョウジはアスカに真実を告げることなく、アスカ来日の日を迎えてしまう事になる。

涙（後書き）

この作品は歌手の倉木麻衣さんの「happy days」を聴いて思いついて書いたのですが、イメージの合致する部分は2番のサビのフレーズだけになりました。

2011年8月5日の告知を受けての追記です。

そのフォークは愛を運ぶ

シンジ達の保護者である叔父夫妻は家を用事で留守にして、今夜の夕食はシンジとアスカ、レイの三人だけで食べる事になった。

今夜の夕食は、いつも叔父夫妻と共に家族で過ごすものと少し雰囲気の違いが違っていた。

アスカはシンジに椅子を近づけていたし、何よりも二人の側には甘い空気が漂っている。

ナイフとフォークでステーキを器用に一口サイズに切り分けたアスカは、そのひとかけらをフォークで刺すと、シンジの口元に近づけて行く。

「今日のステーキは、美味しく焼けたと思うの。だから、あーん」

シンジは少し恥じらった仕草をしながらも、まんざらでも無い顔でアスカが差し出したステーキを口に入れる。

「うん、おいしいよ。アスカ」

「嬉しい！　じゃあもう一個ね」

そんな二人のやり取りを見て、レイは首をかしげながらシンジとアスカに向かって質問を浴びせる。

「なんで、シンジお兄さんは手を怪我してないのに、アスカお姉さんが食べさせているの？」

話は第五使徒ラミエルとの戦いの最中までさかのぼる。

ネルフ本部に向かって空中を漂いながらゆっくりと接近してきた使徒に対し、ミサトはシンジの初号機を出撃させて様子を見る事になった。

しかし、初号機が地上に射出されるや否や、使徒は強力な熱線を発射してきた。

自分の作戦の誤りを悟ったミサトはすぐに初号機を地中に収容したが、シンジの両手は初号機のダメージによるフィードバックで痺れが止まらなくなってしまっていた。

意識を失っていたシンジは、病室のベッドの上で目を覚ました。

「……？ 綾波……？」

ベッドの側の椅子に腰かけていたレイはシンジの呟きには答えず、ミサトの命令を遂行しようと原子力レンジでリゾットを温める。

そして、あつという間にアツアツになったリゾットをシンジに突き付けた。

シンジは湯気を上げるリゾットを前に戸惑っている。

「食事。目が覚めたら食べるようにって。温かいうちに食べて」「痛ててて。手がしびれて上手くスプーンが握れないよ」

シンジの様子を見たレイは、スプーンをシンジの手から奪い取る。そして、リゾットをスプーンで掬い、シンジの口の前へと持っていく。

「碇君、口を開けて」

レイがそう言うと、シンジは耳と顔を赤くして照れ臭そうな表情で渋っている。

「あ、綾波、こういうのは……その……」

『命令』が遂行できず、困った様子でレイがシンジを見つめると、シンジは仕方が無いと言った様子で口を開いた。

「熱っ！ もっと冷ましてから口に運んでよ」

「ごめんなさい。こういうの、初めてだからよく分からないの」

「スプーンで掬ってから息を吹きかけて冷ますんだよ」

シンジにそう言われたレイは、言われた通りにフーフーと息を吹きかけてリゾットを冷ましている。

その姿を見たシンジは、胸の奥が暖かくなるのを感じる。

シンジは風邪を引いて母親にこうして食べさせてもらうといった経験は一度も無かったが、目の前のレイに母親のイメージが重なったような気がしていた。

「綾波ってさ、きっと優しいお母さんになれると思うよ」

「お母さん……？ 加持一尉みたいに？」

「うん」

レイは穏やかに微笑むシンジを見つめて言葉を返す。

「じゃあ、碇君がお父さんなの？」

そのレイの言葉を聞いたシンジは激しく咳き込んだ。

「そ、それは違うと思うよ！」

赤くなって否定するシンジを見て、レイは胸の奥が温かくなったり、切なくなったりを繰り返している事に気がついた。

そして、時は流れ……。

使徒との戦いは終結し、アスカとシンジとレイはシンジの叔父夫妻と同じ屋根の下で暮らすことになった。

アスカとレイはシンジを巡ってライバル関係になったこともあったが、シンジとアスカが自分の入る隙が無いほど固い絆で結ばれている事を知って、レイは妹として振る舞う事に割り切った。

シンジとアスカはめでたく恋人同士になったわけだが、叔父夫妻の前でイチャイチャすることが出来るはずもなく。

普段も健全な交際をしていた二人。

いつも家に居る叔母まで居なくなるのは珍しい事で。

二人は新婚夫婦のように甘い時間を過ごしていた。

今夜の夕食はアスカがステーキを焼くことになり、レイの目の前ではアスカとシンジの不思議な食事作法が行われていたのである。

レイに真顔で聞かれて、思わず赤くなって固まってしまう二人。

「……お姉さん、聞こえなかったの？　なんでお兄さんは手を怪我していないのに、フォークで食べさせてあげているの？」

真剣な顔で詰問するレイからは逃げられないと感じたのか、アスカは耳まで赤くしながら話し始める。

「いい、レイ？　これは愛情を伝える方法の一つなの。アタシが、シンジを愛してるって気持ちをフォークに乗せて運んでいるのよ」

「……前にお兄さんが言っていた、お母さんが風邪を引いた子供に食べさせてあげる行為に該当するものなの？」

いまいちわかっていないレイにシンジも苦笑する。

「これは、恋人同士でもするものなんだよ。レイは、知らなかった？」

「だって、赤木博士も、碇司令もそんなことを教えてくれなかったもの」

レイの答えを聞いたシンジとアスカは納得して頷いたが、次の瞬間、何か良からぬものを想像したのか顔が青くなる。

「ねえシンジ、今リツコと碇司令が……」

「うん、口を開いて……」

自分達の想像がユニゾンしていたことを知ると、アスカとシンジは目を見合わせて苦笑した。

「……それじゃ、なんでお姉さんは毎日お兄さんとそうやって食べないの？」

レイの直球な質問に二人はまた言葉を詰まらせた。

「そ、それは叔父さまや叔母さまの見ている前でやると恥ずかしい事だからよ、ね、シンジ！」

「う、うん、そんなことを目の前でしたら付き合っのを許してもらえなくなるかもしれないから……」

「お姉さんとお兄さんは楽しそうに食べていて、私も見ていて面白かったのに、残念ね……」

レイはそう言っただけで溜息をついた。

シンジとアスカはすっかり茹でダコのように赤くなってしまい、それ以上レイの前で夕食を食べる事が出来なくなってしまった。

次の日の学校の昼休み。

教室でアスカとシンジとレイは友人達と混じってお弁当を食べていた。

レイは不思議そうにアスカとシンジの食べる姿を眺めている。

そして、アスカがタコさんウィンナーをフォークに突き刺したタイミングで、レイはアスカに声を掛けた。

「どうして、昨日みたいにお兄さんにフォークで食べさせてあげないの？」

アスカとシンジの周りに居る友人達の会話が途切れ、動きが止まった。

「叔父さんと叔母さんが居たら恥ずかしくてできないって言うんだけど、ここには居ない……ムゲツ」

シンジが慌ててレイの口を押さえたが、すでに遅かった。周りの友人達は目が全てイタズラ猫の様ににやけている。

「なんとまあ、羨ましいやつちゃ」

「俺達に遠慮しないで、どんどんやってくれ！」

高まる周囲の期待にアスカとシンジは退けなくなってしまった。アスカはウィンナーを突き刺したフォークをシンジの口に持っている。

「し、シンジ。今日アタシの作ったウィンナーはどうか？」

「う、うん、よくできていると思うよ」

口を開いてウィンナーにかじりついたシンジは耳まで赤くして照れながらそう答える。

アスカも同じように火照っていた。

「じゃあ、今度は碇の番だな」

クラスメイトの男子にそう言われて、シンジは弁当箱に入ったハンバーグをフォークに突き刺して、アスカの口の前に運んで行く。

「あ、アスカ。昨日の残り物のハンバーグでごめんね」

「そ、そんなことない。シンジのハンバーグは冷めてもおいしいわよ」

アスカがそう答えると、クラスメイト達から歓声と口笛が巻き起る。

いつの間にか他のクラスからの見物客も加わってさらににぎわいを増していた。

「きゃー、アスカ、次は隣にあるニンジンよ!」

クラスメイトの女子がそう黄色い歓声を上げた。

この騒ぎは昼休み中ずっと続き、二人に触発されたのかその日の放課後は学校の至る所で告白する生徒達の姿が目撃されたという。

そしてこの事は伝説として学校で語り継がれていった……。

<第三新東京市郊外 加持邸 リビング>

使徒戦役と呼ばれる使徒と人類との戦いが終わってから10年後。
 アスカとシンジは打ち解けたシンジの伯父と伯母と一緒に加持邸で暮らしていた。

使徒戦役で命を落としたリョウジの亡き後、本来の家主であるミサトは10年前から外国で娘と息子と暮らして家をシンジの家族達に任せていたのだ。

伯父と叔母がすっかり寝静まった夜、アスカとシンジはリビングのテレビでユイとキョウコのメッセージが入ったディスクを見ていた。

「アスカ、そろそろ寝ないと体に障るよ」

「うん、でももう一回見たいのよ」

「アスカは産休を取ったから、いつでも見れるじゃないか」

「でも、伯父様と伯母様居る前でみるのは、何となく恥ずかしくて」

「この前までは平気で見ていたじゃないか」

「だって、アタシとシンジはいよいよママとパパになるのよ。いつまでもママ達に甘えているわけにはいかないじゃない」

「それはそうだけど、こんな隠れるようにして見なくなっちゃった」

シンジはアスカの妙なこだわりにも、苦笑した。

次の日、早朝に目覚めたシンジはアスカを起こさないようにそっとベッドを抜け出そうとしたが、アスカに気付かれてしまった。

「シンジ、今日はこんな早くから仕事なの？」

「うん、アメリカの外相が来日するって言うから、事務方の僕達もいろいろ準備しなくちゃならないんだ」

「じゃあ、情けない格好は出来ないわね」

シンジの服を準備しようとしたアスカをシンジは慌てて押し止める。

「ダメだよアスカ、無理をしちゃ」

「妊婦は適度な運動をした方がいいのよ。アタシだけ産休を取ってシンジに負担を掛けているんだからさ」

「そんな、負担だなんて……」

高校を卒業したアスカとシンジは、外交官の道を選んだ。

使徒との戦いは終わっても、人類同士の戦いは終わらなかったのだ。ミサトも内戦の起こっている外国で子供達に平和の大切さを教える仕事をしている。

自分達も武力に寄らない話し合いによる世界平和に貢献する仕事を目指したくなったのだ。

アスカとシンジは20歳を超えても必死に勉強した。

そして、24歳となった今、やっと外交官の仕事以外にも余裕を持つ事が出来、アスカの妊娠が発覚した。

シンジがアスカの見立てたスーツとネクタイに着替える中、アスカはシンジの朝食を作る。

「今日のラッキーカラーは青なの？」

「そういうわけじゃないけど、外交官と会うんでしょう？ それなら厳格な色の方が良いと思って。茶色も捨てがたいんだけどね」

「そっか、僕はそう言うの疎いからね」

朝食を食べ終えたシンジは玄関でアスカに見送られる。

「ほらシンジ、忘れ物よ」

「カバンの中は確かめたけど、今日必要な物は全部入っていたよ」

シンジがアスカの質問に首をかしげて答えた。

「んもう、いつてきますのキス」

「あ、そうか、一番大事な物を忘れるところだったね」

シンジはそう言ってアスカを抱き寄せてキスをした。

「おや、2人とも起きていたのか？」

「お、おじ様っ！」

「こ、これは……！」

シンジの伯父が起き出して姿を現すと、シンジとアスカはパツと体を離れた。

「別にいいんだよ、もう2人とも大人だ。私達が口を出す事じゃない」

シンジとアスカは高校時代から愛のスキンシップが暴走しすぎて伯父夫婦に怒られた事が度々あったのだ。

なので、2人は伯父夫婦にいまだに頭が上がりません。

「しかしゲンドウもついに孫を持つのか」

「お父様よりも先に伯父様が抱く事になってしまいかもしれませんね」

「きつと父さんは仕事を放り出して駆けつけてくるんじゃないかな」
「ふふ、その姿が目には浮かぶようだわ」

すっかり引きとめられてしまったシンジは慌てて玄関を出る。
外では車がシンジの事を待っていた。

「待たせちゃってすまないね」

「いいんですよ、その分私がぶつとばしますから」

車に乗り込んだシンジが話し掛けると、運転手の女性は片目をつぶって答えた。

この女性はシンジより2歳若い。

アスカはシンジがこの女性相手に不倫をしたと勘違いし、新婚早々離婚の危機になったのは過去の話。

「ミサトさんみたいなことしないでよ」

「加持特佐には奥様の妊娠の事、お知らせになったのですか？」

「うん、とつくに知らせたよ。10年遅いって伯父さんと真逆の事を言われたよ」

車の中で2人は声を上げて笑った。

「奥様の出産予定日はいつごろなのですか？」

「多分、5月から6月位になると言われたよ」

「そうですか……それで奥様にあの事は相談なされたのですか？」

「いや、ただだけど」

「身重の奥様を気遣うお気持ちは解りますが、シンジさんが決めてしまわれる方がお怒りだと思いますよ」

「うん、日本にはレイや伯父さんや伯母さんも居てくれるし、きっと平気だよ」

「でも、また私とシンジさんの関係を奥様が疑ってしまうかもしれない」

「それが一番の心配だよ」

運転手の女性がもらした冗談にシンジは声を上げて笑った。

<第三新東京市 総合病院>

そして出産予定日が近づき、アスカのお腹はすっかりと大きくなっていた。

医師の診断を聞くアスカの隣にはこの病院の看護婦であるレイが立っていた。

元気に育っている事を聞くと、アスカとレイは顔を見合わせて喜んだ。

「お姉さんは生まれてくる子が男の子だと思う？ 女の子だと思う？」

「きっと女の子だと思うけど」

「どうして？」

「だって、お腹をこんなに元気に蹴って来るんだし、アタシに似た女の子よ！」

「でも、お母さんは女の子は父親に似るって言っていたわ」

「そんな根拠の無い事を言うなんてリツコらしくないわね。ま、アタシの女の子だと思うって言葉も根拠が無いけどね」

その夜アスカが家に帰ってシンジを出迎えると、シンジは浮かない顔をしていた。

シンジが思い悩んでいる事があるとすぐに分かったアスカは、シンジに声を掛ける。

「ねえ、何か悩み事があるなら言いなさいよ。独りで抱え込んでしまわないで相談する、それがアタシ達の約束でしょう？」

アスカに言われたシンジは、大きく息を吸い込んで深呼吸してから話し始める。

「実は、9月に人事異動でアメリカ大使館の仕事に回されそうなんだ」

「それって、シンジの仕事が認められたって事じゃない、シンジの外交官補をやって来たアタシの鼻も高いわ」

「だけど、僕は断ろうと思うんだ」

「そんな事したら、シンジの将来に関わるんじゃない？」

「だって僕は、アスカと生まれたばかりの子供と離れ離れにならないんだ」

シンジが絞り出すようにそう言うと、アスカは堂々とした態度で笑い飛ばす。

「そんな事を気にしていたの？ アタシ達は大丈夫だってば」

「そうだよ、レイが居るし、伯父さんや伯母さんだっているから、僕が居なくても問題無いよね」

「違うわよ、アタシ達もアメリカに着いて行くって言っているの」

「ええっ!？」

アスカの言葉にシンジは驚きの声を上げた。

<第三新東京市 共同墓地>

シンジにアメリカ行きを告げられたアスカは、身重の体を引きずりながら共同墓地へとやって来た。

ここには使徒戦役で命を落とした人々が葬られている墓地である。

量産機を足止めするために散って行ったオーバー・ザ・レインボーや戦略自衛隊の隊員達。

ゼーレの謀略により殺されてしまった剣崎キョウヤ、加持リョウジ、加賀ヒトミ。

そして、エヴァンゲリオンの実験の犠牲になってしまったユイとキョウコの墓もあった。

墓地の中の小高い丘に登ったシンジとアスカは手をつないで墓地に眠る人々に語りかけるように話し出す。

「使徒が居なくなっても、残念ながら人類同士の戦いは続いていきます」

「だけど、アタシ達はいつの日か平和な日が来ると信じて努力するわ」

シンジとアスカはそこまで言うと、深呼吸をして声をそろえて発声する。

「「チルドレンのために」」

シンジとアスカの言葉に答えるかのように優しい春の風がシンジとアスカのほおをなでた。

自分達の言葉が届いたと感じたシンジとアスカは再び声をそろえてお礼を言う。

「「ありがとう」」

2人は手を取り合ってゆつくりと丘を降りて行く。

「アスカ、足元気を付けて」

「うん。……さっきの柔らかな風、アタシのお腹もそっとさすって

くれた気がするわ」

「そっか、きつと母さんやアスカのお母さん、加持さんやみんなが撫でてくれたんだね」

「ふふ、なんか恥ずかしわね」

共同墓地からの帰り道、シンジとアスカはそんな事を笑顔で言い合った。

そしてその年の12月、シンジとアスカはアメリカの地へと降り立った。

アスカの体調を気遣って赴任を3ヶ月伸ばしてもらったのだ。

少しでも長く孫と居たいと言うゲンドウの願望もあったのかもしれない。

赤ん坊を抱えたアスカは出迎えた大使館のスタッフと笑顔でこんなやり取りをするのだった。

「How are you?」

「I'm fine, Thank you!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1718i/>

チルドレンのためのエヴァンゲリオン ~いつか、心、開いて~

2011年11月17日17時54分発行